

デスとハイエロファントの物語：REBOOT 外伝・番外編集

榊石スミオ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「マジカルドロップⅢ」「マジカルドロップポケット」「マジカルドロップV」デスとハイエロフアント主役。ふたりの恋愛を主軸とした物語で、本編である『デスとハイエロフアントの物語・REBOOT』に付随する外伝や番外編を集めた書き物です。

注：台本形式読み物です。

同一内容を、下記サイトにも掲載しております。

pixiv: [https://www.pixiv.net/](https://www.pixiv.net/ novel/member.php?id=323663)
novel/member.php?id=323663

目次

落語「改訂版・死神」【第一話】	1
落語「改訂版・死神」【第二話】	7
落語「改訂版・死神」【第三話】	12
落語「改訂版・死神」【第四話】	16
落語「改訂版・死神」【第五話】	20
おお、運命の女神よ Episode of Fortune	27
【第一話】	
おお、運命の女神よ Episode of Fortune	34
【第二話】	
おお、運命の女神よ Episode of Fortune	46
【第三話】	
おお、運命の女神よ Episode of Fortune	57
【第四話】	
おお、運命の女神よ Episode of Fortune	63
【第五話】	
おお、運命の女神よ Episode of Fortune	69
【第六話】	
おお、運命の女神よ Episode of Fortune	79
【第七話】	
おお、運命の女神よ Episode of Fortune	91
【第八話】	
正義の恋 Episode of Justice 【第一話】	104
正義の恋 Episode of Justice 【第二話】	

話】

114

正義の恋 | Episode of Justice | 【第三

話】

127

アイネクライネ | Episode 0 to ∞ | 【第1話】

144

アイネクライネ | Episode 0 to ∞ | 【第2話】

148

アイネクライネ | Episode 0 to ∞ | 【第3話】

151

アイネクライネ | Episode 0 to ∞ | 【第4話】

157

アイネクライネ | Episode 0 to ∞ | 【第5話】

162

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【前編】

165

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【前編】

175

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【前編】

183

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【前編】

190

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【後編】

197

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【後編】

205

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【後編】

212

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【後編】

218

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【後編】

223

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【後編】

228

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【後編】

237

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【後編】

246

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【後編】— 8

落語「改訂版・死神」【第一話】

デスとハイエロファントの物語：REBOOT

番外編「落語『改訂版・死神』」

演芸場。高座に、屏風、青色の座布団。

客席は満員。少しざわついている。

上手側袖から、紫色の着流しを着た「灰江路亭 出守」（はいこうじてい です）Ⅱデス登場。

メクリの横に正座し、一礼。静まる客席。

頭を上げ、メクリを一枚後ろに回す。「灰江路亭 伴人」の筆文字。

「前口上にて失礼する。只今より、真打『はいこうじてい ほんと』、演目『改訂版・死神』をお届けする。最後までごゆるりと、お楽しみ頂きたい」

再度、一礼。客席より、一斉に拍手。

デス、立ち上がって上手袖に消える。

【お囃子】

入れ替わりに、「灰江路亭 伴人」（はいこうじてい ほんと）Ⅱハイエロファント登場。

薄青緑色の紋付、白色の羽織、灰色の袴。手には扇子と手ぬぐい。満場の拍手。

座布団に正座し、扇子を前に、手ぬぐいを横に置き、深く一礼する。

【お囃子終了】

段々と鳴り止む、拍手。

頭を上げるハイエロファント。

【以下、独演】

「灰江路亭 伴人」でございます。一席、お付き合います。

本日はいっぱいのお運びを頂きまして、誠にありがとうございます。す。

世の中には、数多くの神様がいらつしやいます。この日本には、八百万と書いて『やおよろず』の神様がいらつしやるそうで・・・日本

だけでも八百万、世界全部を合わせますと、これはもう、星の数ほどの神様がいらつしやる計算になります。確か、星の数の方がちよーつと多かったと思いますね。僕が数えた訳ではありませんが。

さて、神様にもいろんな方がいらつしやいまして、生命の誕生を司る創造神をはじめといたしまして、その生命の環の一端、死を司るのが、死神でございます。実は、僕の奥さんが死神の役目に就いておりまして……これがまた、綺麗で素敵で可愛らしい女性なのですよ。もう本当に、毎日毎日が幸せでしてね。僕は果報者で……え？　惚気はいいいから、早く話を始めてくれ、つて？……はい、では、僕の惚気はまたの機会といたしまして、今回のお話を始めさせて頂きます。

今からのお話は、その、僕の奥さんが登場する話です。

あるところに、お金に縁のない男性がいらつしやいました。縁のないと申しますか、大変お金遣いが荒い。荒い上に、三度の飯より賭け事が好きとききました。しかも勝ちが上回った日には、一晚中呑んで騒ぐ。昔は『宵越しの金は持たない』のが粋とされてた時代もあったそうです。昨今の厳しい世情を抜きにしましても、これじゃあ、貯まる物も貯まらず、日々の糧を確保するのも難儀、という有様でした。

「ああ……今日も稼ぎにありつけなかった……何が悪いんだ？

あん時、イーピン切って振り込んだのが悪かったのか？　いや、ありやあ序盤だ。あの後、上家がツモリやがったのが……はあ……最近では麻雀だけじゃなく、パチスロも競輪も競馬もオイチヨカブも何やっても勝てない……ははあ、判ったぞ。きつとあつしには貧乏神か疫病神が憑いてるんだ。じゃなきや、これほど勝てないつてのは……」

「違うな」

「うわあ！　びっくりした！……おや？　これはまた美人なお姉さん。しかも、なかなか色っぽい出で立ちでらつしやる。こりや驚いた、大きな鎌まで持ってますなあ」

「そんなことはどうだっていい」

「あつしに何か御用ですか？　どちらさんで？」

「死神だ」

「・・・はい？」

「あたしの名は、デス。死神だ」

「・・・うええ！ 何てこった！ もうあつしにお迎えが！」

「早まるな。残念だが、今日はお前の魂を送りに来たんじゃない。あたしの旦那に頼まれた用があつて、来た」

「・・・もう人妻なんですか!？」

「お前は何を言ってるんだ。あたしが結婚してようが何だろうが、お前には関わりがないだろう」

「ごもつともですが・・・そう言や、さつき『違う』っておっしゃいましたか・・・何が違うんで?」

「お前には、貧乏神も疫病神も憑いていない。お前の稼ぎの悪さは、博奕に没頭してるからだ」

「まあ、確かに最近はとーんと勝ちには恵まれてませんがね」

「勝てる勝てないだの、恵まれてる恵まれてない以前の問題だ。博奕のし過ぎだ。自覚がないのか?」

「勝てない自覚はありやすがね」

「・・・聞いたあたしが馬鹿だった。解った、さつきと要件を言う。お前のような奴に義理も何もないが、あたしの旦那が、救けてあげてほしい、と頼んできた。まあ、あたしの旦那は困ってる奴を助けるのが趣味みたいなものでな・・・その解決策を今から教える」

「勝てる方法を教えてくれるんで?」

「・・・やはり、帰る」

「いやいやいや！ ちよいと待つて下さいよ！ 気に障ったなら謝ります！ ごめんなさい！ 真剣に困ってるんで！ 上手い策があつたら教えて下さい！ この通り！ 頼みます!」

「・・・このままお前の魂を送ってやりたくなつたが、お前の番はまだ先なんで、それも出来ない。お前には寿命が長く残ってるからな・・・仕方ない、ちゃんと聞いて、ちゃんと実践しろ」

「へえ！ 合点です!」

「お前・・・医者になれ」

「は?・・・何ておっしゃいました?」

「医者になれ、と言った」

「・・・いや、ちよつと待つて下さい？ デスさん、とおつしやいましたか、お医者さんつてのは、勉強して医学部出て、免許取らないと出来ないですよ？ ご存知なんですか？」

「知ってる。こちらの世界では、医者を開業するには免許が必要なのも解ってる」

「デスさんのお国では違うんで？ でも、こつちじゃマズいですよ」

「だから、モグリの医者、となれ」

「あつしは顔に傷もありやせんし、皮膚もツートンカラーじゃありやせんし、髪も片側白かあございやせんよ」

「・・・何の話をしているんだか判らん。まあ、実際に医療行為をやる訳ではないが、医者と同様の働きが出来る」

「ほほお、どうすりやいいんで？」

「今のお前には、ある術が掛けてある。死神が見えるようになる、まじないだ。だからあたしが見えている。本当ならあたしの姿は、普通の奴には見えないんだ」

「へえー！ 今のあつしには、死神が見える！ 何でまた？」

「それが、今回の策に必要な術だからだ。他の死神も見えるように、な。この国の死神も、目に映る筈だ」

「見えるようになって、それから、どうしたら？」

「家に帰ったら『医者』と書いた看板を出せ。手書きでいい。板は何を使っても構わない。すると、近い内にお前を頼ってくる奴が現れる」

「看板を出すだけで？・・・広告とかチラシとか、ネットショップとかやった方がいいんじゃないですか？ もつとも先立つモノがありませんが・・・」

「必要ない。ただ、看板を出しておけ。そして、呼ばれた先にいる病人を診てやれ。そこには、何処かしらから来た死神がいる筈だ。さつきも言ったが、死神はお前にしか見えていない。他の奴らには覺られないようにしろ」

「覺られないようにするのは得意でさあ。ポーカーフェイス、つて

ヤツですよね」

「博奕で負け続けてる奴が言うのと、説得力皆無だな」

「まあ、まあまあまあ・・・それで、行ったら何をすれば?」

「病人が寝てる布団の何処かに、死神が座っている。枕元に座っていた場合、もうそいつは寿命だ。何をやっても救けられない。ただし、病人の足元に座っていた場合・・・ある『呪文』を唱えると、死神は消える。帰らなくてはいけない決まりになってるんだ。死神が帰ると、病人は、ケロツ、と回復する。治れば、医者としての形はつくだろう」

「なるほど・・・確かに医者みてえなフリ出来まさあね。こうなったら、いっぱい救けてやらねえとね」

「問題はそこだ」

「何処です?」

「・・・場所の話じゃない」

「こいつは失礼しやした。で、何が問題で?」

「救けられる人数に上限がある。それ以上は『呪文』が無効になるから気を付けろ」

「何人までで?」

「8人だ」

「8人・・・何でまた?」

「しにがはち、と言うだろ」

「・・・デスさん、貴方、ホントは日本在住じゃございせんか?」

「気にするな。人数制限があるのは、無制限に救けたのでは、この世界の生命環が崩れるからだ。生ある者は、最後に必ず死ぬ。それが自然の摂理だからな」

「納得しやした。8人ですか・・・しかと、覚えておきやす」

「それで病人を救け、貯めた金を元手に、真つ当な商いを始めるなり、真つ当な職業に就け。そうすれば立ち直れる」

「解りやした! ありがとうございます! それで『呪文』ってのは?」

「よく聞け、一度しか言わない。ちゃんと聞いて覚えろ」

「・・・記憶力には自信がありませんぞ。どうぞ！」

「アジャラカモクレン、マージドロ、テケレツのパツ・・・と言って、手を、パンパン！と2回叩け」

「・・・けつたいな『呪文』ですなあ・・・こうですかい？ アジャラカモクレン、マージドロ、テケレツのパツ！」

(パンパン！と、両手を叩く)

「・・・あれ？ デスさん？ デスさーん・・・消えちまいやがった・・・つてコトは・・・こりゃあ、本物かい！ こうしちやいられねえ！ 帰つて看板出さねえと！」

男性は一目散に帰って、早速家の中に板があるかどうか探しました。ところが、いざつて時は必要な物ほど見付からないもので、看板に使えるような板は何処にも見当たりません。流石に俎板などは使う訳にはいかず、方々を探しましたら・・・ごみ箱に、昨日食べた蒲鉾の板がありました。

「蒲鉾板かあ・・・まあ、ねえよりマシンだろ！」

つて訳で、綺麗に洗って、蒲鉾板に金釘で『医者』と彫りまして、玄関横に釘打ちして看板といたしました。

「それにしても、死神がいるってこたあ解つたが、ホントにこんなんで患者が来るのかよ？」

僕の奥さんの話を聞いても、尚、この男性は半信半疑だったのでね。

落語「改訂版・死神」【第二話】

ところが、看板を出してもものの半時も経たない内に、男性の家の玄関横にスーツ姿の壮年の男の方が見えられました。

「えー……ごめんください……」

「はいはい、それでしたら、この先の角を左折して、100メートルくらい行つたトコに玩具店がありますぜ」

「え？ 何をおっしゃって……」

「だから、『お面ください』って言ったでしょ？」

「……あ、いえいえ、お面、ではなく、『ごめん』ください、と申したので……」

「……解つてますつて！ 軽い挨拶の洒落ですよ！ 尋ね人が滅多来なくて、聞き慣れないから勘違いしたワケじゃあごさいやせん！」

「……話に入つても、よろしいですか？」

「はい！ どーぞどーぞ！」

「こちらは、お医者様で、間違いございませんか？」

「はいはい、医者ですよ。今日開業したばかりの……」

「今日開業したばかり？」

「あ！ いやいや！ 今日開業したばかり、でなくつて、業界業者に憚りの、隠れたモグリ医者……」

「隠れたモグリ？」

「違う違う！ あつしの出身が、カクレター・モーグリ大学医学部つて海外の学校でしてね！」

「……何か胡散臭く思えてまいりましたが……」

「まあ、細かいコトは気にせず！ で、どういったご用件で？」

「ああ、これは失礼……実はお医者様に、患者を診て頂きたいのでございまして……」

「医者ですからね、診るこたあ診ますが……他のお医者さんには診てもらつたんで？」

「ええ、実は、私どもはある会社を経営しております、私はその専務取締役を務めております。今回床に伏したのは、ウチの社長で

す。まだ50半ばの現役なのですが、突然倒れまして、それ以来ずっと布団から起き上がれず、眠った状態です。既に10人以上のお医者様、医療機関をたらい回しにされました・・・何処に行っても『この患者は余命がない』『回復の見込みがない』などと告げられ、入院すら出来ない始末・・・ほとほと困りまして、占い師の先生に相談いたしました。タロット占いをやって頂いたのですが、先生のおっしゃるには、『○○線○○駅北口から通りを真っ直ぐ進み、3つ目の信号を右折、その先、最初に見た『医者』の看板の家に、名医がいる。訪ねてみる』とのお話です・・・それで訪ねてきましたら、こちらに辿り着いた、という次第です」

「つかぬコトを聞きますが・・・その占い師の先生ってのは、女性ですか?」

「よくお判りで!」

「髪は紫で、こう、左右がピン!と跳ねたような髪型で、耳が尖がってて、ルビーのような目の色の」

「そこまでご存知でしたか! 有名な占い師の先生なんでしょうか?」

「まあ、有名っちゃ有名ですか、ね・・・ははあ、デスさん、上手いコトやってくれたのかい・・・」

「何か?」

「いや! こつちの話でさあ!・・・話は解りやした。じゃあ、これから伺いやしょ」

「ありがとうございます! ささ、タクシーを待たせてありますので、どうぞ」

そんな訳で、タクシーに乗せられて向かった先が、立派な門構えのお家、早速奥の間に通されました。そこには、話にあった社長さんが、見るも痩せこけた風体で寝てらっしゃいます。瞼は薄く開いていますが、意識がある様子ではなく、朦朧としているか、あるいは眠っている状態です。

男性は部屋に入った途端、布団の足元を見ました。

そこには・・・黒いローブを着て、大きな鎌を肩に掛けた死神が、胡

坐をかいて座っております。フードを深く被っていて、顔ははつきり判りませんが、どうやらご老人の姿と思われれます。

「ホントにいやがった・・・しかも足元の方だ。よし！」

「何がよろしいんです？」

「いやいやいや！ 独り言でさあ・・・そんなじゃ、診察いたしましよ。ふうむ・・・」

男性は患者の脈を取る真似をしたり、胸の辺りを触診するフリをしたり、眼球を覗き込んでみたりと、精いっぱいの見よう見真似で医者を演じておりました。

「・・・如何でしょう」

「うむ・・・大丈夫、治してみせましょ」

「本当ですか!?! 今、社長に何かありましたら、社運を賭けたプロジェクトの一大事、何卒！ 何卒治療願います！ 御礼は如何様にもいたします！」

「じゃあ、専務さん、治すことが出来ましたら、治療代はこれくらいでどうです?..」

(指を3本立てる)

「300万ですね！ かしこまりました！ 経理もそれくらいは出せそうと申しておりました！」

「やややや！ それは！」

「不足ですか?..」

「いいえええ！ 充分でさあ！・・・3万くらいと思ってたが、マジですかい?.. 判りやした、それで結構です」

「ありがとうございます！ では、早速治療の方を！」

「ようがす、始めさせてもらいましょ。ただし、今から行う治療は、遥か太古から一子相伝で受け継がれてきた、秘術中の秘術、一切の他言は無用で願います。もし人に話そうものなら、また患者さんは病になり、それどころか話した人も黄泉の淵を彷徨うことになりますんで、くれぐれも、ご内密に」

「・・・了解しました。肝に銘じておきます」

男性は専務さんに指示して、患者の社長さん、立ち合いの専務さん

以外をお人払いして、部屋の襖をすべて閉じました。そして自分は、患者さんの布団の横に、どっかり、と胡坐をかいて座り、大げさな動作で手を前で組みます。修験者が印を組むように、ですね。

そして、ちら、と足元の死神を見ます。

「んー．．．むにやむにやむにや．．．アジャラカモクレン、マージドロ、テケレツのパツ！」

(パン！　パン！と2回手を叩く)

すると、チツ、と舌打ちが聞こえ、死神の姿は、すーっ、と消えていく。

途端、それまで意識朦朧としていた患者さん、ガバツ！と起き上がって．．．

「おーい！　お茶！」

「うわああッ！　社長！　意識が戻られたッ！」

「．．．おお、専務かい。すまんが喉が渴いた。茶をくれ。あと、腹も減ったので何か持ってきてくれ」

「社長！　ようございました！　お医者様！　奇蹟でございます！」

「．．．ホントに治っちゃったよ．．．あ、まあまあ、ざっとこんなモンでさあ」

「ありがとうございます！　感謝申し上げます！　それと、センセイ．．．」

「センセイ!?　いい響きだねえ．．．何でしょ？」

「お薬など頂けましたら．．．」

「薬？　んなもんいらねえですよ」

「そうおっしゃられても、経過観察も必要ですし．．．」

「薬つつたつてなあ．．．あ、そうだ、確か．．．」

男性は自分のズボンのポケットを、ごそごそ、と探ります。そして取り出しましたのが、お菓子のラムネが数個。

「これを一日一錠、飲ませてやんなさい。薬がなくなる頃には、膏薬を剥がしたように、ケロリ、と良くなってますよ」

「重ね重ね、ありがとうございます！　あと、食べ物とか、気を付け

ることがございましたら・・・」

「専務さん、心配症だねどうも・・・あー、はいはい、大丈夫大丈夫。本人の食べたいモノ、何でも食わしてやって問題ありやせん。肉でも魚でも鰻重でも大丈夫です。ご心配なく」

「センセイ！　ありがとうございます！　では、御礼と治療代は、只今から準備して持ってまいります！」

という訳で、男性は、300万円という大金と菓子折を貰って、自宅に帰ってまいりました。

「こんな大金初めて持った・・・凄えな・・・暫く、眺めておこう。しかし、あのデスさんって死神・・・こうも上手く運んでくれるたあ夢にも思わなんだ。あの方は幸運の女神に違えねえ！」

と、男性が僕の奥さんを褒めて下さいました。まあ、僕にとっては、最初から幸運の女神なのですが。

落語「改訂版・死神」【第三話】

さてその後暫く経って、患者だった社長さんは見る見る元気になりました。数日で職務復帰を果たされました。専務さんは治してもらった経緯を社長さんにお話したのですが、治療、と言うか「呪文」の部分、固く口止めされておりますので、伏せておいたそうです。社長さんはその話を、自社の役員、系列会社の取締役の方々に話されまして、更に話は別の会社の役員へ・・・と、いわゆる「拡散」という現象ですね、こうして一気に話題は広がり、名医ここに在り、という評判が立ち、口コミが口コミを呼び、男性の家へ押し掛ける方の尽きないこと尽きないこと、仕舞いには押すな押すなの大行列。

しかし、最初に僕の奥さんから告げられた『人数制限』があります。最初の社長さんを治した段階で、救けられる残りは7人。この男性もそれなりに頭の切れる方だったようで、そこを上手く立ち回ることにしました。

まず、行っても死神がいない場合・・・これがもつとも多い例だったようで、男性は医者を演じながら、患者本人と話をする。話をしていく内に、悩みなども聞くようになる。カウンセリング、という別名もあるようですが・・・そうすると、全員ではありませんが、結構回復する方もいらつしやる。病は気から、とも申しますのでね、実際に病気が治ると『ああ、名医だ』と、更に評判となります。

逆に、実際に死神が来ていて、しかも枕元に座っていた場合・・・「これはいけません。寿命です。残念ながら治せませんが、せめて穏やかに逝けるようにいたしましょう」

そうして、口元で呪文らしきものを唱えるフリをする。患者さんもそれで何となく安心する。そうこうする内に、枕元の死神が魂の尾を斬って、姿を消す。患者さんは安らかな顔で亡くなられる。『ああ、苦みずずに逝けたのだな。名医だ』と、益々評判が良くなっていきます。そして、死神が患者さんの足元にいた時は・・・

「アジャラカモクレン、マジドロ、テケレツのパツ！」

（パン！　パン！と両手を2回打つ）

死神は消え、患者さんは目覚めたように回復する。『素晴らしい名医だ!』と大評判になっていくのでした。

世間では、名医と言えはこの男性の代名詞、とまでになり、休む暇もなくなりつつありまして、さぞかし貯金も貯まったか・・・と、思いきや、男性の本来の悪い癖、賭け事好きがいよいよ戻ってきたのであります。何しろ三度の飯よりも好きなくらいですので、寝食を忘れるとはこのこと、時間があると判れば馬券を買いに行く、新装開店のパチスロ屋があれば誰かしらからの連絡があるまで入店している、拳句の果てに、麻雀をとんでもないレートで打ち、その上に青天井ルーラまで用いる始末・・・これでは、いくら稼いだとしても元の木阿弥です。

しかも、以前にもなかつた夜毎の豪遊、料亭で呑んで騒いで、芸者さんも行列が出来るくらいお呼びになってました。最初は懐が潤いまくってましたから、猫撫で声でいろんな方々が寄ってくる。皆さん『センセイ』『センセイ』と声を掛けて揉み手で近寄って来る・・・男性も有頂天になって、気前が良くなって札束を見せ、持っつけ泥棒、とばかりに札びらを散らせる。それはもう、支持率が落ちた政治家の方々が起死回生とばかりに行う政策のように、お札をばら撒く。『医者』として稼ぐ以上に浪費していたもので・・・とうとう、男性の手元には数十枚の硬貨が残るのみ、となってしまうました。

金の切れ目が縁の切れ目、と申します通り、今まで『センセイ』『センセイ』と言い寄ってきた皆さんも、ないと判れば長居は無用、とばかりに離れていきます。もともとそういつたお付き合いの方々はともかくとしまして、以前にも増して日々の糧に困る毎日が、戻ってきませんでした。

「・・・おつかしいなあ、何で金が残ってないんだ？ やっぱあん時、ウーワン振り込んだのが・・・」

何と、この男性、反省も自覚もしておられません。

『医者』としての仕事も、急速に減ってきて、ネットの話題どころか『あの人は今!』の位置になりつつあり、たまにお呼びが掛かって患者さんのところに行く・・・毎回のように、死神が枕元に座っており

ます。それが行く度に必ずと言っていいほどの状況になりまして、遂に『あの医者が来ると患者が死ぬ』という噂が、巷を席卷するところまでに相成りました。

流石に男性も、生活が危機的状況と自覚した頃に、振り返って考えました。今まで死神に「呪文」で帰ってもらった回数は、7回……。最初に僕の奥さんに告げられました人数は8人、つまり、あとひとりしか救えることが出来ない、という現実に気が付いたのです。

「おいおいおい……。このままじゃ駄目なあ！　あとひとりに「呪文」使ったらオシマイじゃねえか！　これ以上誤魔化して医者やるならんぎ出来ねえ！　どーしたらいいんだ！」

「……。あのー、こちらはお医者様でらっしゃいますか？」

「ああ、石屋さんならね、この先の角をずーつと行くとですわね……」

「いえ、『石屋』ではなく、『医者』と申しましたが……」

「……。失敬！　聞き間違いでさあ。で、どちらさんで？」

「あ、これは突然に失礼します。こちら様が、瀕死の患者を蘇らせる奇跡のお医者様、と伺いましたもので……」

「奇蹟がどうか知らねえが、まあ、医者つーたら医者ですな。今んといい」

「今んといい？」

「まあまあ、こつちの話……。んで、何か用ですかい？」

「重病の患者を、診て頂きたいんですが……」

「……。治せないかも知んねえですよ。聞いてるでしょ？　最近は、

あつしが行くと患者も逝く、って評判でさあ」

「存じております。それでも、藁にも縋る思いで、参りました」

「藁でも腹でも何でも縋りやいいですけどね……。どっからお見えになつたんで？」

「これは申し遅れました。私、〇〇〇フィナンシャルグループの頭取を務めておりまして……」

「……。は？　嘘でやんしょ？　そんな超有名な企業のトップクラスが、何でまたこんな辺鄙なトコまで？」

「実は……。私どもの、会長が……」

「ちよつと待つておくんなまし。お宅の会長さんって、確か経済界の重鎮の……」

「ご存知でしたか。ええ、あの、団体連合の会頭を務めております」「よくニュースなんかで顔とか出てる？ 政治家なんかともよく会つてる？ ああ？」

「はい、その通りです」

「いやいやいや、あの方……随分なお歳でやんしょ？ アンタもお歳を召してそうですが」

「私は、齢70になります。会長は、御年108歳でございます」

「……長寿国とは言つても限度つてのがあらあ……108で現役かよ……申し訳ないですけどね、頭取さん、いくら何でも流石に寿命なんじゃないですかい？」

「いえ、ついこないだまで本人は『200まで現役』と申してましたので、まだ早いかと……」

「真に受けるなよオイ……ギネスブックに載るつもりかよ……あのね、頭取さん、この世の生きとし生ける者には寿命つてのがありまさらあね。会長さんは、診てないとは言え判りますぜ、もう長かあねえ」「そんなコトおっしゃらずに！ どうか救けて下さい！ この通りです！」

「……頭ア下げられたつて、寿命ばつかしは、いくらあつしでも、どんな医療術でも限度がありますつて！」

「今、後継者も覚束ない現状で、この国の経済も立て直つてないこの現状で、会長に亡くなられた日には、とんでもない混乱が生じます。この国を救けると思つて、どうか！ 何卒！」

「……話がでつかくなつてきやがった……とは言つてもですな、無理なモノは無理……」

「御礼は、センセイのお望みの額を……」

「行きやしょ！ 善は急げ、できあー！」

コロツ、と掌を返して、男性は頭取さんの導かれるがまま、黒塗りの高級車に乗せられ、会長さんのご自宅へと向かいました。

落語「改訂版・死神」【第四話】

会長さんのご自宅は、とてつもない広さを誇ってらっしゃいまして、お城のような高い壁がどこまでもどこまでも伸びている、超の付く大邸宅。車で門から乗り入れ、いくつもの邸宅が並ぶ中をどんどん進み、会長さんのお住まいまで門から車で10分掛かるといふ凄さ。男性は後部座席で、ポカーン、と口を開けて、ただただ圧倒されてます。

男性と頭取さんは、数十人の屈強な護衛の男性陣に前後左右を挟まれて、奥へ奥へと歩いていきました。そして、寝屋の中、大変に広い座敷に通され、その布団に横になるご老人を見て・・・そう、男性は見てしまったのです・・・枕元に、死神の姿を。

「・・・やっぱ無理です！ 帰らせておくんまし！」

「そんな！ ここまで来られて何もやって頂けないのですか!？」

「あのですね、あつしには判るんですよ！ 会長さんはもうすぐ亡くなられる！ 治せねえんです！」

「ご無体なコトおっしゃらずに！ この通りです！」

「何度頭下げられたって駄目なモンは駄目でさあ！」

「ではせめて！ 寿命を延ばしては頂けませんか!? 1カ月でも！」

「無茶言わんで下さいよ！」

「1ヶ月延ばして頂けたら！ 2000万お出しいたします！」

「・・・今、何とおっしゃいました？」

「1ヶ月寿命を延ばして頂けたら、その際に2000万円お支払いいたします」

「・・・マジですかい？」

「はい、誓約書もお書きいたします」

「・・・やややや、でも、そんなコト出来んのかい?・・・待て・・・何とか出来ねえかな・・・」

「もし治療して下さって、回復すれば、ここで500万、前金としてお渡しいたします。残金は1カ月持った際に、お支払いいたします」

す・・・如何でしょう?」

「ごひゃ・・・や、嘘みてえだが・・・」

「更に・・・もし半年、寿命を延ばして頂けたのでしたら・・・1ヶ月毎に2000万追加でお支払いし、半年後には、総計で2億円お渡ししたいしましょう。そこまで出すつもりであります」

「に! お! く!・・・あつしは夢でも見てるんですかい!」

「すべては、センセイのお力に懸かっております」

「・・・少し、時間を下せえ・・・」

いきなり夢のような金額を提示され、男性は腕組みをして考えます。どうしたらそれだけの報酬を手に来るか、あらん限りの知恵を絞って考えております。そして、一計を案じました。

「頭取さん、ちよいと、別な部屋でお話がありやす」

そう言いまして、頭取さんとふたり、別室で向かい合いました。

「今からあつしの言うことを、よく聞いておくんなまし。でねえと、会長さんは救けられねえですよ」

「はい、お聞かせ下さい」

「アンタらの、ほら、さつきいたガタイのいい、ボディガードのお兄さん方を4人お借りしたい」

「ええ、それは結構ですが・・・何をなさるんですか?」

「そのお兄さん方を、会長さんが寝てる布団の四隅に座らせて下せえ。そして、あつしが膝を、ポーン!と叩いたら、一齐に布団を持ち上げ、頭と足を逆にするように、水平にクルン!と回転させて頂きたい。その直後に、あつしが治療いたしやす」

「・・・どういうことですか? まあ、布団を持ち上げて回すのは雑作もないことですが・・・」

「言った通りにして下せえ。いいですかい、膝ポーン!の合図ですぜ。遅れたら取り返しがつかなくなりやす」

「判りました。では、4名の手配をいたします」

頭取さんは男性の指示通り、4人の体格のいい護衛の方々を、会長さんが寝てらっしゃる布団の四隅に座らせました。

そして男性は、布団の横に胡坐をかき、チラ、と死神を見ます。

藍色のマントを着て、身体の前を覆っており、フードを目深に被り、顔は見えません。大鎌を肩に掛け、片膝を立てて、じつ、と微動だにしません。今まで「呪文」でお帰り願った死神とは、雰囲気の違いが違います。

さて、男性はある『策』を練っていたのですが、実行するには何かのきつかけが必要でした。それは、死神の気を逸らすこと。どうやって逸らせたらいいか、部屋中を、ぐるつ、と見回しました。すると、会長さんが寝てらっしゃる布団の向かい側、部屋の角に、大きな画面の機械が置いてありました。

「頭取さん、すみませんが、そのテレビを点けて下せえ」

「はい？ テレビですか？ こんな時に？」

「いいから、点けておくんまし」

頭取さんは首を捻りながらも、言われた通りに、プチツ、と電源を入れます。すると突然、画面に映像が流れ、音声が大きな音量で流れ始めました。

『・・・では、次のニュースです。ローマ法王が本日、政府専用機で来日され、歓迎の式典に臨まれました』

その途端、バツ！と死神が画面に顔を向け、背中をこちらに見せて食い入るように、前屈みになって見詰めます。

男性は、しめた！とばかりに・・・

(ポーン！と、膝を叩く)

すると4人の護衛の方々、一斉に会長さんが寝てらっしゃる布団を持ち上げ、くるりん！と水平に回し、布団を置きます。今まで足の向いていた方に頭が、頭の向いていた方に足があることになり、死神は足元に座っている状態となりました。

間髪入れず、男性は印を組むように手を合わせ・・・

「アジャラカモクレン、マジドロ、テケレツのパツ！」

(パン！　パン！と、2回手を叩く)

驚いたように振り返る死神が、スーツ・・・と姿を消していきます。一瞬、口元が見えまして、若い死神であることが判りましたが、それを確認する前に、とうとう見えなくなってしまうました。

その後、それまで眠ったように反応がなかった会長さん、ガバツ
！と起き上がり・・・

「おはよう！ 皆の衆！」

「おおおおっ！ 会長！ お目覚めになりましたかっ！」

こうして、男性は8人目の命を救えることが出来たのです。頭取
さんは何度も何度も御礼をおっしゃられ、500万の現金と、今後の
支払いを約束する誓約書を用意して渡されまして、男性はホクホク顔
で自宅に戻って来たのです。

落語「改訂版・死神」【第五話】

昨日までとは打って変わり、一攫千金の大長者となりました男性、現金の封筒を目の前に置いて、感慨深げに頷いてます。

「いやあ、一時はどうなるかと思っただが、上手くいったねえ。これぞ、禍を転じて福と為す、だね。まあ、頭は生きてるウチに使い、とはよく言ったもんだ」

「よくもやってくれたな」

「うわあつ！ びっくりしたあ！・・・おや、これはこれはデスさん、ご無沙汰しました。こんち、お日柄も良くって結構で・・・」

「挨拶はいい。おい、お前・・・自分が何をしたのか解ってるのか？」

「はて？ 何の話でやんしょ？」

「とぼけるつもりか？ 枕元の死神を無理矢理追い返しただろ？」

「・・・何のことですかねえ？ あつしにはとーんと、話が見えねえで・・・」

「あたしだ」

「はい？」

「お前が無理に追い返した死神・・・あれは、あたしだったんだ！」

「・・・うええええつ！ マジですかいつ！」

「本当だ。あの時、部屋の隅の機械から突然『法王』という言葉が聞こえてきて、思わずそっちに目がいった。実はあたしの旦那は、あたしらの世界の『法王』でな、この国にも『法王』がいるのか、と画面を見てたら・・・お前の「呪文」で強制送還されちゃった、つて顛末だ！」

「・・・いやいや、ちよいと待っておくんなさい。何でデスさんが、あの場所に？」

「この国を管轄する死神たちに頼まれたんだ。手が足りないんで救ってくれ、とな。あたしの旦那も同意してくれたんで、あの老人の魂を送りに行った・・・それが経緯だ。その後、お前が来るまでは、予想出来た。しかしよりによって、あんな策であたしを引つ掛けようとは、な・・・」

「……ひ、引つ掛けるだなんて、そんなつもりは……」

「お前は現金に目が眩み、策を弄して騙し、決まりと約束を破った。この一件で、この国の死神連中が旦那とあたしのところに大勢押し掛けてきた。何たる様だ、死神の面目丸潰れだ、責任を取れ、とな……あたしが話を持ってきて『呪文』をお前に教えたりしたんだ。あたしは何を言われようとも構わない。如何なる悪口雑言をも、甘んじて受けるつもりだ。だが……連中は、あたしの旦那までに文句を浴びせた！ その原因を、お前が作ったんだ！ お前が決まりを破らなければ、旦那は悪く言われることはなかった！ それが許せない！」

「ひえええっ！ すんません！ ほんの出来心です！ ごめんなきーい！」

「謝って済むのなら死神はいらん！」

「でしたら、持ってきたお金をお譲りいたします！ それと今後入ってくるお金も全部、あげます！」

「……この期に及んで、まだそんなことを……現金など、あたしには何の価値もない！ 死神を買収しようなんぞ、見下げ果てた奴だな！……もういい、お前に情けを掛けたあたしが馬鹿だった。この国の死神とは話がついている。あたしが責任を持って、お前の命を終わらせることになった。覚悟しろ」

「うええええっつっ!!! 許して下さいっ！」

「往生際が悪い！」

「命ばっかしは勘弁して下さいっ！ ホントに申し訳ありやせんでしたっ！ 何卒！ 何卒！ お慈悲をっ！」

「……そんなに命が惜しいか？」

「へえ！ 惜しゅうございます！ 救けて頂けるんなら何でもいたしやすー！」

「……反省しているか？」

「もちろんでさあ！ 金輪際、二度と愚かな真似はいたしやせん！」

「……あたしの旦那は、文句を受けた後でも、お前を、大目にみてあげてほしい、とまで言った。普通なら言い返して然るべき言葉を浴びせられて、尚、お前のような奴を許すつもりらしい。まあ、それで

こそ、あたしのような死神を嫁にしてくれたんだがな……旦那の言葉に免じて、一度だけ寿命を延ばす機会をやろう」

「ホントですかあつ！　ありがてえっ！」

「だが、この国の死神連中との話もある。だから、寿命が延びるかどうかは、お前に決めさせる」

「へ？　どういうこつて？」

「お前、博奕が三度の飯より好きだったな」

「へえ、そうでやんすが？」

「その“博奕”をする。賭けるのは、お前の命、だ。今からある場所に案内する。追いて来い」

「命！……もし、あつしが断ったら？」

「この場で魂を刈り取る」

「……嫌も応もありませんか……解りやした、案内して下せえ」
そして、僕の奥さんは、男性をこの街の神社の境内まで連れていきました。その神社には、大きな榆の木がございまして、幹の太さは両手を広げた幅ほどもあります。幹の前に、僕の奥さんが手を翳します。すると……ポツカリ、と大きな穴が口を開けました。中を覗きますと、洞窟のような空間が延々と奥へ広がっているのが判ります。

「この奥だ。あたしに続いて入れ」

「そんじや、失礼して……へえ、神社の樹の中つて、こんなんなつてたんですねえ」

「ここに入れるのは、死神か、死神の許可を得た奴かのどちらかだ」
どんどん奥へ奥へと進んでいきますと、やがて空間が広がり、鍾乳洞のような場所に辿り着きました。かなり広いその場所に足を踏み入れ、目に飛び込んできたのは……一面に置いてある、火の点いた蠟燭の数々。洞窟の広間に、まさに星のように無数に群立する灯、蠟燭、蠟燭、あつちに蠟燭、こつちに蠟燭。多分、星の数の方がちよーつと多いかも知れませんが、それに匹敵するのではないかと思うほどの、火の点いた蠟燭が立ってございます。

「おおおお！　凄え！　何ですかこの蠟燭！　いっぱいあらあ！」

「これは『命の蠟燭』だ」

「何ですかそりゃ？」

「これはな、一本一本が生き物の命の灯となっている。この火が消えるか蠟燭が燃え尽きたら、生き物の寿命、という訳だ」

「へーっ、驚いたねえ。こんな物が存在するんですねえ。いろんな蠟燭があらあ・・・デスさん、この、どでーん、と、やたらでつかくて太い蠟燭は、どなたのです？」

「それは、この国の、ある政治家の『命の蠟燭』だ。逆風にも耐える」
「ほほお・・・んじゃ、こつちの、えらくひん曲がつてツイストしてる、明後日の方を向いてて、変な色をしてる蠟燭はどなたんで？ さほど長くはねえみてえですが」

「それは、桁石スミオつて奴の蠟燭だ。捻じくれた根性と性格を表してるな」

「なるほどなるほど・・・そんじゃあ、この手前にある、ほとんど残りがねえ、燃えカスみてえな蠟燭は？」

「ああ、それはお前のだ」

「・・・はい？」

「だから、お前の『命の蠟燭』だ」

「・・・うっそでやんしょおおおっ!!!」

「残念だが、本当だ」

「でも！ ちよいとコレ！ もうじき燃え尽きちまいそうですよっ！」

「そうだな」

「そうだな、つて・・・そんな冷静におっしやらんでもっ！」

「事実だから仕方がない」

「そんなあ！・・・だ、第一、デスさん、アンタ最初に会った時『お前の番はまだ先だ。寿命は長く残ってる』っておっしやっただじやありませんか!?!」

「あの時は、な。確かに長く残っていたんだ」

「じゃ何で!?!」

「あたしを強制送還した時、入れ替わったんだ。お前の寿命と、あの老人の寿命が、な」

「・・・何ですって!？」

「見てみる。お前の蠟燭の奥に、一際長くて太い蠟燭があるだろ？それは今、あの老人の『命の蠟燭』になってる。もともとはお前の寿命だったんだが、お前が無理に『呪文』を使ってから、お前の蠟燭は一気に減り、逆に老人の蠟燭は急に伸びた。何故だかは解らないが、恐らく、世界全体の生命の均衡を保つ為に、創造神の手が加わったんだろうな。こうなると、あたしらでも元に戻すことは如何ともし難い」

「そ・・・そんなあ！」

「まあ、自分で仕出かしたことだろ？ 自業自得という訳だ。あの老人、この調子だと200歳を超えるかも知れんな。お前の寿命は、まさに風前の灯火、だが」

「お願いです！ 早く！ 寿命を延ばす賭けを！ させて下せえ！」

「判った、やり方を教える。お前の寿命を延ばせるかどうかは、お前の腕次第だ」

「早く教えて下せえ！ ああ・・・やべえ、今、あつしの蠟燭が、ジュワツ、と鳴ったよ。芯が減っていくよ・・・」

「周りに、蠟燭の燃えさしが転がってるだろ？ ほら、あちこちにある。その燃えさしを、お前の蠟燭に上手く芯と芯を繋げ、再点火するんだ。それが出来れば寿命は延びる。少なくとも今は死なない」

「ええええっ！ 無茶ですよっ！ 下手すりゃ蠟燭が被さって、火が消えちまう！」

「他に方法はないぞ。だから言ったら？ これは命を賭ける『博奕』だとな」

「そんなご無体な！」

「ほら、また芯が減ったな・・・黙ってたら火が消えるぞ」

「うわあああっ！ やりますやります！ ええい、こうなりやヤケだ！ やってやらあ！」

「度胸は褒めてやる・・・まさに、人生最大の賭け、だな」

「ええと、こつちの燃えさしがデケえな・・・いやいや、こつちの燃

えさしが大きいかな・・・」

「迷ってる内に、消えるぞ」

「煽らんで下せえよ！ よし、こっちにするか！・・・ちよいと、中心を合わせて・・・」

「どうした？ 手が震えてるぞ？」

「あわわわ・・・やっべえ・・・震えが・・・止まらねえ・・・」

「早くしないと、消えるぞ？」

「そんなことおっしやられたって！ うわああ・・・手が・・・止まれッ！ 震えッ！ 止まれッ！」

「そのままだと、消えるぞ？」

「・・・火が・・・あわわわ・・・」

「消えるぞ？」

「ああ・・・消え・・・」

（ぱたっ・・・とうつ伏せになる）

（がぼっ！と起き上がる）

「・・・あれ？ あつし、死んで・・・ない？ 生きてる？・・・おとおおおおっ!!! 蠟燭が！ 繋がった！ 火が点いてるっ！ 信じられねえ！」

「悪運が強いな、お前・・・やってみるものだな」

「勝った！ あつしは、賭けに勝った！ やったあ!!!」

「まあ、今回はお前の勝ちだ」

「デスさん！ 本当にありがとうございましたっ！ お陰さんで助けられやした！」

「良かったな」

「はい！ これで枕を高くして眠れやす！」

「そうだな、帰ってゆつくり休むといい」

「そうさせて頂きやす！」

「そして、朝起きたら枕元を見てみる。あたしが座ってるからおあとが、よろしいようです。」

【独演終了】

【お囃子】

満員の観客から、一斉に、盛大な拍手。

深々と頭を垂れるハイエロファント。

暫く、そのまま。

頭を上げ、扇子と手ぬぐいを持って立ち上がって、上手袖に消える。
鳴り止まない、拍手。

【お囃子終了】

番外編【落語『改訂版・死神』：了】

「この番外編を書くにあたり、六代目三遊亭円楽師匠の高座、並びに、魔夜峰央氏「パタリロ師匠の落語入門」及び「パタリロ!」「ラシャーヌ!」などの諸作品を、嘶の参照にさせて頂きました」

おお、運命の女神よ | Episode of Fortune | 【第一話】

デスとハイエロファントの物語：REBOOT

外伝 | おお、運命の女神よ | Episode of Fortune |

★ マジカルランド中央・フォーチュンの居城・フォーチュンの自室

厚い雲の隙間から、幾筋かの陽の光が降り注ぎ、城を照らす。

開かれた窓から差し込む陽の中、天蓋付きのベッドの縁に腰掛けている、ヤング（リトル）・フォーチュン。

膝上に革表紙の書物を開き、じつ、と目線を下ろしている。

【N（ナレーション）】「この世界は、マジカルランド。彼女は、マジカルランドに暮らす者の運命を司る女神。名は、フォーチュン。真の名を『ホイール・オブ・フォーチュン』、別名『運命の輪』という。見た目は幼い少女だが、齢1万と14歳。マジカルランド創生より永い時を生きている」

窓の外に、ズ・・・と大きな影が被さる。

顔を上げるフォーチュン。

窓枠の向こうに、タワ一の、緑色に光る左眼がある。

フォーチュン、静かな微笑みを浮かべる。

タワー「(重厚な声で)・・・フォーチュンさま・・・」

フォーチュン「どうしたのじゃ？」

タワー「イマ・・・エロファント、デス、キタ・・・」

フォーチュン「(更に笑顔で)真か？ 何用か知らんが、いいぞよ、通せ」

タワー「(頷いて)ター・・・ワー・・・」

ズ・・・と、窓から離れていくタワー。

ベッドの縁から、ぴよんっ！と勢いよく飛び降り、書物を本棚に戻すフォーチュン。

そして、隣室に移動しようとして扉を開く。
鼻歌混じりで、少し浮かれてる様子。

★ フォーチュンの居城・客間

【N】「エンペラーによるタワー強奪事件より一月ほど過ぎた、ある日。フォーチュンの元に、デスとハイエロフロントが訪ねてきた時のことである」

年代物の骨董品や装飾品が、壁際にずらりと並ぶ客間。

絢爛豪華なシャンデリア。その下に、十数人が向かい合わせで座れる長テーブル。

廊下から客間に入ってきた辺りで、立っているデスとハイエロフロント。

ふたり、部屋のあちこちに視線を投げっては、珍しい物を見ている表情になっている。

カツ、カツ・・・とブーツの踵を響かせ、フォーチュンが入室してくる。

フォーチュン「よう来たのう、ふたりとも」

ハイエロフロント「こんにちは、フォーチュン。連絡もなしに急に来て、申し訳ないけど」

フォーチュン「いいのじゃ。丁度退屈しておったところだな・・・まあ、その辺に座れ」

デス「ああ、邪魔するぞ」

ハイエロフロント、長テーブルの扉側、下座の一番端から二番目の椅子の後ろに立つ。

デスが椅子の横に立った時、すぐさま椅子を引いて彼女を座らせる。

大鎌をもうひとつ隣の椅子に、斜めにして立て掛ける。

それを確認して、一番下座の椅子に腰を下ろすハイエロフロント。

フォーチュン、食器棚からグラスを3個取り、トレーに乗せる。

フォーチュン「振り返って」何か飲むであろう？ 酒もあるが、どうじゃ？」

デス「昼間から酒はやらん。酔わなければ何でもいい」

フォーチュン「相変わらず堅苦しいのう、そなたは。下戸でもあるまいし」

ハイエロフアント「僕もデスと同じで。お酒以外だったら大丈夫だよ」

食器棚に隣接しているワインセラーから、一本の黒色のボトルを取り出すフォーチュン。

コルク抜きもトレーに乗せてから、テーブルに歩み寄っていく。

デスとハイエロフアントが座る向かい側にトレーを置き、ボトルとグラスを移す。

慣れた手付きで、ボトルから栓を、キュポツ！と抜き、グラスに傾ける。

トクトクトク・・・と注がれていく、赤紫の液体。芳醇な葡萄の香りが、辺りに広がる。

フォーチュン、各グラスに7割ほど満たしてから、ふたつをハイエロフアントとデスの前に置く。

フォーチュン「最近仕入れたばかりの、葡萄果汁の飲み物じゃ。安心せい、酔う物ではないぞよ」

ハイエロフアント「(微笑んで) ありがとう、頂きます」

デス「(微笑んで) 馳走になる」

フォーチュン、ハイエロフアントの向かい側の椅子に腰を下ろす。

そしてグラスを持ち上げ、ふたりに視線を向ける。

デスとハイエロフアント、同時にグラスを持ち、スツ、とフォーチュンと同様に上げる。

少し掲げるような仕草をしてから、グラスに口を付ける3人。

飲み物を口腔内に流し込み、喉を鳴らし、ふう、と息をつくフォーチュン。

静かにグラスをテーブルに戻し、彼女に視線を投げるデスとハイエロフアント。

デス「ここに来るのは、前回対戦して以来だな」

フォーチュン「そうじゃったな。あの時は謁見の間での対戦であつ

「だから、この客間に通すのは初めてかろう?」

デス「(頷いて) そうだな」

ハイエロフアント「僕も、この部屋に入るのは初めてだよ」

フォーチュン「エロフアントは随分と前に来たつきりじゃった、のう・・・(ピタ、とグラスを持った手を止め) はて?・・・いつじやつたか? 覚えておるか?」

途端。

口元を引き締め、少し目を伏せるハイエロフアント。

その横顔に眼差しを向け、眉を寄せるデス。

ハイエロフアント「(重めの声で)・・・覚えている、けど・・・」

ハイエロフアント、徐々に眉を顰め、ぐっ、と奥歯を噛む。

デス、彼の横顔を見詰めたまま、瞼を半分閉じて切なげな表情を浮かべる。

フォーチュン、ただならぬ雰囲気を感じ、据えた視線を向ける。

フォーチュン「(怪訝そうに) どうした? ふたりとも、深刻な顔をしておって」

暫くの、間。

意を決したような、引き締まった表情で、顔を上げてフォーチュンを見るハイエロフアント。

ハイエロフアント「(深い響きの声で)・・・フォーチュン、改めて聞くけど・・・マジシャンとプリエステスのところには、戻らないの?」

直後。

一瞬で曇った顔になり、俯くフォーチュン。

トン、とグラスを卓上に置き、手を離して戻す。

デスとハイエロフアント、彼女に視線を送る。

フォーチュン「(はああ、と息を吐き) また、その話か・・・」

ハイエロフアント「しつこいとは思うけど、尋ねさせてもらうよ」

フォーチュン「(重苦しい声で) 今は・・・戻らん・・・知ってるで

あろう? 何があったのか、わらわが何をしでかしたのか・・・全部、聞いているであろう?・・・答えは同じじゃ・・・」

デス「戻る気はありそうだな。だが『今は』戻らない、ということか」

ギユツ、と唇を噛み、目を閉じて一層顔を伏せるフォーチュン。
沈黙。

少しの、間、

ふう、と息を継ぎ、腕組みをするデス。

デス「(尖った声で) 凶星、か……」

フォーチュン「何も言えん……(顔を上げ) もういいじやろ？ この話は終いじや」

ハイエロフアント「すまないけど、フォーチュン、今日は、この件について話をしに来たんだ。マジシャンとプリエステスにも了解を取ってある……全部、僕の方から話してもいい、と許可も貰った」
フォーチュン「(眉を顰め) 許可？……何を言っておるのじや？」
デス「ハイエロフアントとあたしで来たのは、理由がある。今からハイエロフアントの話を、よく聞け。あたしは、その『立ち会い人』になる為に、来た。お前に間違いなく話がされたという、証人になりに来た。それだけ重要な話だ」

ハイエロフアント「話し始めれば長くなりそうなんだ。時間、いいかな？」

ゴクリ、と唾を飲み込むフォーチュン。

フォーチュン「そこまで前振りされて帰したのでは、気になって眠れん。よいぞ、時間はある。話せ」

ハイエロフアント「ありがとう、じゃあ、話すね」

すう、ふう、と一度深呼吸するハイエロフアント。

それが合図のように居住まいを正す、3人。

僅かの、間。

ハイエロフアント「まず、聞くけど……フォーチュン、君は以前の記憶は戻っているの？」

フォーチュン「以前、か……わらわがこの姿になる前、ということか？」

ハイエロフアント「(頷いて) うん、そうだよ」

フォーチュン「覚えておるが・・・ある時期の記憶が、すっぱり抜けておる。まだ大人の姿じゃった頃と、今の女子の姿になつてからの、間がのう」

デス「赤子の時の記憶はない、ということか？」

フォーチュン「少し呆れたように」赤子の時の記憶は、誰しもないであろう？ わらわが覚えとるのは、その・・・（頬を薄く染め）父上と母上と過ごしておった子供の頃から、じゃ」

ハイエロファント「（微笑んで）いい思い出が多いんだね」

フォーチュン「（赤くなり）・・・言わせんでよかろう・・・」

デス「今からハイエロファントが話すのは、その、記憶の抜け落ちた期間の話だ。ハイエロファントとあたしは・・・（真剣な声で）その期間に、お前に何があつたかを知ってる」

フォーチュン「（驚いて）真か？」

デス「（頷いて）ああ。何故なら・・・あたしらは、お前が大きな変化を起こした時、一緒にいたんだから、な」

フォーチュン「変化？・・・わらわに何があつたのじゃ？」

ハイエロファント「順を追つて話すよ、よく聞いてて・・・（瞼を少し閉じ、再び開け）今からの話は、デスと僕がここで・・・この城で、君と対戦した時からの話だ」

すつ、と両手を卓上に置いて組むハイエロファント。

彼の仕草を見てから、フォーチュンに視界を移すデス。

沈黙。

沈黙。

フォーチュン、微かに不安げな表情になる。

ハイエロファント「フォーチュン、君を今の姿に変えてしまったのは・・・（真剣な表情で）僕なんだよ」

途端。

バン！と両掌をテーブルに叩き付け、両腕を突っ張らせて立ち上がるフォーチュン。

同時に、ガタン！と、勢いよく後ろに押し出される椅子。

フォーチュン、両眼を正円に近い程に見開き、口を半分開けている。

真つ直ぐに彼女の瞳を見詰めている、ハイエロファントとデス。
フォーチュン「愕然として、声を震わせ」・・・何・・・じゃ・・・
と?・・・」

おお、運命の女神よ ― Episode of Fortune ― 【第二話】

【回想シーン】

★（過去）フォーチュンの居城・謁見の大広間

【N】「話は、過去に遡る。フォーチュンはかつて、大人の女性の姿であった。ワールドの創り出すマジカルドロップを管理し、対戦して勝った者にドロップを与えていた。しかしいつからか、自我と欲望が強くなり、やがてドロップを我が物にしようと思んだ。だが、ワールドの魔力により、ドロップを使うにはワールドの許可を得て封印を解くか、フォーチュンに勝たねばならない術が施されていたのだ。フォーチュン自身が使うには、自分の分身に勝つ必要がある。その為に、マジカルランドの民の魔力を吸収し、自身に溜め続ける日々が続いた。その異変の真相を突き止め、場合によっては止めるべく、フォーチュンの居城に来たハイエロファント。そこで目にしたのは・・・」

煉瓦造りの薄暗い廊下を、足音を抑えて進むハイエロファント。

突き当たり、巨大な観音開きの扉の片方が開いたままになっている。一旦立ち止まるが、その先に目を凝らし、慎重な足取りで入室していく。

そこは、大広間。天井は非常に高く、ヴォールト（蒲鉾型）造りになっている。深紅の細長いカーペットが一直線に奥に伸び、太い円柱が左右に並んでいる。

室内の壁、柱にはランプが設置されていて、仄かではあるが明るい。カーペット延長線上の向こう、幾段か高い位置に玉座がある。

ハイエロファント、右手の方に視線を向ける。

はっ！と息を飲み、目を見開く。

【N】「床に倒れている、デスの姿。そして、勝ち誇って笑っている、

フォーチュンであった」

うつ伏せで四肢を投げ出しているデス。顔は窺えない。

少し離れたところに、彼女の大鎌が転がっている。

寒気のような高笑いをしながら、こちらに背を向け玉座の方に歩いていくフォーチュン（大人）。

思わず床を蹴り、デスに走り寄っていくハイエロフロント。

それに気付いたフォーチュン（大人）、振り向いて、キツ、とハイエロフロントを睨む。

ハイエロフロント、デスの傍らに片膝を着き、顔を覗き込むように屈む。

途端。

ブオオオオオツ！と、凄まじい風速の縦回転の渦が、”目”を向けてこちらに距離を詰めてくる。

間髪入れず身体を起こして、バツ！と左腕を伸ばして、掌を掲げるハイエロフロント。

掌の中心が、ポウツ・・・と白色の光を放つ。

ハイエロフロントとデスを内側にして、半透明な光のドームが形成される。

突風が激突し、バシユウウツツ!!と弾け飛んで四散する。

機嫌を損ねたような、鋭利な視線をふたりに投げるフォーチュン（大人）。

【N】「デスを助けようとしたハイエロフロントに、フォーチュンの攻撃が襲い掛かる。止むを得ず、彼は対戦を決意する」

一度、慈愛に満ちた眼差しをデスに向け、すくつ、と立ち上がるハイエロフロント。

両腕を真っ直ぐに突き出し、掌を直角に立て、親指同士を合わせる。光を放つ掌。左右に開いていく腕に合わせて、棒状に伸びる白色光。

その中から現れる、ハイエロフロントのバクルス（司教杖）。

くるつ、と半回転させ、バクルスを右手に握り締める。

フン、と鼻で嗤うような仕草をして、右腕を後方から眼前に振り抜

くフォーチュン（大人）。

ブオオオオツツ！と、再び縦回転の竜巻が、ハイエロフアントに向かって伸びていく。

その直線上に、バツ！とバクルスを翳すハイエロフアント。

杖の軸上にある青い宝石が、バチイツ！と蒼白い放電を発する。

ブオン・・・と直径2メートルほどの光の円盤が出現し、盾のようにハイエロフアントの前にそびえる。

フォーチュン（大人）の魔術が、バシイイツツ！と弾かれ、勢いをなくして散り散りになる。

それを見て、苦虫を噛み潰したような形相を彼に向けるフォーチュン（大人）。

バクルスの延長線上から、フォーチュン（大人）に、悲し気な視線を送るハイエロフアント。

フォーチュン（大人）、再び右手を振り被る。

ハイエロフアント、改めてバクルスを構え直す。

その後も、繰り返される、魔力の応酬。

幾度も突風の魔術を繰り返すフォーチュン（大人）。

攻撃を弾くか、受け流すか、防ぐかを繰り返すハイエロフアント。

ハイエロフアントの後方、意識を戻すデス。ゆっくりと両目を開く。

伏せたまま腕を縮め、肘を支点に上半身を少し起こす。

ブルツ、と頭を振り、霞が取れていく視界を目の前に投げる。

バシユウウツツ！と、何かが弾け散る音が聞こえ、ハッ！とその方向に顔を向ける。

白地に緑の柄が入った法衣、同色の彩りのミトラ（司教冠）。青い髪。

襲い来る突風の魔術を、鮮やかに防ぎ切っている、背中。

バツ、と身体を起こし、横座りになって目を見開くデス。

バクルスを、くる、と半回転させ、構え直すハイエロフアント。

デス、彼を、じつ、と見詰め、声も出せず。動けない。

【N】「そして、決着が付く瞬間が、やってきた」

両腕を大きく左右に広げて、ギラ、と睨み付けるフォーチュン（大人）。

対して、バクルスを両手でしっかりと握り、頭上に振り被るハイエロフアント。

フォーチュン（大人）「ダークホイールツ!!!」

フォーチュン、両掌を合わせ、魔術を発動。

ブアアアツツツ!と、今まで以上の風量と速度で渦を巻く竜巻が出現。直径2メートルほど。

“目”をハイエロフアントに向けて、動き出す。

ハイエロフアント「（腹の底からの声で）ミラクルビームっ!!!」

気合一閃、バクルスを振り下ろすハイエロフアント。

前方に、純白の光球が出現。直径50センチほど。

間髪入れずそれが光線となり、バシユウウツツ!!!と伸びていく。

竜巻の“目”に一瞬で飛び込み、突風を物ともせず、フォーチュン

（大人）の掌に到達する。

フォーチュン（大人）「（驚愕）何ッ!」

直後。

フォーチュン（大人）を中心にして、カアツ!!!と白色の光が湧き上がる。

それは空間を瞬時に拡散し、大広間すべてに充満していく。

ズドムツ! ガッ! ブイン・・・と、歪んだ音を立て、周囲の空気が割れる。

僅かの、後。

バアアアツンツンツツツ!!!と、フォーチュン（大人）の真下から、垂直に光の柱が突き上がる。

同時に、ブワアアアツツツ!!!と、凄まじい魔法風が立ち昇る。

光の柱の中で、身体を両腕で抑え付けるように、もがくフォーチュン（大人）。

ドレスが真下からの魔法風に、バタバタバタ・・・と暴れている。

眉を強く顰めている。両眼は見る見る白濁化していき、肌が色褪せて輪郭がぼやけ始める。

フォーチュン（大人）「（悲鳴）うあああッ！ 何故ッ！ 何故わらわがッ！」

バクルスを振り下ろした姿勢のまま、茫然とそれを見ているハイエロファント。

更にその後方から、一部始終を唾然として凝視しているデス。暫くして。

キュイイインツツ!!!と、高周波の音を立て、一瞬ですべての光が消滅する。

魔法風も、止む。

フォーチュン（大人）のドレスだけが、空間に人型を成して残留している。

彼女本人の姿は、ない。

ハイエロファントとデス、目を大きく開いてそれを見る。

刹那の間、フワアツ・・・と重力に従って沈んでいくドレス。

ゆつくりと、非常にゆつくりとした動きで、畳まれるように床に下がっていく。

そして、全部が纏まった時、ドレスの内側から、ポワ・・・と光が湧く。

それはすぐに消え、丸められたようなドレスが残っている。

静寂。

静寂。

静寂。

自分の呼吸音に気づき、段々と落ち着きを取り戻していくハイエロファント。

フシユン・・・と、手にしたバクルスが姿を消す。

ハイエロファント「（荒れた息で）・・・終わった・・・の？・・・」直後。

ハッ、と振り返って、デスを視界に映すハイエロファント。

ハッ、とそれに気付いて、ハイエロファントを見詰めるデス。

横座りで床に腰を下ろしている彼女の右上腕部に、大きな擦り傷と出血。

ハイエロフアント、即座にデスに駆け寄る。

ハイエロフアント「デスっ！　しつかりっ！」

流れるように片膝を着き、デスの右腕を左手で取るハイエロフアント。

デス「(驚いて、頬を染め) なっ・・・何を!？」

デス、振り解こうと、思わず右腕を引こうとする。

ハイエロフアント「(びしやり、と言い切るように) じっとしててっ！」

ビクン!と肩を跳ねさせ、ぐう、と押し黙るデス。

ハイエロフアント、右掌をデスの傷口に翳す。

ハイエロフアント「(凜とした声で) 聖なる力！」

ポウツ・・・と白色光が発せられ、デスの右上腕部が照らし出される。

傷口に温もりを覚えるデス。それが、徐々に全身に伝わってくる。

真剣な眼差しを注いでいるハイエロフアント。それが、掌からの光に浮かび上がる。

デス、彼の顔と、自分の右腕を交互に見て、茫然としている。

瞬く間に傷口が塞がり、薄いかさぶたが、ポロ、ポロ、と剥がれて落ちる。

デスの右上腕部は、滑らかな肌を復活させている。

ふうっ、と大きく息を継ぎ、デスを見詰めるハイエロフアント。

声も出さず、身動きもしないデス。眼差しが絡む。

ハイエロフアント、申し訳なさそうに目を伏せる。

ハイエロフアント「ごめんね、大声出しちゃって・・・初めて逢った時も、大声出してびっくりさせたよ、ね・・・気に障ったら・・・」

デス「(目線を外し) そ・・・そんなに謝ることは、ないだろう・・・別に、気に障ってはいない」

ハイエロフアント「(デスを見詰め、微笑んで) そう・・・なら、良かった・・・」

ふうう、と長い吐息を漏らし、ハイエロフアントの肩越しに目を向けるデス。

フォーチュン（大人）の着ていたドレスに、視線を投げる。

デス「正直、驚いたな。まさか奴の魔術の中心部を射抜くとは、想像出来なかった……（ハイエロフアントを見詰め返し）考えてやったのか？」

ハイエロフアント「（首を左右に振り）ううん、たまたまだよ。少なくとも、風の渦の真ん中……『目』になっているところなら、僕のミラクルビームも向こうに届くかな、って思っただけだし……まさか、フォーチュンを倒してしまっなんて、思ってたなかった……」

デス「（感心したように）お前……強いな」

ハイエロフアント「そんなことないよ。対戦するつもりだってなかったし……争わずに済むのなら、それに越したことはない、って思っているもの。（自嘲気味に）でも結局、闘いになってしまったのは、僕が不甲斐ないだけだよ。僕なんか、何も出来ない」

少しの、間。

デス「（籠った声で）……あたしをかばって、闘いになったのか？」
ハイエロフアント「かばった、と言うほど、大したことはしてないよ」

デス「そうか……」

デスの唇が、一瞬震える。

デス「ハイエロフアント……」

名を呼ばれ、じつ、と眼差しを彼女に注ぐハイエロフアント。

対して、瞬きの間絡んだ視線を、静かに彼の胸元に落とすデス。

デス「いや、その、何だ……（言いづらそうに）お前は、充分強い……」
ハイエロフアント「（笑顔で）ありがとう、デス。君がそう言ってくれるなら、気持ちが悪くなるよ」

僅かに朱に染まる、デスの両頬。

ハイエロフアント、片膝を着いたまま、身体を捻って振り返る。

ハイエロフアント「フォーチュンのいた場所に視線を向け）でも、何が起こったんだろう？ フォーチュンが消えちゃったみたいだけど……」

デス「恐らく……魔力の暴走、だろう」

ハイエロフアント「(思わずデスを見詰め) 暴走?」

デス「ああ。あくまであたしの考えだが・・・フォーチュンが魔力を開放した隙間、つまり、攻撃に全魔力を注いだ瞬間に、お前の力が当たった。防御には魔力を転化させていなかったのだろう、開放されるべきだった魔力が、一瞬で内側に、フォーチュン自身に向けられた。つまり：(真剣な声色で) 火薬庫に火種を放り込んだようなものだ。奴の持ってた魔力は底が知れないほどだった。だからああなったのではないか?」

ハイエロフアント「(深く感心して) なるほど・・・そうなんだろうね、きつと」

デス「本当にそうなのは、判らんが」

ちら、と視線を後方に一度向け、フォーチュン(大人)のドレスを視界に映すハイエロフアント。

ハイエロフアント「(眉を寄せて) もしかして、身体を消滅させてしまったのかな・・・だとしたら、魂は何処に行ったんだろう?」

デス「いや、魂の離れていった感覚は、ない。第一、あたしが『仕事』をしなければ、魂は肉体から剥離しない筈、だ」

ハイエロフアント「(目線を戻し) そうなんだ・・・君には、魂の存在が判るんだものね」

デス「(フツ、と自嘲気味に笑い) 死神だからな。他に能はない」

ハイエロフアント「逆だよ、デス。『能がない』のじゃなくて、『君にしか出来ない』んだよ。君以外の誰も、魂を送ってあげられることが出来ない、ってことだものね」

両眼を、少し見開くデス。

視界いっぱい、ハイエロフアントを捉えている。

ブルツ・・・と、小さく身体を震わせ、キュツ、と口元を結ぶ。

デス「(僅かに瞳を潤ませ)・・・そういう言い方をされたのは、初めてだ・・・」

ハイエロフアント、返事をするように、穏やかな微笑みをデスに向けてる。

それから、膝を移動して上半身を起こす。

デスに対して直角の位置で腰を下ろしたまま、フォーチュン（大人）の立っていた場所に目をやる。

ハイエロフアント「でも・・・本当にどうなっちゃったんだろう・・・魂は離れてないけど、身体を滅ぼしてしまったのかな・・・」

デス「解らんが・・・このマジカルランドに生きる者は、例え女神だろうが、あたしの大鎌で首を刈られなければ、死ぬことはない筈だ。それに、生命力が枯渇したにせよ、あたしが手を下したにせよ、肉体の存在が消えることはない。必ず、亡骸が残る」

ハイエロフアント「僕の力の、何かの作用なのかな・・・」
突然。

ピク、とこめかみを反応させるデス。

デス「・・・命の気配がする！ 奴は生きてる！」

ハイエロフアント「驚いて」えっ!？」

すかさず跳ね起き、近くの大鎌に飛び付き、両手に握って立ち上がるデス。

マントが、バサア・・・と、軽やかに流線型の軌道で舞う。

続いて間を置かず、バツ、と両脚に力を込めて起立するハイエロフアント。

フォーチュン（大人）のドレスの付近に、目を凝らす。

デスが、タツ、と彼の隣に立ち、身体の前で大鎌を構えて、据えた視線を飛ばす。

僅かの、後。

もぞ、とドレスが動く。

ハッ、とそれに気付き、同時に歩を進め始めるふたり。

警戒を眼前に向け、慎重に、一歩一歩前に行く。

途端。

ドレスの襟の付近が、フワサ・・・と拡がる。

その中に、赤子がいる。

産まれて数時間経ったような、一糸纏わぬ姿。

デス「（驚愕）・・・何・・・だど?」

ハイエロフアント「（驚愕）赤ちゃん!？」

思わず同じ動作で、ドレスの傍らに屈み込むデスとハイエロフアント。

ドレスを産着にしたように包まれ、すう……すう……と寝息を立てている赤子。

朱色の髪が薄く生えている。

ハイエロフアント「どうということなの？ 何で、赤ちゃんがここに？」

デス「(茫然として) こいつは……フォーチュンだ」

ハイエロフアント「(思わず大声で) ええっ!? この赤ちゃんが!」

デス「(頷いて) 間違いない。命の気配も、魂の感覚も、奴とまったく同じだ」

ハイエロフアント「生まれ変わったの?」

デス「転生とは、違うな。魂が肉体と密着したまま変わってない。今までこんな状況に遭遇したことがないんで、推測でしかないが……(ハイエロフアントを見詰め) 身体だけが、赤子に逆戻りしたんだろう。見たところ、先ほどまでの記憶があるかどうかは怪しいが、あるいは、記憶は残ってて、あたしらのこの会話も理解してるかも知れない」

ハイエロフアント「驚いたよ……まさかこんなことになるなんて……」

両腕を伸ばして、ドレスと床の境に手を差し入れるハイエロフアント。

そつ、と静かな動作で、掬うように赤子を持ち上げる。

すると、ドレスの裾の方から、コロン……と何かが転がり出る。蓋の閉まった、拳大の壇。中には、虹色に輝く飴玉がぎっしりと詰まっている。

それに目を留める、デスとハイエロフアント。

ハイエロフアント「あれ? これって……ひよっとして……」

少しの、間。

デス・ハイエロフアント「(一際驚いた顔で)マジカルドロップ!!!」
ハッ!と思わず顔を向き合わせる、ふたり。

息を飲んで、見詰め合う。

暫しの、間。

デス「(真っ赤になつて)あ……いや、その……」

ハイエロフアント「頬を染めて、目を細め」ごめんね、また大声出しちゃつて……でも……(満面の笑みで)思わず、声が揃つちやつたね」

ハイエロフアント、ゆっくりと、赤子を胸元に抱き上げる。

デス、隣でその様子を、じつ、と見続けている。

赤子は規則的な寝息を立て、穏やかな顔で眠っている。

デス「それで……どうするんだ？ その赤子。お前が育てるのか？」

ハイエロフアント「うーん……(首を左右に振つて)正直、厳しいかな。この姿にしちやつたのは僕だから、責任はあるんだけど……」

デス「なら、誰かに預けるしかあるまい」

ハイエロフアント「(真剣な表情で)フォーチュンを育てるのなら、思い当たる適任者はいるんだ。話はしてみようと思う」

デス「連れて帰るのか」

ハイエロフアント「このままにはしておけないから、ね」

左腕でしっかりと赤子を抱え、右手でドロップの入った壘を持ち、立ち上がるハイエロフアント。

壘を握ったままの右腕を、赤子を包んだドレスに添え、両腕で抱いている状態。

続いて両脚に力を込め、大鎌を右肩に掛けて、身体を起こすデス。向かい合つて立つ、ふたり。

ハイエロフアント「ねえ、デス」

デス「何だ？」

ハイエロフアント「君は、何故フォーチュンと対戦してたの？」
キュツ、とデスの口元が引き締まる。

デス「(斜め下を見て、口籠り)……し、死神が来る理由は、ひとつだけだろ？」

ハイエロフアント「フォーチュンの命に、終わりを告げに？」

デス「あ、ああ・・・そうだ・・・」

ハイエロフアント、一瞬、胸元の赤子を見下ろす。

それから、すつ、とデスの眼前に差し出す。

デス、赤子に視線を繋ぎ、戸惑ったような表情を見せる。

ハイエロフアント「君の“仕事”だったのなら・・・」

デス「(首を左右に振り) あたしは対戦に負けたんだ。今更出来ない。それに、今は“その時”ではない。あたしには、その『声』が聞こえるんだ。魂を送るべきか、まだ先なのか・・・生命の『声』が、な

ハイエロフアント「(深い感心を込めて) 凄いな。流石だね」

デス「(頬を染め)・・・何も大したことではない・・・」

改めて、赤子をしっかりと胸に抱きかかえるハイエロフアント。

ちら、と彼の右手の壘に視線を送るデス。

デス「ドロップ、使うのか？」

ハイエロフアント「ここに来た目的は、ドロップじゃなかったからね・・・取り敢えず持って帰ろうと思うけど・・・(ハッ、と気が付き) そうだ。良かったら、デス、持って帰ってよ」

デス「(焦って) いや！ あたしは！ 別にいい！」

ハイエロフアント「何か願い事があれば、君に使ってほしい。僕は特に、叶えたい願いも思い付かないし・・・」

デス「(更に焦ったように) あたしも！ 特にないから！ 大丈夫だ！」

思い切り顔を左右に振って、冷や汗を飛ばすデス。

にこつ、と柔らかな微笑みを彼女に向けるハイエロフアント。

ハイエロフアント「じゃあ、ワールド様に返そう。フォーチュンの件もあるから、一度会おうと思う。その時に返すことにするよ」

デス「(ふうう、と長い息をつき) 判った・・・」

ハイエロフアント「とにかく、お城を出よう」

頷くデス。落ち着いた表情。

おお、運命の女神よ | Episode of Fortune | 【第三話】

★（過去・数分後）フォーチュンの居城・城門近くの前庭
城の玄関ホールを、入口の大きな観音開きの扉に向かって、並んで歩くデスとハイエロフロント。

片側の扉が、外側に開き切っている。真っ直ぐに歩を進める、ふたり。

扉の付近に差し掛かった、途端。

外側、頭上の方から、ズオオオオ・・・と圧迫感を感じる音。

ふたり、ハッ！と、同時に顔を上げて扉の上方を見上げる。

黒い影が被さってくる。

ハイエロフロント「（大声で）危ないっ！」

扉と外側の境の場所で、バツ！とデスの眼前に飛び込むハイエロフロント。

くる、と背を扉の外側に向け、赤子を抱きかかえたまま、両脚を踏み締める。

デス、思わず少し屈んで、大鎌を自分の前で構える。

直後。

ズツドオオオオオオンン！！と、外で何かが倒れる大音響。

ブワアアアアツツ！！と、凄まじい土埃が巻き上がり、玄関ホールに雪崩れ込む。

ハイエロフロントの背中に、大き目の砂粒や塵が当たる。

デスの足元を土煙が這い、ブーツを掠めて奥へと流れていく。

もわあっ・・・と漂う、土の粒子。

ハイエロフロントが盾のように背で防ぎ、デスには砂一粒すら当たっていない。

中腰の姿勢で凝り固まったデス。

向かい合って、こちらに心配げな視線を向けているハイエロフロント。

絡み合う、眼差し。

沈黙。

沈黙。

やがて、土煙が散っていき、視界が戻ってくる。

ハイエロフアント「(落ち着いた声で)・・・デス、大丈夫?」

デス「(茫然とした声で)あ・・・ああ・・・大丈夫、だ・・・」

安堵したように微笑むハイエロフアント。

未だにあっけに取られたような表情で、身体を起こすデス。

視線は、ハイエロフアントに繋がれたまま。

再び並んで、扉から外に出ようとす、ふたり。

何事かと目を凝らし、警戒感を前方に集中させる。

外は、城門と玄関の間に広がる、石畳と土の前庭。薄い土煙が残留している。

そこに、身体を投げ出して、仰向けに倒れているタワー。

目を丸くして、扉から外に駆け出すデスとハイエロフアント。

タワーの全身は、5割ほどしか残っていない。

両手脚、腹部がバラバラに崩れ、煉瓦が四散して山積み、あるいは散らばっている。

頭部はほぼ原型を留めているが、見えている左眼の緑色の光が消えかかっている。

ハイエロフアント「(愕然として)タワーっ!」

デス「崩壊、だど?・・・(気付いたように)そうか、魔力の消失か!」

眼前で構えていた大鎌を、刃を下げて左手に持ち直すデス。

デス「フォーチュンと闘う前に、こいつと闘ったんだ」

ハイエロフアント「(驚いて、デスを見詰め)えっ?」

デス「そして、勝った。正確には、負けを認めさせた。だから、フォーチュンに闘いを挑めた」

ハイエロフアント「僕が来た時には、タワーはいなかったよ」

デス「(ハイエロフアントを見詰め返し)あたしに負けて、この城門から離れたんだろう。そしてここに戻ってきたが・・・恐らく、フォー

チユンが赤子の姿になって、魔力が消失したんで、タワーも倒れた。こいつは、フォーチユンの魔力でしか動けない筈だからな」

ハイエロフアント「じゃあ・・・僕の、所為で・・・」
直後。

ドレスで包んだ赤子を、バツ、とデスの眼前に差し出すハイエロフアント。

ハイエロフアント「デスっ！　お願いっ！」

無意識に両手を差し伸べるデス。カラン、と大鎌が石畳に落ちる。彼女の両腕の上に赤子を乗せて、くるっ、と踵を返すハイエロフアント。

デス「(ハイエロフアントと赤子を交互に見て) え？　え？　えっ？」

デス、思わず赤子を抱き留め、茫然としている。

ハイエロフアント、流れるような動作で、マジカルドロップの壘の蓋を、キュポツ、と開ける。

左手で壘を持ち、右手で一粒のドロップを摘まみ出して、高々と掲げる。

ハイエロフアント「ドロップよ！　願いを聞いてほしい！」

きつ、と視線をドロップに据えるハイエロフアント。

ハイエロフアント「(凜とした声で)　タワーを元の姿に戻してあげてっ！」

次の、瞬間。

カアツ！と、ドロップが眩い光を発する。

キュイイイ——ツツン!!!と、高周波音が辺りに拡散していく。途端。

タワーの周囲に散らばった煉瓦が、フワアツ・・・と宙に浮かび上がる。

崩れて山積みになった煉瓦も同様に浮き上がり、それらひとつひとつが白色の光を帯び始める。

光は、タワー全身を包み込むように大きくなっていく。

煉瓦が、カシユン、カシユン、と、タワーの身体の形に積み上がっ

ていく。

パズルのピースがはまっていくように、整然と、規則正しい動きの煉瓦。

程なく、タワーの身体全体が元に戻る。白色光に覆われたまま、横たわっている。

安堵したように微笑むハイエロファント。摘まんでいたドロップは消えている。

言葉も発せず、ただ彼の後ろ姿とタワーの復活を見詰めているデス。

タワーの左眼が、ポワァ・・・と緑色に光る。

タワー「(深い響きの声で)・・・ター・・・ワー・・・」

ハイエロファント「気が付いたっ？　タワー！」

タワー「・・・アタタカイ・・・ワタシ・・・モトノ、スガタ・・・モドツタ・・・」

ハイエロファント「(ふうっ、と息を吐き)良かった・・・」

ズ・・・と首をこちらに向け、ハイエロファントを見るタワー。

タワー「オマエ・・・タスケテ、クレタ、ノカ？」

ハイエロファント「ドロップを使って、君を治したんだ。僕とは、初めて話すよね？　僕の名前は、ハイエロファント。君がフォーチュン

と一緒にいることは、前から知ってたけど・・・よろしくね、タワー」

タワー「エロファント・・・カ・・・ヨロシク・・・」

再度顔を上に向け、両腕を体側の地面に着け、ズウ、と身体を起し始めるタワー。

様子を窺うように、ハイエロファントの背後に近寄るデス。

デス「・・・なるほど、ドロップをそう使ったか。お前らしいな」

ハイエロファント「(振り向きながら)あ、デス、ごめんね、急・・・に・・・」

彼女を見詰め、目を正円に見開くハイエロファント。

息を、飲む。

ドレスに包んだ赤子を、しっかりと両腕で胸元に抱いているデス。ハイエロファントの両目に、鮮やかに、清廉とした輝きを醸し出し

て映っている。

身体をデスに正対させ、すべての動きを停止させるハイエロファン
ト。

デス「(首を傾げ) どうした?」

瞳を、感嘆の潤いで満たすハイエロファント。

言葉が出ない。

ハイエロファント《(蕩けそうな感覚で)・・・デス・・・》

デス、彼の真っ直ぐな視線に気付き、凍て付いたように立ち止まる。

沈黙。

沈黙。

沈黙。

ボワツ!と茹ったように真っ赤になるデス。

ポオツ、と綺麗な朱色に染まるハイエロファント。

デス「(上擦った声で) な、何をじっと見てるっ!」

ハイエロファント「(頬を染めたまま) っ、ごめんっ! つい! 見

とれちやて!」

サツ、と赤子を両手で突き出すデス。

デス「(赤面したまま) 返すぞ!」

ハイエロファント「あ! うん! いきなりでごめんね! ありが

とうっ!」

受け取り、改めて両腕で胸元に赤子を抱きかかえるハイエロファン
ト。

口を結んで、緊張しているような面持ちで、クルツ、と身体を返す
デス。

石畳に横になっている大鎌を取り、右肩に掛けてから、こちらに向
き直る。

デス「(はああ、と長く息を継ぎ)・・・あまり長く、死神に赤子を
抱かせるもんじゃない・・・」

ハイエロファント「そうかな? いい雰囲気だったし、似合ってる
と思うけど」

デス「(声が裏返り) に! 似合ってる!?! 冗談言うな!」

ハイエロフアント「真剣な表情で」冗談なんて言う訳ないよ。本当に、いい感じだな、って思った。いつかは君も、お母さんになる日が来るんだろうし……」

デス「(自虐気味に) あたしは死神だぞ。死神が母親なんぞに……なれる訳が……」

ハイエロフアント「僕は、なれると思う」

ハイエロフアントの、真摯な眼差し。

デス、ぐうつ、と息を飲んで、唇を引き締める。

一方、上半身を起こし終わり、ズ……と顔を向けてハイエロフアントとデスを見下ろすタワー。

ハイエロフアントの胸に抱かれた赤子を目に留める。

タワー、少しの間した後、何かに気付いたように首を傾げる。

タワー「ソノ、アカンボウ……フォーチュンサマ、カ？」

ハイエロフアント「(タワーを見上げ) そうだよ。赤ちゃんになっちゃったけど、ね。この子が、フォーチュンなんだ」

タワー「……フォーチュンサマ……」

ふ……と、赤子が瞼を開ける。

タワーと視線が絡む。

初めて見たような、また興味深そうな眼差しを向け、きよとんとした顔をしている赤子。

タワー「ワタシ……ワカラナイ、ノカ？」

ハイエロフアント「……今は、解っていない気がする。タワーのことも、デスのことも、僕のこと、ね」

デス「どうやら、完全に赤子に逆行したようだな。過去の記憶も、定かではないだろう」

ハイエロフアント「(頷いて) そうだね。この無垢な表情を見る限り……覚えていないか、忘れちゃったか……」

タワー「フォーチュンサマ、ドウスル？」

ハイエロフアント「申し訳ないけど、タワー……連れ帰って、育てなきゃならない」

タワー「オマエタチ、フタリ、デ？」

ボツフン！と、同時に茹ったように真っ赤になって、目を見開くデスとハイエロフアント。

デス「(慌てたように)ち！ 違う！ あたしらは！ その・・・」
ハイエロフアント「(慌てたように)うん！ 僕たちじゃないんだ！
別の人に預けるつもりなんだ！」

暫しの、間。

頷いて、ゴウン、と音を立て、両腕を地面に着けるタワー。

タワー「・・・ワカツタ・・・ワタシ、コソダテ、デキナイ・・・」
ズウン・・・と両足を畳み、力を入れて立ち上がるタワー。

赤子を含めた3人が見ている中、完全に直立する。

顔を上げて、タワーを見上げるハイエロフアントとデス。

ズン、ズン、と足音を立て、城の玄関の扉に近寄るタワー。

そして片膝を着き、腰を下ろす。

外側に開いている扉を指で動かし、ガチャリ、と戻して閉じる。

それから、ズウ、と背中を城側に向け、更に腰を沈める。

両手を身体の横の石畳にしっかりと着き、重心を後ろに傾ける。

タワーの背中と、城の入口の扉の間隔が狭まり、ほとんど隙間がなくなつた辺りで止まる。

タワー「ワタシ・・・ココデ、マツ・・・フォーチュンサマ、カエリ、マツ・・・」

ハイエロフアント「タワー・・・」

タワー「イリグチ、マモル・・・ダレモ、ハイラセナイ・・・」

タワーの左眼が、点滅し始める。

緑色の光が弱くなつていき、段々とぼんやりとした光量になつていく。

ハイエロフアント「(息を飲んで)タワー！ 目が！」

デス「やはり・・・フォーチュンの魔力も、最早尽きてる。タワーの活動の限界が来たようだ」

ハイエロフアント「ドロップで何とか出来ないかな!？」

タワー「(首を左右に振り)ムリ、ダ・・・ワタシ、フォーチュンサマ、チカラナシ、ウゴケナイ・・・」

デス「タワーは、フォーチュンと表裏一体なんだろう。今は、眠らせてやるしかない」

タワーの顔に目線を繋ぎ止めるハイエロファントとデス、赤子。赤子の瞼が重くなつていき、うと、うと、と眠りに入っていく。

タワー「(深遠な声で) エロファント、デス：フォーチュンさま、タノム：モウ：メ：ミエナク、ナル：ネムリ、ツク：オマエタチ：ミエナク、ナル、マデ：ミテイル：ユケ：ユケ」

ハイエロファント「(頷いて) 判ったよ、タワー。フォーチュンを、待っててあげて」

デス「(踵を返しつつ) 行くぞ」

タワー「(声を弱らせ)：フォー：チュ：ン：サマ：タ：ノ：ム：メ：ミエナク、ナル、マデ：ミテイル：ユケ：ユケ」

タワーに背を向け、歩き始めるデスとハイエロファント。

城門の真下で一度振り返り、タワーの姿を見て、向き直って門をぐるぐる。

先の石段を並んで降りていく、ふたり。

途中、再度振り返るハイエロファント。タワーの左眼は、ほとんど光が消えている。

胸に抱かれた赤子は、すう：すう：と熟睡している様子。

ハイエロファントの横顔を一旦見詰め、それから先立って階段を下っていくデス。

何かを振り切るように、デスの後に続いて階段を降りるハイエロファント。

★ (過去・更に十分後) 森の道

陽が天頂を越え、傾き始めている。

森の中の道を、肩を並べて歩いているデスとハイエロファント。

両腕で、眠った赤子を胸に抱くハイエロファント。添えた右手には、マジカルドロップの壘。

ハイエロファント「タワーは、もう眠りに就いたかな・・・」

デス「恐らく、な。あとは、フォーチュンの魔力が復活し、あの城に戻るまで眠り続けるだろう」

ハイエロファント「(ドロップの壇を見て)このドロップは、どんな願いも叶うんだよね？ やっぱり、タワーがずっと動けるようにした方が、良かったのかな・・・」

デス「それは可能だったろうな。だが、タワーは否定した」

ハイエロファント「確かに『無理』って言ってたけど・・・」

デス「それに：：本人はそれを望んでいない気がする。仮にドロップでフォーチュンの魔力なしに動けるようになったとして、今この現状・・・タワーは、フォーチュンのいない城にひとりでいることになる」

ハイエロファント「(ハッ、として、思わずデスを見詰め)あ・・・」

デス「いつ戻るとも知れない主を待ち続けるんだ。フォーチュンが記憶を取り戻すかどうかとも判らず、元の魔力を復活させる保障もない。それを自我を保ったまま、果たして奴は待てるのか？」

少し口を開いて、正面に視線を投げるハイエロファント。

暫くの、間。

ハイエロファント「そこまで気が回らなかったよ・・・僕は、ただタワーが元に戻るのなら、と思って・・・(抑えた声で)ひとりになるくらいなら、フォーチュンのいない時間を眠って過ごしたい、ってことなんだろうね」

デス「本人が言ってないから、あくまで予想だがな」

ハイエロファント、ふつ、と穏やかな微笑みを浮かべてデスを見詰める。

ハイエロファント「デス、君は・・・(柔らかい声で)優しいね」

デス「(頬を染め)そ！ そんなことはない！ あたしが優しいなどと・・・そんなこと・・・」

ハイエロファント「本当にそう思うよ。タワーの意志を尊重すれば、それが正しいんだね。考えるに、僕は、誰かを救っているつもりで、実のところはお節介過ぎて、(自嘲気味に、目を伏せ)しかも自己満足に終始していたところがある。救うならば、まずは本人の希望

を、ちゃんと聞いてあげなきゃね・・・」

デス「お節介と言われようが、自己満足を覚えようが、それが：その道が、お前自身だろ？ ハイエロフアント」

ハイエロフアント「(思わず顔を上げ) え？」

デス「誰も目を向けられない部分にまで踏み込み、手を差し伸べる。それが『法王』 足る、お前の根幹だ。それを変えたら、お前ではない」ハイエロフアントの瞳が、微かな潤いを帯びる。

見る見る満面の笑みになっていく。

対して、目線を外して、軽く、コホッ、と咳払いをするデス。

ハイエロフアント「(嬉し気に) デス・・・ありがとう。そう言ってくれと、自信が湧くよ」

デス「(再度頬を染め) れ・・・礼を言われるまでも、ない・・・」ふたりの行く先、森の道が二手に分かれている。

その交差点で、向かい合って立ち止まるデスとハイエロフアント。

ハイエロフアント「じゃあ、ここで。送ってあげたいけど、フォーチュンの件があるから、ワールド様に早めに会わなきゃならない」

デス「ああ・・・あたしは、自分の住居に戻る」

ハイエロフアント「(思い出したように) あ、そうだ。今度、家に来てよ。ゆっくりと話がしたいんだ」

デス「(驚いたように) え？ いや、あたしなんか・・・その・・・」

ハイエロフアント「僕は、神殿に住んでるんだ。判るかな？ 森を抜けた街中の小高い丘にある、神殿」

デス「神殿・・・(頷いて) 場所は、判る・・・」

ハイエロフアント「ほとんどいると思うから、いつでも来てくれて大丈夫だよ」

少し、考えているデス。視線を伏せる。

デス「(口籠って) き、気が向いたら、な・・・」

ハイエロフアント「(微笑んで) 待ってるよ」

デス、半身を分かれ道に向けて、ハイエロフアントを視界に映す。ハイエロフアント、デスに真っ直ぐな眼差しを向ける。

ハイエロフアント「帰り、気を付けて。また逢おうね、デス」

デス「あ・・・ああ・・・また、な・・・ハイエロフアント」

くる、と踵を返し、歩を進め始めるデス。
にこやかな笑みを、彼女の背に送り続けているハイエロフアント。
段々と小さくなっていく、デスの背中。

かなり進んだところで、こちらを振り返る。

未だにデスを見詰め続けるハイエロフアントと目が合い、ビクツ、と肩が跳ねる。

僅かの間、固まる。

やがて、思い切ったように道の奥に向き直り、歩き始めるデス。

遠くなり、視界から彼女が見えなくなるまで目線を投げているハイエロフアント。

静寂。

静寂。

ハイエロフアント、脳裏にデスの姿を浮かべる。

はあっ・・・と感動に溢れた溜め息を漏らす。

ハイエロフアント「(感慨深げに) 君を抱っこしたデスの姿・・・綺麗だったなあ・・・」

穏やかな寝息を立て、ハイエロフアントの胸元で眠る赤子。

ハイエロフアント「(笑顔で) 行こうか。君の、新しい家族のところに」

ぎっ、とデスの去った方と別方向の道へと足を踏み出すハイエロフアント。

おお、運命の女神よ | Episode of Fortune | 【第四話】

★ (過去・更に数時間後) 街の郊外・マジシャンの家

【N】「フォーチュンと対戦して数時間後、ハイエロファントはワールドと共に、赤子になったフォーチュンを連れて、マジシャンの家を訪れた。そしてハイエロファントは、事の次第をすべてマジシャンに打ち明ける。当初は話を聞きながら、動揺すら見せたマジシャンだったが、聞き終わった頃には冷静さを取り戻していた」

夕刻に近付いた陽が射し込む、暖炉のある居間。

テーブルを囲んで座る、マジシャン、ハイエロファント、ワールド。

こじんまりとした室内。寝起きするベッドが部屋の角にある。

その上に、竹で編まれたクローファン(籠)が置いてあり、中に産着に包まれたフォーチュン。

すう・・・すう・・・と、規則正しい寝息。

卓上で肘を着き、両手を顔の前で組むマジシャン。

マジシャン「(ふっ、と長い溜め息をつき) 話は解った・・・そうか・・・フォーチュンが、今は、あの姿であるか・・・」

ワールド「マジシャン、あなたは以前より、フォーチュンを気に掛けてらっしゃいましたワよね」

マジシャン「(頷いて) その通りである。同じ魔導を極めようとする者として、一目置いていたのは間違いない」

ワールド「フォーチュンがこの間まで、マジカルランドの魔力を自分に集め、溜めていたのに早く気付いたのも、あなたでしたワね？」

それが原因で、この世界の魔法均衡にも障害が及んでいる、と」

ハイエロファント「君がいち早く気付いてくれたお陰で、僕もいろいろ対策が出来たんだ。フォーチュンが原因だと判って、彼女に話を聞きにいったんだけど・・・(目を伏せ) こういう結果になっちゃって」

マジシャン「話し合いでどうにかなったとは思えん。気に病むことはない、エロファント」

ワールド「そこで、マジシャン・・・あなたがフォーチュンに一方ならぬ感情を抱いてらっしゃったのを鑑みて、今日、ここに来ました。話というのは、他でもなく・・・」

マジシャン「(重厚な口調で)・・・フォーチュンを預かれ、であるか?」

ゆつくりと頷くハイエロフアント。

ハイエロフアント「勝手なお願いだとは、重々承知の上、なんだけど・・・」

ワールド「今、彼女はまったく邪気のない状態・・・ワタクシより遙か永い時を生きてきた、女神の先輩として、ワタクシはワタクシなりにフォーチュンには敬意を払ってるつもりですワ。しかしワタクシでは、恐らくフォーチュンを正しく導けないでしょう。ですがマジシャン、あなたにしたら、彼女を託せると考えたのですワ」

ハイエロフアント「本当なら、フォーチュンを赤ちゃんにしてしまった僕が育てるのが筋、なのは解っている。だから、正直に言っほしい。無理はしてほしくない。子供を育てるのは簡単ではないからね」

マジシャン、俯いて目を閉じ、口元を、ギョツ、と引き締める。

マジシャン「(深い響きの声で)フォーチュンは・・・私が救いたかった・・・」

ワールド、慈しむような視線をマジシャンに向ける。

ハイエロフアント、静かな微笑みを湛える。

マジシャン「実は以前、フォーチュンと対戦したことがあってだな・・・(自嘲気味に)結果、惨敗となった。魔力の桁が違い過ぎた。その違いは対戦の前から解っていた。それでも・・・(更に声を落とす)何とかしたかったのだ・・・邪悪な道も魔術の道であろうが、世界全体の秩序を乱すまでの道は、立ちほだかる必要があった。止めねばならなかった。しかし、それ以上に・・・(優しい声で)もしフォーチュンが苦痛を覚えているのなら、私に話をしてほしかったのである」

ガタ、と椅子を下げて立ち上がるマジシャン。
ベッドに近寄り、クーファンの横に腰を下ろし、中に目線を繋ぐ。

安らかな寝顔で眠っているフォーチュン。

マジシャン「私に親が務まるかどうか、未知の領域だが・・・」

マジシャン、顔を上げ、テーブルのふたりに凜々しい目を向ける。

マジシャン「(柔らかな微笑みで)引き受けよう。フォーチュンを預かる」

ハイエロファント「(笑顔で)本当? 良かった・・・」

マジシャン「ただし、子育ては未経験だからな。魔導書の代わりに育児書を読みながら、であるが」

ワールド「感謝しますワ、マジシャン。ワタクシも出来る限り、協力しますワ(頭を下げる)」

途端。

コンコン、と玄関の扉がノックされる音。

3人が一齐に、その方向に視界を移す。

マジシャン「どなたであるか?」

ハイプリエステス(扉の向こうから)「あたくし致します、マジシャンさん」

マジシャン「(笑顔で)開いてるから、入り給え」

ガチャリ、とハンドルレバーが下がり、外側に開く。

左腕に分厚い本を抱えたハイプリエステスが入ってくる。

ハイプリエステス「(笑顔で)こんにちは致します」

ふと、部屋の内部を見渡して足を停めるハイプリエステス。

それから、ベッドに座っているマジシャンの方に再び足を進める。

ハイプリエステス「あら、エロファントさん、いらしてたのですか? ワールド様まで、珍しい致しますね」

ワールド「プリエステス、お久し振りですワ」

ハイエロファント「こんにちは、プリエステス」

ハイプリエステス「何事致しますか? 皆さんで・・・今日・・・は・・・」

ハイプリエステス、ぴた、とマジシャンの前で立ち止まる。

マジシャンと、隣にあるクローファン、その中の赤子を交互に見詰める。

急に、笑みが消える。

茫然としてる様子。目の焦点が合っていない。

マジシャン「(怪訝そうに) どうしたのだ? レディ」

産着姿の籠の赤子が、もぞ、と動いて、眠ったままマジシャンの方に顔を向ける。

ス・・・と、ハイプリエステスが、持ってきた本を両手で持ち上げる。

自分の真上にまで掲げ、無表情でマジシャンを見下ろす。

沈黙。

沈黙。

沈黙。

ハイプリエステス「(腹の底からの大声で) 辞典クラアアアアツシユツ!!!」

直後。

渾身の力で、マジシャンの頭目掛けて本を振り下ろすハイプリエステス。

ボゴンツ!!!と派手な勢いで、頭を殴られるマジシャン。

グツギイツ!と、嫌な音まで響く。

マジシャン「ぐわあぁっ!!!」

心底驚き、思わず立ち上がるハイエロフアント。

同時にワールドも起立して、身を乗り出す。

白目を剥き、ギリツ、と奥歯を噛み締めて、再度本を振り翳すハイプリエステス。

間髪入れず、マジシャンの脳天目掛けて本を叩き付け始める。

ドガツ! バギツ! ゴスツ!と、凄まじい連打。

ハイプリエステス「(金切り声で)不潔ぎますッ! いつの間に隠し子なんて! 不潔ぎますッ! 見損なつたぎますッ!」

マジシャン「(痛みに耐えながら)痛ッ! 待ち給えッ! レディ!

ちよ! 話を! ごわッ! 聞いて!」

ハイエロフアント「(焦って) 待ってプリエステス! 話を聞いて!」

ワールド「(焦って) お止めなさい! 落ち着いて!」

★ (過去・更に数分後) 街の郊外・マジシヤンの家

テーブルで向かい合って座っている、マジシヤンとハイプリエステス。

マジシヤンの横にはハイエロフアントが立ち、右手を彼の頭部に向けている。

掌から、ポワツ・・・と白色の光が注がれ、マジシヤンを照らす。無然とした表情で腕を組み、両目を閉じているマジシヤン。

正面で、卓上擦れ擦れに頭を下げているハイプリエステス。

ハイプリエステス「ほんっ・・・とうに！ ごめんなさいぎます！ あたくしつたら！ 勘違いしたぎます！」

ス・・・と右手を挙げ、ハイエロフアントを見るマジシヤン。

マジシヤン「(落ち着いた声で)もう大丈夫である、エロフアント。世話を掛けた」

ハイエロフアント「ううん、気にしないで」

ハイエロフアント、治癒の術を終え、右腕を下げる。

ベッドの傍らからクーファンを覗き込み、赤子が熟睡しているのを確認するワールド。

足音も立てず、浮遊したままハイプリエステスの横に寄っていく。ワールド「(腕組みをして)話は理解出来ましたか？ プリエステス」

ハイプリエステス「(頷いて)ええ・・・大体は・・・にわかには信じられないぎますが・・・」

ハイエロフアント「だろうね。目の前で見た僕も、未だに信じ難いと思っているからね。でも事実なんだ。あの赤ちゃんが、フォーチュンなんだよ」

ハイプリエステス、改めてベッドのクーファンを目に映す。

テーブルに両肘を寄せ、軽く腕を組んで置くマジシヤン。

マジシヤン「(はあ、と溜め息をつき)まったく・・・まず話を聞いてくれれば良かったのである。第一、レディ、あなたは昨日も来ているではないか。長い時間、私と一緒にだつたではないか。赤ん坊を隠

す場所など、この家の何処にもないことは、冷静に考えれば判ることではないか。それをいきなり辞典で殴るなど……」

途端。

マジシャンに向き直り、顔を深く伏せるハイプリエステス。

虚ろな視線を卓上に投げ、肩を震わせ始める。

ハッ！とそれに気が付いたマジシャン、言葉を切って彼女を見詰める。

ハイプリエステス「(絞るような声で) その通りぎます……あたくしったら……ロクに話を聞かずに……(ぼろ、と涙を零し) そそっかしくて……頑固で……聞く耳持たなくて……情けないぎます……」
マジシャン「(茫然として) あ……あの……」

ハイプリエステスの目頭から、ポタツ、ポタツ、と落涙。

テーブルに、露の溜まりを作っていく。

動揺したように数回頭を振るマジシャン。

しかしすぐに、すうう……はーっ……と、一度大きく息を継ぐ。そして、ハイエロフアントとワールドを見て、無言で手招きをする。すぐ近くに来たのを確かめて、手を口元に翳すマジシャン。

マジシャン「(小声で) あとは、私が話しておく……」

ハイエロフアント「(小声で) うん、解ったよ。お願いね」

ワールド「(小声で) 頼みましたワ」

そ……と足音を忍ばせ、玄関に向かうハイエロフアント。続くワールド。

扉をゆっくり開き、外に出てから、静かに閉めてハンドルレバーを戻す。

ハイエロフアント、ワールドに目線を送り、頷く。

ハイエロフアント「ふたりなら、大丈夫ですね」

ワールド「ええ、心配ありませんワ」

ハイエロフアント「(扉を振り返り) それに……フォーチュンのことも」

【回想シーン終了】

おお、運命の女神よ | Episode of Fortune | 【第五話】

★ フォーチュンの居城・客間

飲み掛けのグラス付近に視線を投げ、茫然とした表情のフォーチュン。

視界の焦点が遙か彼方に向けられているように、瞳を揺らがせている。

ハイエロフロント、テーブルに乗せて組んでいる両手を、改めて、ギョツ、と握る。

デス、ハイエロフロントの仕草と横顔、向かいのフォーチュンを順に見ている。

ハイエロフロント「ふうっ、と息を継ぎ」それから暫くしてだよ、マジシャンとプリエステスが結婚式を挙げたのは・・・もともとお互い好き合っていたみたいんだけど、結婚を決意したのは、フォーチュン、君がきつかけだった。君を育てるという大きな目標が出来て、ふたりは結ばれたんだ・・・(微笑んで) 君が、ふたりの縁を結んでくれたんだよ、フォーチュン」

ピクツ、とフォーチュンの眉の辺りが跳ねる。

視線は上げず、伏せたまま。

ハイエロフロント「僕の話したいことは、以上だ」

フォーチュン、両膝にそれぞれ手を着き、腕を伸ばして突っ張らせる。

更に俯き、膝頭付近に目を向け、瞼を閉じ、キュツ、と口元を結ぶ。

ハイエロフロント「落ち着いた声で」僕が君の運命を変えてしまったことには、責任を感じている。君は『運命の輪』だけど、自分の運命は自由に出来ないんだよね？ その道を大きく逸らせてしまったのは、本当に申し訳ないと思う。だから、言いたいことがあったら、全部言っしてほしい。何かをやれ、と言うなら、出来る限りのことはしたいと考えているんだ」

沈黙。

沈黙。

長い、間。

尚も、間。

目を静かに開け、眉を寄せるフォーチュン。

フォーチュン「(ふううつ、と長い溜め息を吐き) 話は・・・解ったぞよ・・・」

ハイエロフアント「どうかな？ 僕に何か出来ることが・・・怒りがあるなら、僕にぶつけても構わない」

フォーチュン「(首を左右に振り) そんなことせぬわ。第一、ぶつけようものなら、その死神が黙っておるまい？」

デス「(領いて) 当たり前だ。ハイエロフアントに手を出すなら、あたしが相手になる」

ハイエロフアント「(デスを見詰め) 僕は大丈夫だよ、デス。君に責任を被せるつもりはないから」

顔を上げ、ふたりに視線を向けるフォーチュン。

ゆつくりと表情を和らげ、肩の力を抜いて両手を引き寄せる。

フォーチュン「安心せい。闘う気どころか、怒る気もないわ」

デス、意外そうな表情をフォーチュンに向ける。

ハイエロフアント、穏やかな微笑みを浮かべる。

フォーチュン「エロフアント、そなたは、タワーを救ってくれたのじゃろう？・・・(フツ、と微笑んで) タワーの恩人じゃ。感謝こそすれ、怒りなど覚えようか」

釣られたように、口端を緩めるデス。

フォーチュン「それに・・・(斜め上に視線をやり) これで、記憶の点と点が繋がりおった・・・父上も母上も、わらわには話してくれなかつたが・・・」

ハイエロフアント「話すつもりはあつた筈だよ。でも多分、その時期を待ってたんだと思う。今の君には、余りにも大き過ぎる話だったんじゃないかな？ だから、もつと君が成長するまで・・・理解出来る日まで話をしないでおこうと考えた、と思うよ」

デス「(領いて)だろうな。いきなり話されても、訳が解るとは思えん。青天の霹靂、という訳だ」

フォーチュン「で、あっても……(視線を戻し)やはり話してほしかった、のう」

ハイエロフアント「フォーチュン、君は僕たちと対戦する以前の記憶って、いつ戻ったの？」

フォーチュン「(目を伏せ)わらわが家を出てきたあの日、じゃ。それまでは、思い出しはおらんかった」

ハイエロフアント「そう……突然だったんだね」

デス「原因は解るか？ 何かのきっかけがあった、とか？」

フォーチュン「(首を左右に振り)いいや、何も無い。それこそ、青天の霹靂、じやった」

デス「転生してない以上、自身の記憶は残っていた、という訳だろうが……(ハイエロフアントを見詰め) 記憶が封印されていて、急に解除されたのか？」

ハイエロフアント「(デスを見詰め返し) 恐らくはそうだと思うけど……思い出す鍵になった出来事もない、ってのは……答えを出すのが難しいね」

フォーチュン「まあ、良い。そなたたちが聞かせてくれたので、な」
フォーチュン、居住まいを直し、表情を引き締める。

彼女の真剣な顔を見て、背筋を伸ばして座り直すデスとハイエロフアント。

フォーチュン「深々と頭を下げ、真摯な声で」礼を言う。事実を話してくれたことと、タワーを救ってくれたことに……感謝するぞよ」
ハイエロフアント「頭を上げて、フォーチュン。お礼を言われるよ
うなことは、何もしてないよ」

フォーチュン「(頭を戻し)いや、ここで礼を言わねば、いつ言うの
じゃ？」

デス「(フツ、と笑みを見せ)かつてのお前なら、礼は言わなかった
ろうな。一度赤子に戻り、成長し直したことで、感謝を口に出来るよ
うになったんだろう……良い環境で育った、ということだな」

ハイエロフアント「微笑んで」マジシャンとプリエステスが育んできた環境、だものね」

フォーチュン「遠い目をして）・・・否定はせん」

グラスを持ち上げ、飲み物を一口含み、ゴク、と喉を鳴らすフォーチュン。

ふう、と息をつき、コト、と卓上にグラスを戻す。

フォーチュン「ところで、話を聞いて思ったのじゃが・・・ひとつ、言わせてもらおうぞよ」

ハイエロフアント「何？」

フォーチュン「瞼を半分閉じ、ジト目で）そなたら・・・赤子のわらわをダシにして、いちやついておったな？」

直後。

カアツ・・・と、茹ったように真っ赤になつて、思わず椅子から立ち上がるデス。

隣で頬を鮮やかに染め、目を丸くして口を結ぶハイエロフアント。

デス「(裏返った声で) い！ いちや!? な！ 何を言い出す！」

ハイエロフアント「いちやつく、って！ そんなつもりは、なかつたけど・・・」

フォーチュン「今の話を聞いた者なら、100人が100人、いちやついてるとしか聞こえん、と答える筈じゃ。特にエロフアント、赤子のわらわを抱いたデスの姿に、ボーツ、つとしておったクセに、何を今更」

ハイエロフアント「更に赤くなり）それはその通りだし、その時のデスが物凄く綺麗だったし・・・」

フォーチュン「悪戯っぽい口調で）誰と誰の子供を想像したとか、聞いた方がよいか？」

ハイエロフアント、再度口元を引き締め、黙り込む。

デス、隣席で立ち尽くしたまま、唇を、パクパク、と開け閉めしている。

全身の肌が朱に染まり、頭頂部から湯気まで出している。

フォーチュン、満足したように、ニツ、と笑う。

フォーチュン「この辺で勘弁しといてやるわ。あまりツツコむと、茹で死神”が出来てしまうからのう」

もう一度、グラスの飲料に口を付けるフォーチュン。眼前のふたりを、目を細めて見詰める。

フォーチュン「エロフアント、デス、そなたたちの話は確かに聞いたぞよ。(飲み物の瓶を持ち)さあ、折角開けたのじゃ、飲んでいくとよい。長話で喉も乾いたであろう?」

すーっ・・・と自然と、緩やかに表情を戻すデスとハイエロフアント。

椅子に座り直して、ハイエロフアントに眼差しを送るデス。

彼女と視線をしっかりと絡めるハイエロフアント。

それから、向かいのフォーチュンに視界を移動させ、自分の前のグラスを持つふたり。

ハイエロフアント「ありがとう、フォーチュン。頂きます」

デス「あたしも貰おう」

領いて、ハイエロフアントのグラスに瓶を傾けるフォーチュン。

トクトクトク・・・と、飲み物の注がれる音。

★ (半時後) 森の道

雲が割れ、大きな切れ目から太陽光が降り注いでいる。

フォーチュンの居城を離れ、森の道を並んで歩いているデスとハイエロフアント。

ハイエロフアント、歩を進めながら、一度振り返り、フォーチュンの城の尖塔を目に映す。

そして、再び前方に視線を向ける。

ハイエロフアント「フォーチュンは、家に戻るかな?」

デス「いや、まだだろうな。自分から戻るには、何かきっかけなり、機会が必要なような気がする」

ハイエロフアント「騒ぎになってしまったこと、気にしてるのかな・・・」

デス「それはあるだろう。だが、一番大きな要因は・・・タワーの

存在だと思う」

ハイエロフアント「彼がこの城にいるから……一緒にいたいから、今は戻らない、ってこと、だろうね」

デス「(頷いて) 恐らく、な」

ハイエロフアント「マジシャンとプリエステスの為にも、一度戻ってほしいけど……」

デス「(ハイエロフアントを見詰め) 話はした。言うべきことも言った。ハイエロフアント、お前が出来ることはすべてやった。これ以上出来ることはない。後は……あいつら家族間での問題だ」

ハイエロフアント「(デスを見詰め返し、頷いて) そうだね……」
真っ直ぐに道の先に目線を据え、肩を並べて歩くふたり。

ハイエロフアント「少しでも良い方向に向かってくれれば、いいな」

おお、運命の女神よ | Episode of Fortune | 【第六話】

★ (数時間後) フォーチュンの居城・中庭

宵の口。柔らかい夜風が流れる、芝の張つてある中庭。

天空には半月。雲の境目から顔を覗かせたり、隠れたりしている。

タワー、片膝を着いた姿勢で、城と平行した位置に座る。

灯りが消えたままのフォーチュンの自室を、チラ、と目の端に捉える。

心配げな光を、左眼に宿している。

フォーチュン「タワー・・・」

ズ・・・と顔を足元に向けるタワー。

右腕で枕を、左腕で敷布と掛布を抱えて立っているフォーチュン。

タワーを見上げ、微笑みを湛え、揺るぎのない瞳を向けている。

タワー「(重厚な声で) フォーチュンさま・・・ドウシタ?」

フォーチュン「今夜は、そなたの中で寝るとする。良いか?」

タワー「・・・ヨロコンデ・・・」

右掌を、ズウ、と下ろすタワー。

フォーチュン、タワーの右手が庭の芝に着く寸前に、ぴよんつ、と軽やかに跳ねて飛び乗る。

★ タワーの内部

腹部バルコニーから繋がる、タワー内部の小部屋。

床に敷布を広げ、横になって掛布を身体に掛けるフォーチュン。

枕に乗せた後頭部の下で、両手を組んで天井を見上げる。

フォーチュン「暫く振りじゃな、ここで寝るのも。いつ以来だったかのう?」

タワー(頭上から)「フォーチュンさま、カエツテキタ、トキ・・・」

フォーチュン「(目を伏せ) あの時か・・・そうじゃった、か・・・」

フォーチュン、一度瞼を閉じ、切なげな表情を見せる。

フォーチュン《わらわが、過去を思い出した、あの日・・・》

【回想シーン】

★（過去） 街の郊外・マジシャンとハイプリエステスの家

【N】「過去の記憶を閉ざして赤子になったフォーチュンは、マジシャンとハイプリエステスの元で、すすくと育ち、ふたりの養育の甲斐もあり、礼儀正しい少女に成長していた。将来の夢は、父、マジシャンのような魔導士になることと、母、ハイプリエステスのような知識を持つこと、であった。そう、この日、この事件が起こるまでは」

テーブルに向かい、革表紙の本を開いているフォーチュン。

背筋を、ピツ、と伸ばし、綺麗な姿勢で座り、ページに目を落としている。

柔らかに、落ち着いた金色の瞳。

彼女と直角の位置、椅子に腰を下ろし、卓に向かい編み物をしているハイプリエステス。

普段は掛けない眼鏡を、くい、と鼻の辺りで上げ、時折フォーチュンを見て微笑む。

ふと、ハイプリエステスを見るフォーチュン。

フォーチュン「母上、この一節は、何の出来事のことなのでしょうか？」

ハイプリエステス「どれどれ・・・（1ページをを斜め読みし）ああ、これはぎますね、『星ヶ城の星の夜の爆発』という事件のことぎますよ。遙か昔の出来事ぎますが、とつてもエッセティックなお話なんぎますよ」

フォーチュン「母上は、ご存知なのですか？」

ハイプリエステス「ええ、図書館に本があるぎます。『ウイタ・マキニカリス』に書いてある『星澄む郷』というエピソードで・・・（感銘を受けている口調で）素敵で、幻想的で、神秘的で、何度も読んだぎます。今度行った時に持って帰るぎますので、是非読んでみるといいぎますよ」

フォーチュン「（微笑んで）はい、お願いします」

フォーチュン、葉を本に挟み、パタ、と閉じる。

フォーチュン「私は、まだまだ知識がありません。母上に教えてもらうことは、多いので……(右手を挙げて、見詰め)魔法も、父上には遠く及びません。術も上手くありませんし……」

ハイプリエステス「焦ることはない致しますよ。フォーチュンはフォーチュンのペースで、いい致します」

フォーチュン「(不安そうに)私は……父上のような魔導士に、なれるのでしょうか？」

ハイプリエステス「(頷いて)間違いなく、なれる致します。わたくしが保障する致しますよ」

フォーチュン「(安堵の表情で)母上……ありがとうございます」
ハイプリエステス「そろそろ、お茶の時間致しますね。マジシャンさんは、まだお庭致しますか……フォーチュン、呼んできてほしい致します」

フォーチュン「はい、母上」

ガタ、と椅子を下げて立ち上がるフォーチュン。

編み掛けの毛糸、編み棒を卓上の籠に纏めて入れ始めるハイプリエステス。

フォーチュン、玄関に足を向けて、歩を進める。

ハイプリエステスの背後を過ぎ、扉まで数歩の距離まで歩く。

突然。

くらあつ……と、血が引くような感覚に襲われるフォーチュン。

視界が薄暗くなつていく。

ふわ、と足が浮遊するような、激しい眩暈。

足を止め、倒れないように両脚に力を込める。

フォーチュン《わ……私は……わ……私……》

フォーチュンの様子の変化に、思わず彼女の背を見詰めるハイプリエステス。

ハイプリエステス「(怪訝そうに)フォーチュン?……どうしたん致します?」

虚空を凝視したままのフォーチュン。

両眼の光が仄暗くなり、聴力が急激に降下する。

自分の裡、遙か底の深層から、何かがせり上がってくる。

意識が闇の中にあるような、五感が痺れているような、奇妙な状態。

フォーチュン《深い奥底から響くように》わ……わら……わら……わらわ、の、名……わらわの名……フォーチュン……わらわは……

『運命の輪』……『ホイール・オブ・フォーチュン』……》

深海から海面に浮上していくように、徐々に感覚を取り戻していくフォーチュン。

フォーチュン「籠った声で」わ……わらわ……は……フォーチュン……」

ハイプリエステス「わらわ？……（ハッ、と息を飲んで）まさかあなた！」

フォーチュン「（明瞭な声で）わらわの名は、フォーチュン。『運命の輪』ぞよ……」

ガタアツ！と、勢いよく椅子を跳ね下げ、立ち上がるハイプリエステス。

フォーチュンの脳裏に、ある姿が投影される。

姿見に映った、ドレスを着用している、大人の女性の自分。

それが非常に明確な映像として、鮮やかに蘇る。

猛烈な勢いで意識内に溢れ出る、過去にフォーチュンが体験した出来事。

連鎖して映像化され、時空を遡っていく、記憶。

フォーチュンの両目に、再度光が宿る。

今の眼光は鋭く、瞳が黄金色に燃えるように輝く。

彼女のすべての感覚が、回帰する。

フォーチュン「見える……（大声で）わらわは、かつて大人の姿であつた！」

ハイプリエステス「（震えた声で）その口調……フォーチュン……記憶が……戻ったぞ、か？……」

ゆつくりと、ハイプリエステスに身体を正対させるフォーチュン。自分の発言、脳裏の映像、過去の記憶すべてが信じられないような、

愕然とした表情。

ハイプリエステス、両手で口を覆い、血色を失う。

交わされる、目線。

沈黙。

沈黙。

フォーチュンの瞳が、大きく揺らぎ始める。

フォーチュン「母上・・・わらわの頭に、昔のわらわの姿が、出ておる・・・わらわは大人の姿じゃったのか？ 何故今は女子の姿になっておる？ それと、わらわは・・・(重い声色で)運命を司る女神であった、のか？ 何がどうなっておる？ 解らん・・・何が何だかさっぱり解らん！ 母上！ 説明してほしいぞよ！」

直後。

ガチャリ、と玄関が開き、マジシャンが入室してくる。

向かい合って立っているふたりを見て、穏やかではない雰囲気を感じる。

マジシャン「何事だ？」

ハイプリエステス「(肩を震わせ)マジシャンさん！ フォーチュンが・・・記憶を・・・」

マジシャン「(息を飲み)・・・何だと！」

すつ、と身体を返し、今度はマジシャンと相対するフォーチュン。

縫り付くような眼差し。混乱と不安が浮かんでいる顔。

それを目の当たりにして、少し目を見開き、驚きを全面に出すマジシャン。

フォーチュン「父上！ わらわは以前、運命の女神であったのか!？」

何故、今はこの姿になっておる!?! わらわに何があったのじゃ!?!

さつき母上が言った『記憶』とは何のことじゃ!?! 何故、わらわの知らないわらわを覚えておるのじゃ!?! わらわはどういった存在なのじゃ!?! 昔は大人の姿じゃったのなら・・・(目を見開き)誰かがわらわの姿を変えてしまったのか!?! だとしたら誰じゃ!?! それに・・・

(微かに肩を震わせ)わらわは、父上と母上の子ではなかったのか!?!」
マジシャン「(すう、ふうう、と深呼吸をして)落ち着け、フォーチュン

ン・・・」

フォーチュン「焦れたように落ち着いておられる訳がなからう！
いいから！ 早う話を！ ああもう、頭の中がグチャグチャ
じゃ・・・早う！ 説明を！ 話を！ 頼むぞよ！」

両手で頭を抱え、数回大きく左右に振って瞼を固く閉じるフォー
チュン。

マジシャン「まずは、落ち着きなさい。その混乱している状況では、
何を話しても・・・」

途端。

ガバツ！と顔を上げ、見る見る怒りの形相を浮かべるフォーチュ
ン。

白目を剥き、両腕を振り下ろし、ギリイッ！と激しく奥歯を噛み締
める。

瞳が、赤黒く染まる。

フォーチュン「(腹の底からの怒声)もおよいわああああツツツ
!!!」

次の、瞬間。

クワアアアツツツ!!と、赤い光の柱が、フォーチュンの真下から天
井に伸びる。

ズドオオオオオツツツン!!と、地の底から突き上げるような轟
音。

魔法風がフォーチュンの足元から垂直に吹き上がり、ツイントール
の髪を真上に靡かせる。

フォーチュンの周囲に、風が渦を巻き始める。

マジシャン、間髪入れず側方から部屋の奥へ駆け込み、ハイプリエ
ステスを抱きかかえる。

彼の胸元にしがみつくハイプリエステス。一気に抜ける、力。
崩れ落ちるようになやがみ込む、ふたり。

マジシャン、片膝を着いて左腕でハイプリエステスを抱き寄せ、右
掌を真上に突き出す。

マジシャン「(張りのある声で)マジック・シエル！」

ブウン・・・と、透明な膜が半球形を成し、マジシャンとハイプリエステスを覆う。

直後。

フォーチュンの周囲の風が、彼女を中心とした灰色の突風と化し、加速していく。

ズウウウ・・・ブオオオ・・・ズアアアアツツ・・・と、一気に風速と風量を増す。

刹那の間の、後。

バツガアアアアア——ツツンツツ!!と、大爆発を起こしたように拡散する風の渦。

テーブルが横転し、椅子が舞い、ベッドが跳ね上がり、食器棚が宙に浮く。

部屋中のすべての物品が竜巻に飲み込まれ、派手な破壊音を立てて四散し、あるいはぶつかり合う。

更に加速し続ける、暴風。

余りの風圧に耐えかね、ガツシヤアアアン!!と碎け散る窓ガラスと窓枠。

とうとう、バアアンツ!!と、玄関の蝶番が破壊され、扉が吹き飛んで宙を回転しながら遠ざかっていく。

マジシャン「(大声で)フォーチュンツ!!」

ハッ!と我に返るフォーチュン。

瞬時に、暴風も魔法風も光も止む。

重力に従い、静かに降りて下がるフォーチュンの髪。

瞳は、黄金色を戻している。

暫く茫然と虚空を見た後、恐る恐る身体を返して部屋の中を見回すフォーチュン。

見る影もない、惨状。

何処かしらか、カチャン、と陶器が落ちる音。

眼前、床に屈んだ両親を目にして、息を飲む。

マジシャンの防御魔法の効果で、ふたりとも傷ひとつ付いてはいない。

ゆつくりと右腕を下ろし、こちらに視線を向けているマジシャン。ギリツ・・・と奥歯を痛いくらいに噛んでいて、唇を震わせ、両眼は鋭利な光を宿している。

彼の胸に両腕を回し、焦点の合わない、怯え切った瞳を送ってくるハイプリエステス。

恐怖の余り全身を震わせ、短い呼吸を繰り返している。

顔面蒼白となるフォーチュン。

フォーチュン「詰まったような声で）あ・・・うあ・・・あ・・・」
フォーチュン、肩を震わせ、2、3歩後退る。

少しの間。

クルツ、と踵を返し、ダツ！と床を蹴って駆け出すフォーチュン。玄関を飛び出し、脇目も振らず一目散に庭を抜け、門を潜ろうとする。

マジシャン「待ちなさい！ フォーチュン！」

フォーチュン、マジシャンの声が後方から耳に届くも、走るのを止めない。

門から小道に走り込み、瞼をきつく閉じて、全速力で家から遠ざかっていく。

★（過去・半時後）森の道

雲行きが怪しくなり、急速に陰っていく。

樹々の葉が覆い被さった森の道を、全力で走っているフォーチュン。

ダダダダダ・・・と土を蹴り、大きく両腕を振って駆け続ける。薄く瞼を開け、ただ足元の少し先の路面だけを見詰めている。

フォーチュン《何じゃ・・・一体何なんじゃ・・・わらわは・・・何という存在なのじゃ・・・》

フォーチュン、段々と速力を落としていく。

やがて、走駆から歩行へと変わる。進める脚は停めない。

息が上がり、はあっ・・・はあっ・・・と荒い呼吸を繰り返している。

フォーチュン《わらわは『運命の輪』、わらわは『ホイール・オブ・フォーチュン』、この世界の運命の流れを司る、女神……1万年の時を生きている、女神……》

両目をしっかりと開け、双方の掌を顔の近くまで掲げて挙げるフォーチュン。

フォーチュン《理由は解らんが、今はこの女子の姿……そして……あのふたりに……育てられた……》
途端。

フォーチュン、足を止める。

脳裏に浮かぶ、ハイプリエステスの怯えた表情。

フォーチュン《母上を、怖がらせてしもうた……》

続けて意識に映し出される、マジシャンの鋭い眼光。

フォーチュン《父上を、怒らせてしもうた……》

フラシユバックのように鮮烈に投影される、破壊された室内の映像。

フォーチュン《家を……滅茶滅茶に壊してしもうた!》

両手で顔を覆い、ガク……と膝の力が抜ける感覚を味わうフォーチュン。

ザ、と両膝を路面に下ろし、指の間から数歩先の地面に目線を投げる。

瞳は、絶望に満ちた色合い。

暫くの、間。

暫くの、間。

フォーチュン、ダラ……と両手を下げ、虚ろな表情で、行く先の道を眺める。

更に、間。

やや生気を戻した視線を、背後に投げるフォーチュン。

フォーチュン《(悲哀を込め) もう……あの家には……父上と母上の元には、戻れん……》

フォーチュン、静かに立ち上がる。

そして、ズ……ザ……と緩慢な動作で、引き摺るように重い足

取りで歩き始める。

おお、運命の女神よ | Episode of Fortune | 【第七話】

★（過去・更に数時間後）マジカルランド中央・フォーチュンの住んでいた居城

雲が幾分切れ掛かっている、空。

天にそびえる尖塔を見上げて、石段の一番下に立ち止まるフォーチュン。

フォーチュン《わらわの、城……ここじゃ……わらわは、かつてここに住んでおった……》

フォーチュン、疲れ果てたような表情と動きで、ゆっくりと階段を昇っていく。

石段の最頂部まで数段のところ、城門の向こうに、煉瓦造りの巨大な人型を確認。

ハッ！と思わず顔を上げ、残る段を駆け上がり、城門をくぐる。

眼前に、片膝と両手を石畳にしつかりと据えた、タワーの姿。

フォーチュン《愕然として》……タワー！》

タワーに走り寄り、大きく深呼吸をして見上げるフォーチュン。

光のない左眼を、じつ、と見詰める。

フツ、と穏やかな微笑みを浮かべ、目を細める。

フォーチュン《ああ……懐かしいのう……そなたと過ごしていた日々が……》

暫くの間、遠くを見るような視線を彼に送る。

ふと、タワーの周囲に視界を巡らせる。

城の玄関を密着して塞いでいる、背中。

身体に無数に群生している、苔。

風雨に晒され続けて、身体を構成する煉瓦のいくつかにヒビが見受けられる。

フォーチュン《苔むして尚、城を護ってくれとったのか……》

タワーの爪先に歩み寄り、そつ、と右手を触れるフォーチュン。

直後。

ブイイイイン・・・と、何かが起動するような音。

タワーの体内から聞こえてくる。

フォーチュン「(ハッ！と、思わず見上げ)・・・まさか！」

タワーの爪先に、緑色の光が煌く。

それが煉瓦と煉瓦の隙間を縫い、一気に脚を駆け上り、全身を覆い
尽くしていく。

キュルルルル・・・と、綺麗な緑の光で染まっていくタワー。

それが頭部まで達し、瞬く間に光が左眼に集まる。

キュイイ——ンツツ!!と、高い周波の音が響く。

左眼に宿った、緑色の煌き。

目を丸く見開き、驚愕の表情を見せるフォーチュン。

タワー「(重厚な声で)ター・・・ワー・・・」

ズウ・・・と顔を動かし、少し屈むタワー。

タワーの左眼に、自分の姿が映るのを確認するフォーチュン。

そのまま、暫く。

更に、間。

タワー「(深く優しい声で)オカエリナサイ・・・フォーチュンサ
マ・・・」

フォーチュン「(息を飲み、一層驚き)わらわが判るのか!？」

タワー「(静かに頷き)オマチシテ、オリマシタ・・・」

沈黙。

沈黙。

沈黙。

長い、長い間。

フォーチュンの両方の瞳から、ぽろ、と涙が頬を伝う。

ぽろっ・・・ぽろっ・・・と、連続する透明な滴。

フォーチュン「(落涙しつつ)タワー・・・タワー・・・わらわを・・・
待って・・・」

ぽろろ・・・ぽろろろ・・・と、滝のように流れ出る涙。

ぐうっ、と嗚咽が彼女の裡を突き上がり、喉元を一度引き締める。

しかし堪え切れず、表情を一気に崩すフォーチュン。
フォーチュン「空に届くほどの泣き声で」うわあああああああ
ん!!!」

フォーチュン、天を仰ぎ、幼児のように泣き始める。
腹の底からの、感情を一片残らず吐露させたような、感涙の絶叫。
両方の瞼を強く閉じ、眉をこれ以上ないほど寄せ、大きく口を開け
て泣く。

ポトツ、ポトツ、と頬から顎先を伝って、彼女の足元に落下する涙。
慌てて両掌を翳し、どうしていいか判らない様子のタワー。

タワー「(狼狽えた声で)フォーチュンさま・・・ナカナイデ・・・
ナキヤンデ・・・」

尚も、フォーチュンは泣き止まない。

おろおろ、と手を上げ下げして、フォーチュンを見詰め続けている
タワー。

【回想シーン終了】

★ タワーの内部

彼方を眺めるような目線から、天井に焦点を合わせるフォーチュ
ン。

頭の下に組んでいた両手を抜き、寝ている身体と垂直に、天井に向
けて掌を翳す。

フォーチュン「(しみじみと)あの時の気持ちを、生涯忘れまい。い
や、忘れまいと誓った・・・あなたが雨風に晒されながら城を護り、わ
らわを待っていてくれたことが、嬉しかったのじゃ・・・あの感激足
るや、何物にも替え難い」

タワー(頭上から)「ワタシ・・・タダ・・・マツテイタ、ダケ・・・
ナニモ、シテナイ・・・」

フォーチュン「待つのは大変なことじゃ。わらわには出来ん。1万
年も生きとって、待つのは苦手なのう・・・(微笑んで)本当に、あり
がたかったのじゃ、タワー」

フォーチュン、すつ、と両腕を下ろし、体側に置く。

フォーチュン「そなたとは、どれくらいの付き合いになるかのう？
5千年くらいにはなるか？」

タワー「フォーチュンサマ、シロ、タテテ、カラ・・・」

フォーチュン「ではやはり、5千は超えるか・・・（申し訳なさそうに）タワー、そなたには一時、酷い扱いをしていたのう。下僕同様に接してた時期もあることを、ハッキリ覚えておる・・・（沈んだ声ですまんかった。今更詫びを言っても、とは思うのじゃが、許してはくれまいか？」

タワー（頭上から）「アヤマルコト、ナイ・・・ワタシ・・・フォーチュンサマ、シタガウ・・・」

急に、ガバツ、と起き上がり、天井を見上げるフォーチュン。

フォーチュン「（首を左右に振り）それでは駄目なのじゃ、タワー。最早『従う』とか『従わせる』ではなく・・・そなたには、わらわの下ではなく・・・（頬を染め）その、何じゃ・・・」

俯くフォーチュン。

頬に朱を帯びさせたまま、自分の足元に視線を投げ、口元を、キユツ、と結ぶ。

少しの間。

右手で拳を作り、膝の上に置いて、グツ、と握る。

意を決したように真上を向いて、僅かに瞳を潤ませる。

フォーチュン「タワー、一度外に出る。扉を開けよ」

タワー（頭上から）「ター・・・ワー・・・」

フォーチュン、掛布を除け、両脚に力を込めて起立する。

ガチャ・・・と自動で開く、目の前の扉。バルコニーが視界に入る。頷いて、歩を前に進めるフォーチュン。

★ フォーチュンの居城・中庭

タワーの腹部バルコニーに足を踏み入れるフォーチュン。

穏やかな夜風が、さわ、と彼女を頬を撫でる。

フォーチュン「そなたの顔の前に行く。よいな？」

タワー「ター・・・ワー・・・」

ズウ、と右の掌を持ち上げ、欄干に水平に添えるタワー。
欄干に右足を掛け、スツ、と昇り、そのままタワーの掌に乗るフォー
チュン。

ズズズ・・・と自分の顔面に手を持ち上げ、五指を向こう側に位置
させる。

フォーチュンは、タワーに背を向けている。

暫く、そのまま。

尚も、間。

フォーチュン、両手を後ろ手に組み、もじ・・・と指を絡めている。
突然、くる、と振り向くフォーチュン。

今までない程、両頬が赤く染まっている。

艶やかな色彩に輝く、黄金色の瞳。

数歩、タワーの顔に近寄り、彼の左眼を目の当たりにする。

フォーチュン、和らいだ微笑みを浮かべる。

フォーチュン「そなたは、澄んだ目をしとるのう。綺麗な緑の色
じゃ」

タワー「フォーチュンさま、ノ・・・オカゲ・・・」

フォーチュン「話の続きじゃが・・・(真剣な表情で)今から、わら
わの今の気持ちを言うぞよ。心して聞くがよい」

タワー「(落ち着いた声で)ワカツタ・・・」

すう、はあっ・・・と大きな呼吸をするフォーチュン。

ゴクリ、と唾を飲み込み、きり、と眼差しを向ける。

フォーチュン「そなたに再会した日に、決めたのじゃ、タワー：：
そなたには、わらわの傍にいてほしいのじゃ。下ではなく、わらわに
従うでなく、隣に、横にいてほしいのじゃ。わらわの判る場所に、見
える場所にてほしいのじゃ。声が届くところに、いつつもいてほし
いのじゃ。誰でもない、そなたに・・・(凜とした声で)タワーにいて
ほしいのじゃ！ 主と従者の関わりよりも、わらわの連れ合いとして
傍におってはくれぬか!？」

沈黙。

沈黙。

タワーの眼の光が、キラ・・・と瞬間虹色に変わり、また元の緑色に戻る。

フォーチュン、両手で拳を握り、身体の横に下ろす。

タワー「フォーチュンサマ・・・」

フォーチュン「(目を伏せ)そなたが主従の間柄を望むのなら、そうである方が負担にならぬのであれば、それでも良い。じゃが、わらわは・・・(顔を上げ、少し潤んだ瞳で)どんな関係でも、タワーと離れとうない・・・そなただけは、わらわのものじゃ。誰にも渡しとうない・・・そなたと一緒にいたい・・・わらわは・・・(きつぱりと)そなたと添い遂げたいのじゃ! この先、何百、何千、何万年と経とうとも! この身が減びるまで! 朽ち果てるまで共にありたいのじゃ!」

再び、左眼に虹の輝きを帯びさせるタワー。

今度はやや長い時間。そして静かに、色を戻す。

タワー「(深遠の響きの声で)・・・ワタシ、デ・・・イイノカ?」
コクン、コクン、と頭を上下に、明確な動作で振るフォーチュン。
タワーの眼の光が、刹那、戸惑ったように鈍る。

タワー「ワタシ、ヌクモリ、ナイ・・・ニンギョウ・・・フォーチュンサマ、ヌクモリ、アル・・・」

フォーチュン「(張りのある声で)体温なんぞよりも! そなたは! わらわに心の温もりを教えてくださいとる!」

フォーチュン、両手を胸の前で重ね、ギュウツ、と握る。

蕩けるような、何もかも許容したような、陽溜まりのような笑顔。うる・・・と、彼女の双方の瞳が潤いで煌く。

フォーチュン「(穏やかな声で)これ以上の温かいものなど、この世にあるか・・・」

絡む、ふたりの眼差し。

そのまま、停止。

暫くの、間。

更に、間。

キラツ、と今まで以上の虹色の輝きを放つ、タワーの左眼。

タワー「(優しい声で)フォーチュンさま、ノゾミ……ワタシ、ウレシイ……」

フォーチュン「(声を昂らせ)真か！ 真にそう思うか！」

タワー「(頷いて)ワタシ、フォーチュンさま……ズット、イツシヨ……ワタシ、モ、フォーチュンさま、トナリ、イタイ……ズット、ズット、ズット、イツシヨ……」

フォーチュンの笑みが、弾ける。

ズ……と顔を近付けていくタワー。

手の届く距離まで来た時に、待ちきれなかったように、ガバツ！と両腕を広げて抱き着くフォーチュン。

タワーの顔の下方、顎と思しき付近に頬を摺り寄せる。

フォーチュン「(歓喜に満ちた声で)タワー……もう離さんぞよ……」
タワー「(再度、キラ、と眼を煌かせ)フォーチュンさま、ワタシ、ハナレナイ……」

フォーチュン、撫でるようにタワーの顔に手を滑らせ、少し身体を起こす。

つ……と右の人差し指を伝わせ、タワーの顎付近の上部で、ぴたと止める。

フォーチュン「(艶やかな声で)そなたに口があれば、よかつたのう……」

指を立てた辺りに、左右の掌を、タワーの顔にしっかりと密着させるフォーチュン。

瞼を閉じ、手と手の間に、躊躇なく顔を寄せる。

唇を、押し当てる。

そのまま、停止。

タワーの左眼、鮮やかな朱色に染まっていく。

ドクン、ドクン、と脈打つように点滅を始める。

長い、長い時間の口付け。

更に、続く。

フォーチュン、そお……と身体を起こし、照れた顔で満面の笑みを浮かべる。

一向に収まる気配のない、タワーの眼の点滅。それを嬉しそうに眺めているフォーチュン。フォーチュン「今度は、そなたがしてみよ。ゆっくりで良いぞ」ビク、と動揺したように顔を動かすタワー。フォーチュン、両手を後ろ手に組み、顎を上げ、瞼を閉じて唇を結ぶ。

タワー、余り間を置かず、ズウツ・・・と顔を接近させる。徐々に、極めて緩やかに、少しずつ、慎重に寄せる。ぴと・・・と、先ほどフォーチュンの唇が付いた場所を、寸分違わず、再び当てるタワー。

ぐうつ、と一層強く自分の唇を密着させるフォーチュン。再開される、長い口付け。尚も、続く。

タワーの眼の点滅は、いつの間にか治まっている。朱色から緑色に、落ち着いた色を取り戻す。そ・・・と惜しむように、唇を離すフォーチュン。両掌はタワーの顔に添えたまま、蕩けそうな表情を向ける。フォーチュン「甘い声色で」上手いのう・・・最高の接吻じゃった・・・」

タワー「(照れ臭そうに) ヨロコンデ、モラエテ・・・ウレシイ・・・」フォーチュン、目を細め、嬉しそうな微笑みを浮かべる。

★ (数週間後) フォーチュンの居城・自室

【N】「それから、数週間経ったある日の、宵」陽も沈み切り、とっぷりと暮れて闇が覆っている空。

開かれた自室の窓、その窓枠に両肘を着き、右手に小壘を持って目の前に掲げているフォーチュン。

小壘の中には、マジカルドロップが一粒だけ入っている。窓の外、フォーチュンの目の前にはタワーの顔。緑色の眼で、じつ、と彼女を見詰める。

【N】「フォーチュンの元にある、一粒のマジカルドロップ。これは、

ワールドから手渡された物。『天空の女神』が言うのは、近い内にデスとハイエロファントが結婚式を挙げる可能性がある、その時に全員で集まって参列してほしい、とのことだった。ドロップを使って一堂に会する為に、ワールドが段取りをしていたのである」

右手を軽く振り、中のドロップを転がすフォーチュン。

コロン、と軽やかな音が耳に届く。

フォーチュンとタワー、眼差しを絡める。

フォーチュン「まあ、あやつらがその内に結婚するじやろうことは、随分前から見えていたことではあるがのう。じゃが、正確にどの日になるかは、今もよく見えん……『運命の輪』の力も、まだ戻り切っておらんのか、不安定なのかも知れん。(ふう、と息を継ぎ)折角、祝いの品も準備してるといふのにのう」

タワー「ワタシ、ハヤク、オイワイ、シタイ……タノシミ……」

フォーチュン「笑顔で」まったくじや。あやつらの驚く顔が目にかぶわ」

タワー、顔を少し下に向けてから、ズ……と再度上げてフォーチュンに視線を結ぶ。

タワー「フォーチュンサマ、ヒトツ、キキタイ……」

フォーチュン「何じゃ？ 申してみよ」

タワー「(少し籠った声で)……イエ、カエリタク、ナイノカ？」

ピク、と眉を微かに跳ねさせ、目を伏せるフォーチュン。

壇を持った右手を下げ、窓枠に両腕を重ねて置く。

少し曇った表情。

しかし、意を決した様子で顔を上げ、タワーの左眼に真っ直ぐ眼差しを注ぐ。

フォーチュン「そなたには、正直言っておこう……一度は顔を見せたい、と思っておる。じゃが……(切なそうに)帰ったら、父上と母上と暮らしたくなるじやろう。この城にそなたを置いていくなど、出来ん……タワーと離れとうない……」

途端。

ズイ……と、タワーが顔を窓に接近させる。

フォーチュン、目線を繋いだまま、窓枠に両手を着き、上半身を乗り出す。

触れれば届く距離まで寄り、一度動きを停めるタワー。

タワー「(穏やかな声で)ワタシ・・・マツ・・・ダカラ・・・カオ、ミセテアゲテ・・・」

緑色の眼が、キラリ、と輝きを放つ。

至近距離で見詰め合う、ふたり。

両瞼を閉じ、すっ・・・と顔を近付けるフォーチュン。

タワーの口と思しき辺りに、唇を押し当てる。

少しの間、そのまま。

フォーチュン、静かに離れ、身体を部屋の中に戻し、艶やかな眼差しを向ける。

フォーチュン「もう暫し、考えておくぞよ」

小首を傾け、可愛らしい微笑みを湛えるフォーチュン。

頷く、タワー。

直後。

部屋中、そして城の周囲の空気が、一瞬、ブイン・・・と震える。

思わず周囲を見渡し、それから夜空を見上げる、フォーチュンとタワー。

フォーチュンの持つ小壇の中のドロップが、ポアアッ・・・と光を発する。

続けて聞こえる、ワールドの声。

ドロップに視線を繋げる、ふたり。

ワールド(声のみ)「聞こえますか・・・ドロップを持つ方々よ、聞こえますか・・・間もなく、デスとエロファントが神殿で挙式を行う模様です・・・取り急ぎ申し訳ありませんが・・・すぐに来られる方は・・・只今から神殿前庭に集合なさって下さい・・・天空の女神の名に於いて、ドロップの封印を解除します・・・では、後ほど・・・」
見る見る明るい表情となるフォーチュン。

フォーチュン「ニッ、と笑い」いきなりじやのう！ 読めんかったわ！ じやが、面白いことになりよった！」

フォーチュン、窓枠から一步後方に下がり、両脚を肩幅に広げて背筋を伸ばして立つ。

フォーチュン「タワー！ 花火の筒を装填せよ！ わらわも魔法弾を準備する！ 整い次第、ドロップで神殿に飛ぶ！ いよいよ祝いの品を披露する時が来よったのう！」

タワー「・・・ロウ、ノ、エンペラー、ドウスル？」

あつ、と短く声を上げ、目を見開いて表情を停止させるフォーチュン。

沈黙。

沈黙。

フォーチュン、ガク・・・と項垂れて、右手で顔の半分を覆って首を左右に振る。

フォーチュン「(はあ、と溜め息をつき) あつちやあ・・・すっかり忘れとったわ・・・拳式までには『最教育』しておくつもりじゃったが、間に合わなかった・・・(顔を上げ) 仕方ない、『奥の手』を使うとしよう。わらわの宝物庫に、人格や性格を一時的に自由に設定出来る『電池』があつた筈じゃ。それを使うとする。もたもたしてると式が終わってしまうでな、止むを得まい」

ズウ、と大きく頷くタワー。

そして、バツ！と顔を上げてタワーに視線を結ぶフォーチュン。

左掌を真っ直ぐ伸ばして掲げ、やる気満々という、凜として清々しい表情。

フォーチュン「そなたは筒の設定をしておけ！ わらわは他の準備を急ぐ！ (満面の笑みで) さあ、忙しくなるぞよ！ タワー！ 共に行こうぞ！」

タワー「(嬉しそうに) ター！ ワー！」

【N】「この夜、遅れながらもデスとハイエロファントの結婚式に参列したフォーチュンは、マジシャン、ハイプリエステスと再会し、和解除する。更に明るる日、エンプレスの城で行われた、デスとハイエロファントの披露宴に、タワーと揃って出席。その日の夕餉を、育てきた家で取り・・・フォーチュンは母の手料理を堪能し、久し振りの

「家族団欒を味わうことになった」

おお、運命の女神よ | Episode of Fortune | 【第八話】

★（1ヶ月後）街の郊外・マジシャンとハイプリエステスの家

【N】「その後、フォーチュンは、週に1日、マジシャンとハイプリエステスの家で過ごすことにした。既に親子としての、家族としてのわだかまりはなくなったにせよ、タワーがいる居城になるべくいたい、というのが彼女の願いだっただからである。マジシャンもハイプリエステスも、フォーチュンの望みを優先し、それを認めてくれた」

麗らかな気温の、昼下がり。

テーブルに向かい合って座り、茶と茶菓子を嗜んでいるマジシャンとハイプリエステス。

香しいハーブティーの湯気が、卓上の空間を揺れている。

菓子籠に盛り付けられたクッキー、ラスクなどの焼き菓子。

ラスクを一片摘み、サク、と噛み締めるマジシャン。

茶を少し啜り、ふう、と穏やかな表情になるハイプリエステス。

【N】「デスとハイエロファントの結婚式から1ヵ月ほど過ぎた日。フォーチュンがタワーと共に、マジシャンとハイプリエステスの元に戻っていた時に、ある賑やかな騒動が起こった」

奥の部屋から、居間に入室してくるフォーチュン。

テーブルの横に立ち、左右の椅子に座る両親に、一度ずつ顔を向ける。

フォーチュン「父上、母上、話があるんじゃないが」

マジシャン「どうしたのだ？ 改まって」

フォーチュン「重要な話じゃ。聞いてほしい」

ハイプリエステス「（頷いて）いい致しますよ。お話しなさい」

ハイプリエステス、カップを受け皿に、カチャリ、と置く。

マジシャン、食べ掛けのラスクを、手元の小皿に乗せる。

娘に視線を送る、ふたり。

すうう・・・ふうう・・・と、一際大きな深呼吸をして、再度両親

を見詰めるフォーチュン。

僅かの、間。

フォーチュン「(真剣な表情で) タワーを婿に迎えたいのじゃ!」

沈黙。

沈黙。

目を正円に見開き、茫然として動きを凍て付かせるマジシャン。対して、ほとんど表情を変えていないハイプリエステス。

マジシャン「(動揺した声で)・・・今・・・何と言ったのか?」

フォーチュン「(凜とした声で) わらわは! タワーの嫁になりたい! 結婚をしたいのじゃ!」

パン!と、軽やかに音を立てて、胸の前で両掌を叩き合わせるハイプリエステス。

ハイプリエステス「(満面の笑みで) 大賛成致します!」

マジシャン「(思わずハイプリエステスを見て、声が裏返り) はあッ!」

フォーチュン「(嬉しそうに) 真か、母上? 賛成してくれるんじゃない?」

ハイプリエステス「(頷いて) ええ、もちろん致しますよ! 大好きな殿方と結ばれる・・・最高の幸せ致します!」

フォーチュン「(歓喜に震え) 母上・・・」

ハイプリエステス「そうになると、わたくしは義理の息子を持つことになる致しますねえ・・・タワーなら、安心してあなたの未来を託せる致します。きつと良い家庭を築けると思う致します!」

フォーチュン「(言いにくそうに) そ、そこでじゃな、話ついでですまぬが、勝手な提案を言わせてもらいたいのじゃ・・・」

ハイプリエステス「何ぞましょ?」

フォーチュン「タワーに住むには、わらわの城くらいの館が必要となる。新たに館を建てるのも考えたのじゃが・・・(顔色を窺うように) どうじゃろ? 全員でわらわの城に引っ越す、というのは・・・そうすれば、父上と母上と、わらわたち夫婦で揃って暮らせる、と思うてのう・・・」

ニツコオツ、とはち切れそうな笑顔となるハイプリエステス。

フォーチュンに身体を向け、両手を合わせて握り、瞳を煌かせる。

ハイプリエステス「(感嘆した声で)素晴らしい致します! 完璧致します

! みんな揃ってまた暮らせるなんて、夢のよう致します!」

フォーチュン「(パアアア・・・と明るい笑顔になり)では! 良いのか!」

ハイプリエステス「お城に、図書室はある致しますか?」

フォーチュン「あるぞよ! 蔵書を増やせるだけの部屋も、父上の

魔術研究の部屋も用意出来るぞよ!」

ハイプリエステス「じゃ! 決まり致しますねっ!」

マジシャン「(腹の底からの声で) ちよつと待ち給えええツツツ
!!!」

バツ!と、右掌をハイプリエステスに突き出し、翳すマジシャン。

ハイプリエステスとフォーチュンが、同時に彼を視界に映す。

瞬時に怪訝そうな顔となり、眉を顰めるハイプリエステス。

ハイプリエステス「何致します、そんな大声出して」

マジシャン「(再度大声で) 話を勝手に進めるでない!」

ハイプリエステス「マジシャンさんは反対致しますか? フォーチュ
ンの結婚」

マジシャン「(冷静になつて、手を下ろし) いや、決して反対ではな
いのだが・・・」

ハイプリエステス「じゃあ、いい致しますよ? 式の日取りも決めて、

衣装も選んで・・・」

マジシャン「(再度声を高め) だーかーらー! 私にも意見を求めて
はくれんのか!」

ハイプリエステス「どうぞ、致します」

マジシャン「あ、うむ。(ゴホン、と一度咳払いをして) フォーチュ
ン、よく聞きなさい。私も、その、何だ、タワーは、良いと思ってい
る」

フォーチュン「(再度笑顔になつて) 父上も賛成してくれるか! 嬉
しいのう!」

マジシャン「ま、まあ、賛成は賛成なのだが・・・話が、いきなり
だったもので、な、その・・・」

ハイプリエステス「(割り込み) 神殿の予約もしておくぎますね」
マジシャン「(またも大声で) 私の話はまだ途中である!」

ハイプリエステス「もう、簡潔に言っただけほしいぎますよ。折角の娘
の晴れ舞台ぎますもの。いろいろ考えたいぎます。フォーチュン
だって、早く決めたい気持ちもあるぎますよ?」

フォーチュン「そうじゃのう。やはり、決めるものを決めておきた
いぞよ」

マジシャン「(言葉を選ぶように) だが、少し、急ぎ過ぎ、ではない
のか?」

ハイプリエステス「善は急げ、ざましよ?」

マジシャン「急がば回れ、とも言うのである」

ハイプリエステス「(ムツ、として) 思い立ったが吉日、とも言うぎ
ますよ?」

マジシャン「(ムツ、として) 急いで事はし損ずる、とも言うであ
るぞ?」

ハイプリエステス「(カチーン!ときて)・・・好機逸すべからず、と
も言うぎますよ!」

マジシャン「(カチーン!ときて)・・・待てば海路の日和あり、と
も言うのである!」

ガタ、ガタ、と続け様に椅子から立ち上がるマジシャンとハイプリ
エステス。

テーブルを挟んで、凄まじい眼光を飛ばして睨み合う。

「効果映像」背後に、ゴオツ!と燃え上がる炎。

【N】「ラウンド1・・・(高らかに) ファイツ!!!」

「効果音」カ——ンツ!!!と、ゴングの音。

ハイプリエステス「あなたは娘の幸せを願ってないぎますかっ!」

マジシャン「そんな訳がなからう! フォーチュンが幸せになるの
が至上の歡びである!」

ハイプリエステス「だったら希望を叶えてあげるのが! 親の役割

ざましよ!？」

マジシャン「それは当然である！　しかし物事には順序というものが・・・」

ハイプリエステス「だから順序よく打ち合わそうとしているざますよ！　マジシャンさんが入ってくるのが遅いんざます！」

マジシャン「遅くはない！　あなたが早過ぎるのだ！　プリエステス！」

喧々囂々と言い争いを始めたふたりを見詰め、肩をすぼめるフォーチュン。

フォーチュン「（はあ、と溜め息を吐き）・・・まーた始まりおった・・・こうなると長いからのう・・・」

フォーチュン、くる、と振り向き、部屋のチェストの引き出しから、紙と鉛筆を取り出す。

柵の上で、数行の文章を書き、鉛筆を仕舞って引き出しを閉める。紙をテーブルの端に置くフォーチュン。

言い合いをしているマジシャンとハイプリエステス、まったくそれに気が付いていない。

再度、はあ、と吐息をつき、玄関の扉を開けて外に出るフォーチュン。

部屋の中で途切れることなく続く、ふたりの言葉の応酬。

フォーチュン、扉を閉めて、庭の片隅に陣取るタワーに近寄る。片膝を着いたタワー、右腕に止まる二羽の鳥を見詰めている。

その鳥は仲睦まじい様子で、嘴をつつき合っている。歩み寄りながら、自然と微笑むフォーチュン。

彼女が近付いてきたのを察知して、チチチ・・・と鳴き声を残して飛び立つ鳥たち。

フォーチュンに、顔を向けるタワー。

フォーチュン「タワー、出掛けるぞよ」

タワー「（怪訝そうに）・・・ドウカ、シタ、ノカ？」

フォーチュン「父上と母上が始めよった。書き置きはしてきたんでな、神殿に行くとするぞよ」

タワー「(領いて)ター・・・ワー・・・」

★ 神殿・ハイエロファントの居室

ハイエロファント、執務机に向かって座り、両手を卓上で組んでいる。

デス、机と直角の位置で椅子に腰を下ろし、足を組んでいる。

机の向かい、ハイエロファントの正面に用意された椅子に、姿勢よく座しているフォーチュン。

ハイエロファントとデスは、フォーチュンを見詰めている。

フォーチュン「・・・と、いう訳じゃ」

デス「(ふう、と息をつき)・・・相変わらずだな、あのふたりは」

ハイエロファント「(微笑んで)いつものことだけどね」

腕組みをして、眼前のふたりを交互に見るフォーチュン。

フォーチュン「そなたたちは、喧嘩とか口論とか、しとらんのか?」

デス「(きも当然の表情で)したこともない。第一、ハイエロファントが諍いや争いを嫌ってるんだ。何を好き好んでする必要がある?」

フォーチュン「まあ、そなたはそうであろうな」

ハイエロファント「僕が時たま、大声を出しちやったことはあるけどね」

デス「(ハイエロファントを見詰め)あれはあたしに言い聞かせる為だろ? 言って当然のことだ」

フォーチュン「聞くまでもなかったのう・・・(笑顔で)そなたたちらしいわ」

眼差しを交わすデスとハイエロファント。微笑み合う。

フォーチュン、はああ・・・と長い溜め息をついて、瞼を半分閉じる。

フォーチュン「それにしても、父上も母上も、何かにつけては熱くなりよる。わらわの幼少の時からああでな、一度始まったら早々には終わらん。困ったものじゃ・・・」

ハイエロファント「フォーチュンはそれを横で聞いてて、嫌な気分になった?」

フォーチュン「(首を左右に振り)いいや、あれだけ言い合ってるのを聞いてつても、不思議と嫌な気にならん」

ハイエロファント「だろうね。だってあれは、ふたりの『会話』だからね」

フォーチュン「『会話』などという、生やさしいものではなからう？　ほとんど闘いじゃ」

ハイエロファント「確かに、ね。でも、お互いの一番深い部分を、言葉に乗せて交流している気がするよ。楽しんでるんだ。以前からああだったし、それがふたりの絆を育ててきたんだと思う。マジシャンとプリエステスだけの・・・ふたりにしか出来ない『会話』だと、僕は考えている」

視線を伏せ、少し考えているフォーチュン。

間を置かず目を前に向け、安堵したような顔となる。

フォーチュン「そうじゃな・・・そう思えるぞよ」

フォーチュン、おもむろに右手の人差し指で、ぽり、と右頬を搔く。フォーチュン「しつかし、せめて娘の前では少し控えてほしいものじゃ。式の最中にでもに始めおったら、恥ずかしゅうて堪らん」

デス「(呆れたように)流石にそこまではしないだろう？」

フォーチュン「いいや、判らんぞよ。ふたりともああなると、見事に周りが見えなくなるからのう」

デス「その時は、タワーの中に移動して続きをやってもらうといい」フォーチュン「(苦笑いで)新婦の両親を中座させるつもりかえ。それにタワーは新郎じゃぞ。便利な防音室ではないわ」

ハイエロファント「大丈夫だと思うよ。ふたりとも君の両親だから、ね」

フォーチュン「今までが今までじゃから、一抹の不安はあるがのう・・・(思い出したように)ああ、それとじゃ、式の日取りとか、今ここで決めてもよいか？」

ハイエロファント「それは、家族全員で話し合ってから、だよ。みんなで納得して日程を決めてきてほしい」

フォーチュン「(頷いて)判ったぞよ。それとは別に、じゃが・・・

頼みがある」

ハイエロフアント「何？」

フォーチュン「エロフアントは司祭として式を取り仕切ってもらからよいとして・・・(デスを見て、真剣な表情で)デス、そなたにも参列してほしいのじゃ」

デス「驚いて、息を飲み)あたし!? あたしに? 参列しろ、と言うのか!？」

フォーチュン「そうじゃ」

デス「(高めの声で)あたしは死神だぞ! 相応しくないだろ?」

フォーチュン「そうは思わんぞよ。それに、デス、既婚なのに何を今更なことを言うておる?」

デス「(頬を染め)・・・や、あれはあたし自身の式だったし、当初はハイエロフアントとふたりだけで挙げる筈だったし、参列者が来ることは知らなかったし・・・」

フォーチュン「まあ、ワールドに一杯食わされた感がなきにしもあらず、じゃがのう・・・(引き締まった声色で)それとは別にじゃ、わらわとタワーで話しおうたんじゃ。そなたたちふたりには、是非とも、わらわたちの門出に立ち会うてもらいたい、のでな・・・」

きつ、と真剣そのものの表情で背筋を伸ばし、両手を膝に着けて腕を張るフォーチュン。

フォーチュン「そなたとエロフアントがおったからこそ・・・そなたたちふたりの? がりがあってこそ、わらわはタワーと夫婦になれるのじゃし、父上と母上の元に帰れたのでな。じゃから・・・」

ガバツ!と、膝に額が付きそうになるくらい、深々と頭を下げるフォーチュン。

フォーチュン「(切実な声で)この通りじゃ! 何卒参列してはくれまいか!？」

デス、彼女とハイエロフアントを交互に見て、戸惑いを露わにする。

どう対応していいのか判らないような、答えに窮している表情。

じつ、とデスを見詰めているハイエロフアント。

僅かの、後。

ハイエロフアント、にこ、と柔らかい微笑みををデスに送る。

ハイエロフアント「それじゃあ、デスには、僕の式進行を手伝ってもらおうことにしようか」

デス「(目を丸くして) えっ?」

ハイエロフアント「本当は如何なる式典も、主司祭と副司祭がいた方がいいんだ。デスは死神として、日々忙しいのは重々承知しているんだけど、どうかな? 今回はフォーチュンとタワーの結婚式だからね、本人のたつての希望もあるし、一緒に式を進行してほしい」

デス「(一度口元を結び)・・・いいのか? 祝典など参列すらしたことがない。何も判らないぞ」

ハイエロフアント「大丈夫、全部教えるから。それに、大体は僕たちで挙げた式次第と変わらないよ」

デス「ああ・・・あんな感じか」

デス、口元に右手を当て、目線を少し伏せて自分の挙式を思い出している。

暫くの、間。

暫くの、間。

未だに頭を垂れて身動きもしないフォーチュン。

彼女の姿を目に焼き付けるように凝視し、フツ、と笑みを浮かべるデス。

デス「(大きく頷いて)・・・判った。ハイエロフアントの補佐としてなら、式に立ち会おう」

フォーチュン「(バッ、と顔を上げ)真かつ! 引き受けてくれるか!?!」

デス「ああ、二言はない」

フォーチュン「ありがたい! よろしく頼むぞよ!」

フォーチュン、数回、繰り返し頭を上下させる。

そして身体を起こし、椅子に座り直してデスに目線を繋げる。

フォーチュン「それにしても・・・デスにとって、エロフアントの言葉は何よりも重いのだ。金言であり、至言であり、絶対なのじゃない」

デス「(赤くなり) 当たり前だ」

フォーチュン「そなたたちみたいな夫婦になりたいのう、わらわとタワーも。手本にしてもよいか？」

ハイエロフロント「僕たちよりも、君のご両親が一番のお手本だと思うよ。ずっと育ててもらってふたりを見てきて、いいな、とか、嬉しいな、と思ったこと・・・君が受けてきた恩恵を、そのまま、君とタワーに反映すればいいんじゃないかな」

両目を閉じるフォーチュン。

何かを噛み締めるように、思いを巡らせている様子。

ゆつくりと瞼を開き、静かな微笑みを浮かべる。

フォーチュン「そうじゃのう・・・その通りかも知れん・・・」

★ 神殿・前庭

太陽が燦々と、前庭の芝と石畳に降り注いでいる。

神殿建屋内から、歩み出てくるフォーチュン、ハイエロフロントとデス。

前庭の右手側に、片膝を着いて座っているタワー。

そのすぐ手前に、タワーを見上げて、彼と何事かの会話をしているマジシャンとハイプリエステス。

デス「(フツ、と笑って)来てたな。いつもの遣り合いは終わってるようだ」

ハイエロフロント「(笑顔で)そうだね。フォーチュンが心配で、ここまで来てくれたんだよ」

フォーチュン、軽やかな足取りで石段を駆け下りる。

マジシャンとハイプリエステス、それに気が付き、振り向いて、大急ぎで走り寄ってくる。

マジシャン・ハイプリエステス「(心配げに)フォーチュン！」

立ち止まって、両手の甲を腰に当て、やや胸を張るフォーチュン。向かい合って立つ、親子。

フォーチュン「書き置きはしておった筈じゃぞ。すぐに戻るつもり、じゃとな」

ハイプリエステス「でも、待っていられなかつたぎますよ」

マジシャン「その通りである。話も途中のままであつたので、な」
フォーチュンの隣にデスが、デスの隣にハイエロフロントが並ぶ。
ふたりに身体を向けて、神妙な顔になるマジシャンとハイプリエス
テス。

申し訳なさそうな視線で、ペこり、と頭を伏せる。

マジシャン「いきなりで、騒がせてしまった。すまなかつたであ
る」

ハイプリエステス「ごめんなさいございますね、エロフロントさん、デ
スさん。フォーチュンから事の次第はお耳にされてるとは思うさま
すが・・・」

デス「ああ、話は聞いた」

ハイエロフロント「フォーチュンとタワーが結婚式を挙げたい、つ
てことでいいんだよね？」

デス「それよりも、お前ら・・・フォーチュンに言うべきことが
あるだろ？」

思わず顔を見合わせて、バツが悪そうな表情で視線を絡めるマジ
シャンとハイプリエステス。

すぐにフォーチュンに身体を向け、同時に頭を下げる。

マジシャン「フォーチュン、悪かつた・・・言い合いを始めるつも
りではなかつたのであるが・・・許しておくれ・・・」

ハイプリエステス「ごめんなさいございます・・・熱くなり過ぎたさま
す・・・」

フォーチュン「いいのじや、気にせんで。父上と母上が仲良いから
ああなるのは、解つておる。それに、わらわも急に話を振つたのも悪
いんじや。青天の霹靂、だったのう」

マジシャン「(顔を上げ)確かにそうだが・・・(ハツ、として)い
いや、私も動揺し過ぎた。親として反省せねばいかなのである」

ハイプリエステスも顔を戻し、マジシャンの横顔に視線を送る。

マジシャンが眼差しを絡め、両手を後ろ手に組む。

一度、コクリ、と頷き合うふたり。

それから、揺るぎのない視線をフォーチュンに結ぶ。

マジシャン「フォーチュン、結論を言おう・・・(真摯な声で)お前の幸せが、何よりの望みだ。私とプリエステスの願いだ。だから・・・認めよう、タワーとの婚姻を」

ハイプリエステス「優しく微笑んで」引越しの件は、今後じっくり話すぎます。なるべく、あなたの望むようにしたいと思ってるぞますよ。マジシャンさんもわたくしも、ね」

マジシャン「優しい笑顔で」・・・誰よりも幸せに、おなり」
両方の眼を、ゆつくりと正円に見開くフォーチュン。

融けるような笑みを、徐々に浮かべ始める。

瞳が、虹色の潤いで輝く。

フォーチュン「(歓喜に溢れ)父上・・・母上・・・」

ぶるっ、と全身を震わせ、ぐっ、と口元を引き締めて口角を緩める。
直後。

タツ、ターンツ！と石畳を蹴って、両親の胸に飛び込むフォーチュン。

右腕をハイプリエステス、左腕をマジシャンに回し、ふたりの間に顔を潜らせる。

驚いて、娘を見詰めるマジシャンとハイプリエステス。

フォーチュン、破顔一笑。

フォーチュン「(至上の歓びを込め)大っつつっ好きじゃっ!!」

今まで想いを両腕に注ぎ、ギユウツ・・・とふたりを抱き締めるフォーチュン。

同時に満面の笑みを浮かべる、マジシャンとハイプリエステス。

そ・・・と、娘の背中に手を添え、抱き返す。

暫く、そのまま。

尚も、そのまま。

3人を視界に映し、優しい微笑みを浮かべるハイエロフロントとデス。

静かに身体を戻す、フォーチュン、マジシャンとハイプリエステス。

もう一度小さく頷いてから、タワーに駆け寄るフォーチュン。

タワーの左眼が、キラ、と虹色の彩りを帯びる。

ズウ、と右掌を芝に着け、フォーチュンが跳び乗ったと同時に腕を上げていく。

フォーチュン、タワーの眼前まで来た時に、ガバツ！と彼の顔に抱き着く。

フォーチュン「タワー！ わらわたちは夫婦になるぞよ！」

タワー「(重厚だが、嬉しそうに) フォーチュンサマ…ワタシ…ウレシイ…」

フォーチュン「(満面の笑みで、愛しさを込め) 最高の家庭を築くのじゃ！ そして、父上と母上のような、最高の夫婦になろうぞ！」

タワー「(愛おし気に) ター…ワー…」

至近距離で眼差しを絡め合っている、フォーチュンとタワー。

肩を並べて、ふたりを見上げながら、柔らかな笑顔を向けているマジシャンとハイプリエステス。

その後方、4人を見詰めて、安堵したように顔を見合わせるデスとハイエロフアント。

デス「フォーチュンとタワーは、数千年の同じ時を過ごして尚、共に生きる道を選んだんだな」

ハイエロフアント「そうだね。僕たちとはまた違った、一緒に歩んでいく運命、なんだね」

デスとハイエロフアント、微笑みを交わしてから、フォーチュンとタワーを見詰める。

【N】「この世界は、マジカルランド。彼女は、マジカルランドに暮らす者の運命を司る女神。名は、フォーチュン。真の名を『ホイール・オブ・フォーチュン』、別名『運命の輪』という。見た目は幼い少女だが、齢1万と14歳。マジカルランド創生より永い時を生きている。この日より程なくして、フォーチュンとタワーは、ハイエロフアントとデスを司祭として華燭の典を挙げ、永遠を誓うことになるのだが、それはまた後日の話である」

外伝「おお、運命の女神よ Episode of Fortune : 了」

正義の恋 | Episode of Justice
ce | 【第一話】

デスとハイエロファントの物語：REBOOT
外伝【正義の恋 Episode of Justice】

★（場所・時間不明）

虹色に輝く空間。足元に靄が掛かっている。

風景は何もない。ただ七色の輝きが満たされている。

ぼんやり、と佇んでいるジャステイス。辺りを、ぐるり、と見渡す。ハツ、と誰かの気配。振り向くと、デスが立っている。

穏やかで静かな雰囲気。デス、じつ、とこちらを見詰めている。

身体を彼女に正対させるジャステイス。胸元に両掌を上げて組み、ぎゅっ、と握って見詰め返す。

ジャステイス、やがて刹那そうな表情を湛える。

暫くの、間。

ジャステイス「潤んだ目で」デス……」

デス「ふっ、と微笑んで」そんな悲しそうな顔するな」

数歩ジャステイスに近付き、すっ、と右腕で彼女を引き寄せるデス。

デスの肩口に頬が当たり、ポオツ、と上気していくジャステイス。

デス「今は……こうしている……」

頷き、両脇を閉じるジャステイス。穏やかで嬉しそうな微笑みを浮かべる。

重なったままのふたりの影。虹色の輝きの中で反転し、やがて融けるように消えていく。

空間全体が段々と照度を落としていき、暗転。

暫くの、間。そして静寂。

静寂。

静寂。

★ 街中・ジャステイスの家

コケコッコーツ！と、甲高い鶏の鳴き声。家の外から響く。半開きの瞼で、ボーツ・・・とベッドに上半身を起こしている、パジャマ姿のジャステイス。

いつものポニーテイルの髪型は解かれ、肩付近まで髪が垂れている。

暫く、そのまま。

徐々に意識が明瞭になっていくジャステイス。瞳に光が宿っていく。

そして、ふうふう、と大きく長い溜め息を一度つく。

ジャステイス「(呼吸を整えながら)・・・何、今の?・・・夢?」スツ、と両掌を上にして胸元に掲げ、掌の中心辺りに目線を落とす。ジャステイス《夢・・・夢だったんだ・・・》

一瞬、夢の中でのデスの姿が、鮮やかにジャステイスの脳裏に蘇る。デスに触れたような感覚に襲われ、ビクツ、と指先が反応する。

やがて、それが実際のものではないと自覚し、両腕をベッドにゆくりと下げるジャステイス。

ジャステイス《だよね・・・デスがボクに、あんな・・・》ぎゅつ、とベッドのシーツを両手で握り込むジャステイス。

唇を噛み締め、物憂げに前方の宙に視線を投げる。

ジャステイス「(抑揚のない声で) あんなに・・・優しい声・・・なんて・・・」

ジャステイス、顔を伏せ、両目を閉じる。肩口から髪が前に揺らぐ。沈黙。

沈黙。

コッコーツ！と、勇ましい調子の、二度目の鶏の声が外から聞こえる。

★ 森の道

太陽は天頂。厚めの白い雲が多数流れ、時折太陽を覆いながら移動している。

いつもの平静さを保った様子のジャステイス、左右に樹々が繁る森の道を歩く。

ふと、前方に人影。相手はこちらの方向に歩いて来る。

段々と明確になってくる姿。泥鯨髭を軽やかに撫で、腰に手を当てて無暗に堂々とした歩きっぷり。

ジャステイス、それに気付いて足を停める。

ジャステイス「あ！ エンペラー！」

エンペラー「あら！ ジャス子じゃないの。相変わらず巡回？ ごくろーさま」

ジャステイス「(胡散臭そうに) 何処に行くつもり？」

エンペラー「(フン、と鼻で嗤い) 何処に行こうがアタシの勝手じゃない」

ギロリ、と憤りを圧縮したような鋭利な目線を投げるジャステイス。

エンペラー「(不満気に) あ・の・ね！ 毎回そんなに睨むの止めてくれない？ アタシが何したつてのよ？」

突然。

無言のまま、スラリ、と背中の大剣を抜き、剣先をエンペラーに向けてジャステイス。

エンペラー「(真剣に怯え) ヒイイイ!!!」

ジャステイス「(怒気)・・・キミがデスに仕出かしたコト・・・もう忘れたとは言わせないよ？」

エンペラー「だからそれはアタシがコテンパンにやつつけられて・・・(大剣の刃が、ギラツ、と光り) ああもうっ！ お願いだから剣を仕舞ってよっ！」

ジャステイス「デスに謝ったの？」

エンペラー「謝るワケないじゃない？」

直後。

ジャステイス、流れるような動作で大剣を真横に持ち替え、ダン！と一歩踏み込む。

大剣の刃が、エンペラーの喉仏付近に直角に当てられる。

ラー。

エンペラー「なーーほーどーねー！ 惚れちゃったワケね！ 死神に！」

何やら勝ち誇ったように胸を張り、フンム！と鼻息をつくエンペラー。

ジャステイス、いきなり、ドサ、と両膝を地に落として、両手も地に着けて、ガツクリ・・・と項垂れる。

彼女の頭部に、どよ〜ん・・・と暗い影が降りてくる。

ジャステイス「(絶望的な声) 終わりだ・・・よりによつてエンペラーなんか知られた・・・」

エンペラー「失礼ね。なんか、とは何よ。(腕組みをして、感心したように) しつかし、超絶生真面目でウブで色恋とは無縁かと思つたケド、あんたも恋心なんてあつたのねえ」

尚も同じ姿勢で、返す言葉も出ないジャステイス。

ふう、と短い息を一度継ぐエンペラー。

エンペラー「ジャス子、ちよーつと時間あるかしらん？」

ジャステイス「(顔だけ上げ、据えた目で、上目遣いで)・・・何だよ、からかわれる時間まで付き合つてらんないよ」

エンペラー「からかうだなんて、心外ね。話くらい聞いたげるわよ」

★ マジカルランド上空

緩やかに流れていく多くの白い雲。

傾きかけた太陽を時折隠しながら流れていく。

その太陽に、丸く黒い影が徐々に掛かっていき、やがて4分の1を覆うまでとなる。

だが地上から見ると、雲に隠されてほとんど判らない。

★ 森の外れ・草原のほとり

先程話をしてきた森の道から、数分ほどにある開けた草原。

森との境近くにある、腰ほどの高さの岩に腰を下ろしているジャステイス。

視線を落とし気味にして、膝の上で両手を、ギョツ、と拳にして、淡々と話をしていく模様。

その真正面に立ち、エンペラーが腕組みをして、何度も頷きながらそれを聞いている。

ジャステイス、一通り話を終えた様子で、ふうふう、と長い溜め息をつく。

エンペラー「へえー、そうだったのねえ。何がキツカケになるか判らないものね」

ジャステイス「ギツ、と睨み」絶対言わないでよね、誰にも」

エンペラー「さーてーねー・・・どーしましょうかねー」

ジャステイス「怒声」エンペラー！」

エンペラー「苦笑して」嘘、嘘、言わないどくわよ。取り敢えず」

ジャステイス「一層の怒声」取り敢えずって何だよ！（頭を抱え込んで）もうっ！ やっぱ話すんじゃないかったよ！ デスに知られたらお終いだよ！」

エンペラー「別に知られてもいいんじゃないの？ 何も悪いコトしてるワケじゃなし」

ジャステイス「顔を上げて」いい訳ないじゃないか！ エロフアントに申し訳ないよ！」

エンペラー「疑念混じりの声で」折角の恋心なのに、否定するワケ？」

ジャステイス「消え入りそうに」いや・・・否定するとかしないとかじゃなくてさ・・・」

エンペラー「誇らしげに」アタシはね、エロフアントちゃんと死神が結婚しても、エロフアントちゃんへの気持ちは変わらないわよ。（胸を張って）むしろ一層惚れ込んだものねっ！」

ジャステイス「（ジト目で）・・・キミは少し遠慮した方がいいんだケド・・・」

腕組みを解き、腰に手を当てて、グツ、と顔を近寄せるエンペラー。

エンペラー「でも・・・苦しくても（晴れやかな笑みで）恋はイイ物よ！ ジャス子！」

ジャステイス「(啞然として)・・・は?」

エンペラー、突然その場で、くるうり、と身体を翻して一回転する。そして、ビシィッ!と右手人差し指を垂直に立て、ジャステイスに向ける。

エンペラー「そう! 恋は自分を高めるの! カッコ良くありたい! キレイでありたい! 可愛くありたい! そして何より! (両腕を翼のように広げ、伸びのある声で)美しくありたい! これがイイ物でない筈ないでしょ!」

眼を大きく正円に近くして、ポカン、と唇を開けているジャステイス。

暫くの、間。

更に、間。

ジャステイス「(感心したように)驚いたなー・・・エンペラーが真面なコト言ってるよ」

エンペラー「(怒って)しっつっつっつれいねえッ!!! あんただんだけアタシを下に見てんのよ!」

ジャステイス「まあ・・・キミの言ってるコト・・・(小さく頷き)その通りだと思うよ。悪い物じゃないと、思ってる」

エンペラー「でしょー! だったら素直に認めて、死神に告白しちやいなさいよ」

ジャステイス「(首を左右に振り)それはしないし、出来ないよ。(ハッ、として)まさか、ボクを煽って・・・(ジロ、と睨み)その隙にエロフロントを自分のモノにしようってんじゃないだろうね?」

エンペラー「(ブンブン、と頭を横に振り)イヤイヤイヤ! そんなんやったら命がいくつあっても足りないわよッ! 流石にアタシも学習能力くらいあるわよん!」

ジャステイス「・・・まあ確かに、あれ以来余計なちよつかいは出してないみたいだケド」

謎の声「(遠くから)結局は失敗しよった。無能にも程がある、ゾ・・・」

エンペラー「無能とは失礼ね。アイテムだって使いこなしたし、そ

こそこの能力は……」

はた、と何かに気が付くエンペラー。

少し、沈黙。

エンペラー「(疑念溢れた声で)……ジャス子、あんた、無能とか言った？」

ジャステイス「(驚いて)え？　言っていないよ。自分で言ったんじゃない？」

謎の声「この男は言っていない。言ったのは我輩、ゾ」

何処かから、誰のものとも知れない声が入りに届く。

ゾク、と例えようのない寒気が、一瞬ジャステイスの背後を駆け上る。

エンペラー、ひたすらキョロキョロと周囲を見回す。

ジャステイス「……聞いたコトない声……誰？」

エンペラー「(サアツ、と血の気が引き)……まさか!……」

謎の声「ホオ、聞こえてるらしいな。まあそう怯えることはない、ゾ」

地の底から響くように、あるいは天の片隅から落ちるように、声がする。

岩から跳び退くように降り、ザシュッ!と背中の大剣を引き抜いて、正眼に構えるジャステイス。

ジャステイス「(ギン!と声のした方を睨み)誰だっ!　出て来いっ!」

謎の声「(嘲笑) ムシユシユシユ……血気に逸っているな、戦士よ。その男では失敗したが、貴様の能力……使えろと見たゾ!」

ジャステイス「何を言っている!　姿を現せっ!」

一方、蒼褪めた表情のエンペラー、拳を握り締めて虚空を見詰めるような目線を投げている。

エンペラー「(唇を震わせ)こ、この声……アタシが『小アルカナのカード』を渡された時の声!」

ジャステイス「(思わずエンペラーに目線を投げ)ええっ!」

謎の声「喰らえッ!」

途端。

中空に、怪しく紫色に鈍く光る火球が出現。

ふたりが気付くより早く、ジャステイスに激突する。

ズツドオオオオン!!!と、火柱が噴き上がり、バチバチバチツ!と雷撃に覆われるジャステイス。

ジャステイス「(絶叫) うあああああつっつ!!!」

エンペラー「(驚愕) ジャス子ツ!!!」

一瞬、跳ね上がるように浮かぶジャステイス。苦痛に顔を歪める。そのまま彼女の身体が、大剣を正面で構えたまま宙で留まる。

眼を丸くしているエンペラーの前で、火柱が鈍い光の帯へと変化していく。

ジャステイスの表情が解ける。緩やかに素の顔へと戻っていく。

しかし、感情がすべて欠落したような、能面の如き無表情。

両目は大きく開けられたまま、瞬きひとつしていない。

その瞳は、どす黒く濁った紫の光を放つ。

更に、同色の光の帯がオーラ状となって全身を覆う。

それはジャステイスから湯気のように、ゆらあ、と立ち上っている。

エンペラー「・・・ちよ、ちよつと・・・ジャス子・・・?」

かつて見たことのない異様な状態に、思考が追いついてこないエンペラー。

エンペラー「何? 何? どうしちゃったの?」

エンペラーのこめかみに、つう、と汗が流れる。

彼は、理解不能の状況に怖れを抱き、数歩後退り、更に距離を取ろうとする。

途端。

ジャステイス、視界をエンペラーに向け、すーっ、と漫然とした調子で身体を返してくる。

表情は、まったくの、無。

地面よりやや浮いていた足が、重力に従って土に着く。

次の、瞬間。

ダアアン!!!と、爆発的な勢いで地面を蹴って、エンペラーとの間合

いを詰めるジャステイス。

大剣を後方に振り被り、エンペラー目掛けて斬撃の弧を描く。
エンペラー「(悲鳴) ああああああれえええツツツツ!!!」

【第二話へ続く】

★ 街はずれ・森の入り口に近い橋のたもと

街から森へと通ずる、小川に掛かる橋を渡っているデスとハイエロフアント。

デスは大鎌を左肩に掛け、右隣をハイエロフアントが両手を後ろに組んで並んで歩いている。

時折顔を合わせて、何か会話をしている様子。

ふと、デスが歩を停める。そして、すつ、と上空に眼差しを向ける。すぐに気付いて、隣でデスを見詰めるハイエロフアント。

ハイエロフアント「どうしたの？ デス」

デス「視線をハイエロフアントに移し）いや、陽の光がいつもより弱いような気がしてな」

ハイエロフアント「今日は雲が多いからね。雨雲じゃなさそうだけど」

デス「それもあるが・・・」

再度、空を見上げようとするデス。

直後。

はっ、とデスが森の方向に目を向ける。瞼を半分閉じ、遙か彼方に届くような視線。

彼女の様子の変化を捉え、ただデスを見詰めているハイエロフアント。

デス「(眉を顰め)・・・悲鳴が聞こえた」

ハイエロフアント「え？ 何処から？」

デス「森の奥・・・道を、こつちに向かって来る」

★ 森の道

バタバタッ！ バタバタッ！とマントを猛烈に靡かせ、森の道に街に向けて駆けているエンペラー。

時折背後を振り返り、また必死の形相で、左右の腕で前方から後方に、水を掻くように回して走っている。

これ以上出来ないほどの、荒い呼吸。

エンペラー「誰かあああああツツツ!!! お助けエエエ!!!」

★ 街の端・森の入り口

道の先から、悲鳴混じりの声を耳にするデスとハイエロフアント。

ふたり同時に、少し腰を落として身構え、発声方向を凝視する。

デス「(一度口元を引き締め)・・・来る!」

大鎌を眼前に構えて持つデス。

途端。

一直線に伸びている道の奥から、一気にふたりの視界まで駆け込んできけるエンペラー。

互いに姿を確認した距離、約20メートルほど。

ハイエロフアント「エンペラー!」

エンペラー「猛烈に息が上がり」たっ、たっ、救けてエロフアントちゃん!」

尚もエンペラー、凄まじい走りに向かってくる。

瞬間の、後。

ドバアアアン!!!と、エンペラーが走る道の横の樹木が、爆破されたように破壊される。

煽られて吹き飛び、地面に転がるエンペラー。

宙に大量の木屑と葉が、朦々とした土煙を噴き上げて溢れる。

その爆裂の煙の中から、フワア、と飛び出してくるジャステイスの姿。

虚ろな眼がエンペラーを補足し、大剣を大上段から一気に斬り付ける。

エンペラー「(大絶叫)ヒイエエエエ——ツ!!!」

エンペラー、思わず両眼を固く閉じ、身体を丸くして縮まる。

直後。

ガシイイン!と、エンペラーの頭上で金属同士がぶつかる音。

驚いて目を開け、すぐ傍らを見上げるエンペラー。

そこには、剣撃の間合いに飛び込み、自分の眼前に大鎌の柄を横に掲げ、大剣を防いだデスの姿。

キキキキ・・・と大剣の刃と大鎌の柄が擦れ合う高音が鳴る。

ハイエロフアント、息を飲んで、武器を合わせているふたりに目を映す。

ハイエロフアント「(驚いて) ジャステイス！」

エンペラー「(半泣きで) もう嫌ア!!!」

エンペラー、跳ね返るような動きで即座に起き上がり、もう片側の
大木の陰に隠れる。

デス、武器越しのジャステイスの顔を凝視する。

デス「(目を凝らし)・・・様子がおかしい」

濁った紫色の瞳、感情の欠片も存在しない表情、全身から立ち上る
面妖な紫のオーラ。

デス《・・・ジャステイスの魂とは質が違う 何か〃がいる・・・
一体何だ?》

ギギギギ!と、急激に金属音を高める大剣と大鎌。

ジャステイスが凄まじい力を武器に掛け、デスを押し返そうとする。
右足を、ズサア!と後方に引いて、前方に体重を掛けて腕を伸ばす

デス。
尚も増していく加重に、両脚を、ぐうっ、と踏ん張る。

デス《何て力だ! これほど圧が強かったか?》

強烈な加圧に、つう、と冷や汗が、デスの首筋を流れる。

キン!と、小さな火花を散らし、ジャステイスの大剣が離れる。

彼女は武器を後方に一度引き、水平に刃を構える。
途端。

間髪を入れず、大剣が真横の軌道を描き、デスに襲い掛かる。

大鎌を構え直す間も与えられず、タン!と跳ねて後方に距離を取る
デス。

デスのいた空間を薙ぐ大剣。しかし次の瞬間、ヒュイツ!と剣先が

翻り、再度デスを狙う。

更に身体を躲すデス。しかしまた、大剣が空を裂き、デスを執拗に追う。

切っ先が、ヒュンヒュンヒュン！と唸りを上げて、幾度もデスを斬らんとする。

その度に、鮮やかな身体の動きで避け続けるデス。目にも留まらぬ速さ。

ジャステイス、虚ろな目線でそれを追視している。無表情のまま。やがて、ブワツ、と大上段に大剣を構えるジャステイス。

ピタ、と双方の動きが一度停止する。

直後。

ジャステイス、一気に大剣を叩き付けるように振り下ろす。

ふっ、と残像を残して、真横に跳ねるデス。

ゴツバアアアアアンン!!と、大爆発を起こしたような剣撃。

延長線上にある高い樹木が、内部から破裂して木っ端微塵に吹き飛ばぶ。

その周囲の樹々数本も、同様に根元から割れ、枝にも亀裂が一瞬で入り、繊維状になって宙を舞う。

それは、エンペラーが陰に隠れている大木の側面を抉り、猛烈な突風をも起こす。

ビクウツ！と、全身を硬直させて、白目を剥いて、あんどり、と口を開けて凍て付くエンペラー。

ハイエロフアント、技を放ったジャステイスの背中を茫然と見詰める。

デス、ジャステイスの斬撃が放たれた方向を見て、息を飲む。

今いる付近から延長線上遙か先まで、あらゆる樹々が消滅し、地面が穿たれている。

更にその奥、尚も奥、幅2メートルほど、約50メートル先の樹木に至るまで、跡形もなく破壊されている。

デス《粉々に・・・こんな剣技を繰り返すとは・・・いや、いつものジャステイスとは別だ。ここまでの破壊をする奴じゃない筈・・・》

一瞬、ジャステイスの次の攻撃を伺うデス。

ジャステイスは大剣を振り下ろした時の格好で、すうつ、と顔を上げてデスを見る。

無言のまま、まったくの無表情のまま。

すいつ、とデスが大鎌を一度正面に構えて持ち、軽やかに半身の状態で踵を返す。

それから、エンペラーが逃げてきた道の奥へと、タン、タン、と跳ねるように距離を置く。

ジャステイスの虚ろな視線が、デスに固定され続けている。

デス「追いて来い！ ジャステイス！」

ぶわっ、とマントの裾を、流れるような綺麗な軌跡を描かせ、デスが道を駆け出す。

間髪入れず、大剣を脇構えにして持ち、ジャステイスがデスの背中を追う。

タタタタタタ・・・と、一気に森の深遠部方向に、ふたりの影が離れていく。

すかさず、タツ、と地面を蹴るハイエロフアント。

ハイエロフアント「(きつ、と視線を前方に向け)行かなきゃ！」

ハイエロフアントも、ふたりが向かった森の道を走り始める。

彼が通り過ぎた刹那、ハッ！と気が付いて大木の陰から顔を覗かせるエンペラー。

小さくなっていくハイエロフアントの背中。既にデスとジャステイスの姿は可視出来ない。

エンペラー、仰天して、顔を引き攣らせる。

エンペラー「ちよ・・・ちよつとエロフアントちゃあん！ 置いてかないでエ！」

怯えを隠すことなく全身に漲らせ、自分が逃げてきた道に戻って疾走していくエンペラー。

★ 森の外れ・草原

先程まで、ジャステイスとエンペラーが会話をしていた草原の入

口。

凄まじい速度で、デスが駆け込んでくる。そのまま一気に草を跳ね上げ、草原中央付近まで疾走する。

一瞬、背後を見る。ハッ！と驚くデス。

空中に、身体を大きく弓形に反らせ、大剣を背中辺りまで振り被らせるジャステイスの姿。

気配も音もしない、超人的な跳躍。

こちらの背丈より遙かに高い位置。紫色の濁った眼が、デスに繋がれている。

判断する間もなく、ブオン！と裂空音がして、ジャステイスが大剣を叩き付ける。

剣先を、真つ直ぐにデスに向けて突き立てようとする。

攻撃が放たれたのを見極め、ザッ！と草叢を蹴るデス。そのまま横方向に側転。

デスのいた空間を、ジャステイスの剣先が貫く。

ズン！と大剣が地面に突き刺さる。

次の、瞬間。

ドゴオオオオオオオンン！！と大音響を放ち、草原が地中から突き上げられるように揺れる。

まるで直下型地震の如く地面が跳ねて波打ち、ビリビリビリ・・・と空気が震動する。

草叢の波紋が、一気に草原全面に拡散する。

濃い土埃が、同時に湧き立つように漂う。

足下の揺れに、一度、二度態勢を整え、着地するデス。

改めてジャステイスを目視する。そして、思わず息を止める。

そこには、ジャステイスの大剣を中心に、風景が一変している。

蜘蛛の巣のような、地割れ。

大剣は抜き身の半分ほど地面に刺さっており、そこから地割れが円周、放射線状に拡がっている。

地表の草は反転したように捲れ、下の赤茶けた土が曝されている。場所によつては深さ一メートルほども抉られた、無残な光景。

ごくり、と唾を飲み込むデス。

デス《(驚嘆) この威力！・・・まるで破壊の神のようだ！》
だが、ジャステイスの動きが、そこで停まっている。

地面に垂直に減り込んでいる剣を引き抜こうと、グツ、グツ、と力を入れていく様子。

デス、即座に大鎌を後方に翳し、ザシユツ！と草叢を蹴って跳び上がる。

剣を凝視したまま屈んでいるジャステイスへ、一息のもとに刃を振り抜く。

斬撃が半月の軌道を描き、彼女の肩口へと届く。

しかし、大鎌は何物も斬ることなく、空のみを裂く。

ジャステイスの姿が、残像となりそこに留まっている。

武器を振り切ったままの姿勢で、白目を大きく開くデス。

フツ、と背後に気配。

デス、眼の端で補足する。大剣を脇構えにして向かってくるジャステイス。

デス「(驚愕) 速い！」

慌てて大鎌を構え直し、正対しようと身体を返すデス。
直後。

大剣の柄頭を、渾身の力で叩き込むジャステイス。

ボグオ！と、デスの腹部に命中。デスの背中側の空気まで震動する
威力。

デス「(両眼を、カツ、と見開き) がはっ！」

デスの腹部からせり上がってくる、焼き付く痛み。

ジャステイス、目にも留まらぬ動作で大剣を引き、再度デスの腹部
目掛けて柄頭を撃つ。

ボツゴオン!!!と、先程よりも格段に凄まじい打撲。

今度はそれに合わせて、ジャステイスが跳躍し、デスの身体ごと宙
へと浮かぶ。

砲弾の軌跡のような放物線を描く、ふたり。

デスが仰向け、ジャステイスが彼女に覆い被さるようになり、引力

の法則に従って落下する。

背中から地面に叩き付けられるデス。顔の前で構えたままの大鎌を持つ両手を、思い切り握る。

デス「(痛みで顔を顰め、一度瞼を固く閉じ)くっ!」
再び目を開けるデス。

そこには、自分に跨って起立し、大剣を天頂に向けて翳しているジャステイス。

虚空の瞳が、何の感覚も存在しないかの如く、デスを見下ろす。

大剣の刃がデスに向けて振り下ろされようとした、刹那。

ハイエロフアント「(腹の底からの声)ミラクルビームつつつ!!」

ドン!と衝撃音を放ち、空間を劈く純白の光線。

ジャステイスの背中側、森の入口の方面から一気に届く、直径50センチほどの光の直線。

大剣の柄付近に激突し、一度球形を成してから、バン!と破裂する。

ジャステイスの両手から弾かれ、数メートル飛んで草叢に落下する大剣。

一瞬足元の方向に視線を移すデス。かなり離れた位置に、ハイエロフアントの姿を確認。

彼は両脚を肩幅に広げ、バクルス(司教杖)の端部、青い宝玉の付いている方をこちらに向けている。

デス、安心したような、微かな笑みを浮かべる。

改めてジャステイスに視線を戻し、はっ!と息を飲む。

ジャステイスの上半身が、ハイエロフアントの放った光線と同じ色に、ぼんやりと光る。

先程まで彼女を覆っていた紫色のオーラが、人型を形成して、ジャステイスから離されようとしている。

ジャステイスの両目は閉じられ、だら、と両腕は前方に垂らされる。機会を逃すことなく、スイツ、とジャステイスの足下から脱出するデス。

スタン! タタツ!と軽やかに土を蹴り、ハイエロフアントの元へ駆け寄る。

ジャステイスの半身にあった白い光、雲散霧消。

同時に、隔離されようとしていた紫の影、ヒュッ、と再び彼女の身体に吸い込まれる。

再度立ち上り始める、同色のオーラ。

緩やかにジャステイスの両眼が開き、再び暗く濁った紫の瞳が現れる。

顔を上げ、大剣が草叢に落ちているのを目に留めると、ヒュイツ！と取りに走るジャステイス。

ハイエロフアントのすぐ傍らに到着し、短く笑顔を向けるデス。

デスを見詰め、一旦バクルスを持った腕を下ろし、笑顔を返すハイエロフアント。

並んで立ち、草原の中央を向き、腰を少し落として得物を構える、ふたり。

デス「すまない！ 救かった！」

ハイエロフアント「大丈夫!? 怪我はない!？」

デス「問題ない！ それより見たか!? 今の！」

ハイエロフアント「うん！」

デス「ジャステイスの中に『何か』がいる……理由は解らんが、どうやらそいつは、お前の『聖なる力』でジャステイスから追い出せそうだ」

ハイエロフアント「(頷いて) そうみたいだね」

デス「(一瞬、横のハイエロフアントを見詰め) もう一度援護を頼む

！ お前の『間合い』で、だ！」

ハイエロフアント「(デスを見詰め返し) 判ったよ！ 任せてっ！」

間髪入れず、キツ、とジャステイスに視線を繋ぐデス。

きりっ、とジャステイスに視線を向けるハイエロフアント。

無表情のジャステイス、大剣を拾い上げて、脇構えでこちらに駆けて来ている。

デス、右足を大きく踏み出し、タツ、と草叢を蹴る。

左手に持ったバクルスを横に翳して、右掌を広げて添えるハイエロフアント。

ハイエロフアント「聖なる力！」

クワアツ！と純白の光が、ハイエロフアントの掌から溢れ、バクルス全体を覆う。

その間に、距離が詰まっていくデスとジャステイス。

デス「(堂々とした声で) 来いっ！ ジャステイスっ！」

デスの脚が停まる。腰を、ぐつ、と落として、大鎌を正面で構えるデス。

剣撃の届く位置に到達し、大剣を、ブアツ！と振り翳すジャステイス。

途端。

ターンッ！とデスが後方に跳ねる。身体をジャステイスに向けたまま。

ブオン！と空振りをする大剣。しかしすぐに切っ先が返り、下方向からデスに襲い掛かる。

再度、ターンッ！と草叢から僅かに跳ぶデス。大剣の刃を躲そうとする。

しかしジャステイス、今度は、振り抜く直前に、ズダンッ！と左足を大きく踏み出して斬り込む。

デスの口元に、につ、と小さく笑みが浮かぶ。

直後。

大鎌の柄を、ボスッ！と自分の足元左側方、踵の外側目掛けて、思い切り突き刺すデス。

その反動を利用して地面を蹴り、両脚から全身を、ふわっ、と浮かせる。

後方上空に全身を丸めるように、くるり、と宙返りして反転していくデス。

デスの身体が、走り高跳びのような綺麗な跳躍を具現化させる。

ジャステイスの大剣は完全に振り抜かれ、先端が天空に向けられる。

開き切った態勢の真正面で、デスの姿がマントに包まれるように隠れていく。

マントが、ぶわっ・・・と鮮やかに翻り、ジャステイスの視界いっぱいに広がる。

後方へと流れていく、マントの端。

カーテンのように捲れ上がっていく、その真下。

陰から、しゃがんで片膝立ちでバクルスを構えたハイエロフアンの姿が現れる。

端部の青い宝玉が、眩い純白光を発し、バチツ、と電光を放つ。

それは極めて近い距離で、身体の伸び切ったジャステイスの腹部に向けられている。

眉を顰め、申し訳なきような切ない表情のハイエロフアン。

ハイエロフアン「(絞るような声で)ごめん・・・ジャステイス」

デスがハイエロフアンの背後に、スタン、と降り立った、瞬間。

バクルスから、クワアアアアツツ!!と光球が膨れ上がり、バーンツツツ!!と前方に破裂する。

ジャステイスの身体が吹き飛ぶ。大剣は手から弾かれ、離れて落下していく。

彼女は、全身を白色の光に覆われたまま、ドサツ・・・と背中から草叢に放り出される。

純白光はそのまま滞留し、隙間なくジャステイスを包んでいる。

両目は閉じられ、ジャステイスの表情が穏やかな、眠っているような顔に戻る。

大の字に横たわる彼女から、急激な速度で紫色のオーラが湧き、瞬間に人の形になっていく。

そして明らかな人型を成し、ジャステイスから、ふわり、と離れる。表情はない、のっぺらぼうの顔。しかし、何気に狼狽している様子。

中空に浮かぶ人型の真横に、フツ、と瞬間移動したようにデスが現れる。

既に大鎌を振り翳し、殺気を込めた視線で睨む。

ビクツ!と気付いて、デスに直面する人型。

デス「(凍て付くような声色)・・・貫った・・・」

デス、渾身の力を込めて、大鎌の刃を薙ぐ。

ズツシャアアアツ!!!と、紫の人型が、腹部付近で上下に両断される。

スタツ、と草叢に着地するデス。
少しの、間の後。

鈍い切断面が蒼白い光を発し始め、それが一気に、浸食するように人型の表面を広がる。

苦痛に喘ぐかの如く、もがいて暴れている人型。
やがて。

ヒイイヤアアア!・・・と、断末魔の悲鳴のような音を放ち、人型が消滅する。

静寂。

静寂。

びゅう・・・と一陣の風が、地割れが広がる草原を駆ける。

完全に人型の影が失せたのを確認し、ふう、と溜め息をつくデス。

近くに横たわるジャステイスに近寄り、右の片膝を落として、右手を彼女の頭部に翳す。

目を閉じ、暫く、そのまま。

ハイエロフロント、ふたりの元に走り寄ってくる。

デス、立ち上がって、ハイエロフロントに柔らかい微笑みを向ける。

ハイエロフロント「デス!」

デス「世話を掛けたな。お前のお陰で救かった」

ハイエロフロント「(微笑んで)ううん、大したことはしてないよ。

(ジャステイスを見て、心配そうに)どう? ジャステイスの具合は・・・」

デス「魂は問題ない。生命力も障りがあるほどではない。少し眠れば回復する程度だ」

ハイエロフロント「(ふうう、と安堵の息をつき)そう、良かった」
そろり、そろり、と森の入口へと向かおうとする人影が、ふたりの眼の端に映る。

バツ!と、デスとハイエロフロントが同時にその方向に視線を投げる。

いつも間にか近くまで来ていたエンペラーの後ろ姿。

明らかに、この場から退散しようとしている。

ハイエロフアント「エンペラー・・・何があったの？」

エンペラー「(ビクウウツ!)と肩が大きく跳ね、振り返りながら) エツ! あのツ! アタシ! まさか、また、あの声がするなんて思って・・・」

ハイエロフアント「あの声?」

エンペラー「(ドキーン!)と心臓が飛び出しそうになって) イヤイヤイヤ! 何でもないので何でも!」

口元を引き締め、圧さえ感じさせる目線を送るハイエロフアント。対して視線を明後日の方向に反らして、顔からダラダラと汗を流し続けるエンペラー。

ハイエロフアント「(深く、重みのある響き)・・・全部話してくれるかな?」

デス「待て、ハイエロフアント。話の続きは、ここを移動してからにしないか。神殿に戻った方がいい。ジャステイスはあたしが背負っていく」

ハイエロフアント「(振り向いて)・・・そうだね、じゃあ戻ろうか。僕も手を貸すよ」

デス「(首を左右に振り)いや、ハイエロフアントはそいつを逃がさないように見張っててくれ。(エンペラーを睨み)悪いが、お前に選択権はない。洗いざらい喋ってもらおう」

糸がきれたように、ガクーン・・・と項垂れるエンペラー。

デス、ジャステイスを背負おうと屈む。

その刹那、ふと、上空を見上げる。

デス《陽の光が、戻った気がする・・・》

【第三話に続く】

正義の恋 | Episode of Justi
ce | 【第三話】

★ 神殿・ハイエロファントの居室

居室の書斎机の椅子に座り、卓上で両掌を合わせて組んでいるハイエロファント。

書斎机の真横で腕組みをして立ったまま、一方向に据えた目線を投げるデス。

デスとハイエロファントの視線を浴び、机に正対した椅子に腰を下ろすエンペラー。

エンペラー、両膝の上で拳を握り、脂汗を垂らしている。落ち着きがない。

エンペラー「ちよつと・・・これじゃ裁判みたいじゃない！ 弁護人いないのツ？」

デス「(少し苛ついた様子で)・・・いいから何があつたか喋っておけ」

エンペラー「喋れ、って言われても・・・どつから話せばいいか判らないわよ!」

デス「(一度深い呼吸をして)最初から話して、最後まで話したら終わればいい」

ハイエロファント「エンペラー、君が『小アルカナのカード』を手に入れた時にあったこと、以前フォーチュンから聞いているんだけど、改めてそこから話してほしい。そして今日、ジャステイスに追われた時の状況も続けて聞かせてくれないかな?」

グツ、と一度息を飲み込むような仕草をするエンペラー。

暫し、そのまま。

やや長めの間。

ハアアア、と観念したように溜め息を吐き、目を閉じて、すぐに開く。

エンペラー「(諦念に溢れた顔で)・・・解ったわよ。順番に話すわ

よ」

【回想シーン】

★（過去） 荒野の端・ジャングルとの境界付近・廃城

深夜。ホウ、ホウ、と梟の鳴き声が静寂を破って響く。

『半月』となつている月の光が、密林の樹木の枝間を縫う。

荒れ果てた中規模の廃城。煉瓦も方々で崩れ、何百年と誰も手を加えてないような雰囲気。

エンペラー、その玄関ホールと思しき部屋の中央に、腕組みをして立っている。

エンペラー「（眉を顰め）まさかここまで荒れてたなんてね……んと……（グルリ、と玄関ホールを見回し）こりやあ造り直した方が早いかしらん。でもアタシの細腕じゃ、工事はしんどいわ。（ハタ、と気が付き）そーよ、タワ―に手伝ってもらえば……（首を振り）イヤイヤ、フォーチュンが許可しないでしようねー」

謎の声「……なら、我輩が手を貸してやろう、ゾ」

エンペラー「ヒイエエエツ!!」

跳び上がるように驚き、ブン、ブン、と辺りに目線を放り投げるエンペラー。

エンペラー「だつ、だだだだだ誰よオツ！」

謎の声「そう畏れずとも良い……我輩の声はちゃんと聞こえているらしいな」

エンペラー「（悲鳴混じり）嫌アアア！ お化けエ！」

謎の声「（愉快そうに）ムシユシユシユ……貴様の世界にも“お化け”がいるのか。それは重畳、ゾ」

エンペラー「アタシ食べても美味しくないわよッ！」

謎の声「心配いらん、ゾ。身体は食わぬ。貴様に力を与えに来た」

エンペラー「（ハツ、と落ち着き）力？ 力って、何の？」

謎の声「……それは……（地鳴りのような低い声で）貴様の願いを叶える力、ゾ」

エンペラー、今度はゆつくりと、確認するように視線を移動し始め

る。

声は一箇所ではなく、反響も伴って四方八方から聞こえてくる。

謎の声「貴様の願いは、フォーチュンの下僕、タワーを操り、ここを新しく建て直すこと……」

エンペラー「無理よオ、タワーはフォーチュンの魔力でしか動けないのよ。フォーチュンがウンって言うワケ……(ハタ、と気が付いて)ちよつと待って……何であんた、フォーチュンもタワーも知ってるの？ マジカルランドの住人にしちゃあ、聞いたコトない声よね!？」

謎の声「知っている、ゾ……フォーチュンもタワーも、よく知っている」

突然。

エンペラーのすぐ近くの足元に、ブイン……と半球状の紫色の光が湧く。直径50センチほど。

ビクツ！と片足を跳ね上げるが、視界をしつかりとそこに向けているエンペラー。

謎の声「こいつを使うといい」

光の中心付近の、大理石を敷き詰めた床に、四角の小箱。

細長く平たい、木製の蓋付きのケース。木目を生かした表面の柄。

屈んで顔を近付け、じつ、と凝視するエンペラー。

箱の蓋に、魔法陣のような円形の彫刻細工がある。

エンペラー「何コレ？」

謎の声「これは古代魔術のアイテム『小アルカナのカード』、フォーチュンの宝物庫に置いてあった代物、ゾ」

エンペラー「魔術、って、アタシ魔法使えないわよ」

謎の声「心配無用……既に封印は解いてある、ゾ。魔法の使えない者でも使えるようにしてある」

エンペラー「(辺りを改めて見回し)アタシにどうしろって言うの？」

謎の声「先程言った通り、願いを叶えろ。使い方を今から教える。心して聞くがいい、ゾ」

エンペラー「それより、アンタ何処の誰？ 姿を現さないの？」

謎の声「(低く唸り) 訳あって現せない・・・今はな」

エンペラー、再度、床に置かれた小箱を穴の開くほど見詰める。

右手を顎の下に当て、眉を顰めて考え込む。

エンペラー《何か怪しい話だケド・・・マジカルドロップを手に入れるにもフォーチュンに勝たないとイケナイし・・・今のアタシじゃ、そうそう勝てないし・・・》

謎の声「カードを使い、フォーチュンの魔力をタワーに宿せば、言うことを聞くだろう。さすればこの城を新しく建て直し、その主として住むことなぞ造作もない、ゾ」

エンペラー「そんなコトが出来るのん？」

謎の声「出来る。そして城の主となり、好きな者を侍らすがいい、ゾ」

エンペラー「好きな者?・・・」

瞬時に、エンペラーの脳裏にハイエロファントの姿が浮かぶ。

そして、ポン!と左掌を右拳で叩いて、パアアアアツツ!!と明るい蕩けた笑顔になるエンペラー。

エンペラー「(嬉しそうに) エロファントちゃんとのスイートホームってことねーッ!」

謎の声「誰だか知らぬが、そいつを連れてきて共に暮らせ。働きに期待している、ゾ。(重低音で囁い) ムシユ、ムシユ、ムシユシユシユ・・・」

床の『小アルカナのカード』のケースを、バシツ、と荒々しく取るエンペラー。

途端、小箱を包んでいた半球状の紫の光は失せる。

エンペラー、カードの箱を握ってしゃがんだまま、動きを停めている。

暫くの、間。

暫くの、間。

スウツ・・・と静かな動作で立ちあがるエンペラー。

両方の眼に、微かだが紫色の濁った光が宿っている。

ニイヤアツ・・・と、口角を引き攣ったように釣り上げ、悪鬼のよ

うな嗤いを浮かべる。

【回想シーン終了】

★ 神殿・ハイエロファントの居室

エンペラーの話す事柄を一通り聞き、顔を見合わせるデスとハイエロファント。

デス「フォーチュンから聞いた話とは一致したな」

ハイエロファント「(頷いて) そうだね」

エンペラー「(心外そうに) 流石にこの期に及んで嘘ついても仕方ないでしょ！」

デス「それにしても……(じろ、とエンペラーを睨み) 得体の知れない正体不明の奴の話を、よくもまああつさり信じ込んでくれたものだな」

エンペラー「イヤ、疑ったわよ！ 少しは」

デス「最終的には話に乗って……(深い憤りで) ハイエロファントを誘拐したんだろう？」

エンペラー「だからそれはホントごめんなさい！ (頭を下げて、再び上げ) 反省してるのよん！」

ハイエロファント「僕が連れ去られた件はともかく、エンペラー、君の口から“約束”を聞いてない」

エンペラー「(少し考えて) “約束”？」

ハイエロファント「(圧を持った、響くような声質で)……デスを、二度と傷付けない、ってこと……」

真つ直ぐに、射抜くような視線をエンペラーに向けるハイエロファント。

凜とした雰囲気。更に、その場の空気が凍て付くような、威圧感。ビクウツ！と、エンペラーが椅子に座ったまま、跳ねる。

そして先程の汗とは違う、畏怖の感情がもたらす汗が、全身あちこちから湧く。

一方、デスはハイエロファントの横顔に眼差しを繋ぎ止めたまま。沈黙。

沈黙。

限界を超えた様子で、縮こまった身体の緊張を自ら解くエンペラー。

ふうふうふう、と非常に長い溜め息を継いで、視線をやや下方に向けてる。

エンペラー「(重めの声質で) 解ったわ・・・約束します・・・」

ハイエロフアント、緩やかに笑みを浮かべ、デスを見詰め返す。

デス、微かに唇に笑みを湛え、僅かに申し訳なさそうな色を瞳に宿す。

それから、もう一度エンペラーに視線を放る。今度は落ち着いた色彩。

デス「それから、今日あったこと、だ。ジャステイスの状態が明らかに異様だった」

エンペラー「(通常の声で) アレはね・・・ジャス子と話してる時に、変なコトが起こったのよ」

ハイエロフアント「変なこと?」

エンペラー「(怖ろし気に) アタシに『小アルカナ』を渡した時の声と、同じ声が聞こえたの。姿は見せずに、どっからともなく、ね・・・でも今日のは、更に・・・(顔の上側に影が入り、声を震わせ) 紫色の光が帯になっていきなり降ってきて、ジャス子にブチ当たって、それたら・・・」

デス「ジャステイスが攻撃してきた、ってことなのか?」

エンペラー「(蒼褪めたまま頷いて) そうなのよ・・・アタシが呼び掛けても返事もナシで、急に斬りかかってきて・・・もうダメ、死ぬかと思っただわ」

デス「安心しろ。あたしの大鎌でないと死ぬことはない」

エンペラー「(汗を飛ばしながら) 死にそうなくらいブツた斬られるトコだったのよん!」

腕組みを解き、両手を体側に垂らすデス。

デス「(瞼を一度閉じ) あれは、今まで闘ってきたジャステイスではなかった。瞬きすらしない紫色の瞳といい、纏わり付いていた紫色の

光といい、(目を開けて)「何か」がジャステイスの中に、いた。別人が憑依していたようだった」

ハイエロフアント「(デスを見詰め)憑依・・・誰かが憑りついていたらってことかな?」

デス「(ハイエロフアントを見詰め)可能性がある、つてことだ。何者かは不明だし、今だかつてこんな出来事に遭遇した経験がない。フォーチュンやワールドなら、何らかの事例を知っているかも知れない」

デスとの会話に頷いてから、改めてエンペラーに視線を移すハイエロフアント。

ハイエロフアント「それで、走ってきたところで僕たちに会った、つてことなのかな?」

エンペラー「そうなのよー。エロフアントちゃんが救いの神様に見えたわ。(ニツ、と笑い)まあアタシにとつては神様以上に愛しの・・・デス「(断ち切るように)話は判った。あとは、ジャステイスの様子はあたし達で見しておく」

エンペラー「(怒声)最後まで言わせなさいよツ!!!」

ハイエロフアント「ありがとうエンペラー、お陰でいろいろと判ったよ」

エンペラー「(コホン、と空咳をして)ま、まあ、エロフアントちゃんがそー言ってくれんなら、いいわ」

両掌を広げて、タン、と両膝を叩き、勢いをつけるようにして椅子から立ち上がるエンペラー。

デスとハイエロフアントが見ている前で、何やら吹っ切れたような、不敵な笑みを顔に出す。

そして左右の拳を腰に当て、胸を張るような姿勢を取り、ふたりを視界に映す。

エンペラー「エロフアントちゃんともっとお喋りしてたくて名残惜しいところだケド、そろそろアタシは帰るとするわ。(デスを見て)死神、あんた、ジャス子が目エ覚ましたら声掛けてやんなさいよ。優しくね。(明瞭な声で)や・さ・し・く・ね!」

デス「(これ以上ないほど訝し気に)・・・お前は何を言ってるんだ？」

ハイエロフアント「(はっ、と何かに気付き)うん、そうだね。声を掛けてあげるといいよ、デス」

デス「(ハイエロフアントに驚いた表情を向け)ハイエロフアントまで・・・まあ、判った。ハイエロフアントがそう言うのなら、そうする」

デスの台詞を聞き届け、その場で、くるうり、と踵を返して半身になるエンペラー。

エンペラー「そんじやエロフアントちゃん！ まったねー！ 愛してるわん！（チュツ、と投げキス）」

特に表情の変化もなく、冷静な顔のハイエロフアント。

僅かに眉間に皺を寄せるが、すぐさま普段の表情となるデス。

そして、妙に軽やかな足取りで、居室の扉を開いて廊下に出るエンペラー。

パタン・・・と扉が締められ、スキップするような足音が廊下を遠ざかっていく。

小さくなっていく音が、ふたりの耳に届いている。

デス「(ふう、と嘆息をつき)相も変わららず、だな」

ハイエロフアント「(にこ、と微笑んで)そうだね」

ハイエロフアント、キィ、と椅子を傾けてデスに身体を向ける。

ハイエロフアント「ジャステイスはあの時、何かに憑りつかれた。

あの紫の影・・・何だったのかは解らないけど・・・多分、君に攻撃してきたのって、彼女の意志とは無関係だったと思う」

デス「(頷いて)それはあたしも感じた。いつものジャステイスの太刀筋とはまったく違う、凶暴な剣、暴風のような速さ・・・恐らく、その憑依していた「影」が操っていたと思えるな」

ハイエロフアント「運良く身体から剥がせて、君が撃退出来たのはいいとしても・・・」

デス「・・・正体が不明だ。あたしが送ってきた魂に近い気がするが、異質な存在だった」

ハイエロフアント「エンペラーの話と合わせて考えると、以前から『誰か』がマジカルランドに入り込んでいるのかな・・・でも姿を見えないってことは、別世界から間接的に魔術や魔力を使ってるのかも知れない」

デス「(据えた眼差しで)そいつが、何かを目的としてこの世界に干渉しているんだらう」

ハイエロフアント「とにかく、これから注意して情報を集めてみた方がいいね」

デス「(大きく首を縦に振り)ああ。あたしも“仕事”で行った先で、出来る限り集めてみる」

頷き返すハイエロフアント。

意志を漲らせ、視線を絡ませ合う、ふたり。

僅かの、後。

ちら、と寝室の方向に瞳を泳がせるデス。数秒、そのまま。

ハイエロフアント、静かに微笑んで目を細める。

ハイエロフアント「・・・そろそろ、ジャステイスのところに行こうか」

デス「(視線をハイエロフアントに戻し)あ、ああ・・・そうだな・・・」
見透かされた時のような、少しの戸惑いを表情に混じらせるデス。

★ 神殿・ハイエロフアントとデスの寝室

小振りな窓が高いところにあり、陽が差し込み、光の直線を描いている室内。

寝台の上に、小さな寝息を立てて横臥しているジャステイス。

落ち着いて安心し切ったような、寝顔。

ベッドの横に立て掛けられている鞘に収まった大剣が、カタ、と僅かに音を発する。

ぴく、と、こめかみの辺りが反応し、ジャステイスの瞼が緩やかに開いていく。

通常の呼吸を取り戻そうと、少し、すう、と肺に空気を送り込む。

ジャステイス《(陶醉したように) いい匂い・・・落ち着くなあ・・・》

焦点がまだ定まっていないう視線を放り投げ、仰向けになるジャステイス。

ジャステイス《ここって・・・神殿の寝室・・・》

それから天井に目をやり、遠くを眺めるような眼差しを向ける。

ジャステイス《(ぼんやりとして) 思い出した・・・さつきまで『誰か』がボクの中にいて、ワケ判らない内に、気付いたらデスと闘ってたんだ・・・》

急速に蘇ってくる、戦闘時の記憶。

自分の裡に得体の知れない「影」が存在する、おぞましき。

明らかに相手を屠る威力の、殺意を込めた波動に充ちた、闘い。

ゾツ・・・と猛烈な寒気が、ジャステイスを襲う。

そして、デスに斬り掛かっていった瞬間が、電光の如く脳裏を劈く。

自分の感情、想いを踏み躪るような、意志を無視した苛烈な剣撃。

いたたまれない感情に襲われ、涙腺を殴打されるジャステイス。

ジャステイス《もうデスと闘う気なんて(ギョツ、と唇を噛み)ないのにつ・・・!》

ジャステイスの目頭に、じわ、と涙が浮かぶ。

直後。

ガチャリ、と寝室の扉が開き、ハイエロファントとデスが入ってくる。

ハッ!と顔を扉の方に向けるジャステイス。寝台に横たわったまま。

歩み寄りながら、安堵の表情を顔に出すハイエロファント。

ハイエロファント「(笑顔で) 気が付いた? ジャステイス」

ジャステイス「(か細い声で) エロファント・・・デス・・・」

ハイエロファント、ジャステイスを見たまま、両手を後ろ手に組んで立ち止まる。

デス、更に数歩ベッドに近付き、すぐ傍らまで進んでジャステイスを見下ろす。

絡み合う、ふたりの眼差し。

ジャステイス「(潤んだ目で見詰め) デス・・・」

デス「(ふっ、と微笑んで)そんな悲しそうな顔するな。お前らしくない」

緩やかな動作で、寝台の端に腰を下ろし、上半身を左側に向けるデス。

すっ、とデスの左手が伸び、掌をジャステイスの頭部辺りに翳す。

それから、羽で撫でるような優しい動きで、彼女の髪を撫でるデス。

デス「(深い、穏やかな響きで)今は・・・こうしている・・・」

正円に見開かれる、ジャステイスの両眼。

停止。

停止。

尚も、そのまま。

じいわあああ・・・と泉から湧き出す純水の如く、涙を流し始める

ジャステイス。

途端。

ガバアツ！と跳ね上がるジャステイスの上半身。

驚いた顔のデスの、差し出している左腕の内側を滑るように、懐に飛び込んでくる。

そして勢いそのままに両腕をデスの胸から背中に回し、ぎゅうううっ!!!と抱き着く。

突然の出来事と、今の現状を認識し、見る見る赤くなっていくデス。

止めどなく溢れ続ける、ジャステイスの涙。流れ落ち、デスの胸元を濡らす。

ジャステイス「(轟くような泣き声)うわあああん!!! デスう!!!」

デス「(頬を染めたまま)おいっ！いきなり抱き着くなっ！」

ジャステイス「ごめんねデス！ボク、ボク・・・(しゃくり上げながら)ホ・・・ホントにごめん!!! ボク、あんな闘いなんてしたくな

かったのに！」

デス「だから・・・何かに憑りつかれてたんだろ？お前の闘いじや

ないことぐらい、すぐに解った・・・(少し怒り気味に)解ったから離れる！くつつき過ぎだ！」

ハイエロフアント、柔らかな微笑みを浮かべ、ふたりを見詰めてい

る。

デス、助けを求めるかの如き顔をハイエロフロントに向け、戸惑いを惜しみなく表現している。

デス「(困り果て)ハイエロフロントも何とか言ってみてやってくれ：」
ハイエロフロント「うーん・・・(目を細め)でも今のジャステイスの一番の治療は、君にそうしてもらえなことだと思おうよ」

ぐう、と息を飲んで、これ以上ないほどの困惑を見せるデス。

しかしすぐに、少しの冷静さを取り戻した様子で、頭を掻き、ジャステイスに視線を戻す。

デス「(はあ、と溜め息をつき、諦めたような口調で)もう少し、だけだから・・・」

未だにしゃくり上げが治まらないジャステイス。

小さく可愛らしい仕草で、コクン、と頷く。

高窓から差し込んでくる陽の光が、仄かな温もりを空間に届けている。

★(数日後) 森と草原の境・ストレンジスの家・庭の樹の木陰

太陽が眩しいほどに、天頂にある午後。

さわ、と涼しい風が大樹の枝葉を揺らす。

その根元、木陰に並んで草叢に腰を下ろしているジャステイス、ストレンジス。

ジャステイス、揃えた膝を両腕で抱えている。

ストレンジス、胡坐をかいて、両手を後方に付けて座る。

ストレンジスの傍らでは、ガオガオが伏せて、重ねた両前足に顎を乗せ、眠っている。

眉を顰め、やや重い表情のジャステイス。

話に頷きながら、真摯さに溢れた眼差しを向けるストレンジス。

ストレンジス「そっかー、いろいろ大変だったねー」

ジャステイス「グツ、と奥歯を噛んで)正直、悔しくて悔しくて・・・

『誰か』に操られた拳句に、デスに滅茶滅茶な闘いを仕掛けるなんてさ・・・『正義』が聞いて呆れられるよ」

ストレンジス「でも結局、デスに優しい言葉掛けてもらったんでしょ？」

ジャステイス「(カアツ、と真っ赤になって) うん・・・それは、良かったよ、うん、すっごく良かった」

ストレンジス、眼前の草原の遠い箇所視線を投げ、少し微笑む。

ストレンジス「デスの優しい言葉って、破壊力凄いやねー」

ジャステイス「(笑顔で頷いて) そうそう！ すっごいやね！ キミも掛けてもらったんだよね？」

ストレンジス「(笑い返し) うん、アタイは頭撫でてもらって褒められた。とーちゃんのマッスルボンバー並みにもんの凄かったよ、衝撃が」

ジャステイス「(しみじみと) わっかるなあ、あれは言ってもらわないと解らないよねっ！」

ストレンジス「エロフアント兄ちゃんは、毎日言ってもらえてるのかなあ」

ジャステイス「そうだよねえ・・・羨ましいケド、毎日だったら身体持たないかもね」

ストレンジス「丈夫さには自信あるけど、アタイもきつと持たないなあ。(ジャステイスを見て) たまに言われるからいいのかもよ？」

ジャステイス「そうかも知れないね」

肩を疎めながら、共感出来た嬉しさを顔に出すジャステイス。

身体を、ずい、とジャステイスの方向に向け、座り直すストレンジス。

ストレンジス「でき、ジャステイスはデスに言うの？ 気持ち」

ジャステイス「(首を左右に振り、寂し気に)・・・ううん、言わない。きつと迷惑だと思うし」

ストレンジス「アタイは言ったよ、デスに」

間。

間。

更に、間。

跳ね上げるように両腕を解き、思わず前のめりになって顔を近づけるジャステイス。

ジャステイス「(正円に目を見開いて)そんなの初耳だよっ! 言ったの!? いつ!? 何処で!？」

ストレンジス「(あっけらかんと)デスとエロフロント兄ちゃんが結婚する前に、昼ご飯一緒に食べようって、ウチに呼んだんだ。食べ終わってから言った。(指で地面を指し)丁度ここ、樹の下で『好きだよ』ってね」

ジャステイスの口元が覚束なく震え、暫く声を発することが出来ず。

余りにも狼狽えた顔が、彼女に貼り付いている。

漸く、落ち着こうとして両の瞼を一度閉じ、静かに再度開くジャステイス。

ジャステイス「ねねね、それで? デスは何て言ったの?」

ストレンジス「(デスの声真似で)『お前は何を言ってるんだ』だって!」

急速に沈静化していく、ジャステイスの表情。

戸惑い、何と言葉を返していいか判らなさそうに、視線を落とすジャステイス。

ジャステイス「・・・そうだったんだ」

ストレンジス「まあでも、デスがそんなんでテレテレになるなんて思わなかったし、当然の反応かな」

さっぱりとした笑顔をジャステイスに見せるストレンジス。

安堵したような、穏やかな笑みを向けるジャステイス。

ストレンジス「アタイの『デスが好き』と、アンタの『デスが好き』って、別物のような気がする。アタイはデスに言って後悔してないし、良かったと思ってるケド、もしかしたらジャステイスは、言わない方がいいのかも知れないなあ。何となくだけど・・・(身を乗り出すように)ねえ、ジャステイスってさ、デスとどうなりたいの?」

ジャステイス「(頬を染めて)どうって・・・どうなりたいの、って・・・」
ストレンジス「恋人になってイチャイチャしたい、とか?」

ジャステイス「(ボフウン!)と湯気を出して、灼熱化して)うわあッ! 何てコト言い出すんだよッ!! そ、そそそそんな、ボクが、デ、

デスとイチャイチャ、って……(顔を覆って俯いて) もーっ！ 頼むから想像させないでくれないかっ！」

ストレンジス「(ニイ、と笑みを浮かべ) 大当たり、かな。アタイの予想以上かも知れないケド」

ストレンジスの笑顔を横目に見ながら、尚も赤面を隠そうとしているジャステイス。

しかし、やがて静かな調子でそれは治まっていき、普段の表情を戻し、両手を下ろす。

入れ替わりに、ジャステイスの顔に重厚な色が浮かんでくる。

真剣そのものの眼差しで眉を寄せ、前方を見詰める。

ジャステイス「でもさ、罷り間違っても……(真剣な声で) デスとエロフアントを引き離すようなコトは、しちやいけないんだ。デスがエロフアントと一緒にいて、幸せを感じててくれるのが……ボクの願いでもあるんだから」

ジャステイスの澄んだ声質に、居住まいを正して、唇を引き締めるストレンジス。

ジャステイス「ボクね……前に、ワールドからデスの昔のコトいっぱい聞いて、どれだけつらい運命なのか、どれだけ苦しんできたのか思い知ったんだ。なのにボクったら、昔は勝手にデスを悪だって決め付けて、散々鬭いを仕掛けてきて……『正義の気持ちなんて解らない』って言われたコトもある。そりやそうだよね、言われて当然さ。それに、ワールドの話を聞いてから考えたんだ。もしね、自分が死神の役目をやらなきゃならない、ってなったら……(悲愴な面持ちで) 無理だ、絶対に出来ない、って……でもデスは運命を受け入れてきた。どんなに苦しかったんだろうね……どんなにつらかったんだろうね……(一呼吸置いて) そんなデスが恋してる顔を初めて見せてくれた時、(心底感嘆して) ああ、可愛いなあ、って思ったんだ。こんなに可愛い顔するんだ、って……そんな時かな、ボクが……(薄く頬を染め) 恋に落ちて、デスが大好きになったのは」

ストレンジス、綺麗な紅色になるジャステイスを見詰め、ふっ、と静かな微笑みを浮かべる。

ジャステイス「デスにとってエロファントは、生まれた時からの苦しさやつらさを理解してもらえ、唯一絶対の存在なんだよね。あんなものすっつつつごく可愛い顔させるんだもの。そしてエロファントもデスに恋してた。もう何も言うことないよ。だって・・・(穏やかな笑顔で)エロファントがデスと一緒にいる限り、ボクは、デスの可愛いあの顔を、何度も何度も見ることが出来るんだ、からね」

納得したように、大きな動作で頷くストレンジス。

それを目の当たりにして、ジャステイスも同様の仕草で首を上下に振る。

身体の芯が共鳴したように、眼差しを交わすふたり。

ジャステイス「だから・・・絶対に言えないんだ。デスはもちろん、エロファントにも嫌な思いさせる。あのふたりには何があっても離れてほしくない。それは、ふたりが想い合ってるのを知った時・・・ううん、デスがエロファントに恋してる、って知った時から変わってない本気の気持ち、なんだよ」

ストレンジス「(静かに微笑んで)・・・そうだね、アタイもそう思う」

ジャステイス「これからボクが出来る一番のコトって、デスがずっと幸せでいてくれるよう、(清廉な声で)ふたりの関係を護っていくことだと思う」

ストレンジス「だったら・・・(凜とした声で)アタイたち、一緒だね」

ストレンジス、右手を眼前に掲げて拳を作り、指を折った側を、すつ、とジャステイスに向ける。

ジャステイス、続けて左手を上げ、拳を握ってストレンジスに掲げる。

一瞬の、後。

双方の拳が伸び、コツン、と小さな音を立てて一度合わさり、離れる。

ニコツ、と満面の笑顔のジャステイス。

ニイツ、と弾けるような笑顔のストレンジス。

ふたりの座る木陰に、穏やかな風が吹き込み、周囲の草叢を波立たせる。

風はそのまま草原を駆け、やがて気流に乗り、天空へと舞い上がっていく。

外伝 一 正義の恋 Episode of Justice :
了 一

アイネクライネ | Episode 0 to
∞ | 【第1話】

デスとハイエロファントの物語：REBOOT

外伝「アイネクライネ | Episode 0 to ∞ |
一

間近での雫の落ちる音が、ひどく遠くで鳴るように聞こえる。

微かな黴の臭いが取れない毛布を、一旦頭から剥ぎ、デスは横たわったまま視線を足下に投げた。

どうやら一眠りしていたらしい。霞掛かった意識が、急速に明瞭化してくる。それと並行して、横向きの身体を起こし、寝台としている平たい岩に腰掛けた。薄茶色の毛布が、彼女の身体を滑り落ちる。

住居としてある洞窟内に、点けたままのランタンの橙色の灯火が溢れている。

デスが、目線を前方足元に下ろす。

(また・・・夢に出てきた・・・)

短時間の眠りで、浮かんだ映像。

ハイエロファントの、にこやかな笑顔。

夢の中に投影された姿が、脳裏に再度、鮮やかに蘇ってきた。

デスの胸が、とくん、と脈打つ。頬が、綺麗な紅色に染まる。

同時に、彼女は奥歯を、きゅつ、と噛み、脛を痛いくらい強く閉じた。

今までを、思い起こす。

以前、彼と出逢う前、世には救済を積極的に行う『法王』がいるという話を耳にしてから、どういう存在なのか、どういう風体なのか、どういう人物なのか気に留めてきた。その時は、逢ってみようと思っただけであつた。はいなかったが、いずれ対面することもあるだろう、という予感があつた。

デスは無自覚の内に、別の意識を芽生えさせる。

救済を前向きに行う者ならば——自分を救ってくれるのではないかと。

斬首を生業とする、血塗られた運命を背負う自分に、光明を与えてくれるのではないかと。

それは表立って自覚することはなかったが、デスの裡に深く根を張り、やがて本人が意図しないまままで心の真髄で確固たるものと化していた。

そして、初めて逢った時にハイエロファントに告げた言葉。

——お前はあたしを救う力などない。

しかし、間髪を入れず彼が返してきた言葉。

——そんなのやってみなくちゃわからない。

それを耳にした瞬間、デスは余りの驚きで目を見開いた。

何故、そうも力強い声が出せるのだろうか。

何故、揺るがない視線を向けてくるのだろうか。

かつて自分の向けられてきた多くのものは、怖れ、怒り、拒みの表情と声と態度。死神である以上、むしろ当たり前の応対。

ハイエロファントだけは、違った。真摯で真つ直ぐな態度、反らさない眼差し、真剣な表情。そして積極的に自ら距離を詰めてくる雰囲気。それは憐憫や哀れみなどは欠片も感じさせない、心底から対面しているものであった。

デスの気持ちだが、激しく動揺した。

ハイエロファントの姿が、声が、消えない刻印となる。

それから何度も逢い、逢う度に彼の姿が自分の中で克明さを増し、自分の中で存在領域を拡大させていった。その度に戸惑い、且つどうしていいか解らない不安に襲われる。生まれて初めての感情に、彼女はその後ろ揺さぶられ続けたのだった。

それが、決定的な感情になった出来事がある。

死神の“仕事”である首刈りの帰り、彼に遭った。全身が振り返り血に塗れた自分を見ても、尚、彼は普段の表情を変えなかった。それどころか、労いの言葉すら掛けてくれた。

デスの裡で、何かが弾けた。

その瞬間、今まで蓄積された感情が、一気に具体化される。涙が止まらなかつた。そして、デスのはつきりと自覚する。

自分は、ハイエロフロントに恋をしているのだ、と。

それから毎日のように彼を想い、毎夜彼への思慕に焦がれ、毎朝、夢にまで登場してくる彼を脳裏に投影し、頬を赤らめて溜め息をついている。生まれて初めての激情は、最早希釈することすら出来ない濃度にまで達していた。

だが、デスは何人に対しても、その気持ちを口にすることは避けていた。

何かの流れで、また何かの拍子にハイエロフロントの耳に入れば、どうなるか。

答えは、出ている。

死神に慕われていると判り、良い感情を抱く者などいる筈がない。今のところは、初めてあつた頃から変わらない、真つ直ぐな態度で接してくれている。むしろその時よりも——勘違いかやも知れない、と思うが——にこやかな、また嬉しそうな笑顔を向けてくれている。

もし、自分がこう想っていることが、知られたのならば。

彼の笑顔も、態度も、一変するだろう。

彼と逢つて感じている細やかな幸福感も、一瞬で霧散し、水泡に帰すだろう。

残るは、おのれに向けられる侮蔑と拒絶の態度に違いない。

であれば。

生涯、想いを告げることなく過ごせば良い。

デスの中で、それは決定事項だった。

ただ。

逢いたかつた。

自分の裡に浮かぶ映像としてではなく、直接声を聞き、姿を見たかつた。

恐らく、この感情を殺してなら、彼も嫌悪感は見せまい。ハイエロフロントはそういう人物だ。だから多くの人々が彼を慕う。何しろ、

死神の自分に対してですら、常人と変わらぬ態度で接してくれるのだから。

ちら、とデスは洞窟の入り口方面に目をやる。かなり明るい。未だに陽は傾いている様子はない。

すかさず、彼女は腰掛けていた岩から立ち上がり、フード付きのマントを羽織る。バサツ、と裾が翻り、身体の前面に降りてくる前に、立て掛けていた大鎌を左手に握る。いつもの身支度を整えながら、陽が射し込む方向に歩みを進め始めていた。

逢う約束は、していない。しかしハイエロファントは、いつ来てもらっても構わない、と言ってくれた。何用かあつて逢うことが出来なくとも、彼の近くまで行くことで、今の自分は満足する。

デスは、昂る気持ちを抑えつつ、森の道へと歩み出した。

アイネクライネ | Episode 0 to
∞ | 【第2話】

神殿外壁の日陰は、思ったよりも冷える。

背を大理石の壁に凭れさせ、デスはそう感じていた。

今、ハイエロフアントが住居としてある神殿に来ている。彼に逢うべく、正門とは反対側の裏手の垣根を抜け、中庭を通り抜けて正面に行こうとしていたところ、前方から話し声が耳に届く。反射的に身を隠し、神殿外壁を慎重に近付いていき、建屋の角まで達してから、視線だけを前庭に投げてみた。

ハイエロフアントが、いた。こちら側には背を向けている。

ドキン、と心臓が跳ねる。

しかし、周囲の状況を確認すると、デスは急速に冷静さを取り戻す。彼に対して、数名の女性がいる。そして全員で、何事か話し込んでいた。

入り混じって聞こえる、楽し気な調子の声色と笑い声。

視線を引つ込め、デスが静かに態勢を戻し、そのまま地面に座り込む。音を殺し、大鎌を傍らに寝せ、緩やかな動作で彼女の身体が壁に体重を預ける。

ふう、という短い溜め息をつき、両の瞼を閉じる。

そして、複数の発声の中から、ハイエロフアントの声だけに意識を集中した。

(・・・よく通る、声だな・・・)

芯が一本据わっているような、安定して振れない声質。

そして何より、甘美。

現在、彼の声が届く場所にいることを実感し、デスは軽い陶酔を覚えてきた。

耳に入ってくるハイエロフアントの言葉が、即座に自分の脳幹に到達し、まるで飲酒をしているかのような高揚感と昂ぶりを感じさせてくれる。

ずっと、このまま聞いてきたい。例えおのれに話し掛けられたものでなくとも、ただ聞いていたい。

いつの間にか、デスは柔らかい微笑みを浮かべていた。目を閉じて頭を背後の壁に凭れ、両膝を立てて腕で抱え込むような態勢で鎮座し始める。

どれくらい時間が、経ったか。

デスは、表側の話し声が治まっていることにも気が付かず、数名の別れの挨拶が交わされて静寂が訪れていることにも気が付かず、意識を内側に向け続けていた。

そこに、ひとりの姿が、接近する。

「デス？」

「うわあっ！」

驚愕。

思わず、彼女の身体が小さく跳ね上がる。

流れるように、がばっ、と身体を壁から引き離し、デスが声の方向に視線を向ける。

自分の斜め前方に、少し目を見開いてこちらを凝視するハイエロファントがいた。どうやら、自分の反応に反って驚いた雰囲気だ。

「ご、ごめん。びっくりさせちゃった？」

申し訳なさそうに、且つ様子を窺うように、彼が問いを投げる。

頬が紅色に染まっていくのを自覚しながら、デスがすぐに、答えを返した。

「い……いや、その……驚いたというか……思わず声が出た……」
声質が、鈍る。

彼の前で意図せず大声を上げてしまったことに、羞恥心を覚える。

デスは、ふい、と目線を外した。真面にハイエロファントの顔が見られない。

対して彼が、和やかさを包括した言葉を発する。

「よく来てくれたね。良かったら、お茶でも飲んでいってよ」

あくまで自然な、誘い。

何故ここに、などという、至極当然な問い掛けもなく、ハイエロファ

ントはデスを見詰めている。

顔を上げた彼女と、宙で眼差しが絡む。

「あ……あたしは……その……」

もう、目を反らすことも出来ず、デスは言葉を選んでいった。

断る理由などない。逢う為に来たのだから。ただ、即答する勇氣もない。

暫くの、間。

ハイエロファントが、にこ、と満面の笑みを浮かべる。そして、すつ、と右手を正面の入口の方向に流すように差し出し、言葉を発した。

「どうぞ」

「……じゃあ……」

一瞬で、踏ん切りがつく。デスは大鎌を携えて立ち上がり、先に歩み出しているハイエロファントの背に続いて、神殿の前庭に進んでいった。

アイネクライネ | Episode 0 to
∞ — 【第3話】

陽は、かなり傾いていた。夕暮れには早い、八時はとうに回つていよう。

デスが、ハイエロフロントの居室の椅子に腰掛けている。眼前の執務机の横、小さな卓の上で、彼が手際よく茶葉をポットに投入し、耐熱性と思しき湯筒から熱湯を注いでいる。

自分の位置まで、芳醇且つ涼やかな香りが漂ってきた。

彼女は、住処では茶を嗜むどころか、淹れることすらしない。そういう生活様式ではないし、また時間もない。故に、自己の日常とは隔絶された今のひとは、彼と共に居るといふ実感を認知する重要な時間であった。

ハイエロフロントが、ハーブティーを満たした器を、受け皿に乗せてデスの目の前に置く。

カチャリ、という音に我に返ったように、彼女が手を伸ばす。

「今日は『仕事』 あったの？」

柔らかい笑みを湛え、執務机の椅子に腰を下ろし、もうひとつのソーサーを引き寄せながら彼が問う。

デスはカップの取っ手を持ち、口元に寄せたところで一瞬停止する。

自分の『仕事』——死神の役目である首刈りがどういったものか、彼は良く認識している筈だ。全身を返り血で真っ赤に染め、刎ねた首を持ち帰る。それをさも、日々の買い物でもしているかのよう、極々当たり前の事柄のように、ハイエロフロントは尋ねてくる。今までこういった反応を示した者は、誰もいない。

だからこそデスは、彼を特別に感じていた。

香り立つ薄琥珀色の茶を、ずと一口啜った後、彼女は言葉を紡ぐ。

「・・・いや、今日は、ない」

机を挟んで向かい合っているハイエロフロントが、静かな口調で話

した。

「君の“仕事”は本当に大変だからね、休める時にちゃんと休んだ方がいいよ」

「死神に休みなどない。朝だろうが真夜中だろうが、魂に呼ばれば行く」

「眠ってる時に呼ばれることもあるの？」

自分と同様に一口茶を飲み込んだ後、彼が言葉を返してくる。

その瞳に興味津々という煌きを醸し出し、更にこちらに一步踏み込んでくるように。

反らさないその眼差しと雰囲気、デスは更に自分の籠が緩んでいくのを感じ取っていた。

「無論だ。ざらにある」

「そう・・・しつかり眠れないときついよね」

「あたしは数分の睡眠でも、深く眠ればどうということはない。逆に長い時間は眠れないしな」

カチ、と持っていたカップを皿に戻し、ハイエロフロントが真っ直ぐに見詰めてくる。

少しの間。

会話の隙間に、デスは顔を上げて彼と視線を絡める。

そこには穏やかな表情で、ただ黙ってこちらを見てる姿があった。

同様に、カチャ、と器をソーサーに乗せた後、訝し気に、また微かな不安を隠した声色で彼女は問う。

「・・・どうかしたか？」

ふっ、と温かい笑みが、ハイエロフロントの口元に宿る。

「凄いなあ、って思ってたね」

清廉で、透明な言葉。

デスの胸が、とくん、と脈打つ。

褒められることなど、ない。死神である自分の存在が忌まわしく思われたり、また拒絶されるものであるのは百も承知で、それが普通である、と。

彼女は目線を外し、卓上に下げる。どう反応を返しているものか、

まったく判らない。

それが、おのれが恋い焦がれている相手からなら、尚更だ。

「本当に、君は凄いな。想像以上だよ」

ハイエロフアントはそれでも、まったく退く気配がない。

褒め過ぎだ。

デスは心底、そう感じた。

そして、漸く言葉を絞り出す。

「・・・な・・・何も大したこと・・・ないだろう？」

「ううん、心底感心しているよ。話を聞かせてもらう度に、そう感じる」

しかし尚も、追撃は治まる様子がなかった。

視線を戻してみると、先程と同じ、彼のぶれない眼差しがそこにあった。

深い響きを持つ声で、ハイエロフアントは続ける。

「君の話を聞かせてもらおうと、僕はまだ知らないことが多いな、と思うよ。物事を感じ方も捉え方も、そういう見方もあるなあ、つて思えるんだ。本当に、君は新しい感覚を教えてくれているんだよ。だから・・・」

一瞬、言葉が途切れる。

意識が僅かの間、自分から剥離したような感覚を覚え、デスが真っ直ぐに見詰め返す。

まるで彼の瞳に魂が吸い込まれていくような、浮揚感。

直後。

ハイエロフアントが微かに、極めて微かに頬を紅に染め、眩く。

「僕は・・・まだまだ君を知っておきたい・・・」

蕩けるような、甘い声質。

デスは、停止する。

何を言われたのか、暫く解らなかった。

聞き間違いか、幻聴かとも思える。

それが確実に彼の口が発した言葉であることを、今の眼前の表情と雰囲気、そして向けられる揺るがない視線から彼女が確定させるま

で、暫しの時を要した。

ぼふつ、と瞬間的にデスが顔を真っ赤に染める。唇の端を、きゅつ、と引き締め、完全に絶句した。

それでも尚、ハイエロフアントはこちらを、じつ、と見詰めたまま動かない。

そのまま、どれくらい固まっていたか。

凝り固まった肩から一気に力を抜き、はああ、と彼女が溜め息を漏らす。そして諦めたような口調と共に、言葉が転がり落ちる。

「・・・死神だから・・・知つていいようなことは、ないぞ?・・・」
「逆だよ、デス。死神だからこそ、僕が知らないことをいっばい知っている」

先程よりは落ち着いた表情で、ハイエロフアントが返答した。

デスは、思う。自分から距離を取ることはない。むしろ逢いたくてここまで来ているのだから。しかし、まさか彼の方から間を詰めてくるのは、予想だにしていなかった。人を突き放すような性分ではないとは言え、こうも死神である自分の領域に踏み込んで来る言動は、考えられなかった。

素直に感じれば、嬉しい。

しかし、答えに窮する。

やがて。

彼女は、目線を落として、慎重に言葉を捻出した。

「き・・・聞かれれば、判る範囲で答えられるが・・・」

「それで充分だよ。多分、一回二回じゃ収まらないと思うから・・・」
ふと、台詞の間が再度空く。

それに従って、デスの視線が再び彼の両目に注がれる。

その動きを待っていたかのように、ハイエロフアントは柔らかい笑顔を浮かべ、言う。

「何度も逢うことになっても、いいかな?」

デスは、瞬時に目を丸く開く。

彼から続けられる言葉は、軽々と自分の期待の遥か上を行く。

手が届く存在でないことは解り切っている。ハイエロフアントが

陽の当たる場所にいるなら、自分は漆黒の闇にいる。彼が多くの人に寵愛される存在なら、自分は忌み嫌われる存在。年齢が同じ年だという以外、立場や世に有る理由も、何もかもが真逆。

その格段の差ですら、彼はいとも簡単に乗り越え、こちらに踏み込んでくる。

恐らくはそれ故に、猛烈に惹かれたのだろう。今は、そう思える。返事が、出て来ない。デスは数回唇を動かし掛けるが、言語の形成にまで至らなかつた。

とうとう、彼女は言葉を発することが出来ず、こくん、とただの一度だけ頷くにとどまつた。

それに対して、にこ、と満足げな笑みを湛え、ハイエロフロントが再び口を開く。

「差し支えなければ、僕が君の住むところにお邪魔してもいいけど」
デスが、眉間に皺を寄せて顔を上げる。

「・・・血の臭いがするぞ。持ち帰った首を、住処の一室に置いてあるからな」

「そうだね」
間髪を入れない、事実認識。

彼の答えからは、微塵も懸念を感じ取れない。

「随分あっさりと肯定するんだな」

「君が死神である以上、当たり前のことだよな?」

矢継ぎ早に返される言葉に、デスは息を潜める。

まるで呼吸をするような当然さの、彼の返答。

「それに僕は、血も、血の匂いも嫌いじゃないよ。だって血は、僕たちが生きる上で大切な物だし、僕たちの身体に流れてるお陰で、生きることが出来るのだもの」

最早、何を言つても、彼は距離を置く気配がまったくくない。一步、また一步と間合いを詰めてくる。

それらの言動すべてが、死神の自分をありのままに受容しようというもの。最も想っている人物にここまで発言してもらえらるとは夢にも思わず、デスはおのれの裡の芯が震えるのを感じていた。

しかし表情に出さずに、彼女は言葉を漏らす。

「ハイエロファント・・・お前、変わつてると言われたことはないのか？」

「うーん・・・覚えはないし、僕は普通の考えだと思うけど・・・」
にこやかに微笑みを浮かべ、彼が器を手に取り、茶を啜る。

デスが続いて、カップを持って同様に喉を湿らせる。

血塗れの運命を負った自分を——死神の自分を、ハイエロファントは認めてくれている。

その事実には、彼女は感嘆を、深く心の奥に刻み込んでいた。

アイネクライネ | Episode 0 to
∞ | 【第4話】

薄暮となった空からの落ち着いた陽の光が、窓から差し込んでい
る。

ガチャリ、と神殿居室の扉が開き、デスが廊下に足を踏み出す。

背後に立つハイエロフロントを振り向き、彼女は大鎌を左肩に掛け
た。

「長々と、邪魔したな」

「ううん、とつても有意義な時間だったよ。来てくれてありがとう」
屈託のない笑顔、そして柔和な言葉。揺るぎのない目線。

離れていた時にただひたすら脳裏に描いていた姿が、今そこにあ
る。

デスの頬が、綺麗な紅色に染まった。

「帰り、気を付けて。またね、デス」

「あ・・・ああ、また、な、ハイエロフロント」

再会を期待させる挨拶が交わされる。恐らくそれは実現するだろ
う。ここを立ち去った後、間違いなくまた逢いたくなるであろうこと
は、火を見るよりも明らかだから。

反動を付けるように踵を返し、デスは歩を進めた。そのまま廊下を
行き、先の曲がり角で、ちら、と彼に視線を放る。

両手を後ろに組み、先程の笑みを変えずに、ハイエロフロントがこ
ちらを見詰めている。

その一瞬で、彼女の脳髄は融解しそうなほどに温度を高めた。絡み
合った眼差しが、否応なしに熱い想いを一気に沸点まで急上昇させ
る。

逆上せそうな感覚のまま、デスが思い切ったように歩みを再開させ
る。

再び冷静さを取り戻した頃、既に彼女は森の道を帰宅の途に着いて
いるところだった。

立ち止まって振り返ると、もう神殿の外観は見えない。まるで夢遊病であるかのように、すべての感覚を浮つかせたまま、ここまで歩いたらしい。

ざあ、と夕暮れの涼やかな風が、頬を撫でる。

同時に、ハイエロフアントの言動、一挙手一投足を思い出して心に投影する。

暫く足を停めて、彼女は思慮を巡らす。

やがて。

デスは、ある意志を自分の裡に克明化する。

(明日・・・行くか)

決断後の彼女の行動は、早い。

翌日の、昼。

マジカルランド中央に聳え建つ巨大な城の一室で、闘いが繰り広げられていた。

巨大な大広間、非常に高い蒲鉾型の天井。太い円柱が等間隔で並ぶ。深紅の長いカーペットが中央に敷かれ、伸びる先にはしっかりとした作りの玉座が設置してある。

広大な部屋のほぼ真ん中付近で、フォーチュンが魔術攻撃を幾度も繰り出している。その技が放たれる先、目にも留まらぬ速度で動き回る影があった。通常の動体視力では捉えることが出来ないその姿に、女神は歯噛みをし、次の魔術を生み出すべく、左手を背後から振り抜こうとする。身体の動きに続いて、ツインテールの長い赤髪が、振り子のように前方に揺れ、流れる。

刹那。

冷たい空気が、鋭利な軌道を持ってフォーチュンに首に弧を描く。

ぞく、と猛烈な寒気を覚え、女神が完全に動きを停止した。

デスが、いつの間にか自分の真後ろで片膝を付いて、屈んでいる。大鎌を彼女の首筋に、びたり、と当てていた。刃と首の皮の隙間、僅か指一本分ほど。

フォーチュンの全身から、どう、と冷や汗が湧く。瞬きひとつ、出

来ない。

死神の攻撃は、寸止めで動作する気配はない。

長い、間。

遂に、女神の口から弱々しい言葉が転がり落ちた。

「……わらわの負け、じゃ……首を取るがよい……」

途端、スツ、と大鎌が離れる。デスは立ち上がって、武器を戻して左肩に掛けていた。

殺気が消えた後方に身体を正対させ、フォーチュンは一瞬で怪訝そうな顔になる。向き合った死神は平然としている様子で、それ以上の攻撃を仕掛けてこようとしなない。

「何じゃ？ 首はいらんのか？」

「今は……その時じゃない」

「ほう……そなたの『仕事』ではなく、別件で挑んできた、と？」

デスは眉根を寄せ、不快そうな表情を向けてくる。チツ、と短く舌打ちをしてから、呟くように言う。

「理由など、どうでもいいだろう？」

「……まあよい。負けは負けぞよ」

諦念に満ちた顔で、女神が両掌を向かい合わせて翳す。ポウ、と掌が光った瞬間、何も無い空間からひとつの物体が姿を現した。それを大事そうに、彼女が手で包み込んで掴む。

虹色に輝く飴玉がぎっしりと詰まった、拳大の壘。

フォーチュンが、すつ、とそれを死神に差し出した。

「受け取れ。マジカルドロップじゃ」

途端。

デスの表情が、微かに緩む。

そして静かな動作で、右手で壘を鷲掴みにして、胸元に寄せる。

彼女の両の瞳孔に、この世の物とは思えない、七色の色彩が投影された。

マジカルドロップ——その一粒一粒が、『何でも願いを叶えられる』という魔力を持つ。この世界、マジカルランドの『天空の女神』ワールドが創り出し、『運命の輪』フォーチュンが管理する、想像を

絶する代物。これを手に入れるには、フォーチュンに闘いを挑み、勝たねばならない。

今まさに、デスが成し遂げたことである。

暫しの間、彼女はドロップを見詰め続けた。

言葉もなく凝視をしたままの死神の前で、フォーチュンが腕組みをして疑問を口にする。

「叶えたい願いがあるのか?」

直後。

デスの頬が、熱を帯びて真っ赤に染まる。唇の端が、きゅつ、と一旦結ばれ、目を丸く見開く。

「……別に答える必要はないだろう?」

「何を赤くなつとる? ただあるのかないのか、尋ねただけじゃろ?」

眉間に皺を寄せ、女神が連続して問い質す。

対する死神は、口元をもごもごと動かすだけで、返答する気配がない。

いや、返答出来ずにいる。

少しの間。

フォーチュンが、ふうう、と長めの溜め息をつく。そして意味あり気な、何もかも見透かしたような不敵な笑みを湛え、言葉を放った。

「これ以上は野暮というものか……構わん、答えんでよい。ドロップは好きに使え」

その台詞に、漸くデスの緊張と強張りが解ける。

はあ、と嘆息をつく、肩の力を抜き、そのまま踵を返す。大鎌を左肩に掛けながら、壇をしっかりと胸に抱え、彼女は大広間の扉に向かって歩を進め始めた。

立ち去つていこうとする後ろ姿に、女神の言葉が飛ぶ。

「ああ、デスよ、ひとつ警告しておく」

一旦立ち止まり、半身を傾けて後方を振り返る。

「何だ?」

「もし……『運命』を変えるのであれば、気を付けよ。わらわは『運

命の輪』・・・そなたが変えた『運命』を戻してしまうかも知れんから
のう・・・」

死神の両目の端が、切れるように細くなる。

それから、胸元のマジカルドロップに視線を下ろし、瞼を閉じる。
噛み締めるような、デスの表情。

「血塗られた、あたしの『運命』・・・」
深い、声色。

また、世界の悲嘆をすべて抱え込んだような、物憂げな響き。

今の発言を耳にした者は、思い知るであろう。彼女が如何に重厚な
『運命』を担い、そして安らかではない、荊の道を歩んできたことを。
すべての悲しみを、ただ一身に負っていることを。

デスは再び両目を開け、女神を鋭い眼光で睨み返す。

「お前如きに変えられると思うか？」

覇気すら覚えさせる、一言。

女神が、にい、と楽しそうに笑う。

フォーチュンは、彼女の事情も、余りにも過酷な使命をも認識して
いる。

故に、死神の一言一句に共鳴出来ていた。

「咆えおる・・・流星はデス、わらわに勝つただけのことはあるのう。
その意気やよし！」

愉快そうに、女神は明るい声質で言う。こういった手合いは大変に
好み、という雰囲気だ。腕組みを解き、両手の甲を腰に当てて胸を張
る。そして何気に嬉しそうな表情で、死神に言葉を紡ぐ。

「そなたがドロップをどう使うか・・・手並み拝見、と参ろうぞ」
「・・・好きにしろ」

デスが、身体を翻らせる。マントの裾が、その動きに合わせて綺麗
に流れる。

彼女のブーツの踵が発する音が残響となり、フォーチュンが目線を
送り続ける部屋中に漂っていた。

アイネクライネ | Episode 0 to
∞ — 【第5話】

薄暗い洞窟の、奥。

デスが住居している開けた空間に、ランタンのオレンジ色の光が満ちる。

寝台としている、平たく小振りな岩に腰を掛け、彼女は左手にマジカルドロップが詰まった壘を持っていた。それを暫く感慨深げに見詰め、手首を少し返してみる。飴玉同志が当たる、軽やかで明るい調子の音が鳴る。

深遠な感覚すらある虹色の煌きを瞳に映し、デスは思う。

先日、ハイエロファントと逢った後に決意した、事柄。

マジカルドロップで、願いを叶える。

彼女の願うことは、たったひとつ。

今の自分の——彼への恋心を生涯貫きたい、ということ。

それは、魔術で実現しなければならぬことなのか、と考えもした。しかし、死神であるおのれの宿命を負い続ける限り、いつかまた精神が崩壊し、心身共に闇に蝕まれる日が来ないとも限らない。今の自分はハイエロファントを想い続けるだけで何もかもが救われている、と感じていた。

そして、彼を想う度に到達する、感慨の極み。

この世で最も悦楽へと導いてくれる、慕情。

それを。

身が朽ち果てようとも、いや、朽ち果てても尚、抱き続けたい。

死神の役目故、いずれは彼の命に終わりを告げ、首に刃を立てる日が来るだろう。その時を超えてもこの身体が存在するのであれば、創造神により自分のすべてが滅するまで——ハイエロファントをずっと、ずっと思い続けていられれば、我が人生は救済されるであろう、と。

もう、この気持ちは偽ることが出来ない。

ならば、彼への気持ちを永遠にしたい。

誰に何と言われようと。

揺るがない恋、に。

だからデスは、絶対であるマジカルドロップの力を借りたかった。何でも願いを叶えるこのアイテムなら、想いを遂げる以上の出来事も具体化するに違いない。だが、無理に自分の欲を押し通すことをしたくはないし、彼の意に反するであろうことは明白だ。

自分は、ただただ思うだけで、いい。

死神如きが、それ以上の高望みはしてはいけない。

デスの眼が、一瞬据わる。決意が改めて漲ってくる。

それから右手で、キュツ、と蓋を外す。一粒だけ取り出し、再度閉め、壘を横に置く。

じつ、とドロップを凝視する、眼差し。

(あたしの願い・・・あたしは・・・あたしの運命を変える！)

彼女が、瞳を閉じる。

ハイエロフアントの姿が、濃く、明瞭に脳裏に浮かぶ。

瞼を開け、右手で虹色の飴玉を高々と掲げる。

真つ直ぐな、微塵も揺らがない視線を？げ、デスはその願いを唱えた。

「あたしは・・・恋に生きたい！」

途端。

ドロップが、大きな白色の光を発した。

それは更に膨れ上がり、彼女を飲み込んで空間全体に広がる。

僅かの中に、洞窟の空間はそれで満たされ、すべてを清廉な色に染め上げる。圧すら感じる猛烈な光量の中で、死神は目を細め、摘まみ掲げたマジカルドロップを見詰めていた。

自分の意志の深層奥にまで到達する、純白。

今、この瞬間の彼女は、まだ知らない。

それは。

デスとハイエロフアントが繋がる物語の道行きを照らし出す、一条の光となることを。

悠久の遙か彼方まで共に歩む人生の、導きとなったことを。

【 T o b e c o n t i n u e d . . . E p i s o d e 0 1
『恋せよ死神 —コイセヨヲトメ—』】

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【前編】——1

★ 1872年・アメリカ合衆国・アリゾナ州・廃墟となった街曇天。ところどころの雲の切れ間から、薄く陽が射し込む。

太陽の位置は、西側地平より45度の高さ。

乾いた、少し涼しい風が吹く、荒野の道。

一頭ずつの馬に跨り、並んで進んでいるキリエとラーラマリア。

キリエは傘を差し、荷を載せたもう一頭の馬の手綱も持つ。

ラーラマリア、右手で手綱を握り、左手で地図に目を落としている。

やがて、前方に街の端を確認。

そのまま、並足で馬を進めるふたり。

街の外周と思しき位置に、杭の柵。ただし、既に大部分が朽ちており、用を成していない。

家屋が見える街の入口付近。倒れている看板。街の名も読めない程に掠れている。

ふたりの乗る馬、それを横目に、街の中に進み入る。

目視出来る家屋、建屋は、すべてに動く者の気配がしない。

壊れたままの窓や扉、空の水桶。砂を被った状態の軒。

数軒が左右に並ぶ通りを過ぎ、眼前のT字路の手前で、馬を停めるキリエ。

ラーラマリアの馬も、続いて停まる。

キリエ、目を細めて、5ヤードほど先の角、更に先の右側に注視している。

前方に投げられたキリエの目線に気付き、彼女の横顔を見詰めるラーラマリア。

ラーラマリア「(訝し気に)・・・どうかしたか？」

キリエ「誰か、いる・・・」

スツ、とすかさず下馬するキリエ。

ラーラマリア、間髪を入れず、同様に馬を降りる。

足音を殺し、静かに建屋の角に近寄っていくふたり。

キリエは傘を畳み、両手で構えて身を低くしている。

ラーラマリアはホルスターから銃を抜き、音を立てずに撃鉄を起す。

ふたりとも、身体を家屋の陰に隠したまま、顔を僅かに出す。

T字路から右側5〜6ヤードほど奥、やはり両脇に建屋がある、通りの中央付近。

ふたりの人物が、こちらに背を向けて屈み込んでいる。

ひとりは、紫の髪。群青色のフード付きのマント、巨大な鎌を肩に掛けている。

ひとりは、蒼い髪。白地に緑の部分が装飾された法衣、ミトラ（司教冠）を被る。

よく見ると、その2名の向こう側の地面に別の誰かが地面に座り込んでいる。

一瞬で、思い切り眉間に皺を寄せるラーラマリア。

ラーラマリア「（小声で）見たことない服装だな……異国の連中か？」

キリエ「（小声で）髪の色も、見たことない。それに……（きつ、と目付きを鋭く）大きな鎌……」

ラーラマリア「（更に声を潜め、頷き）武器だとは思うが……今時あんな馬鹿でつかい鎌なんざ使うのかよ。昔の欧州じゃあるまいし」

キリエ「（呟くように）奥の人、狂血病みたい」

路地で背を向けてしゃがむ2名の前、地面に正座して、頭を抱え込んでいる男性。

ボロボロの衣服。時折身体を起こそうとし、苦しそうに胸を両手で押さえ、荒い呼吸。

その男性に右手を翳している、法衣姿の蒼髪の人物。

掲げた掌が、気の所為か薄ぼんやりと光って見える。

マントの人物「どうだ？」

法衣の人物「首を振って）体力は戻っても、症状が治まらないみたいだ……」

フード付きマント姿の人物は、女性の声。綺麗な響き、やや幼さの残る声質。

白地の法衣姿の人物は、男性の声。清廉な響き、一本の芯が通る明瞭な声質。

ふたりの前で、ビクン、バクン、と座り込む男性の身体が細かく跳ねる。

痙攣をしている模様。

胸元から喉を掻きむしり、両目を、クワツ、と見開いて苦悶の表情。

座り込む男「喘いで、苦しそうに）頼む……こ……殺してくれ……

もう……グ……グガ……ガアツ……」

マントの人物「限界か……魂が、悲鳴を上げている……」

すつ、とマント姿の人物が立ち上がる。

左手に下げた大鎌を、くる、スチャツ、と両手で握り直す。

マントの人物「今、楽にしてやる……下がっててくれ、ハイエロフアント」

法衣の人物「判ったよ。お願いするね、デス」

ハイエロフアントと呼ばれた法衣の人物、立ち上がって、くる、と踵を返す。

デスと呼ばれたマントの人物、フードを頭に被り、懐から面を出して装着する。

面は髑髏を模った物。被った途端、彼女のローブの裾が、ふわ、と浮いて前面を覆う。

数歩の距離をとったハイエロフアント、改めて身体を返し、両手を胸の前で組む。祈るような仕草。

デス、大鎌を右側から後方に、水平に引く。

眼前の男性の全身に、ボコ、ボコボコ、と血管が一気に浮き出る。彼の目が反転し、白眼となり、口が大きく開き、鋭利な牙が剥き出しになる。

直後。

渾身の力で大鎌を振り抜く、デス。

刃の延長線上に、男性の首筋。

斬撃が、ザシユウツ！と躊躇なく薙ぐ。

男性の首が落下するのと、身体が側方に倒れていくのが、同時。

ドサ・・・と地面に伏す、遺骸。
間髪入れず。

キリエとラーラマリアの後方の二頭の馬、ブルブルツ！と全身を震わせる。

即座に、ヒヒン・・・と小さく嘶き。

思わず振り返って馬を凝視する、キリエとラーラマリア。

ラーラマリア「(大きめの声で、右手人差し指を唇に縦に当て)しっ！」

通りの角の向こうにいるデスとハイエロフロント、ラーラマリアの
声に気付く。

バツ、と振り返るハイエロフロント。

マントを翻して振り向き、髑髏の面を速攻で外してこちらを睨むデ
ス。

デス「(警戒を全面に表し)誰だっ!？」

慌てて身体を引っ込めるラーラマリア。

ラーラマリア「(口を右手で塞ぎ)やっべっ!」

キリエの瞳が、一瞬、爛と赫く煌く。

傘を両手でしっかり握り、ダツ！と地面を蹴って飛び出す。

体躯を低くして駆け始めるキリエの背に、思わず左腕を伸ばすラー
ラマリア。

ラーラマリア「(驚いて)待て！ キリエっ!」

キリエ、一気に間合いを詰めていく。

はっ、と彼女に気が付いたハイエロフロント、くる、と身体を返し
て右腕を伸ばし掌を翳す。

途端。

ふっ・・・とデスの姿が消える。

ハイエロフロントを追い越すように、一陣の風がキリエに向かい移
動する。

瞬間移動したように、キリエの真横に現れるデス。既に大鎌を後方
に振り翳している。

デス、間髪入れず、鎌の柄を振り抜く。

即座に、ジャキツ！と傘の先端をデスに向けるキリエ。左手で柄をしっかりと握り、尖った先をデスの眉間に、スチャツ、と合わせる。

キリエが右手の指を掛けている柄の部分、銃の引鉄のような形状。ピタ・・と、デスの大鎌の刃が、キリエの首筋の真横で停止する。1ヤードにも満たない距離で向かい合い、互いの武器を寸止めしているふたり。

キリエの赫い瞳からの目線と、デスの紅の瞳からの視線が、宙でぶつかる。

デス「(眼光鋭く) 何の真似だ？」

キリエ「(重い声で) これはただの傘じゃないの。動くとおあなたの頭に風穴が開くわ」

デス「武器か？ 見たこともない」

キリエ「傘にしか見えないでしょうけど、これは銃よ」

デス「(不思議そうに) 銃？ 何だそれは？」

キリエ「(短く息を飲み) ・・・銃を知らない？ ・・・」

僅かの戸惑いを表すキリエ。

キリエ「(張りのある声で) 答えて！ あなた、何者!? どこから来たの!？」

ハイエロフロント、翳そうとしていた右手を、すつ、と静かに下ろす。

キリエの動揺を感じ取っている様子で、穏やかな視線を向けている。

ラーラマリア、銃を構えながら慎重に歩み寄ってくる。

順に、奥のハイエロフロント、手前のデスに目線を繋げる。

デスの眼を見た途端、驚いたように息を飲むラーラマリア。

ラーラマリア「(絞るような声で) その眼つ・・・こいつも狂血病か?!？」

デス「(キリエを見たまま) きょうけつびょう、とは何だ？」

キリエ「病気よ。ここで流行している、病気・・・今さつき、あなたが首を刎ねた人が罹ってたのが、狂血病よ」

デス「あたしたちの知らない病、か。道理で、ハイエロファントの力でも回復しない訳だ」

ハイエロファント「デスは健康体だよ。病気には罹ってない」

ラーラマリア「しかしその眼……その赫い眼、狂血病以外の何だつて言うんだ？」

ハイエロファント「ラーラマリアに視線を？（げ）デスの瞳は、生まれつきだよ」

後ろ手に両手を組み、落ち着いた口調で言葉を発するハイエロファント。

武器を向け合ったまま対峙し続けるデスとキリエ。

鋭利な目線で、構えた銃口の照準をデスに合わせるラーラマリア。

暫く、そのまま。

尚も、そのまま。

乾いた風が、凧ぐ。

キリエ、デスへの視線を微かに緩める。

キリエ「ラーラマリア、こつちの人の言う通りよ。この人は、狂血病じゃない」

ラーラマリア「そっか……（ふう、と短く息を継ぎ）あんたがそう思うんなら間違いないだろうね」

ハイエロファント、デスに眼差しを結ぶ。

ハイエロファント「（大きく頷きながら）デス……」

キリエを見たまま、すつ、と大鎌を下ろすデス。

そのまま刃を下にして、右手に持つ。

デスを見たまま、チャツ、と仕込み傘を手元に戻すキリエ。

漸く銃を下げ、腰のホルスターに収めるラーラマリア。

肩から力を抜き、若干安堵した笑みを浮かべる。

ラーラマリア「どうやら、あんたら敵じゃあなさそうだね。防疫修道会の連中とも違う。すっかり見たことない服装とか……旅人にしてても妙な格好だしな」

キリエ「（ラーラマリアに視界を向け）銃を知らないみたい」

ラーラマリア「（驚いて）うえっ!? 銃を？ ウソだろ？」

ハイエロフアント、デスとキリエに歩み寄ってくる。

デス、キリエに半身を向け、ハイエロフアントが来る方に歩を進める。

ラーラマリア、キリエに歩き近付く。

キリエ、振り返ってラーラマリアを見詰め、彼女が隣に立つまで視線を繋げる。

そして。

デスとハイエロフアント、キリエとラーラマリアが並んで立ち、向かい合う。

少しの間、眼前のふたりを注視している4名。

ハイエロフアント「まず、名乗らせて。僕の名前は、ハイエロフアント」

デス「あたしの名は、デス。死神だ」

ラーラマリア「軽く笑って）死神？　こりやまた大層な　ふたつ名だね。確かにアタシの知ってる死神の姿によく似てる格好だけどさ」

デス「（意外そうに）いるのか？　この世界にも死神が」

ハイエロフアント「（デスを見詰め）君と同じ　〃仕事〃をしているのかな？」

ラーラマリア「いるっつーか何っつーか・・・」

会話の流れに、妙な違和感を覚えるラーラマリア。

ラーラマリア「（ジト目で）気のせいかな、なーんかズレた話になってる気がする」

キリエ「私の名は、キリエ」

ラーラマリア「アタシはラーラマリア。（キリエを右手親指で指し）キリエと旅してる」

ハイエロフアント「はじめまして、キリエ、ラーラマリア。早速だけど、いろいろ尋ねたいことがあるんだ」

ラーラマリア「その前に・・・（鋭い目付きで）あんたら、何処から来た？」

デス「マジカルランド・・・と言う場所を知っているか？」

ラーラマリア「(首を左右に振って) いや、知らないね。そこは、アメリカ合衆国からどんくらい離れてるんだ？　ここまでどうやって来た？　海を渡ってきたのか？　鉄道で行ける先にそんな国がないことは、判る。馬も連れてないあんたらが、このアリゾナまで歩いて来たのか？　旅支度もロクにしてないような、銃も知らないあんたらがどうやって？」

ラーラマリア、段々と尋問口調になっていく。

一度顔を見合わせ、何度か瞼を瞬かせるデスとハイエロフアント。それから再度、ラーラマリアに視線を戻す。

デス「(眉を顰めて)・・・お前は何を言っているんだ？　さっぱり解らない」

ハイエロフアント「(右手を顎に当て、考える仕草で) うーん・・・いろいろ聞かれたけど、何から答えた方がいいのかな？」

キリエ「質問し過ぎじゃないの？　ラーラマリア。せめて一問一答でないと」

ラーラマリア「(ハッ、と我に返ったように) そうだね、ちよつと勢い余った気がする。すまないね」

ハイエロフアント「いや、気にしないで。聞きたいことはこちらもいっぱいあるから」

ふと、空を見上げるラーラマリア。

曇り空の上空にある太陽が、更に西の地平に高度を下げている。茜に染まっつてはいないが、夕刻に近付いている気配。

ラーラマリア「あまりモタモタしていると、今日中に目的地に着かないかも知れない。アタシは初めて行く場所だから、あとどれくらいで着くのか判らないからな・・・(デスとハイエロフアントを見て) まず答えてくれ。あんたらの目的地は何処だ？」

デス「(頭を振って) いや、ない」
ハイエロフアント「突然この世界に来たんだよ。何処かに行こうとしていた訳じゃないだ」

デス「あたしたちは、この世界の住人じゃない。お前たちの魂の質が違うので、それはすぐに判断出来た」

一度顔を見合わせ、何度か瞼を瞬かせるキリエとラーラマリア。それから再度、デスとハイエロファントに視線を戻す。

キリエ「(眉を顰めて) ごめんなさい……ちよつと何を言ってるのか解らない」

ラーラマリア「いやあ……(頭を掻いて) いろいろ認識の擦り合わせが必要みたいだね。でもまあ、取り敢えず敵じゃないことが判ったから……(明るい口調で) どうだい？ アタシらの目的地まで一緒に行かないかい？ 今夜はそこで寝泊りするつもりだから、飯でも食いながらお互い聞きたいことを質問して答え合うってのは？」

ハイエロファント「願ってもない話だけど……(デスに視線を？げ) どうする？ デス」

デス「(ハイエロファントに視線を？げ) ハイエロファントがいいのなら、あたしは構わない」

ラーラマリア「大きく頷いて) じゃ、決まりだね」

ラーラマリア、隣のキリエに視線を投げる。

はつきりと表情には出していないが、何気に面白くなさそうな雰囲気。

ラーラマリア「何だいキリエ、不満そうな顔して」

キリエ「(目を伏せて) 不満、って訳じゃない……」

ラーラマリア「(にひっ、と明るく笑い) まあ、アタシとふたりつきりでなくなるのが嫌なのは判るけどさ！」

キリエ「(カアツ、と頬を染めて) なっ！……何言ってるの！ ウザいっ！」

プイ、と横を向いて、別方向に顔をそむけるキリエ。

頬の赤みが取れていない。

愉快そうにそれを見てから、視線を戻すラーラマリア。

デスとハイエロファントは、先刻斬首した男性の傍らに近付いていく。

ラーラマリア、それを視界に映して、怪訝そうに目を細める。

ラーラマリア「おーい、何してんだ？ 遺体を埋めてやりたいのかも知れないけど、モタモタしてると夜になっちまうぞ」

デス「(振り返って)首を持ち帰らなきゃならない」

ラーラマリア「(呆れたように)首い？ 何でだ？ アフリカの部族出身なのか？」

デス、遺体の傍らに屈み込む。
途端。

思い切り眉間に皺を寄せ、異様な物を見る目となる。

デス「(不可思議そうに)おかしい・・・魂が、もうない」

ハイエロフアント「(デスの横顔を見詰め)え？ 君が『送って』ないのに？」

立ち上がりながら、ハイエロフアントに眼差しを結び、一度頷くデス。

くる、と踵を返してキリエとラーラマリアに向き直る。

ハイエロフアントも同じ調子で、ふたりに身体を向ける。

デス「ひとつ、聞きたい。この世界の死神は、姿が見えないのか？」

キリエ「(訝し気に)見えないも何も・・・首を刎ねられたら死ぬものよ、普通」

デス「死神が『仕事』をしなくても、か？」

沈黙。

沈黙。

デスの言動が理解不能、という様子のキリエとラーラマリア。

さも当然、といった雰囲気、デスとハイエロフアント。

尚も、間。

4名の視線が、宙で組まれたまま動かず。

更に、間を置き。

ラーラマリア、ふうう、と長い溜め息を吐き、肩を窄める。

ラーラマリア「・・・こりやあ・・・認識の擦り合わせどころの騒ぎじゃなさそうだね」

ひゆう、と幾分冷えた風が、向かい合った全員の間を吹き抜ける。

その状態で、皆が暫く立ち竦む。

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【前編】—2

★ アリゾナ州サンベルナルディノ・孤児院（教会）・食堂
日没後。薄暮をとうに過ぎた時刻。

10人ほどが囲んで座れる長テーブルと椅子がある、食堂。
壁に掛かっているランプがふたつ、部屋を明るくしている。

長い卓の一角、向かい合わせに座って食事を摂っている、キリエと
ラーラマリア、デスとハイエロフアント。

ベーコンと豆類が褐色のソースで炒められた、ポークビーンズが大
皿に盛ってある。

隣に並んでいる鉄鍋には、焼き上げて間もないコーンブレッド。
それらをナイフとフォークで小皿に取り分け、食している。

キリエは、ベーコンを数切れだけ自分の皿に乗せ、フォークで口に
運んでよく噛んでいる。

夕餉を進めながら、交わし続けられている4名の会話。

キリエから一丁の、弾丸を抜いた回転式拳銃を見せてもらっている
デス。

何度かフォークを置き、実際に手にして感触を確かめている模様。
カチ、と撃鉄を起こしたり、弾倉を回してみたりと、興味深そう。

ラーラマリアとハイエロフアントが、互いの世界の様子を語り合っ
ている。

その間にも食事は進み、やがて全部の食器が空になる。

キリエが、食べ終わった皿を傍らに寄せ、ふう、と息をつく。
食卓には、残りなく綺麗に食べ尽されている食器や皿が並ぶ。

一通りそれを見回して、満足気に頷くラーラマリア。

ラーラマリア「どうだった？ この世界の飯は？ まあ、ご馳走と
まではいかなかったけどさ、缶詰の料理でも悪くないと思うがね」

ハイエロフアント（笑顔で）「とっても美味しかったよ。ごちそうさ
までした」

ラーラマリア、椅子から立ち上がり、流れるような手早い動作で食
器を重ねる。

そのままそれらを持ち、台所の隅に移動する。火が入ったままのグリルの上、パーコレーターが乗っている。シユウウ・・・と口から湯気が噴出しており、勢いがいい。

下げた食器類を近くの台に置き、パーコレーターを上から覗き込むラーラマリア。

蒸気と共に溢れ出している、深く豊かな香り。

それは既に、食卓に座ってこちらを見ているデスとハイエロフアントにも届いている。

そのふたりを、じつ、と卓向かいで見詰めているキリエ。

ラーラマリア、コク、と一度頷いて、パーコレーターをグリルから下ろす。

そして、傍のテーブルに用意してある4つの金属製のカップを確認。

その内3つのカップに、パーコレーターを傾ける。

トクトクトク・・・と注がれる、黒褐色の液体。

3つのカップに均等に注いだ後、もうひとつのカップには別の容器から牛乳を入れるラーラマリア。

純白のそれは、なみなみと器を満たす。

その後、彼女は黒褐色の飲料のカップふたつを持つ。

ラーラマリア、デスとハイエロフアントの眼前の卓に、湯気の立つカップを置く。

先程漂ってきた芳醇な香りが、飲み物の液面から強く感じられる。

デス「(カップを覗き込み) 黒い、茶か？」

ラーラマリア「コーヒーは初めてかい？　じゃあ飲んでみな。何事も経験だ」

身体を返し、残るカップふたつを手にしてから、食卓に戻るラーラマリア。

一呼吸の後、カップを手にするデスとハイエロフアント。

ふたりとも、一度、くん、と鼻を鳴らし、続いて一口啜る。

一瞬驚いたような表情となるが、すぐに和らぎ、ごく、と喉を鳴らす。

キリエとラーラマリア、そんなふたりを興味深そうに眺めている。ハイエロフアント「思ったより苦いね。でも……(すう、と嗅ぎ)とてもいい香りだ」

デス「いつもの茶が薄く思える。だが……(ごく、と更に一口飲み込み)悪くない」

ハイエロフアント「(キリエを見て)君は、飲まないの?」

キリエ「私は、ミルクがいい。ミルクが一番好き」

微かに微笑み、コクン、とカップから牛乳を飲むキリエ。

につ、と笑みを浮かべてから、自分の席に座り、前のカップを持ち上げるラーラマリア。

ゴク、とコーヒーを流し込み、それから落ち着いた視線を全員に放る。

ラーラマリア「さてと……じゃあ、話を纏めようか」

デスは再度コーヒーを口にし、もう一度拳銃を手にはしている。

ジャガツ、カチン、と中折れ式の銃を開け閉めしたり、グリップを叩いたり、様々な角度から覗いたり。

キリエが、そんなデスの仕草から目を離していない。

ラーラマリア、やれやれ、といった表情で、ふう、と息をつく。

そしてハイエロフアントに視線を向けてから、左肘を卓上に乗せる。

ラーラマリア「あんたらふたりは夫婦で、『マジカルランド』の住人。アメリカどころか、この世界の人間じゃない。突然飛ばされて、異世界であるここに来ちまって数時間経ってる。元の世界に帰る当てを探してたら、あの廃墟の街で狂血病の男に出逢って、それから後は……今に至る、って訳だ」

ハイエロフアント「(大きく頷いて)そうだよ」

ちら、と隣のデスに眼差しを流すハイエロフアント。

デスは相変わらず、銃の観察に余念がない。

ハイエロフアント、にこ、と微笑んでから、ラーラマリアとキリエに視線を繋げる。

ハイエロフアント「じゃあ、こちらを確認するけど……ここはア

メリカ合衆国という場所で、君たちふたりは旅をしている。キリエは血を主として摂取する『吸血鬼』で、ラーラマリアはこの国の軍隊に在籍する軍人。目的は、吸血鬼の王『黒衣の者』を斃して血清を得ること。それが、狂血病を治療出来る唯一の手段、つてことではないのかな？」

ラーラマリア「大きく頷いて）オツケーだ。理解が早くて助かるね」

こと、と拳銃をテーブルに置き、そのまま、スツ、とキリエの眼前に差し戻すデス。

デス「納得した口調で）なるほど、何となく理解出来た。あたしたちの世界では大砲と砲弾が存在する。これほど小さくて携帯可能な飛び道具は初めて見た。使い勝手は良さそうだ」

キリエ「銃を懐に仕舞って）これがないと、この世界では生きていけないわ」

ラーラマリア「（ハイエロフアントを見て）あんたは……（暫く思いついて）えと、ハイエロ、何だっけ？」

ハイエロフアント「ハイエロフアント。呼びづらいと思うから、エロフアント、でいいよ」

ラーラマリア「判った。じゃ、改めて……エロフアント、あんたは武器を持っていないようだが？」

デス「ハイエロフアントに武器は必要ない。武器を振るうのは、あたしの役目だ」

ラーラマリア「いや、それでも……奥さんにばかり闘わせるのは、如何かと思うが？」

デス「ハイエロフアントは争いや諍いを嫌っている。無理をさせるつもりは毛頭ない」

キリエ「（ハイエロフアントを見て）よくそれで今まで生き残れたわね」

デス、きつ、と射すような眼光を飛ばす。

やや苛ついたような雰囲気。

デス「ひとつ、言っておく。ハイエロフアントは……（キリエとラー

ラマリアを睨み)あたしなんぞ足元にも及ばないくらい、強いぞ。仮に、だ。もしこの道中で何事か起これば、それがはつきりする。言葉で語るより、実際に見てみれば理解出来る筈だ」

ハイエロフアント「(デスに視線をうけ) もういいよ、デス」
右掌をデスに翳し、穏やかに微笑むハイエロフアント。

ハイエロフアントと眼差しを絡め、ぐっ、と言葉を飲み込むデス。
僅かの、後。

デス、ふう、と小さく息を吐く。

デス「解った。ハイエロフアントが言うのなら、これ以上は説明し
まい」

ラーラマリア「争いや諍いが嫌い、ねえ・・・」

やや呆れたような様子で、デスとハイエロフアントに目線を投げる
ラーラマリア。

それからカップを口元に寄せ、ゴク、とコーヒーを一口飲み込む。

ラーラマリア「アタシはアメリカ合衆国陸軍第一葬兵連隊、ラーラ
マリアⅡクリストフォロス葬兵少佐・・・(ハイエロフアントに顔を向
け) あんたの嫌ってる『争い』で飯食ってる」

ハイエロフアント「(ラーラマリアと視線を合わせ) 僕が嫌っている
のは『争う』という事実で、当事者に悪感情は抱かないよ」

一瞬、ラーラマリアの瞳が開かれ、また元に戻る。

そして再度コーヒーを飲み、今度は柔らかな笑みを湛える。

ラーラマリア「ふ・・・と息を吐き)それを聞いて安心したよ。じゃ、
こつから先、取り敢えずの道行きを一緒に行くので、いいんだね？」
ハイエロフアント「(頷き)もちろん。むしろこの世界じゃ右も左も
判らないから、助かるよ」

ハイエロフアント、自分のカップからコーヒーを口にする。

デス、安堵したような微笑みで、コーヒーを多めに喉に流し込む。
そして卓上に、タン、とカップを戻して、目の前のふたりに目線を
放る。

デス「ところで・・・(キリエとラーラマリアを交互に見て) お前た
ちはどういう関係なんだ？」

キリエ「関係？ さつき説明した通りよ。『黒衣の者』を斃す為の、協力関係」

ラーラマリア「(少し残念そうに)つれないねえ。今じゃ友達以上の関係だつてーのにさ」

キリエ「薄く頬を染め、ラーラマリアを睨んで)ウザいこと言わないで。それに・・・(目を伏せ)私を殺そうとしていたくせに・・・」
ラーラマリア「ああ、任務だからね。軍人だから仕方ないだろう？」
デス「解った。これ以上立ち入ったことは聞かない」

右手の掌を軽く翳し、話を打ち切るデス。

少し意外そうに、且つほつとした雰囲気で、デスを見ているキリエとラーラマリア。

やや間を空けた、後。

ラーラマリア、デスの近くの壁に立て掛けている大鎌に目をやる。

ラーラマリア「それにしてもでっかい鎌だね。アタシも似たような武器使ってるけどさ」

デス「(関心したように)持つてるのか？」

ラーラマリア「(薄く笑い)見るかい？ ちよつとビックリさせるかも知れないから、心構えしといてくれ」

右腕をテーブルの上に乗せるラーラマリア。

全員が注視する中で、左手で右手首を持つ。

カチ、と音がしてから、そのまま右手甲に左掌を掛け、内側に力を加える。

ラーラマリアの右手と右腕、留め金の部分だけが？がった状態で、分離する。

デスとハイエロファント、短く息を止める。

彼女の右手首から内側は筒のような空洞になっており、内部に束ねられた金属が見える。

自然な調子で、腕の中の銀色の光沢の塊を引っ張り出すラーラマリア。

卓上に出されたそれは、折り畳み式の小型の鎌状の刃物。

尖った先端から両側に刃が成されており、アタツチメントで角度が

自在に変えられる。

更に、鉄網が織り込まれた太いワイヤーで、腕の奥、内部へと接続されている。

ラーラマリア、ずいつ、と引き出してから、刃の部分を展開して卓の中央に置く。

ハイエロフアント「(目を見開いて)これは・・・驚いたな」

ラーラマリア「アタシは南北戦争で右手を失ってる。義手を着けるのと同時に、武器も仕込むことにした。整備もマメにしないとすぐガタが来ちまうから、まあ大変だけどさ」

デス「(興味深げに見詰め) 飛び道具としての、鎌か・・・駆動部も随分精巧に出来ているな」

ラーラマリア「(にひつ、と口角を上げ)褒めてくれるのは嬉しいねえ。義手にしろとは言わないけど、アンタの大鎌も携帯しやすいように作り変えてやってもいいよ? このラーラマリアさんに掛かれば・・・」

デス「いや、大鎌はあたしの『仕事』に欠かせない『相棒』だからな」

キリエとラーラマリア、一度目を合わせる。

大きな疑念が浮かんだような表情を、交わす。

そして再度デスに視界を戻す。

ラーラマリアは、訝し気な顔のまま、晒した小型鎌を格納し始める。

キリエ「さつきも言ってたけれど、あなたの『仕事』って何なの?」

ハイエロフアント「(キリエに視線を結んで)デスの『仕事』は、命を終わらせ、魂を送り、転生の橋渡しをすること。具体的に説明すると、首を刈り、魂を身体から離し、天空へと還す。その後、刎ねた首を持ち帰り、保管する。遺体を埋葬する時もあるよ」

キリエ「(思い切り眉間に皺を寄せて)それ・・・首刈りと埋葬はともかく、物語の死神じゃないの」

デス「だから言っている。あたしは死神だ、と」

ハイエロフアント「デスの『仕事』がないと、僕たちマジカルランドの住人は、死ぬことが出来ないんだ」

思わず目を見開いて、デスを見詰めるキリエとラーラマリア。
暫くそのまま、停止。

それからハイエロファントに視線を向け、再度デスに視線を結ぶ。
キリエとラーラマリアは、何回かその動作を繰り返す。

視界は対面のふたりに向けたまま、武器の収納を再開するラーラマリア。

やがて、カチン、と右手と手首を元にはめ込む音。

ラーラマリア「ちよつと待て・・・じゃあ・・・(ゴクリ、と唾を飲み)アンタは本物の死神、なのか？　「ふたつ名」じゃなくて、正真

正銘、本物の？」

デス「マジカルランドでは、な。こっちの世界の死神とは違うのだからが」

当たり前、という表情のデスとハイエロファント。

信じ難い、という表情のキリエとラーラマリア。

落ち着いたふたりと、茫然としたふたりの眼差し同志が、宙で固定されている。

既に、カップのコーヒーは湯気を立てていない。

芳醇な香りだけが、空間に漂う。

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【前編】— 3

★ 孤児院（教会）・隣接した場所にある墓地

漆黒の闇の中。教会の灯りが微かに届くところ。

平たい小振りな岩板で、申し訳程度に囲まれた、簡素な墓所。

十数本の、杭で十字架の形に組まれた墓標が立ち並ぶ。

その一基の前で地面に膝を着き、項垂れて前屈みに座っているキリエ。

両の瞼は固く閉じられ、肩が震えている。

そこに。

ザツ・・・ザツ・・・と、ブーツの踵が地を蹴る音が接近。

教会の方向から、ランタンを右手に掲げ、左腕に大鎌を下げて持ったデスの姿。

灯が、墓所全体を明るく浮かび上がらせる。

キリエ、薄く目を開ける。

後方からの灯りは、自分の影を墓標に投影させている。

ザツ・・・と、デスがキリエの真後ろで足を停める。

デス「誰の墓だ？」

キリエ「(俯いたまま) セシリア母さんと、ロイト、ジョンと、トムと・・・みんなの・・・」

顔も上げず、キリエが振り絞るように呟く。

キリエ「私がここに来た所為で・・・殺された・・・『黒衣の者』の血を引く私が関わった所為で・・・(ぎり、と歯噛みをして) 私が早く立ち去っていれば、みんな死なずに済んだ。私のことを友達だって言ってくれた人は、みんな死んでいくの・・・」

デス「そうか」

すつ、と振り向くキリエ。

これ以上ないほど眉間に皺を寄せ、眦を細める。

少しの、間。

キリエの表情は、今ひとつ不服そうな、また意外さを覚えたような、複雑なもの。

キリエ「あつさり返事するのね」

デス「(キリエに視線を?げ)あたしは病も何も関係なく、否応なしに死をもたらすからな。存在自体が死に直結している。だから、あたしに関わる者は全員必ず死ぬ。あたしの手によってな」

キリエ「ちよつと信じられないけど、あなたは本当の『死神』なの?」

デス「そう言ってるだろ? あたしの存在が、マジカルランドに生きる全員ひとりひとりの命に関わっている」

キリエ「あなたの旦那さん・・・エロフアント、つて名前だったかしら。(籠った口調で)彼の魂も、いずれ?」

デス「(頷いて)ああ、いずれ、送る」

キリエ、微かに、同情のような顔を浮かべる。

デス、それまで持っていたランタンを地面に置き、再度キリエに向き直る。

キリエ「つらいわね・・・」

デス「その瞬間を思うと、な。しかし・・・(ふっ、と微笑んで)そこから先は、そうでもなくなつた」

キリエ「(眉を顰め)どういう意味?」

デス「あたしは元々、不死身だったんだ。何をやっても死ぬことが出来ない身体だった。だから、ハイエロフアントがいない世界を生きることが望まないことにした。細かく説明すると長くなるから割愛するが・・・(穏やかな表情で)ハイエロフアントを送った瞬間、あたしも死ぬことになっている」

途端。

思い切り両目を見開いて、デスに視線を固定するキリエ。

唇が僅かに開き、驚きを隠そうとしない。

キリエ「(茫然として)嘘・・・」

キリエ、くる、と身体を返しながら立ち上がり、デスに正面を向ける。

静かな微笑みを湛えているデス。

ランタンの橙色が、ふたりを闇夜の浮かび上がらせている。

尚も、啞然とした顔のキリエ。

キリエ「・・・いいの？ それで」

デス「当たり前だ。ハイエロフアントのいない世界を一分一秒と過ごすことなく、共に逝けるんだ。こんな多幸は、他にない」

キリエの両眼が、再び見開かれる。

まるで何かの真理を目の当たりにしたかの如く、煌く。

正対したまま、眼差しを交わし合う、ふたり。

そのまま、暫く。

暫く。

幾許かの間を、置き。

キリエ「(目を細め)そこまで思えるなんて、羨ましい・・・」

極めて透明な、声色。

一度俯き、しっかりと瞼を閉じ、それから顔を上げてデスを見詰め返すキリエ。

キリエ「私は、不死身じゃないけれど・・・簡単には死なない身体。銀とか、十字架とか、太陽の光とか、苦手な物はいつぱいあるけど、銃で身体を撃たれても生きている。でも痛みはあるから、質が悪い。私を殺す手段は、銀で作られた『浄銀弾』という銃弾で撃つこと・・・脳や心臓を確実に破壊されても、恐らく死ぬ」

デス「なるほどな・・・ほぼ不死身、という訳だ」

余り驚いた様子のないデス。

少し小首を傾げ、キリエに視線を固定している。

デス『浄銀弾』とやらがあれば、お前は死ぬことが出来る。つまり、終わりがある、ということだな？」

キリエ「(怪訝そうに)・・・そうだけど？」

デス「なら良いだろ？ 何をやっても死なないより、ずっと気が楽だ」

キリエ「(驚いた表情の後、少し微笑んで)・・・そういう考え方・・・面白いわね」

デス「(ふっ、と笑みを浮かべ)ああ、悪くない思考だと思っている」
落ち着いた色合いを醸し出している、キリエの瞳。

短く息を継ぎ、デスの紅い両眼に視線を注ぐ。

キリエ「話は変わるけど・・・あなたの旦那さん、私が知ってる人に、ちよつと似ている」

デス「誰だ？」

キリエ「エミリオ、つていうの。狂血病の療養所にいた、男の子」

デス「(少し考えて) 今はどうしてる？」

キリエ「今はいない・・・(目を伏せ) 私が殺したの」

ぐつ、と奥歯を噛み締め、両手を強く握り締めるキリエ。

そんな彼女から目を反らさず、普段と変わらぬ表情のデス。

デス「他に方法がなかったのだから？」

あくまで自然な口調。

揺れた感じすらしらない、デスの言葉。

キリエ、思わず、バツ、と顔を上げる。

キリエ「(疑念を含んだ声質)・・・何でそう言えるの？ 細かいこ

と話してないのに」

デス「お前が好んで命を奪うようには思えない。それが理由だ」

直後。

正円に丸く見開かれる、キリエの両目。

彼女は息を止め、次の呼吸すら忘れたかのように、立ち竦んでいる。

そのまま、停止。

一度小さく息をつき、デスから目を離せずにいるキリエ。

暫くの、間。

キリエ、まるで泣きそうな顔になった後、自分の足元に視線を落とす。

キリエ「(唇を一度噛んで) 何それ・・・(肩を震わせ) ウザい・・・」

デス、慈愛すら感じさせる眼差しを向けている。

デス「気を悪くしたか？」

キリエ「(首を左右に振って) ううん、違う。違うけど・・・何て言ったらいいか・・・」

次の言葉をすぐに？げず、黙るキリエ。

表に出してはいないが、動揺を明確に覚えている様子。

デスは、そのまま待つ。

キリエ「(静かな口調で) そう言われたこと、なかったから……」
そう言った後、顔を緩やかな動作で上げるキリエ。

瞳に、清廉さが宿っている。

デス、穏やかに微笑みを返す。

ふたりの視線が宙で絡み、しっかりと結合している。

暫しの、後。

キリエ「ねえ、デス。こんなこと言うと怒るかも知れないけど……
(少し目を細め) あなたと私って、似ていると思うの」

デス「(意外そうに) あたしと？ 死神のあたしと、か？」

キリエ「(頷いて) そう」

デス「……あまりそういう感覚は褒められたものではないが」
キリエ「どうして？」

デス「(はあ、と溜め息をつき) 死神は忌み嫌われる者だ。怖れられ、疎ましく思われ、拒絶の対象でしかない。何もそこまで自分を貶めることはないだろ？」

キリエ「(緩やかに口角を上げ) だったら尚更似てる。私もそうだもの。吸血鬼だって知られた時に向けられる怯えた目、赫い眼を見られた時の敵意の目……(自嘲気味に) 慣れてるつもりだけど、ね」

懐いたような表情と、共鳴したような口調で話すキリエ。

今度は、デスが戸惑ったような顔を向けている。

デス「死神と似ている、というのには賛同出来ない。出来ないが……
(納得したような口調で) お前も、あたしとは別の『血塗られた運命』
を背負っていることは、理解出来る」

キリエ「(柔らかい声質で) そう言ってくれるだけで、充分」
ふう、と息を吐き、地面に置いたランタンに手を伸ばすデス。

キリエ「あと、もうひとつ言わせて」

デス「(手を停め) 何だ？」

キリエ「エロファントって……優しそうね。爽やかで素敵な人みたい」

ぴく、とデスのこめかみが跳ねる。

ランタンを右手に持って身体を起こし、キリエに目を向ける。先程とは打って変わった、鋭利な視線のデス。

敵視するような眼だが、どう反応していいか困惑している雰囲気。余りにも鮮やかな表情の変化に、可笑しさが込み上げてくるキリエ。

キリエ「くすつ、と笑い）そんなに睨まないでよ。誰も取ろうなんて思わないわ」

デス、自分の心理を見透かされた様子で、両眼を丸く見開く。

見る見る彼女の頬が赤く染まっていくのが、ランタンの灯りに照らされている。

デス「頬を染めた状態で、目線を外して）なら、いい……」

キリエ「少し楽し気に）デスも、そんな顔するのね」

デス「赤みが取れない顔で）……あまりからかうな……」

はああ、と肩を上下させて大きく溜め息を漏らすデス。

緩やかに頬の紅は取れ、幾分落ち着いた様子。

それからランタンを胸元に掲げて、くる、と踵を返す。

キリエ、流れるような足取りで、デスの隣に並ぶ。

デス、ふと、思い出したようにキリエに顔を向ける。

デス「キリエ、お前、血を飲むのだったな？」

キリエ「頷いて）そうよ」

デス「（優しい気な瞳で）あたしも飲むぞ」

キリエ「（驚いたように）ホント!? 吸血鬼じゃないのに?」

デス「ただ、あたしの場合、茶と同じ『嗜好品』だ。飲むのは好みだが、飲まずともいられる。お前のように『生きる糧』ではない」

明瞭な口調で話すデスに、和やかそうな目線を返すキリエ。

はつきりと顔に表していないが、何気に嬉しそう。

キリエ「（デスに視線を?）げたまま）やっぱりデスと私、似てる」

デス「（キリエに視線を?）げたまま）違いを言ったつもりだったが、藪蛇だったやも知れない……まあ、いい」

ザツ……と足を踏み出して、教会へと歩みを進め始めるデス。

キリエも、彼女と肩を並べて、墓所を後にする。

く。
ランタンの灯が遠ざかるのと入れ替わりに、漆黒が帳を下ろしてい

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【前編】— 4

★ 孤児院（教会）・寝室

教会の食堂と同じ棟にある、寝室。

二段ベッドがふたつ、さほど広くない部屋にきつちりと置かれている。

その片方の下段ベッド、窓寄りに腰を掛けているハイエロフアント。

枕側の傍らには低いチェストがあり、その上にランプが乗っている。

ハイエロフアント、煌々とした灯りの元、一冊の本を膝に載せている。

革表紙の本は大きく、相当分厚い。ぎつしりと文字が書き込まれている。

かなり早く動かしている目線。速読している模様。

次のページを捲った時、ラーラマリアが入室してくる。

一瞬驚いた表情を見せる彼女。そのままハイエロフアントに歩み寄る。

ラーラマリア「この世界の本は読めるのかい？」

ハイエロフアント「顔を上げながら」文字や単語が、僕たちの使っている言葉に近いから、何となく……（ページの一節を示して）ここは『見許しあらずば、滅ぶべしこの身』でいいのかな？」

ラーラマリア「（覗き込んで）……凄いな、ちゃんと読めてる。あんた、大したモンだね」

ハイエロフアント「本は、結構読んでるからね」

にこ、と微笑むハイエロフアント。

それから、ぱた……と読んでいた本を閉じ、ベッド脇のチェストに乗せる。

腕組みをして、その仕草を視界に映しているラーラマリア。

ハイエロフアント、彼女を見上げ、身体を向けて座り直す。

ハイエロフアント「ひとつ、聞いていいかな？」

ラーラマリア「何だい？」

ハイエロフアント「(声質を落として)君はここに来るのは、初めてじゃないね？」

ピクツ、とラーラマリアの目尻が反応する。

瞬間的に、訝し気な空気を発散させ始める。

ラーラマリア「(じろ、と睨んで)・・・何故そう思う？」

ハイエロフアント「この教会の内部に詳し過ぎる。この建物も、何が何処にあるのか、大体判ってるみたいだ。夕食の準備の手際の良さも、初めて来た、と言った割には・・・動線に従ってるみたいに、身体が動いていた気がする」

眼光鋭く凝視しているラーラマリア。

そのまま、長い間。

尚も、間。

ラーラマリア、フツ、と目の力を抜く。

諦念に溢れたような表情と、降参したような色彩の目。

そして腕を解き、肩を思い切り落とし、はああ、と溜め息をついてハイエロフアントを見る。

ラーラマリア「こつから先の話は、キリエには黙っていてほしいんだけどさ・・・」

ハイエロフアント、一度だけ、こく、と首を上下させる。

それを確認するラーラマリア。

途端、遙か遠くを眺めるような視線へと転化させ、目を細める。

ラーラマリア「アタシは・・・この孤児院に世話になってた時期があるんだ」

郷愁と憂いを感じさせる、声色。

ラーラマリア「10数年くらい前になるか・・・ガキン時、この神父様に住まわしてもらってたんだよ。独り立ち出来てからアメリカ各地を方々旅しててね、いつの間にやら陸軍に入ってて戦争してた。右腕失くしちゃったが南北戦争生き残って、それからまだ戦いに明け暮れてて、銃や兵器が好きだったからその腕も買われて・・・(自嘲気味に)気が付くと、第一葬兵連隊の少佐にまでなっちゃまっ

た・・・」

柔らかな視線で彼女を見ているハイエロフアント。

ラーラマリア「キリエがこの孤児院に寄ったことがある、って話は、メシん時に言っただろ？」

ハイエロフアント「(頷き)うん。キリエがお世話になったことがあるんだよね」

ラーラマリア「旅の途中でアイツから、この孤児院の話聞いた時は、驚いたなんてもんじゃなかったさ。神父様は、鉄道屋が雇った連中に殺され、拳銃に住んでいたシスターも、子供たちも殺されてたなんて・・・(ギツ、と奥歯を噛んで)アタシは結局・・・何の恩返しも出来なかった・・・」

肩を震わせ、暫く立ち竦むラーラマリア。

彼女の裡で、自分の恩情と後悔が、痛いほどせめぎ合っている模様。ラーラマリア「でも・・・(ふっ、と表情を和らげながら)キリエが仇を討ってくれた。アタシが何も出来なかった時に、あいつは代わりに血を流してくれた・・・(ハイエロフアントに視線を投げ)アンタはこういった『仇』とか『憎しみ』とかの感情を否定するかも知れないが・・・」

ハイエロフアント「否定はしないよ。出来るだけ覚えないうちに越したことはないけど、生まれる感情は仕方のないことだからね」

ラーラマリア「(意外そうに)・・・そっかい。てつきり説教されるかと思ったよ」

ハイエロフアント「制御出来ない時もあるのが、気持ち、だと思っ
ている」

何気に安堵したような顔色となるラーラマリア。

ラーラマリア「・・・ともかく、キリエはこの孤児院に降り掛かった『火の粉』を消してくれた。正直、言葉じゃ表し切れないのさ。感謝、なんて一言じゃ足りないんだよ」

ハイエロフアント「そうだったんだ。でも・・・だったら尚更、キリエに知ってもらった方がいいんじゃないのかな？」

ラーラマリア「(首を左右に振り)・・・いや、絶対に知らない方が

いい」

ラーラマリア、両の瞼を閉じて俯く。

少しの、間を空け。

ラーラマリア「キリエは、孤児院のみんなが死んだのは自分の所為だと思ってる。自分が立ち寄らなかつたら、自分が世話にならなかつたら死なずに済んだって、何度も言ってた。その上、アタシが元世話になったとこだって知ってみろ……(目を開け、ハイエロフアントを見て)あいつは、アタシに対しても贖罪を感じる。アタシにも申し訳ないと思う。そして、自分を責める……キリエは、そういう奴だ……再度ハイエロフアントから視線を外し、部屋の窓から外を眺めるラーラマリア。

同じ方向に目を向けるハイエロフアント。

ガラス越しの夜の闇が、双方の瞳に映っている。

ラーラマリア「ただでさえ煉獄のような運命なんだ……(憂いの眼で)キリエには、これ以上苦しんでほしくない……」

深い憐憫さを湛えた、ラーラマリアの眼差しと表情。

暫し、そのまま。

沈黙が、少しの時間漂う。

ハイエロフアント、漆黒の庭の方向から視線を戻し、ラーラマリアを見る。

ハイエロフアント「(深く頷き)判ったよ。キリエには、何も言わないでおくね」

ラーラマリア「(切な気に微笑み)すまないね、氣い遣わしちゃって」ふと、先程読んでいた本の表紙に目を遣るハイエロフアント。

短い間、何事かを考えてから、再びラーラマリアに視界を移す。

ハイエロフアント「キリエは、デスとよく似てるね」

ラーラマリア「(拍子抜けしたように)……霧囲気が、かい？」

ハイエロフアント「霧囲気もそうだけど……デスも、過酷な運命を背負っているから」

ハイエロフアント、もう一度置いてある本に視線を戻す。

そして、すつ、と右掌を表紙の上に乗せ、両瞼を閉じる。

ハイエロフアント「デスは自分の運命を『血塗れ』って表現している。マジカルランドに生きとし生ける者は、何人足りとも例外なく、彼女の大鎌で首を斬られなければ命を終わりにすることが出来ない。誰も代わりのいない、誰よりも重い、絶対必要な役目を、デスは一身に負っている……」

ラーラマリア「アタシらの世界じゃ、生きる者の命はちよつとしたことで消えちまうけど……あんたらの世界じゃ、彼女がたったひとりですれをやらなきゃならない……ってことなんだね？（理解したような様子で）俄かには信じられなかったけどさ……あんたら見ると、真実だつて思えるよ」

ハイエロフアント「目を開け、ラーラマリアを見て）信じてくれて助かるよ。ありがとう」

ラーラマリア「んで、エロフアントはデスの運命を知つてて尚、奥さんにした訳だ」

ハイエロフアント「と言うより、デスが死神だったから一緒にいたいと思つた」

ラーラマリア「（軽く驚いて）へえ……それはまたどうして？」

ハイエロフアント「だつて彼女の重い使命を、僕も背負えるんだよ。こんなに幸せなことはないよ」

「こ、と清廉で爽やかに微笑むハイエロフアント。

一瞬だけ、きよとん、としたような顔になるラーラマリア。

すぐに、愉快そうな笑顔を浮べる。

ラーラマリア「（明るい調子で）ははっ、言うねえ。ただの聖職者とは違うね……（ふう、と息をつき）防疫修道会のアタマがあんたみたいな『法王』だったら、ちったあマシな世になってたかも知れない」
ハイエロフアント「僕は大した存在じゃない。ただの、神事を司る役目を与えられた聖職者だよ」

ラーラマリア、左手の甲を腰に当て、緩やかに口角を上げる。

ハイエロフアント、本の表紙に置いていた右掌を戻し、膝の上に乗せる。

ハイエロフアント「それにしても、やつぱり君とキリエは縁がある

んだね。ずっと以前から結び付いているような・・・偶然、と言うには説明のつかない？がりが、ね」

ラーラマリア「(にひっ、と笑顔で) だろ?」

ハイエロフアント「それに・・・夕食の時の話で、君はキリエを任務で殺そうとしたことがあった、って聞いたけど・・・(真剣な声で) 今の君にそのつもりはないね?」

直後。

瞬時に、据わったような目線へと転化するラーラマリア。

笑みを貼り付けたままだが、やや尖ったような雰囲気。

ラーラマリア「(ふう、と息を吐いて) やれやれ・・・洞察は大したもの、と褒めておくが・・・」

彼女が、フツ、と意味あり気な微笑み。

ラーラマリア「(低めの、清んだ声で) それは想像に任せるよ。言わないでおく」

その返事を耳にして、静かな、真摯な表情を湛えるハイエロフアント。

ラーラマリアの心理を見抜いているかのような、奥深さ。

暫しの、後。

ラーラマリア「(思い出したように) おおっと、そうだ、面白いモノを見付けたんだった」

ハイエロフアント「(小首を傾げ) 面白い物?」

ラーラマリア「エロフアント、悪いけど、外にいるふた리를呼んできてくれないか? アタシは食堂にいるから、みんなが集まってほしいんだ」

ハイエロフアント「判ったよ。確か、裏手のお墓に行っているんだったよね?」

ラーラマリア「ああ、頼むよ」

ベッドから立ち上がり、そのまま部屋を出ていくハイエロフアント。

その後ろ姿に目線を?げているラーラマリア。

それから、遠ざかる足音を聞きながら、チェスト上の本に視線を投

げ、固定する。

焦げ茶色の革表紙の本。

掠れた文字のタイトルは『B I B L I A S A C R A V U L G A
T A』と読める。

ラーラマリア、懐かし気な、少し潤んだ眼でそれを見詰めている。

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【前編】—5

★（数分後） 孤児院（教会）・食堂

廊下から食堂に入ってくるハイエロフアント。
続いて、デスとキリエが入室してくる。

既に、夕餉を取っていた食堂の卓に向かい、ラーラマリアが椅子に腰掛けている。

3名に気付いて、顔を向けて左手を軽く上げる。

キリエ「何かあったの？」

ラーラマリア「ああ。納戸物色してたら、見付けたのさ。キリエは見たことあるかも知れないけど、エロフアントとデスは初めて見るんじゃないか？」

彼女に近寄っていく、3人。

そして、囲むような位置にそれぞれが立つ。

ラーラマリアは足を組んで座っていて、膝の上にある物を載せて抱えている。

瓢箪を縦に割ったような形状の木製の型から、幅2〜3インチの細長く厚い板が延びる。

全長は1ヤードほど、先端から瓢箪型の下方の端まで、4本の弦が張られている。

弦はそれぞれ径が違う。太い物から細い物まで、4種。

興味津々とした様子でそれを凝視している、デスとハイエロフアント。

キリエは、ラーラマリアとその瓢箪型を交互に見詰め、意外そうな顔付き。

デス「（少し考えて）・・・楽器のようだが？」

ラーラマリア「（ヒュウツ、と口笛を吹き）ご名答。よく判ったね？」

ゴードバンジョーっていう楽器だ」

ハイエロフアント「マジカルランドにも弦楽器があるけど、この形ではないし・・・初めて見るよ」

キリエ「私も、初めて見る」

ラーラマリア「(笑顔で)そっか、みんな初見か。アタシはコイツがギン時から知ってる。よく弾いてもらって、みんなで唄ってたっけなあ・・・」

デス「どうやって演奏するんだ？」

ラーラマリア「(待ってたように、にひつ、と笑い)弾いてやろうか？」

キリエ「(小首を傾げ)弾けるの？ ラーラマリアが？」

ラーラマリア「弾けなきゃ持ってこないさ。ま、いいから座ってなつて」

左掌を上にして、右側から左方向に回し、椅子を勧めるラーラマリア。
ア。

銘々が、夕餉を摂っていた時と同じ椅子に座る。

ラーラマリア、全員が着席するのを待ってから、脚を小さく組み直し、居住まいを正す。

そして、左手をゴードバンジョーのネックの部分に当て、指を這わせる。

弦の感触を確かめるように動かし、右手は、だらん、としたように軽く広げる。

その右の五指を、瓢箪型の上下の間、窪んだ凹み辺りの弦に当て、掻き鳴らす。

ポロオオン・・・と、何とも心地よい響きを奏でる、4種の弦。

キリエの眼の色が、綺麗な赫い煌きを発する。

デスとハイエロフロント、瞼を瞬かせ、驚いた表情。

ラーラマリア、コホン、と一度咳払いをして、自分の左手に目を遣る。

それから、すう、と息を吸い込む。

「以下、ラーラマリアの演奏と唄」

(バンジョー奏法は、イントロと間奏はクロウハンマー、歌の部分はストラム)

De time is nebberr dreary, If de
darky nebberr groans;

I could not go no farther, I t
 what I could see:
 I went to old Kentucky To see
 et me free,
 Once I was so lucky, My mas
 you been so long.
 Come again my true-lub, Oh! wha
 t good old song,
 Ring, ring de Banjo! I like da
 n Wid my true lub on my arm.
 While I roam de old plantatio
 neber loses der charm
 De beauties ob creation Will
 le he got dis song to sing.
 De darky hab no troubles Whi
 hile dere, s watter in de spring,
 Oh! neber count de bubbles W
 you been so long.
 Come again my true-lub, Oh! wha
 t good old song,
 Ring, ring de Banjo! I like da
 you been so long.
 Come again my true-lub, Oh! wha
 t good old song,
 Ring, ring de Banjo! I like da
 e banjo, s out ob tune.
 We, lltum de old Piano When d
 gaslight ob de moon;
 Den come again Susanna By de
 rattle ob de bones;
 De ladies neber weary Widd

you been so long.
 Come again my true—lub, Oh! wha
 t good old song,
 Ring, ring de Banjo! I like da
 hab to work my way.
 I, ll come again my honey, If I
 ut, ll come anoder day
 I, s guine to make some money; B
 So don, t you wipe your eye.
 But I ne bber can deceibe you
 While de ribber, s runnin, high;
 My lub, I, ll hab to leabe you
 you been so long.
 Come again my true—lub, Oh! wha
 t good old song,
 Ring, ring de Banjo! I like da
 bber wake again.
 Massa fall a napping He, ll ne
 dulcem strain;
 On de banjo tappin, I come wid
 like to hear me play.
 My massa send me warning He, d
 y summer day,
 Early in de morning Ob a lub l
 you been so long.
 Come again my true—lub, Oh! wha
 t good old song,
 Ring, ring de Banjo! I like da
 go away no more.
 I lub him all the harder, I, ll
 n to massa, s door,

Ring, ring de Banjo! I like da
t good old song,
Come again my true—lub, Oh! wha
you been so long.

「ラーラマリアの演奏と唄 終了」

(演奏中のシーン)

両肘を卓上に乗せ、両掌を頬に当てて頬杖をつき、目を閉じている
キリエ。

静かで、穏やかで、心地よさそう。

僅かながら、唇の端が上がっている模様。

デス、ラーラマリアの演奏の手付きなどに目線を固定し、腕組みを
して耳を傾けている。

ハイエロフアント、掻き鳴らされるバンジョーの弦に視線を結び、
両手をテーブルの上で組んで、聴く。

(演奏終了後)

キリエ、ゆっくりと瞼を開ける。

明確ではないが、感動を秘めた眼差し。

彼女に一度目をやり、ふっ、と微笑むデス。

にこ、と柔らかい笑みをラーラマリアに向けるハイエロフアント。

ハイエロフアント「(感心して)・・・いい曲だね。明るい調子だけ
ど、郷愁に溢れている。君の演奏も、歌声も素晴しかったよ」

ラーラマリア「(照れて左頬を掻きながら)いやあ、世話になった人
が教えてくれた曲でね、アタシが気に入って何度も弾いてもらった曲
なんだよ。ステイブン||フォスターって人が作った『バンジョーを
かき鳴らせ』って歌でさ、フルコーラス覚えたのは、この歌が初めて
かね」

デス「あたしの知ってる弦楽器は、弦の一本一本を別々に弾いて演
奏する。一度に4本の弦を掻き鳴らす楽器とは、面白いな。(ハイエ
ロフアントと視線を合わせ)鍵盤を同時に弾く『和音』のような感じ
か?」

ハイエロフアント「(デスと視線を合わせ、頷いて) そうだね。4種類
の弦をいっぺんに鳴らすから、そんな風だよ」

ふと、デスとハイエロフアントがキリエを見る。

何となく、夢見心地の雰囲気の彼女。

ラーラマリアもそれに気付き、キリエに目線を繋げる。

ハイエロフアント「どうしたの？ キリエ」

キリエ「(深い声質で)・・・驚いた・・・ラーラマリアにこんな特
技があつたなんて・・・凄いじゃない」

ラーラマリア「(物凄く嬉しそうな顔で) おおつ、キリエに褒められ
るとはね！ どーだ？ 惚れ直したか？」

キリエ「(カアツ、と真つ赤になつて) だつ！ 誰が惚れ直したの
よつ！ ウザいっ！」

デス「惚れ直したかどうかはともかく、気持ち良さげに聴いていた
のは間違いなさそうだな」

ビクツ、と肩が跳ねるキリエ。

それから、他の3名に次々に視線を放つては戻し、キヨロ、キヨロ、
と慌ただしく顔を動かす。

キリエ、カアアアツ・・・と、沸騰したように朱に染まる。

この上なく恥ずかしそうな表情となり、俯く。

直後。

ガタン！と椅子を思い切り跳ね退け、席を立つキリエ。

キリエ「(赤くなつたまま) もう寝るっ！」

キリエ、3人に目もくれず、両肩をいからせて、ダン！ ダン！と
靴の踵を鳴らし、部屋を出て行く。

離れていく足音を聞き、視線を重ね合うラーラマリア、デスとハイ
エロフアント。

ラーラマリアは、少し苦笑いを浮かべる。

デスとハイエロフアントは、静かに笑みを湛えている。

ラーラマリア「んじゃ、アタシらも寝とくとするか。明日はまず、駅
舎に寄つてみる」

デス「話に出ていた『鉄道』と『汽車』があるところか？」

ラーラマリア「(頷き) そうさ。きつと驚くと思うぞ」
ハイエロファント「判ったよ、ラーラマリア。寝る前に素敵な演奏と唄を、ありがとう」

ガタ、と同時に椅子から立ち上がるデスとハイエロファント。

そして、ハイエロファントの先導で廊下へと歩を進めていくふたり。

寝室の方向へと移動していく靴の音。

ラーラマリア、ふう、と息を継いで、ゴードバンジョーのネックを左手で握ってから起立しようとする。

途端。

何かの気配。

食堂の窓の外、ずっと向こうから、得体の知れない感覚。

ぞわ・・・と背筋に戦慄が、一瞬だけ走る。

バツ!と、素早く窓に走り寄るラーラマリア。

流れるような動作で、窓枠の横、身体を隠すような場所に立つ。

ゴードバンジョーのネックを右手に持ち替え、左手でホルスターの拳銃を素早く抜く。

眼前に構える流れで、既に撃鉄も起こしている。

そ・・・と窓から外の庭に、鋭利な視線を投げるラーラマリア。

ガラス越しの闇には、ただ沈黙がある。

先程感じた寒気のような感じは、既がない。

ラーラマリア、そのまま待機する。

暫くの、間。

暫くの、間。

やがて。

ふうふう、と長い溜め息を吐き、緊張を解く彼女。

それでも尚、慎重な足取りで窓から離れ、食堂のランプの灯を、フツ、と吹き消す。

注意深さを保った様子で、部屋から出るラーラマリア。

室内に、静寂が戻る。

夜の沈黙が、訪れる。

【 T o b e c o n t i n u e d . . . 『鳴り交わす絃の、相和せる
競いよ（後編）』】

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【後編】——1

キリエく吸血聖女くメデスとハイエロファントの物語：REBOO

T

クロスオーバー番外編「鳴り交わす絃の、相和せる競いよ（後編）

」

BWV207 Vereiningte Zwietracht

der wechsellenden Saiten

★（翌朝）サン＝ベルナルディノ・孤児院（教会）・庭先

早朝の陽射しが降り注いでいる、教会の庭。

冷えた空気が残っており、風がそよぐと幾分寒いほど。

庭中の樹に、手綱で繋がれている3頭の馬。

その近くに、出発の支度を終えて立っているキリエとラーラマリア、デスとハイエロファント。

ヒヒン！ ブルルルル・・・と大きく嘶き、寄り添うようにしている馬たち。

全頭、落ち着きがない。息も荒い。

何気に、デスから顔を背けている様子。

一頭の馬のたてがみを撫で、訝し気にその横顔を見ているラーラマリア。

ラーラマリア「怯えているな・・・昨日もそうだった」

デス「ふう、と息を継ぎ」判るんだ、こいつらは。あたしが死神だつてことが。説明などしなくとも、本能が感じ取ってるんだ。死を避けるのは生物として当然の反応だからな」

キリエ、デスの顔を見詰め、微かに憂いを浮かべる。

すつ、とハイエロファントが前に出る。

ラーラマリアの横に並び、馬の太い首に右掌を当てる。

ハイエロファント「馬の首筋をゆっくりと撫で」大丈夫。怖がらなくても、いいんだよ」

ハイエロファントの手が動くのに従って、その馬は穏やかな目線と

なっていく。

呼吸も落ち着いてきて、静かなものへと戻る。
やがて。

まるで伝染したかのように、他の2頭も平常時の状態へと回帰していく。

間近で雰囲気を変化していくのを見ながら、感心したような顔で腕組みをするラーラマリア。

デス、ありがたそうな、また申し訳なきような眼差しをハイエロフアントに結ぶ。

キリエ「大人しくなった・・・」

ラーラマリア「エロフアントは逆に宥められる、と・・・」

デス「(キリエとラーラマリアを見て)馬の1頭は荷運びで空けられないだろう。あたしは徒歩でも充分追いていける。お前たちふたりが一頭に乗って、ハイエロフアントに一頭預けてくれないか?」

ハイエロフアント「(デスを見詰めて)僕も歩くよ。馬には、キリエとラーラマリアで乗ってつてもらって」

ラーラマリア「(唸るように)んー・・・アタシらだけってのもなあ・・・」

ラーラマリア、困ったように眉間に皺を寄せ、唇を固く結わえる。

キリエ、一旦3頭の馬に目を投げ、全員を見回す。

キリエ「提案が、あるの」

他の3名が、一斉にキリエに視線を繋ぐ。

★(半時後) サン＝ベルナルディノ駅への線路沿いの街道

太陽が、上昇軌道に乗っている。

雲ひとつない、晴天。

赤茶けた土が晒された地面の、街道。

道の横に、錆びたレールが真っ直ぐに、遠くに霞む街の建屋まで延びている。

カッポ、カッポ・・・と、一定の調子で並んで進んでいる、3頭の馬。

一頭の馬にはキリエとラーラマリアが跨り、手綱はラーラマリア、彼女の前にキリエが乗る。

一頭の馬にはデスとハイエロフアントが跨り、手綱はハイエロフアント、彼の前にデスが乗る。

もう一頭は荷を積載し、その手綱はキリエが握っている。

ラーラマリア、左手に手綱、右手にはキリエの傘を差し、傘の陰にキリエが入るようにしている。

体勢としては、ラーラマリアがキリエを、ハイエロフアントがデスを後ろから抱くような形。

デス、頬を真っ赤にしたまま、ただ真正面に視線を向けている。極度に緊張したような顔。凍て付いたような表情。

隣から、満面の笑みでふたりに視界を向けるラーラマリア。

ラーラマリア「(デスとハイエロフアントをしげしげと見て)いやーいいねえ、見てるコツチまで照れちまうね」

キリエ「(デスとハイエロフアントに視線を向け)思った通り。ふたりに乗れば、馬も落ち着くんじやないかと」

ハイエロフアント、穏やかな微笑みを返す。

一方、デスは口元を、きゆううう……と結んだ状態で身動きすらない。

ハイエロフアント「(デスの耳元で)大丈夫?」

デス「(頬を染め上げたまま)だ、大丈夫だ……だが……」

ハイエロフアント「(小首を傾げ)だけど?」

デス「(消え入りそうな声で)……人前で身を寄せ合うことが、あまりなかったから……」

一度瞼を瞬かせ、それから、にこ、とデスの項を見詰めるハイエロフアント。

ラーラマリア「(にひっ、と笑って)いい表情だな、デス。でも、そこまで照れなくてもいいんだぞー」

デス「(ぐうっ、と息を詰まらせるように)照れたくて照れてる訳じゃない……」

ふと、隣を並行しているキリエに視線を向けるデス。

彼女と目が合った瞬間、和やかな目線を送ってくるキリエ。微かに口角を上げ、何気に喜ばしいという様子。

デス、それでも縮こまらせた身を解くことなく、恥ずかし気に視線を逸らす。

ラーラマリア「それにしても……(キリエの後頭部に目をやり)なんでキリエは照れないんだよ?」

キリエ「(前方に目を向け、無愛想な顔で)照れる要素がある?」

ラーラマリア「(はあ、と溜め息を吐き)へいへい……期待したアタシが馬鹿だったよ」

キリエ「解ってるじゃない」

並足の3頭の馬は、そのまま道を行く。

段々と先の風景が近付いてきて、土埃で霞んでいた街並みが明瞭に確認出来る。

乾いた風が、砂を舞い上げて馬の足元を流れていく。

★ (更に十数分後) サン＝ベルナルディノ駅・駅舎構内線路
駅構内の敷地。

二階建ての駅舎が、二本の線路と平行に建っている。

いくつかの建屋が線路の左右に並び、大きなタンクも確認出来る。

その敷地内を通過し、駅舎の端に辿り着くキリエたち4名。

馬から降り、3頭を建物の角、突き出した庇を支える柱に繋ぐラーラマリア。

デスとハイエロフロント、周囲を見回し、観察している模様。

更に、50ヤードほど先の線路上の一本には、3両立ての蒸気機関車が鎮座している。

乾いた風が、そよぐ。

沈黙が、ある。

周囲の建物、近くの駅舎、察知出来る範囲のすべてに、動く気配がない。

ラーラマリア「(眉を顰めて)妙だな……静か過ぎる……」

キリエ、駅舎の二階部分に傘の端越しに目をやり、じつ、と暫く凝

視する。

ハイエロフアントは、周りを見回した後、離れた位置の汽車に目線を固定する。

デス、進んできた敷地上を一度見て、それから忙しく周囲に視線を投げる。

デス「ここは廃墟なのか？」

ラーラマリア「(首を左右に振りながら) いや、そんなことはない。鉄道の駅……(左人差し指で示し) これがそうなんだけど、ここを中心に結構住人もいて、こんな田舎でも結構な賑わいがあった……筈なんだが……」

いずれの建物にも、朽ちた様子はない。

駅舎の出入り口付近も綺麗に清掃しており、並べてある樽も新しいめな物。

水が張ってある桶も見受けられる。

ただ、何処にも生物が存在している様子が確認出来ず。

機関車からも、蒸気音が聞こえない。

キリエ「(くん、と鼻を鳴らし) 死臭がする……」

デス「(頷いて) ああ。それに……この周囲の建屋からは、生命力も、魂の気配も感じ取れない」

ラーラマリア「まさか……誰かに襲撃されたのか？ それにしては……(周囲を、ぐる、と見回し) 破壊された様子も、弾痕も見当たらない……」

ハイエロフアント、じーつ、と珍し気な目線を機関車に？げている。

ハイエロフアント「(汽車を指差し) あれが『汽車』っていう乗り物なの？」

ラーラマリア、ハイエロフアントの示す方向に視界を向ける。

ラーラマリア「そうだよ。蒸気機関で走ることが出来るヤツでさ、たくさん的人数を長距離移動出来る……」

デス「(ぼっ、と振り返って) 誰か来る！」

デスの声に、一斉に身体を返す全員。

既に、デスは身構え、大鎌を正面に両手で握って持つ。

4人の視線が集まる、駅舎の陰から。
ズウツ・・・ズウツ・・・と、極めて重たい調子で登場する人物。
くすんだ白い背広の上下、オールバックの髪型、丸く跳ねた揉み上げ。

細長い三角型の眼鏡に、厭らしく歪み、濁った両眼がある。

両手に拳銃を下げ、ズウツ、ベタ・・・ズウツ、ベタ・・・と引き摺るような足取り。

その人物、線路近くの位置に立ち止まり、ゆつくりと身体を向けてくる。

足を肩幅に広げ、緩慢な動作で顔を上げ、頭を右に30度ほど傾ける。

薄気味悪い嗤いが、へばり付いている。

途端。

キリエ、目を見開いて息を飲む。

キリエ「(驚愕して)アプローズ!!!」

ハイエロフアント「(キリエの横顔に視線を?げ)知ってる人?」

コク、と一度頷き、差していた傘を一度畳み、チャキツ、と前方に構えるキリエ。

直射日光が彼女に直接降り注ぎ、当たる。

キリエ、一瞬だけ顔を顰める。

キリエ「(深く重い声で) 鉄道屋・・・セシリア母さんたちを殺すよ
う仕向けた奴・・・」

途端。

ラーラマリア、これ以上ないほど両眼を丸くして、アプローズを見る。

呼吸を忘れたかの如く、息を止める。

そして、見る見る鋭利な状態へと変化する、ラーラマリアの目。

尖り切って、触れれば斬れそうなほどの視線で、睨む。

アプローズ、ニヤアツ・・・と盛大に歯を剥き出し、歪に嗤う。

アプローズ「(愉快そうに) 久し振りですうねえ、キリエ・・・

私イはア・・・本社から戻って来ましたよオ?」

キリエ「(腹の底からの大声) お前っ! 生きていたのかっ!」
アプローズ「(歪んだ爆笑) ヒヤアツハハハ!!! 私をオ見逃したの
はア大失態でしたねエ! カネで雇った連中をオ貴様にぶつけてお
いてエ大正解でしたア! 弾除けがいっぱいでしたからア、上手いト
コ逃げきれたんですケドねエツ!」

言葉の狭間と狭間に、歪んだ音質が混ざる、アプローズの声。
ガシヤツ、ジャゴツ、と銃弾を装填し、傘の先端をアプローズに狙っ
て据えるキリエ。

傍らのデス、ちら、とキリエを見て、すぐに正面に視線を戻す。

デス「(低音の声で) 奴は敵か?」

キリエ「敵・・・孤児院のみんなの、仇・・・」

デス「銃を両手に持つているようだが、両方使うつもりか?」

キリエ「(アプローズを睨んで) アプローズが銃を持つてるの、見た
ことない」

アプローズ、唇をUの字に、ニンマアア・・・と引き上げる。

そして胸を張り、銃を持った両手を翼のように広げる。

アプローズ「さあア! 工事の再開です! 孤児院をブツ壊してエ
線路を引きますよオ! その為に邪魔な神父と尼僧とガキどもを皆
殺しにしたので・・・」

直後。

ヴオズオオ——ンツ!と、けたたましい銃声。

同時に、アプローズの額の中心が、ボンツ!と窪む。

彼の頭部が、後方に傾いていく。

のチカラア・・・」

キリエ／ラーラマリア「(驚愕)『黒衣の者』っ!?!」

アプローズ「言い忘れてましたアがア・・・私は『黒衣の者』の身体の一部を取り込ませてもらったんですよオオオ・・・(ニイイイ、と口角を目一杯上げ)素晴らしい吸血鬼の身体となったんですヨオ!!!」

アプローズ、愉悦の極みといった表情。

開いた口の中には、ズラリと尖った牙が並んで揃う。

牙と牙の間を、ダラアア・・・と涎が繋いでいる。

チツ、と舌打ちをして、左腕を下ろすラーラマリア。

キリエ「(デスを、ちら、と見て)デス、下がってて。吸血鬼相手は

初めてよね。まずは・・・私が行く」

デス「(頷き)判った」

くる、と身を反転させるデス。

すかさず、入れ替わりにラーラマリアが、タツ、とキリエの横に寄る。

ラーラマリアの立ち位置と、デスの立ち位置が入れ替わった状態。

デスはハイエロファントの傍らに立ち、視線を結びながら再度アプローズに向き直る。

ハイエロファントはデスに視線を結わえ、それからアプローズに目を遣る。

ハイエロファント「(静かに息を継ぎ)・・・闘いは避けたかったけど・・・」

デス「(ハイエロファントの横顔を見て)止むを得まい。それにしても・・・(近くの駅舎を見て)やはり周りには、生命力も魂も感じられないが、今までにない違和感を感じる。嫌な予感も、だ。こういう時の感覚は、よく当たる」

ハイエロファント「(デスと眼差しを繋ぎ)うん。警戒は、しておこう」

ラーラマリア、キリエの側方から、彼女の耳元に顔を近付ける。

キリエ、正面のアプローズに鋭い視線を固定し、仕込み傘の銃口を向けたまま。

ラーラマリア「『黒衣の者』関係となると、浄銀弾も通用しないか」
キリエ「でも通常弾よりマシ。(ラーラマリアを見て)どれくらい残ってるの?」

ラーラマリア「アタシの手持ちで、1丁6発、残りは積み荷に50くらいあってとこ。そろそろどつかで補填しなきゃと思つてたから、間が悪いコトに今は少なめだ。煉滅弾が2発。だがこれは『黒衣の者』用の虎の子だ。使いたかないねえ」

キリエ「(少し考えて)判つたわ。何とかやってみる」

ラーラマリア、先程撃つた銃をホルスターに仕舞い、別に差してあるもう一丁の銃を引き出す。

カチャ、と撃鉄を起こし、銃身の延長線上にアプローズの顔面を捉える。

アプローズ「顎を、クイ、と上げ)おおっとオ! 貴様たちの相手はまず、こいつらからですよオ!

スイツ、と右腕を真つ直ぐ天に向け、拳銃を垂直に掲げるアプローズ。

アプローズ「(大声で)出てきなさいアアアアア! 街の住人どもオツ!!!」

アプローズ、引鉄を引く。

ヴオズオオオ——ンツ!・・・と、宙に発射される銃弾。

残響が、街全体に広がっていく。

一時、キリエたち4人が固唾を飲む。

アプローズの銃からの硝煙が、風に消された、頃合い。

ガタツ! ガタガタガタツ!と、一斉に建屋の内部からけたたましい物音。

駅舎内から、線路を挟んだ建屋から、大きなタンクの物陰から、何かが動き始める音。

直後。

近くの駅舎の扉を、ギイイイ・・・と押し開いて、誰かが出てくる。のそつ、のそつ、と緩慢な動作。

ズルツ、ズルツ、と引き摺るような足取り。

全員が目視出来る位置に、複数の影が現れる。
人間。

目は反転してほぼ白目、だらしなく開いた口元から牙が見え隠れしている。

全身の肌が蒼白く、僅かな血色すら感じない。

腐臭を纏い、身体のあちこちには、嘔き出した血の塊がこびり付く。それが次から次へと、建物から歩み出してきて、線路に向けて歩き始めている。

4名が見渡せる範囲に、20数体の姿。

更に数を増す。

男性、女性、老若と様々な様相。子供のような風体もある。

陽の当たる場所を物ともせず、キリエとラーラマリアに近付き始める。

ラーラマリア「ぐる、と見回し」何だこいつらっ！

アプローズ「(下衆な嗤いで) ツヒヤツハハハッ！ 私イがア！

血イ吸って殺してエあげたんですよオ！ 何人かブツ殺してやったアラ、後は勝手にイ増えて！ 住人みーんな下僕ってワケでエす！

ギリ・・・と、奥歯を噛み締め、射るような眼光を飛ばすキリエ。

そんな彼女の肌に、強い陽光が、ジリッ、と降り注ぐ。

キリエ、はあ・・・と、やや重い溜め息を吐く。

片や、デスとハイエロファントの後方にも、目視出来る範囲に現れる数体。

それらの人型は、ふたりの姿に顔を向けると、ビク、と反応して立ち止まる。

じっ、と異様な人々を凝視しているデス。

デス「(冷静に眺め) 皆、魂が存在しない。既に屍だ」

ハイエロファント「(注意深く周囲を見回し) 遺体が動くってこと、あるのかな？」

デス「マジカルランドではあり得ないが・・・ここでは動くこともある、ってことなのか」

一方、キリエとラーラマリアの前方。

様々な場所から登場し、緩慢ながらも確実に接近してくる人体の群れ。

アプローズとこちらの間に、まるで盾になるように集まってくる。キリエ「(前方を睨んだまま)デス、エロフアント、この人たち『死兵』よ」

デス「しへい？」

ラーラマリア「一度死んでるんだ。死んでいる兵隊、つまり『死兵』ってこと。しかも全員吸血鬼だ」

ハイエロフアント「何故動いてるの？」

ラーラマリア「以前アタシらは闘ってるが、そんな時は『黒衣の者』が近くに居て、狂血病になって死んだ連中が吸血鬼になり、そいつらが街の連中を襲い、吸血鬼を増やして、倍倍であつちゅー間にソリアの9割が死人の軍隊になったコトがあつた。だがあん時、吸血鬼たちは『黒衣の者』の支配下にあつた。そして『黒衣の者』が去った後、朽ちて斃れていったんだ」

デス「つまり……(視線だけを左右に飛ばし)こいつらは、あのアプローズという奴が使役している、ということか」

ハイエロフアント「きつき『黒衣の者』の身体の一部を取り込んだ、つて言つてたから、影響があるんだろうね」

ラーラマリア「(後方のハイエロフアントを見て)冷静な観察はいいが、緊張感に欠けるな……」

ラーラマリア、10ヤードほど後ろの駅舎角、3頭の馬が繋がれている場所を確認。

馬たちは、死人の群れを目の当たりにして、竦み上がっている様子。ヒヒイン！ブルルツ！と怯えた嘶き。

ラーラマリア「(張りのある声で)エロフアント！デス！悪いが馬たちのトコに行ってくれ！あいつら襲われたらこの先の道中が厳しくなる！何とか死兵を寄せ付けなくてほしい！行けるか!」

デス「(素早く頷き)判った」

ハイエロフアント「(続けて頷き)何とかやってみるよ」

くる、と踵を返して、たつ、と地面を蹴るデスとハイエロフアント。瞬く間に3頭の間近まで寄り、ハイエロフアントは馬のすぐ側に立つ。

デスは馬たちに背を向け、大鎌を構えて周囲を窺う。

安堵したように短く息を継ぎ、キリエと並んで前方を見るラーラマリア。

ラーラマリア「(改めて周囲を見回し)そう簡単には終わりそうもないね」

キリエ「だとしても、答えは出ている。アプローズを斃せばいい。(ラーラマリアを、ちら、と見て) 援護して」

ラーラマリア「(キリエと目線を合わせ)任せな、相棒」

にひつ、と不敵に笑うラーラマリア。

こくん、と頷きで返すキリエ。

それからジャゴツ、ガシヤツ、と、一度傘のカートリッジを抜き、取り出す。

キリエ、入れ替わりに銀色の銃弾の詰まった弾倉を、ガシヤコ、と装填する。

確認したラーラマリア、左手の銃を構え直す。

死兵が大きな壁となったように集い、その向こうにアプローズが立っている。

既に勝ちを確信したような、歪んだ嗤い。

アプローズ「(大音声で)さあアツ！ ブツ殺してしまいなさい下僕どもオツ!!!」

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【後編】—3

刹那の、後。

オオオオオオオオオオ!!!と、不気味でおぞましい発声。目に見える範囲の死人たちが、一斉に咆える。

そして、身体を屈ませ、地を蹴り、一気にキリエとラーラマリアに襲い掛かってくる。

遺骸とは思えないほど、俊敏な速さ。

両腕を開き、キリエに跳び掛かる一体。

次の、瞬間。

ドゴオツ!と、雷のような発射音。

同時に、死兵の額が割れ、頭蓋が砕け、身体が吹っ飛んでいく。キリエの仕込み傘の先端から、硝煙。

間を置くことなく銃口が翻り、隣の吸血鬼に向けられ、火を噴く。ドゴツ! ヴオゴーン!と、連続して発射される弾丸と、延長線上

で貫かれる屍の身体。

ラーラマリア、別方向からキリエに急接近してくる一体に、銃身を向ける。

間髪入れず、ゴヴオン!と爆音を発する拳銃。

額の中心を確実に射抜かれ、死人の頭が炸裂する。

それが地に伏せるのを見届けることなく、別の躯体に照準を向けるラーラマリア。

血飛沫が宙に拡散され、雨のように地面に降り注ぐ。

その中を、まるで踊るように身体を舞わせる、キリエ。

ただその両の瞳は、鮮血よりも赫く輝き、透過の光を残像として空に残している。

キリエ、止めることなく、襲撃してくる死兵に銃弾を叩き込んでいく。

キリエ「(怒声で)ウザい! ウザい! ウザい! ウザあいつ!」

確実に築かれていく、遺骸の山。

太陽の光は、情け容赦なく天空からキリエの上に射している。

はあ・・・はあ・・・と、肩で息をし始めるキリエ。
凄まじい疲労感を覚えている雰囲気。

それでも、一步、また一步と、襲い来る吸血鬼の群れを斃しながら前進を続ける。

ラーラマリア、手持ちの残弾を確認し、キリエを見る。

ラーラマリア「張りのある声で」一旦馬の荷まで下がる！ すぐに戻る！」

キリエ「やや苦しそうに」・・・判ったわ！」

クルツ、と身体を反転させ、後方に駆け出すラーラマリア。

デスは、ハイエロファントと3頭の馬を背に、大鎌を正面に構えて少し腰を落としている。

前方の鬨いと、周囲を交互に見回しているハイエロファント。

近くの建屋の物陰や、駅舎の角の方から、こちらを窺っている十数体の死兵。

ただし、5〜6ヤードほど距離を置いたまま、それ以上接近して来ない。

ハイエロファント「デス、ここは大丈夫。キリエの元に行つてあげて」

デス「(こくん、と頷き)判った」

即座に、たん！と地面を蹴るデス。

フシュツ、と姿が消える。

駆け寄つて来るラーラマリアのすぐ横を、疾風が駆ける。

彼女の髪が、ぶわっ、と風圧で上がる。

ハッ！と驚いて振り向くラーラマリア。

擦れ違いでキリエに急接近していく、デスの後ろ姿が目映る。

ラーラマリア、思わず立ち止まって、右手をデスの背後に伸ばす。

ラーラマリア「おいおいっ！ そつちはアタシらに任せてくれ！」

一方、吸血鬼の軍を相手にしているキリエ。

ドゴドゴドゴツ！と、仕込み傘の銃口から連続で発砲され、その度に崩れ落ちる吸血鬼たち。

それでも怯むことのない死人の兵士は、続々とキリエに向かってく

る。

陽を避ける暇すらない、波状攻撃。

キリエの顔は段々と蒼褪めていつており、はーっ……はーっ……と息苦しそう。

傘の弾が尽き、ジャゴツ、ガシヤコツ、と素早く別のカートリッジと交換するキリエ。

ヴオズツ！と近くの吸血鬼の頭部を吹き飛ばす。

その倒れる陰から、現れる影。

小柄な姿をした、死人。

キリエ、銃を向けた瞬間、はっ！として固まる。

年齢は幼そうな、男の子。だが、明らかな死兵の風体。

牙を剥き、ガバア、と大きな口を開けてキリエに襲い来る。

引鉄に当たった彼女の指が、躊躇する。

ダン！と地を蹴り、両腕を大きく広げて跳び上がる少年吸血鬼。

直後。

キラツ、と三日月型の刃が煌く。

ぞん！と凄まじい斬撃が、男児死兵の首を切断する。

キリエが目を見開く眼前、ズダバンツ！と全身を地面に叩き付けられる、骸。

その身体と頭部は、余りの衝撃で一度大きくバウンドし、数ヤードも転がっていく。

目で追った後、視線を戻すキリエ。

そこには、大鎌を改めて構え直しているデスの姿。

デス、キリエと視線を合わせ、こく、と小さく頷く。真剣な表情。

キリエ、デスと視線を合わせ、コク、と短く頷く。引き締まった表情。

今も群れを成す死兵の軍団の向こう、それを眺めて不快そうに顔を歪めるアプローズ。

オオオオオオオオ!!!と、吸血鬼の軍勢が、咆える。

再び、銃弾を浴びせ始めるキリエ。

一瞬、デスの姿が揺らぐ。

次の瞬間、ザシユウウツ!!と螺旋状の軌跡と共に、数体の死人の首が刎ねられる。

キリエとデスの攻撃は、更なる血の雨を大地に吸わせている。

それらの一部始終を見ていたラーラマリア、少し安心したような表情。

身体を戻して、繋がれている馬の方に走り寄る。

しかし、ハツ、として思わず立ち止まる。

一頭の馬のたてがみを、優しい仕草で撫でているハイエロフアント。

3頭の馬は身を寄せあうようにしている。怖がっている様子。

それらを取り囲むような位置、5〜6ヤード付近で、数体の吸血鬼がいる。

ハイエロフアントに目を向けているようだが、襲撃せず、それ以上接近する気配がない。

何となく、死人たちは怯えている模様。

ラーラマリアに気付いた一体が、身体を返して、ゴオオ!と奇声を上げて向かってこようとする。

素早く銃口を向け、引鉄を引くラーラマリア。

ボンツ!と頭蓋を割られ、崩れ落ちる吸血鬼。

ラーラマリア、その合間にハイエロフアントの近くまで駆け寄り、再度周囲を見回す。

残りの死兵は、やはり距離を取ったまま。

ラーラマリア「(不思議そうな目線で)な…何で死兵たちが近寄って来ないんだ?」

ハイエロフアント「多分、僕の方だと思うよ。こっちの世界でも通ずるとは思わなかったけど」

ラーラマリア「(拍子抜けしたように)チカラ? あんたが何か使っている様子はなさそうだが?」

ハイエロフアント「わざわざ使わなくても、解るんだよ。彼らにはきつと」

前方の奥、戦闘中のキリエとデス越しに、汽車に視界を向けてくる

アプローズ。

それから、拳銃を握った左腕を垂直に掲げ、上方に銃口を向ける。
ニタアツ、と厭らしい嗤い。

アプローズ、引鉄を引く。

ヴォズオオオ——ンツ！……と、宙に発射される銃弾。
残響が、街全体に広がっていく。

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【後編】—4

ハッ、と4名の視線が同時にアプローズに繋がれる。
途端。

後方、50ヤードほど先の線路上の一本に鎮座する、3両立ての蒸気機関車。

その列車内から、オオオオオオオオオオ!!と、空気を震わす咆哮。間髪を入れず、車両内部から、ガタガタガタツ!と何か動き出す音。

ガシャーン・・・と窓ガラスが割れ、ドゴツ!と扉が蹴破られる。客車の窓から、乗降口から、一斉に死兵たちが飛び出してくる。溢れ零れるように続々と地面に降り、その数、約30〜40。

それらが、ぐるうり、とラーラマリアに視線を放り投げてくる。ラーラマリア「サアツ、と血の気が引き」げっ! 汽車にもいっばいいやがったっ!」

後方のその展開に目を向け、ぎり、と奥歯を噛むキリエ。

デス、傍らで一体の吸血鬼を屠った後、キリエに目線を結わえる。

デス「落ち着いた声で」心配いらぬ。後方はハイエロフロントとラーラマリアに任せておけ」

キリエ「でも・・・エロフロントは武器を・・・」

デス「ふっ、と笑みを浮かべ」大丈夫だ。こちらはこちらの闘いに集中しろ」

一方の、3頭の馬の付近。

ラーラマリア、慌ただしく積み荷から浄銀弾を探り出し、手持ちの拳銃に片っ端から装填を始める。

列車から登場した死兵軍団を見ても、尚も冷静な状態のハイエロフロント。

馬たちは恐慌を覚え、ブルルルツ! ヒヒーン!と悲鳴に近い啼き。

ハイエロフロント「馬の首を軽く撫で」大丈夫、怖がらないで。僕は近くにいるからね」

3頭が、緩やかに落ち着きを取り戻す。

ハイエロフアント、馬から離れ、機関車から真っ直ぐこちらに延びる線路を跨いで立つ。

身体を汽車に向け、両足を肩幅に広げる。

ハイエロフアント「後衛は、任せてくれるかな?」

ラーラマリア「(驚いて)ちよつと待て! 銃も持っていないのに、どうやって!?!」

ハイエロフアント「(振り向きながら)銃も武器も持っていないけど、護る力は持つてるよ」

再び向き直り、きりつ、と眉を寄せるハイエロフアント。

両方の掌を、すつ、と正面に向けて、両腕を真っ直ぐ伸ばす。

掌を垂直に立て、親指同志を付ける。

ハイエロフアント「(凜とした大声で) 聖なる力!」

キュイイイイ:~と、鮮やかな白色の光を放ち出す、ハイエロフアントの両掌。

左右に手を広げる。すると、掌と掌の間に棒状の光が繋がる。

その中から、ハイエロフアントのバクルス(司教杖)が出現する。

杖の端部に備わっている青い石が、純白の光と蒼白い放電を帯びる。

完全に実体化したバクルスを、くるつ、ぱしつ、と鮮やかに回して持つハイエロフアント。

ラーラマリア、弾薬補充中の手を止め、目を丸くしてそれを見詰める。

ラーラマリア「なっ!~(驚愕して)どっから出したんだよっ! その杖!」

ハイエロフアント、ちら、とラーラマリアを見て、にこ、と微笑む。すぐさま、正面の機関車に視線を返す。

付近の吸血鬼の軍勢は、暫く停止していたが、一気に動き出す。

先に地面に出た数十体が、ヴォオオオオ!と雄叫びを発して駆け寄り始める。

次から次へと客車から外に降り、線路上に並んで一直線に向かって

くる。

バクルスを頭上に、両手で大上段に振り翳し、一際眉を寄せて表情を引き締めるハイエロフアント。

僅かの、間の後。

ハイエロフアント「(腹の底からの声) ミラクルビームっ!!!」

渾身の力で振り下ろされる、ハイエロフアントのバクルス。

直後。

クワアアアツツツ!!!と、直径1ヤードほどの光球が前方に湧き上がる。

即座に、ズツドオオオオムツツツ!!!と爆音を放ち、純白の光線が射出される。

一瞬で、向かってくる先頭の死兵に当たる。

全身を腹部から『くの字』に曲げ、ボンツ!と吹き飛ばされる身体。

後続の死人たちも、ボンツ! ボンツ!と次々に光に飲み込まれて、飛ぶ。

数体を巻き込んだまま、凄まじい勢いで蒸気機関車の先頭に衝突する、純白光。

途端。

ドガガガガツツツ!!!と、地震のような猛烈な震動で、上下する汽車。

光線が一気に、倍以上に膨らむ。

ハイエロフアントの放った光線は、白色光のドーム形状となり、更に先へと伸びる。

そして、獲物を頭から丸呑みする蛇の如く、一気に車両全体を包括していく。

バリン! バリン! ガシャーン!と、窓ガラスの弾け飛ぶ音。

客車内に残る死兵、弾かれ、ズドガン!と座席や床に叩き付けられる。

外部に出ようとした吸血鬼は、ボンツ!と無理矢理引き摺り出され、宙を舞う。

そしてそのまま、台風で吹き飛ばされる看板のように、後方に飛来

していく。

更に、バリバリバリツ！と、凄まじい電撃が死兵たちを襲う。同時に、ゴオオオツ！と、爆炎も容赦なく浴びせらせる。

猛烈な光線は、数十体を飲み込んだまま、吹っ飛んでいく。

まるで石で水切りをするように、ダンツ！　ダンツ！と、地面を弾け跳んでいく吸血鬼の躯体。

身体が錐揉みし、後転し、側転し、翻弄され続け、遥かの距離を開いていく。

そしてそれらは、ハイエロフロントから200ヤードほどの場所で、漸く止まる。

純白の光線は、静かにその径を縮めていき、遥か遠くの地平へと消える。

やがて。

しーん・・・とした沈黙が、訪れる。

機関車は線路から完全に脱線し、W型に置き換わっている。

客車内と汽車周辺、ずっと先の地面に大量に転がる、元吸血鬼の遺骸の数々。

ただ、それら一体一体の顔は、死兵のそれではない。

まるで眠っているかのような、安らかなもの。

憑き物が落ち、浄化された如く。

誰もが言葉を発しない。

キリエ、ラーラマリア、一部始終を見た後、茫然と立ち竦む。

周囲の死兵の軍勢も、ハイエロフロントを見て動きを停止させている。

キリエの隣に立つデスだけが、ハイエロフロントに背を向けて、アプローズを睨んでいる。

アプローズ、あんどり、と口をだらしなく開いたまま凍て付いている。

眼の端が、プルプル、と震え、怯えを隠そうともしない。

それを確認し、につ、と不敵な笑みを浮かべるデス。

そのまま、暫く。

長い、間。

更に、間。

汽車の窓ガラスの残骸が落下する、カシャーン……という音が、響く。

ラーラマリア「(啞然としながら、引き攣った笑み) ははっ……嘘、だろ……纏めて倒しやがった……」

ハイエロフアント「(振り返り、笑顔で) 後方とこの周辺は、僕が防ぐ。君はデスとキリエの援護をお願いするね、ラーラマリア」

その言葉に、ハツ、と我に返ってハイエロフアントを見るラーラマリア。

そして、にひっ、と愉快そうな笑みを浮かべ、弾薬の補充を再開する。

ラーラマリア「(意気揚々と) まかせなっ!」

ラーラマリア、素早くて的確に浄銀弾を弾倉に込め始める。

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【後編】—5

一方、キリエ、目を見開いたまま、ほおっ……と感心したような吐息を漏らす。

キリエ（感嘆に満ちた声で）凄い……アウレリウスの砲雷撃みたい」

デス「何だ、それは？」

キリエ「防疫修道会の七会士のひとり。大砲みたいな銃を使うの……エロフアントのあの光線、威力といい勢いといい、引けを取らないわ」

デス「ふっ、と微笑んで）だから言っただろ？ ハイエロフアントは、誰より強い」

キリエ「（デスを見詰めて、コクリ、と頷き）そうね。確かに」

片やラーマリア、数丁の拳銃を腰のベルトに差し、準備を終えた模様。

そして身体を返して、ダツ！とキリエとデスの方向に駆け寄り出す。

彼女の後ろ姿に目線を繋ぎ、ふう、と一度息を継ぐハイエロフアント。

ハイエロフアント「昨夜読んだ本に書いてあったけど、こっちの世界ではこういう時、言う言葉があるんだね」

突然、2体の吸血鬼が、思い切ったように物陰から飛び出してくる。

そして、牙が並ぶ口を大きく開け、ハイエロフアントに襲い掛かろうとする。

急に、バクルスの先端の宝玉が翻り、音もなく死人に向く。

ハイエロフアントは、そちらを目視していない。

直後。

杖の延長線上に白色光が、クワアツ！と膨れ上がり、バアーン！と炸裂する。

先程の光線と同じように、死兵の躯体が光に包まれ、ボンツ！と吹っ飛ぶ。

ドサ・・・と地面に転がり、動かなくなる。

それらも、眠ったような安らかな死に顔で、地面に仰向けになっている。

くる、スチャツ、とバクルスを鮮やかに返し、手元に戻すハイエロフアント。

そして、憐憫さを湛えた眼差しを、横たわる遺骸に向ける。

ハイエロフアント「(清廉な声で)・・・主よ、憐み給え・・・」

それらを眺めていた3頭の馬たちに、漸く落ち着いた雰囲気に戻る。

ブルルル・・・と、安堵したような嘶き。

キリエとデスの前方に、ただでさえ悪い血色を更に悪くして立ち竦むアプローズ。

わなわなわな・・・と全身を震わせ、牙を、カチカチカチ・・・と鳴らしている。

彼の壁となっていた吸血鬼軍勢、残りは十数体のみ。

それらも、ハイエロフアントの発した光線を見てから、腰が引けたようになっている。

中には、後退りする者すら。

まるで、アプローズの恐怖心が伝播したかの如く。

焦ったように、キヨロ、キヨロ、と周囲を見回すアプローズ。

キリエたちに攻撃をしようとしなない死兵を目にして、見る見る怒りの顔となる。

アプローズ「(口角泡を飛ばし)キイイイイツ！ 下僕ども何やつてんですかア！ 役立たずどもめエ！」

キリエ「ウザい！ だったらお前が闘えばいい！ でなくとも・・・(ギン！と鋭利な視線で) 今すぐ殺してあげるから！」

アプローズ「(憤怒の表情で)舐めるなアツ！ 私とて銃くらい使えますウツ！」

キリエの背後に駆け寄るラーラマリア。

すかさず腰に差した一丁の銃を抜き、ポイ・・・と宙高く放り上げる。

ラーラマリア「(凜とした声) キリエっ！」

デスの姿が、シュツ・・・と消える。

アプローズ、両手に握った拳銃の撃鉄を起こしながら、グワバツ、と構えようとする。

先程ラーラマリアが放り投げた銃、キリエの頭上に向けて放物線を描く。

次の、瞬間。

周囲の吸血鬼たちの首、ザシユザシユシュツ!!!と凄まじい斬撃を喰らい、次々に落下していく。

空間を、三日月型に光る銀色の刃が縦横無尽に走る。

思わずすべての動作を停止させる、アプローズ。

キリエ、仕込み傘を、くるっ、と左手の方に持ち直す。

そして落下してくる拳銃を、アプローズに視線を結わえたまま、パシイツ!と右手で受け取る。

即座に、自分の銃を、スチャツ、と構えるラーラマリア。

キリエが右手に構えた銃、ラーラマリアが左手に構えた銃が、真っ直ぐにアプローズを捉える。

途端。

ドオズオオ——ンツ!!!と、銃声の轟音。

二丁の拳銃からの浄銀弾が、アプローズの左右の手を、砕く。

アプローズ「(悲鳴) ウギヤアツ！」

アプローズの両五指がバラバラになり、握っていた銃が後方に弾け飛ぶ。

間髪を入れず。

フシユン・・・と、瞬間移動したようにアプローズの真横に現れるデス。

既に大鎌を大きく後方に振り被り、鋭く睨んでいる。

デスを眼の端で捉えた刹那、恐慌で顔が歪んで引き彎るアプローズ。

アプローズ「(裏返った声で) ヒッ！」

デス「(低音の声で) 貫った・・・」

デスの刃が、劈く。

ヴァシユウツツ!!!と、首を真横から切断されるアプローズ。舞踊のような足捌きで、身体を返すデス。

彼女の紅の瞳が、移動の軌跡に従って透過の光を残像として空に描く。

デス、全員が注視する中、大鎌を正面に戻し、敵に背を向けている。アプローズ、悲鳴を上げたような顔のまま。

頭部が、ある。

横断している切断箇所から上、重力に従わずに備わっている頭。はっ!と異様さに気付いて、振り返るデス。

デス「(驚いて) 首が落ちない!」

他の3名も、デスの声に反応し、思わず視線を集中させる。

アプローズの首、斬られた部分に、突如の変化。

切断の線の内側、彼の首の内部から、ウジュルウジュルウジュル…と、何かが蠢く音。

猛烈な悪寒を覚え、ターン!と地面を蹴って距離を取るデス。

ニンマアア…と、アプローズが、斬られた首のまま、嗤う。

直後。

アプローズの破壊された両手首から、ドブシユ——ンツツ!!!と射出される、物。

赤黒く、ぬめった触手。

先端が、錐のように尖っている。

それは瞬時に空を貫き、キリエとラーラマリアに向かっていく。刹那の、後。

グオボオオ——ンツツ!!!と、キリエの腹部に、命中。

僅かに反応が早かったラーラマリアの肩口を掠り、外套を裂いて更に延伸する。

その傍らを、吹き飛んでいくキリエの身体。

バウン! ドゴツ!と鞠のように地を跳ね、転がっていく。

愕然とするラーラマリア、デス、ハイエロファント。

ラーラマリア「(腹の底からの声) キリエーっ!」

デス「(振り向きながら) キリエっ！」
ハイエロファント「(大声で) キリエ！」

キリエ、5ヤードほど吹き飛ばされ、漸く停止する。

並行して、ジュルルルルル…と一気にアプローズの体内に戻されようとする、2本の触手。

デス、一瞬で触手の側方に回り込み、大鎌を振り抜く。

ぞん！ ザシュツ！と連続で斬り飛ばされる、赤黒い触手。

切断面から先端側、駅舎方向に放り出され、ビチビチビチツ！と暴れ回っている。

切断面からアプローズ側、体液を撒き散らしながらも、そのまま身体の中に戻っていく。

攻撃の効果が無いのを見て、一旦身を翻すデス。

ラーラマリア、再度銃を構え直す。

左手指を引鉄に掛け、右手を撃鉄に当て、ドゴドギョン！と連射する。

浄銀弾が、アプローズの額と胸の中心に着弾する。

ヴォズツ！ ゴボン！と穴が開けられ、血が、ゴボツ…と流れる。

しかし、アプローズはダメージを覚えた様子がない。

おぞましく不気味な面のまま。

両眼は濁りが更に悪化し、全身の皮膚が完全な青黒色へと変化し始める。

ムニムニムニ…と抉られた箇所から肉が盛り上がり、撃ち込まれた弾丸が押し出される。

それらが、ポトン…ポトン…と地面に落下する。

チツ、と聞こえるほど大きく舌打ちするラーラマリア。

片や、元いた場所から、地面に血糊を撒き散らした帯を残し、横向きに伏しているキリエ。

腹部が大きく陥没し、凄まじい勢いで血が噴き出している。

キリエ「(猛烈な苦痛を覚え) っほっ！ がはっ！」

キリエ、数度咳き込み、その度に血の塊の吐き出し、口の周りを真っ

赤に染める。

急速に彼女の両目が仄暗くなり、瞼が閉じられる。

素早く踵を返し、バツ！と同時にキリエの元に駆け寄り、ララマリアとデス。

ハイエロフアントも、バクルスを左手に持ったまま走り寄ってきている。

デス「(ララマリアを見て)キリエを連れて一旦下がる！」

ララマリア「ハッ、として、即座に銃を構え」判った！ 援護するっ！」

3人が、キリエの傍に集まる。

デスは大鎌を返して、側に来たハイエロフアントに差し出す。

ハイエロフアントが大鎌を受け取ったのを確認し、両腕でキリエの身体を掬い上げるように抱き起こす。

ララマリアは既に銃を前方に構え、周囲を警戒している。

そして注意しながら、地面に転がっているキリエの傘を手にして、身体を起こす。

そのまま、キリエを搬送し、3名が馬の繋がれた位置まで後退っていく。

一方のアプローズ、両眼が完全にどす黒い色。

両手首から、ジュルウ、と先程射出した触手と同様の物を晒す。

デスに切断された箇所、小さな触手が無数に伸びて、頭部と胴体を？げている模様。

アプローズ「(この世の物とは思えない声)ぐるるるるウウ・・・このアプろーズ様ヲ舐アアメえるヌアアア・・・」

数体の死兵が、動きを止めてアプローズを見ている。

次の、瞬間。

ブジュルウルルル!!!と、2本の触手が急激に伸び、2体の吸血鬼に、グルリ、と巻き付く。

そして絡め取られたまま、勢いよくアプローズの方向に引き寄せられる。

更に、突如。

アプローズの腹部が、ボツゴ——ン!!!と内側から弾ける。

その中から、ウジュールウジュール!と、7〜8本の触手が追加で噴出する。

まるで、蝮の足が生えたよう。

それらは間髪を入れず、引き寄せた吸血鬼2体に絡み付き、躯体を覆っていく。

直後。

凄まじい圧力が、触手に加わる。

ゴギゴギ!　ゴガツ!と骨が折れ砕ける、嫌な音。

ブシューツ!と死兵から噴水のように湧く、血。

ブチブチッ!　ブベジャツ!と肉の塊が圧縮される、吐き気をもよおす音響。

アプローズは、吸血鬼の身体を触手で小さく潰した後、腹部から体内に取り込んでいく。

逃げようとした残存兵にも、アプローズからの触手が伸びる。

オオオオオ・・・と悲鳴混じりの声を上げ、同様の運命を辿る死兵たち。

それだけではなく、既に地面に伏している遺骸にも、触手が襲撃していく。

余りの残虐な光景に、キリエ以外の3名が言葉を失う。

3頭の馬の目に、再び怯えが宿る。

アプローズは、こちらに攻撃して来る気配がない。

ただひたすら、散らばっている遺体を触手で掻き集め、腹に詰め込んでいる。

それはさながら、腹部に大口があって貪り食うが如く。

やがて。

モゴン・・・ブズオン・・・モゴツ・・・と、アプローズの身体が、膨れ上がっていく。

段々と巨大化していく、身体。

表皮に血管が浮き出て、青黒から青褐色へと変色していく。目視する限り、皮膚も硬質化しているように見受けられる。

アプローズ「(最早人の声ではなく)グオオオオオツツ!!! 血ヲ!
肉ヲ! ヨコセエエツツ!!!」

涎を撒き散らし、絶叫するアプローズ。

既に体軀は、身長が2ヤード半を超え、幅も2ヤード近くになって
いる。

捕食し続ける腹の付近から、盛り上がって彼の身体全体に広がって
いく肉の波。

首から上、頭蓋骨を覆うように、ボモモモモ・・・と膨張していく。
頭部も人間の物より遥かに巨大になっており、目鼻口も何処にある
のか判らない。

そこから10ヤード以上離れた場所から、固唾を飲んで見ている3
人。

ラーラマリア「(啞然として) おいおいおい・・・何がどうなってん
だよ、ありやあ・・・」

ハイエロフアント「遺体を触手で集めて、吸収している・・・身体
も巨大化していつてるみたいだ。(ラーラマリアの背に視線を向け)
今までに見たことはある?」

ラーラマリア「ソリアで闘った時、七会士のふたりが『黒衣の者』の
下僕になってき、あんな触手で合体してでっかくなつたのを見た。た
だ・・・(ゴク、と唾を飲み) 今度はそれ以上かも知れないね」

ハイエロフアント「(デスを見詰め) キリエの具合はどう?」

デス「腹を貫通されたようだ。出血が止まっていない。体力が一気
に奪われている。回復力が追い付いていない」

ラーラマリア「(空に目を向け)この陽射しだからね。吸血鬼には酷
な環境さ」

デス「(ハイエロフアントを見詰め返し) 建屋の向こうまで・・・い
や、更に先まで下がって、距離を置いて時間を稼ぐ。ここでは危険だ。
(ラーラマリアに視線を移し)下がってキリエの傷を塞ぎ、回復させた
方がいいだろう」

ラーラマリア「(頷いて) オツケーだ。戦術的撤退、つて奴だね」

デス「キリエはあたしが連れて行く。ハイエロフアントは馬を誘導

してくれ。ラーラマリアは残存の敵がいたら撃退を頼む」

ハイエロフアント「判ったよ」

ラーラマリア「(バツ、と身体を返し) 行くよっ!」

それが、合図。

ハイエロフアント、手早く馬の手綱をすべて解き、大鎌とバクルスを一緒に持って動き始める。

ラーラマリア、駅舎や周囲の建屋に視線を投げ、拳銃を構えて、後退りながら移動。

デス、キリエをしつかりと両腕で抱きかかえ、ハイエロフアントの後に続いて歩を進める。

ちら、とキリエに視線を落とすデス。

全身の力が入っていない様子で、手足を、だら・・・と下げているキリエ。

顔色、肌の色は、雪よりも白く、更に蒼褪めている。

両の瞼は固く閉じられ、睫毛の先が僅かに震える。

微かに聞き取れるだけの、か細い呼吸音。

そんな4名の頭上から、情け容赦なく、射すように降り注ぐ日光。

一度右手に握ったキリエの傘に目を遣り、顔を上げるラーラマリア。
ア。

ラーラマリア「(太陽を睨み) よりによって雲すら掛からないとはね・・・今日は恨むよ、お天道さん」

馬を含めた全員の姿が、駅舎建屋の陰に消える。

残された巨大アプローズ、別の一体を腹から吸収した後、口と思しき部分から、グウエツプ!と息を吐く。

漂う、悪臭。

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【後編】—6

★ サン＝ベルナルディノ駅・駅舎前通り・建屋裏
線路から二階建ての駅舎を挟んだ、反対側。

駅正面入口から真つ直ぐに延びる、左右に家屋がずらりと並んだ、通り。

約50ヤードほど離れた、酒場らしき建物の、横の小さな路地。

日陰になっている場所で、通りの様子を物陰から窺うラーラマリア。
ア。

拳銃を左手に持ち、身体の前で構え、顔を少しだけ出して警戒している。

その奥、片膝を地面に着き、もう片方の膝を枕にキリエを横たわらせるデス。

隣で、同様に片膝を立て、心配気にキリエの顔を覗き込むハイエロフアント。

更に奥には、3頭の馬が、庇を支える柱にくくり付けられている。駅舎の向こう側から、ズウ——ン……ドーン……と地鳴りのような音。

キリエ、呼吸が微弱な状態。

閉じられた瞼は固く、眉間に皺を強く寄せ、苦痛に喘いだ表情。腹部からの出血は、尚も治まらず。

デス「(眉を顰めて) まずいな……生命力の欠落が激しい」

ラーラマリア「(振り向いて) 夜ならまだしも、今は昼前で、この陽射し。けど……例え夜でも、この深手が速効で回復する訳じゃない。いくらキリエとて、治るのは時間が掛かるさ」

ハイエロフアント「ラーラマリアを見上げ) 僕は傷を治す力を持っている」

ラーラマリア「(目を見開いて、少し考え) さっき使ってた力かい？

(二度、奥歯を噛んで) じゃあ、キリエには効かない」

ハイエロフアント「え？」

ラーラマリア「キリエは『黒衣の者』の血を引く吸血鬼で、狂血病

患者と同じだ。つまり……(目を伏せ) あんたが死兵を倒せたのと一緒で、キリエには逆効果の筈……」

ハイエロフアント「(啞然として) あ……」

ハイエロフアント、唇を半開きにしたまま、凍て付く。

そして、僅かに悔しそうな色彩を眼に宿し、口元を引き締め項垂れる。

デス、顔を上げて彼の横顔を、じつ、と見詰める。

ラーラマリア、再び警戒の目線を駅前通りに投げる。

暫く、そのまま。

尚も、そのまま。

キリエに視線を結ぶデス。

呼吸の状態が、更に脆弱になっている模様。

デス「(キリエを見詰めたまま) 頼みがある、ハイエロフアント」

ハイエロフアント「(デスを見詰め) 何?」

デス「あたしが今から『仕掛け』る。終わり次第、すぐに回復させてくれないか?」

ハイエロフアントに向けられたデスの眼差し、決意と覚悟を秘める。

デスに向けられたハイエロフアントの眼差し、一瞬で憂いを秘める。

即座に、彼女が何をしようとしているのか、察知した様子。

ぎゅっ、と右の拳を握り、奥歯を強く噛むハイエロフアント。

ハイエロフアント「(重苦しい声で) ……判ったよ……」

デス、キリエの耳元に顔を近寄せる。

デス「(通る声で、静かに) キリエ、聞こえるか? 大きく口を開ける。出来るだけ大きく、だ」

少しの、間を置き。

ゆっくりと、非常に緩慢な動きで、キリエの唇が開いていく。

残る力を振り絞るが如く。

左手の手袋を剥ぎ、ポトツ、と傍らに放るデス。

反対の右手で大鎌を短く持ち、刃の切り口を左手首内側に、ピタ、と

当てる。

異様な雰囲気を感じ取り、振り返るラーラマリア。

その光景を目の当たりにして、思わず目を見開く。

ラーラマリア「おい・・・まさか・・・(慌てて) 待てデス！ 早まるな！」

直後。

デスの左腕が、動く。

プチッ、という血管の裂ける音の後、シュッ、と短い切創音がして、刃に手首を沿わせる。

大鎌の刃で、自分の左手首、動脈を切断するデス。

彼女の開いた皮膚から、大量の血が流れ出始める。

デス、痛みに一瞬顔を顰める。

しかし構わず、キリエの口の垂直延長線上に左手首を移動。

流血の筋をキリエの唇に落下させる。

デス「(凜とした声で) 飲め！ キリエっ！」

最初の一滴が、キリエの口内に吸い込まれる。

途端。

くわっ！と、突然彼女の両眼が、思い切り開かれる。

透明なほどに綺麗な、赫い瞳。

デスの左手首から、ボトツ、ボトツと連続して流れ落ちる、血液。

キリエ、尖った犬歯を剥き出し、舌を出し、口を大きく開けてそれを受け止め、流し込んでいる。

ゴクン・・・と彼女の喉が、鳴る。

更にもう一度、鳴る。

やがて、愉悦に綻んでいく、キリエの口元。

キリエ「(口角が上がり) オオオオ・・・オアウ・・・」

尚も嘔き出している、流血。

やや蒼褪めた顔で、はあっ・・・と息を継ぐデス。

隣でデスの行為を見詰め、ぐっ、と奥歯を噛むハイエロフロント。

ただただ啞然と、展開を目に映しているラーラマリア。
やがて。

キリエの表情が、段々と落ち着いてくる。

当初の苦悶の顔からの悦楽の顔、それらも通り越し、普段の彼女のものへと転化していく。

その頃合いで、出血の続く左手首を返し、ハイエロフロントに差し出すデス。

デス「大きく息を荒げ）頼む！ ハイエロフロント！」

ハイエロフロント「間髪入れず、両手でデスの左手首を覆い）聖なる力っ！」

ハイエロフロントの両掌、クワアツ！と純白の光を放つ。

デスの傷口と手首一周を隈なく覆った五指同志の隙間から、それが漏れている。

数秒の、後。

発光が収まり、すつ、と両手を戻すハイエロフロント。

デスの左手首の切創、完全に塞がっている。

瘡蓋が、ぽろ、と彼女の肌から剥がれ落ちる。

それと同じくして、自力で身体を起こしていくキリエ。

もう、いつもの静かな表情を浮かべている。

キリエ、地面に腰を落ち着け、自分の臍付近を見下ろし、両手で摩る。

キリエ「僅かに驚いた調子で）・・・お腹・・・もう治ってる・・・」

破れた服から覗くキリエの腹部。純雪のような白い肌。

ラーラマリア、目を見張る。

彼女も、想定外の出来事が起きたかのように、息を詰めている。

突如。

がばあっ！と、渾身の力でデスを抱き寄せるハイエロフロント。

思わぬ彼の行動に、瞬間で頬を染めるデス。

しかし、彼の腕の力と震えている身体を感じ取り、即座に冷静になっっていく。

ハイエロフロント、デスの項に視線を固定して、俯く。

ハイエロフロント「（振り絞るような声色で）僕が力不足なばかりに・・・痛い思いをさせちゃったね・・・」

デス「(ハイエロファントの肩口に顔を埋め) 謝るな・・・あたしが勝手にやったことだ・・・むしろ世話を掛けた・・・すまない・・・」
ラーラマリア「(少しからかうように) おーい、いちやつくのは全部片付いてからにしてくれませんかねーおふたりさーん」

思わず、ばっ、と身体を離すハイエロファント。

彼にしては珍しく、頬を染めている。

呼応したように赤くなり、口元を、きゅっ、と引き締めているデス。眼差しが、宙で絡み合っている。

そのふたりを眼に映し、安堵の笑みを浮かべるラーラマリア。

つられたように、微かな笑みを湛えるキリエ。

ハイエロファント、悠然と両手を下ろし、静かに微笑む。

デス、少し眼を潤ませている。

そしてそれぞれの得物を持ち、しっかりと地面を踏み締め、立ち上がる。

ラーラマリア、やれやれ、という雰囲気で、大きくひとつ息をつく。キリエ、すいつ、と音もなく起立する。

全身の力は戻っている様子で、その両眼にも揺らぎがない。

ラーラマリア「具合はどうだい？ キリエ」

キリエ「痛みも残ってないわ。身体の調子も、いつもよりいいみたい」

ラーラマリア「こんなに急に回復したのは初めてなんじゃないか？ だとしたら・・・(デスに視界を向け) 『死神』の血のお陰かね」

一步、デスに近寄り、真っ直ぐに視線を向けるキリエ。

キリエ「(澄んだ声で) デス、ありがとう」

デス「礼はハイエロファントに言ってくれ。ハイエロファントの力がなかったら、こんな芸当は出来ない」

ハイエロファント「(首を左右に振って) 僕はお礼を言われる資格はないよ。むしろ、キリエを回復させてあげられなかったんだ。何も出来ないどころか、足を引っ張って・・・」

ラーラマリア「(ピシヤリ、とした調子で) んなことはない。デスとエロファントが連携したからこそ、キリエが復活出来たんだ。あんた

らふたりの、お陰さ」

全員が、一度ラーラマリアを見る。

3人を見回し、コクツ、と首を上下に大きく振るラーラマリア。全員が向かい合って立ち、互いに視線を?げている。

その、僅か後。

ヴオオオオオオ・・・と、怖気を感じる不気味な咆哮。

ハッ、として顔を上げ、一斉に通りに跳び出す、4名。

50ヤード以上離れた、駅舎の屋根越しに、巨大な物体がはみ出して見える

それが、ズズズ・・・ズズズ・・・と、摺り足をしているような音と共に、移動中。

通りに横一列に並んで、それを凝視するキリエたち。

キリエ「(鋭い目線で)何? あれ・・・」

ハイエロフアント「キリエはさつき見てられなかったけど、あれがアプローズだよ」

キリエ「(短く息を飲んで)アプローズ!」

デス「化けたんだ。死兵たちの血肉を貪り、巨大化していった。

(苦々しい表情で)今や『外道』とでも言った方がいい」

ラーラマリア「(眉間に皺を寄せ)また随分と馬鹿でつかくなってやがる・・・7、8ヤードくらいあるかね」

暫し、会話を切って様子を窺う4人。

駅の入口に対して、右からラーラマリア、キリエ、デス、ハイエロフアントの順。

少しの、間。

尚も、間。

巨人の頭部のような輪郭が、駅舎の向こうを回り込もうとしている模様。

ただその速度は、さほど速くない。

ハイエロフアント、落ち着いた雰囲気です3名に視線を向ける。

ハイエロフアント「僕たちは、ゴードバンジョーだね」

ラーラマリア「(訝し気に)は? 何言い出すんだ?」

全員が注視する中、真摯な表情を見せるハイエロフアント。ハイエロフアント「僕たちは4人とも違う、4種類の弦。一本一本で音色が違うけど、いつぺんに鳴らすことで素晴らしい音を奏でることが出来る。そう思うんだ」

瞬間。

彼の言葉の真意が、伝わる。

目を見開き、徐々に口元を緩めるラーラマリア。

納得した顔で、視線を投げってくるキリエ。

静かに、だが少しの昂ぶりを秘めた眼差しで、ハイエロフアントを見詰めるデス。

ラーラマリア「なるほど……(にひつ、と笑顔で)あんた、粹なコト言うねえ」

キリエ「エロフアントに、同意するわ」

デス「言うまでもない」

デス、巨大な影に改めて視線を放る。

そして眦を細め、僅かに眉を顰め始める。

デス「(呟くように)銃は効果が薄い……当たっても表皮で押し戻される……斬ることは出来るが復活する……『聖なる力』は……」
はっ、と何かが閃いたような表情を浮かべるデス。
少しの、間を置き。

デス「ひとつ、策がある。聞いてくれないか？」

他の3名が、一斉に彼女に目を向ける。

デス、ラーラマリアと視線を繋ぐ。

デス「確認だが、『黒衣の者』にも通用する弾丸があるんだっただけだ？」
ラーラマリア「(コク、と首を上下に振り)二発だけだけどね」

デス「あのアプローズには、浄銀弾とやらが通用しなかったな？」
ラーラマリア「ああ、さつきは表面で押し戻されちまった。『黒衣の者』にもダメージを与えられる……煉滅弾、ってんだが、それも通用するかどうか、正直解らない」

デス「(鋭い視線となり)身体の内側からなら、通用する可能性はある」

ラーラマリア「内側って・・・（小さく驚いた顔で）まさか、あのデカブツの胃袋の中にも入ろうってんじゃないだろうね？」

デス「近いな。似たような感じだ」

いいっ、という調子で歯を剥き、更に驚異を覚えたようなラーラマリア。

続けて、キリエを見詰めるデス。

デス「キリエ、あたしの動きに追いつて来られるか？」

キリエ「多分、いける。というよりも・・・（右手を胸の上で、ぐつ、と握り）今までにないくらい、身体が軽い。（不敵な笑みを口元に滲え）置いてかれる気がしないわ」

デス「（ふっ、と笑みを浮かべ）・・・上等」

そして、ハイエロフアントと眼差しを絡めるデス。

あくまで穏やかだが、確固たる意志を瞳に漲らせているハイエロフアント。

デス「お前の力が必要になる。頼むぞ、ハイエロフアント」

ハイエロフアント「僕に出来ることなら、任せて、デス」

同時に、微笑みを交わすふたり。

そして。

デスに身体を正対させる、キリエとラーラマリア、ハイエロフアント。

3人は、揺るぎない視線を彼女に向けている。

駅舎に延びる真っ直ぐな道の方々を、右手人差し指で示しながら、説明を始めるデス。

★ サン＝ベルナルデイノ駅・駅舎横

とうとう8ヤードを超える体躯となった、巨大アプローズ。

全身の皮膚は黒い筋が織り込まれた青褐色、見るからに硬質化しており、また分厚そう。

頭部だけでも2ヤード弱の直径、太い首で胴体に据えられている。

目鼻口の部分は凹んだようになっていて、眼球は見えない。

口らしき箇所から、ずらりと並んだ大きな牙が確認出来る。

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【後編】—7

★ サン＝ベルナルディノ駅・駅舎前通り

太陽は、天頂への上昇を続けている。

相変わらず雲のひとつもない、快晴。

熱を帯びた乾いた風が、街中を流れて続けている。

巨大アプローズ、駅舎の反対側、何軒も木造家屋が並ぶ通りに到達。

ズオオオオ・・・と緩慢な動作で、顔を上げ、目線を遠くに放る。

左右に建屋が並ぶ道の先、50ヤードほどに複数の影を発見。

ラーラマリア、傘を差したキリエ、デスが横並びに立っている。

そのすぐ背後に、バクルスを右手に下げたハイエロフアントの姿。

Uの字の形に口角を上げ、ニマアア、と嗤う巨大アプローズ。

巨大アプローズ「(厭らしい声で)ミイイイイツウウウウケ

エエエエタアアアア・・・」

そして、重量のある身体を動かし、ズモモモ・・・と身体の向きを変えていく。

片や、4名。

非常に冷静な、凧いでいる雰囲気。

全員の眼が、涼やかな煌きを包括している。

ハイエロフアント「(落ち着いた顔で)じゃあ、奏でようか」

デス「ああ。まずは・・・(大鎌を縦に差し出し)頼む」

ラーラマリア「(煉滅弾の弾丸を差し出し)頼むよ」

頷きながら、バクルスを左小脇に挟むハイエロフアント。

右手でデスの大鎌、左手で煉滅弾の弾丸ニ発を握る。

彼が一度、すう、と息を吸う。

ハイエロフアント「(明瞭な発声で)聖なる力！」

クワアツ！と、純白の発光を発する、ハイエロフアントの両掌。

大鎌全体も同様の光に覆われ、弾丸は掌の内側でそれに包まれる。

少しの、後。

発光が終息する。

そこには。

全体が金色の、大鎌。

柄が、黄白色と白金色の混じった、光り輝く煌き。

刃のみが、今までの姿より一回り大きくなっており、蒼い大きな寶石が埋まり、流線形の装飾を施されている。

そして大鎌全体を均等に覆っている、虹色の光彩。

明らかに格段の進化をしたような、変化。

ハイエロファントの左掌に載る煉滅弾の弾丸にも、変化。

徹甲弾頭、葉莖、雷管まで含めた全体が、黄白色と白金色の混合された、眩しい輝き。

まるで内部に、ハイエロファントの力を凝縮させたが如く。

目を見開くキリエとラーラマリア。

キリエ「大鎌が、金色に・・・煉滅弾も・・・」

ラーラマリア「(ヒュウ、と短く口笛を吹き)おほっ、鮮やかなモンだね。アタシのヤツもこうなるのかい？」

ハイエロファント「(微笑んで)やってみなくちゃ判らないけどね」大鎌を受け取り、改めて身体の前に構えるデス。

手早く専用短銃に煉滅弾を装填し、カチャン、カチャン、と銃身を戻すラーラマリア。

陽を避けていた傘を畳み、ラーラマリアに差し出すキリエ。

日光が直接浴びせられるが、一瞬こめかみを動かしただけで、すぐに落ち着く彼女。

ラーラマリア「これでよし。(短銃二丁をキリエに渡し)任せたよ、相棒」

キリエ「(受け取りながら)任せて」

そしてラーラマリアが左手に仕込み傘を下げ、キリエが両手に短銃を下げる。

ハイエロファント、改めてバクルスを右手に持ち直す。

デス「(キリエに視線を結び)行くぞ」

キリエ「(デスに視線を結び返し、頷き)ええ・・・」

ハイエロファント「ラーラマリア、合図をお願い」

4人が向き直り、改めて前方の巨大怪物を見上げる。

その距離、およそ40ヤードまで接近中。

ズウウウ・・・ズルウウウ・・・と、不気味な重量音を伴い、尚も微速移動。

触手が空をもがくように掻いており、こちらに先端を向けたまま。尚も、近付いてくる。

キリエ、ラーラマリア、デス、ハイエロフアント、微動すらしない両眼。

凜とした、また芯の備わった、勇ましい眼差し。

巨大アプローズとの距離、およそ30ヤード。

ラーラマリア、カツ！と両目を見開き、ギンツ！と鋭く巨軀を見る。

ラーラマリア「(腹の底からの大声で)行くぞっ！ バンジョーをかき鳴らせつつっ!!」

途端。

ダツ！と、地面を蹴るキリエとデス。

態勢を低くし、放たれた矢の如く、一気に巨大アプローズとの距離を詰める。

疾風のような、ふたりの速度。

すぐさま、右腕の手首の部分を曲げ、カチ、と外すラーラマリア。

義手内部に折り畳みである小鎌が、顔を覗かせる。

ラーラマリア「(右腕を差し出し) やってくれエロフアント！」

ハイエロフアント「(力強い声で) 聖なる力！」

ハイエロフアント、ラーラマリアの右腕に左掌を翳す。

掌の中心が、クワアツ！と白色の光を発し、彼女の前腕部を覆い尽くす。

じわあっ・・・と光が沁み込むように、内側の武器にまで入り込む。

ラーラマリア「(ぶるっ、と一度震え) おおおっ・・・何か身体ん中から力が湧いてくるな」

キリエとデス、更に疾走し接近。

待ってましたと言わんばかりに、ジュルウツ！と両腕の触手を伸ばす巨大アプローズ。

デスが、翻る。

キラツ！と、黄金色の三日月型の斬撃が、螺旋を描く。

二本の触手が、ザシュザシュウウウツ！とほぼ同時に斬り落とされ、吹っ飛ぶ。

切断面が白色光を放ち、即座に、ジユウワアアツツ！！と沸騰したように泡立つ。

それは更に腕の内部まで潜り込み、血が蒸気を放ちながら溢れ出る。

斬り落とされた先端側は、猛烈な湯気を発して、やがて動かなくなる。

巨大アプローズ「悲鳴」痛デエツッ！」

巨大アプローズ、口らしき部分を盛大に△の字にして、襲い来る痛みにもがく。

それでも、腹部の8本の触手を、ウジユルウジユル！と体液を飛ばしながら延伸する。

直後。

フシユツ・・・と、キリエとデスの姿が、消える。

次の瞬間、進行方向左側に跳ねている、ふたり。

ターンツ！と、道端に置かれてる樽の上面を、同時に蹴って跳び上がる。

タンツ！ ターンツ！と、通りに突き出た庇、更に上の軒を足場に、一気に屋根まで達する。

まるで身体をひとつにしたような、見事な動作。

キリエの赫い瞳が、デスの紅い瞳が、二本の透過の光を残像としていく。

巨大アプローズが気付いた時には、ふたりは既に、連なる建屋の屋根を走ろうとしている。

前方に伸ばした触手が、すべて空振る。

そこへ。

キュインツ！と、別の黄金色の光が、飛んてくる。

ラーラマリアの仕込み小型鎌が展開し、キュルルツ！と一気に空を裂く。

ザバツ！ ザグツ！ ズバシユツ！と、数本の触手が斬り飛ばされる。

そのまま伸ばした右腕を、∞の文字の軌道で振り回し始めるラーラマリア。

ラーラマリア「突き抜けるような発声で）みつともねえ触手なんざ斬り刻んでやるよ！ 鉄道屋っ！」

ラーラマリア、両眼に鋭利な殺気を秘め、凄まじい回転速度で小型鎌を旋回させる。

ズバシユズバシユザシユザシユウウツ！！と、連続の斬撃を受け、触手。

刺身のように、寸刻みで細切れになっていく。

斬られた部分は、切断面が白色光を放ち、また血が沸騰して噴き出る。

巨大アプローズ（絶叫）ウギヤアアアアツツ！ イデエイデエイデエツツツ！！

ラーラマリア「エロフアント！ 行けっ！」

シユルルツ・・・と、小型鎌を手元に引き戻しつつ、バツ、と身体を屈ませるラーラマリア。

その背後には、バクルスを大上段に振り翳したハイエロフアントの姿。

眉をきりつと寄せ、雄々しい表情。

ハイエロフアント「凜とした声）ミラクルビームっ！！」

渾身の力で振り下ろされる、ハイエロフアントのバクルス。

クワアアアツツ！！と、直径1ヤードほどの光球が前方に湧き上がる。

即座に、ズツドオオオオオムツツ！！と爆音を放ち、純白の光線が射出される。

ラーラマリアの頭上を、空気を割り、光輪を幾重にも纏い、劈く。瞬時に、巨大アプローズの胸部に到達。

ドオ——ンツ！！と、凄まじい爆音と、目も眩む閃光を放ち、炸裂する。

余りの衝撃で、瞬間、巨躯が凹んだように反る。

その背後の空気が、ビリビリビリ・・・と猛烈に振動する。

ただ、下半身の物量が重過ぎる為か、倒れず。

押し戻されもしない。

しかし、衝突した純白光は瞬く間に巨大アプローズを覆い尽くし、隙間なく包む。

間髪を入れず、バチバチバチツ！と、生き物のように巨体の表面を走る、雷撃。

やがて、光が治まる。

巨大アプローズ、瞬間冷凍したかのように、凝固している。

巨大アプローズ「悶絶した声」ガ・・・ガ・・・ゴ・・・」

向かって左側の建屋、屋根から屋根。

まるで地を駆けるような軽やかさで、キリエとデスが走る。

ハイエロフアントの技が激突したのを目の当たりにし、くんつ、と更に加速。

デスは大鎌を構え、キリエに陽が当たらない位置で、疾駆。

キリエは短銃を両手に下げ、デスの影から巨大アプローズに視線を繋ぎ、疾駆。

固まった巨大アプローズの首筋が、斜め前方、横水平5ヤードほどの位置。

ターンツ！と、デスが、続いてキリエが宙を舞う。

空間を一気に接近していく、ふたり。

背後に大きく大鎌を振り翳した、デスの姿。

その頭上に、デスよりも大きく跳ねて空を行く、キリエの姿。

デス「(快心の声)貫ったあつ！」

気合一閃。

デス、大鎌を振り抜く。

巨大アプローズの右側の首筋に、斬撃が命中。

ザブシュウツ!!!と、三日月の刃が喰い込む。

一拍遅れて、キリエが身体を、くるっ、と空中で前回りに回転し、脚を揃える。

そのまま巨大な頭部に、ドン！と両足裏を押し当て、勢いそのまま全体重を駆ける。

途端。

ブチブチブチブチイッ!!と、太い首の腱と肉が、断たれる音。

デスの大鎌の刃が、キリエの追撃によって、一挙に斬首していく。

切創面の白色光、沸騰する血肉、噴出する水蒸気が混合し、面積を広げる。

そして、大きく傾いていく、巨大アプローズの頭。

顔は、絶叫した形態で、凝り固まったまま。

ぐらあっ・・・と揺らぎ、ズウツ・・・と反対側に重心を移動していく。

キリエ、タツ、と頭部を蹴り、宙返りをして、巨躯の肩に降りる。

デス、見届けて巨躯の肩を踏み締め、大鎌の切っ先を一気に手元に引く。

頭部が更に斜めとなり、パカアツ・・・と切断面を広げていく。

切り口から奥、巨大アプローズの首が、厚い皮だけで繋がっている。

傾き続ける大きな頭が、一旦停止する。

僅かの、間の後。

万有引力に従い、重心を移動し、元の位置に戻ろうとする巨大アプローズの頭部。

それを見極め、くるっ、と大鎌を真っ直ぐ立て、ズボオツ！と突っ込むデス。

巨大な頭が、再び停止する。

断面が、45度の角度を成している。

デスの大鎌がつかえ棒となり、巨躯の頭部の切断面と、綺麗な三角形を描いている。

一気に重さが掛かってくる、大鎌。

デス、奥歯を噛み、両腕と全身に力を込め、支える。

斬撃の光が治まったのを、確認。

デス「(気迫の声で)キリエっ！ 今だっ!!!」
瞬間。

するっ！と滑らかな足捌きで、デスの眼前に潜り込むキリエ。

巨大な頸部の狭間、血肉の泥濘に屈んで、スチャツ、と両手の短銃を構える。

一方の銃口は頭部へ、一方の銃口は首から下へ向けられている。

キリエの赫い瞳が、爛と煌く。

キリエ「(低音を効かせた声で) 終わりよ……ポツポ屋……」
引鉄が、動く。

ヴオゾオ——ン！と、同時の発砲音。

煉滅弾が、巨大アプローズの首から頭蓋、首から胸部に、減り込む。
直後。

巨軀の頭部が、巨軀の胸部が、風船のように膨らむ。

一拍の、後。

ボツオオオオオオオオオオオオツツツンン!!と、大爆発。

アプローズの頭は瞬時に粉微塵になり、凄まじい物量の肉片と血液を、舞い上げる。

アプローズの胴体は、連鎖状に粉微塵になり、猛烈な勢いで肉片と血液を撒き散らす。

途端。

足場を失い、落下していくキリエとデス。

デス、空中でキリエを抱き留め、マントで包み、素早くフードを被る。

そのままふたり、身体を丸めるような体勢で、地面に急接近。

後から、宙に浮かんでいた大量の血肉が、重力に従って落ちてくる。

豪雨のように降り注ぎ、キリエとデスの姿が見えなくなる。

情け容赦なく、ボトボトボトボトボト……と地面に叩き付けている血液と肉片。

啞然とした表情で、それを見ているラーラマリアとハイエロファント。

やがて。

長い時間続いた血と肉の雨が、終息。

アプローズの居た場所を軸に、直径20ヤードにも及ぶ円の範囲

が、真っ赤な絨毯を敷いたよう。

その周囲の家屋の戸口、窓、屋根までが朱に染まる。

中心点に向かい、こんもりと肉片と血液の山が形成されている。

全面から水蒸気が立ち昇り、悪臭も漂う。

ラーラマリアとハイエロフアント、ダッ、とそこに駆け寄る。

次の、瞬間。

がばあっ！と、中心付近に盛られた血肉の山が、内部から跳ね退けられる。

マントを剥ぎ、通常に戻った大鎌を下げて立ち上がるデス。

続いて、撃った後の短銃を両手に握り締めたまま、立つキリエ。

全身は、大量の血液と体液でぬめっている模様。

正面から向かってくるふたりをデスが手で制し、自ら歩を進めてくる。

隣を一緒に歩いてくるキリエ。

兩名、足取りはしつかりしており、表情も落ち着いている。

ビチャ、ビチャ、と踵で血液を跳ね上げ、肉の泥濘を慎重に移動していく。

ラーラマリア「キリエっ！ デスっ！」

ハイエロフアント「ふたりとも大丈夫!?」

デス「(ふう、と息をつき) ああ、問題ない。ちよつと着地が甘かったとは思うが」

キリエ「大丈夫よ。これだけ血肉の塊を被ったのは初めてだけど」
広範囲に拡散されたアプローズの残骸から、外に出るキリエとデス。

ほっ、と胸を撫で下ろした雰囲気、歩み寄ってくるラーラマリアとハイエロフアント。

徐にキリエが、ペロ、と口の周りを舐める。

顔に付着したアプローズの血液が、舌で掬われる。

キリエ「(顔を擧め)・・・まっずい血・・・」

何の躊躇もなく、自分の右手首に付いている血液を舐めるデス。

デス「(口元を歪め)・・・確かに、これは不味い」

途端。

キリエとデス、顔を見合わせる。

そして。

破顔一笑。

目を細め、すべてを許容したような微笑みを浮かべる、ふたり。

連動したように、ラーラマリアとハイエロフアントも、優し気に笑みを湛える。

キリエ、ラーラマリアに視線を結ぶ。

ラーラマリア「(満足そうに) やったな、キリエ」

キリエ「(頷いて) うん、終わった。終わらせることが出来た。本当に・・・セシリア母さんたちに、報告が出来るわ」

ラーラマリア、感慨深げに頷き返し、元の色に戻った小型鎌を、右腕内部に収納する。

カチン、と右手の手首を嵌め込み、ふう、と短く息を継ぐ。

改めてキリエの全身を上から下まで凝視し、続いてデスにも目を向けるラーラマリア。

ラーラマリア「それにしてもまあ、ふたりとも全身血と体液塗れだなあ。それに、化け物の体液は臭いし、いつまでもこのままじゃキツツイ・・・(思い付いたように) そうだ。みんな水浴びしてから移動するか？ 汗も血も流して、さっぱりとしてから次の・・・」

ハイエロフアント「(きっぱりと) いや、僕はデスとふたりだけで水浴びするから、お先にどうぞ」

きよとん、とした顔のラーラマリア。

幾度か瞼を瞬かせるキリエ。

目を丸くして、ハイエロフアントに視線を固定しているデス。

この上なく真剣な表情で、揺るぎない視線を投げているハイエロフアント。

暫くの、間。

長い、間。

更に、間。

ラーラマリアの頬が、段々と緩んでいく。

ある程度我慢していた様子だが、遂に耐える限界を越える。

ラーラマリア「(プツ、と短く嘖き出してから)ぷくっ……くくっ……
(愉快そうに笑い) あははははっ!」

ハイエロフアント「面白いことを言ったつもりはないんだけど……」
ラーラマリア「(笑い混じりで)いや、ははっ、わりーわりー、ぷふっ、
や、余りに真面目過ぎる答えだったんで、はははっ……解ってる解つ
てるって」

デス「(きつ、と睨んで) 笑い過ぎだ、ラーラマリア」

キリエ「確かに、ね。でも……(ふっ、と微笑んで) デスと水浴び
するのは、いいかも知れない」

デス「(少し驚いたように) キリエまで……死神と水浴びしても、
いいことはないぞ」

キリエ「本当にそう? エロフアントもそう思ってる?」

ハイエロフアント、即座に首を左右に振る。

ハイエロフアント「(柔らかい微笑みで) まさか。至高のひと時だ
よ」

直後。

キリエの両手が、むんず、とデスの右手を掴む。

今度はその動作に目を見開き、キリエに視線を繋いで凝り固まるデ
ス。

キリエとラーラマリア、何気に期待を込めた眼差しをデスに向けて
いる。

対してデスは、パクパク、と唇を開け閉めして、言葉を失っている。
ラーラマリア「んじゃ、オンナ3人で水浴びといきますか? (ハイ
エロフアントを見て) エロフアント、悪いが奥さん借りるぞー」

デス「(かあっ、と真っ赤になって) ちよつと待てっ! あたしは
ハイエロフアントと……いやその……」

キリエ「(ハイエロフアントを見て) ごめんなさい、なるべく早く
戻ってくるわ」

ハイエロフアント「(笑顔で) 行ってらっしゃい」

明るい調子で、右手を軽く振るハイエロフアント。

ラーラマリア、先導して小走りに駆け出す。爽やかな笑顔。キリエ、デスの右手を握ったまま走り出し、彼女を引っ張っていく。穏やかな笑顔。

デス、左手の大鎌を引き摺るように、引っ張られて為すがままに移動していく。

そして、ちら、とハイエロフロントを振り返り、視線を絡める。

その時には既に、諦めたような、開き直ったような笑みを浮かべているデス。

ハイエロフロント、柔らかな笑みを、返す。

やがて。

女性3人が、近くの建屋の間、路地の角を曲がり、消える。

残されたハイエロフロント、悠然と身体の向きを変え、歩く。

それから、今も腐臭を放つ、アプローズの大量の遺骸の端に立つ。

左手に下げたバクルスを、くる、と回して持ち直す。

先端の蒼い宝玉を、血と肉の堆積している中心部に翳す。

ハイエロフロント「清廉で、重厚な声で」・・・聖なる力！」

バクルスの先に、クワアツ！と純白の光が、湧く。

直後。

ボン！と弾かれたように光球が発生し、宙を移動し、一直線に肉塊の山に向かう。

光の球の縁が、そこに触れた、瞬間。

20ヤード直径に拡散している血肉の海が、全面白色光を放つ。

ジュウワアアアアアアツツツ!!と、一瞬で沸騰したかの如く、純白のヴェールに覆われる。

そして、オーロラのような煌きを漂わせ、白い靄が揺らぎ、天に昇り始める。

静かに、だが確実にその現象は続き、やがて消失する。

後には、干からびたように平たくなった体組織の層と、焦げ付いたような血の層が残存する。

沈黙。

沈黙。

ひゆう・・・と、乾いた風が、鳴る。

ハイエロフアント、バクルスを持った腕を下ろし、体側に添える。
フシュツ・・・と、手から消えるバクルス。

アプローズを構成していた残骸を、憐憫を湛えて見渡すハイエロフアント。

そして胸の前で両手を組み、両の瞼を閉じ、口元を引き締める。

ハイエロフアント「(透明で、深遠な声)・・・主よ・・・憐み給え・・・」
暫し、そのまま。

尚も、そのまま。

ハイエロフアント、目を開いて、両手を後ろ手に組み、すいつ、と踵を返す。

悠然とした歩調で、3頭の馬を繋いでいる路地に向かい、消える。

静寂。

静寂。

再び、ひゆうっ・・・と、風が空を薙ぐ。

何処から舞って来た砂埃が、旋風のような軌道を描いている。

鳴り交わす絃の、相和せる競いよ【後編】— 8

★ (数日後) カリフォルニア州

サン＝ベルナルディノ駅での激戦から、数日経った日の、昼間。太陽は天頂を過ぎ、地平へ高度を下げつつある時間。

雲は厚く、切れ目から光の筋を成して陽がところどころ差し込んでいる。

地表の温度は思ったほど高くなく、渡る風は心地いい。

ほとんど障害物も、小振りな岩すらも見当たらない、乾燥した荒野が広がる。

地面に、馬車の車輪の跡、馬の足跡、人の足跡などが延々と連なっている。

その線は、途中で大きく二方向に、Yの字に枝分かれしている。

恐らく、違う目的地へと繋がる、二本の轍。

その分岐点の上に、4名が立って向かい合っている。

側には、3頭の馬が並んで控えている。

キリエは傘を深めに被り、目を伏せて、物憂げな表情。

ラーラマリア、キリエの横顔を見た後、視線を前に向ける。今ひとつ腑に落ちていない様子。

対しているデスとハイエロフアント、普段と変わらぬ雰囲気。

デスは大鎌を左肩に掛け、ハイエロフアントは両手を後ろ手に組んでいる。

ラーラマリア「本当に行くのか？」

デス「(こくん、と頷き) ああ。悪いが、ここから別の方角へ行ってみる」

キリエ「顔を上げて」馬はいいの？ 一頭なら譲ってあげても…：それに、エロフアントに懐いている」

ハイエロフアント「彼らは、納得してくれる。元々3頭で旅してきたんだよね？ それを離したくない。ここからの道行きに關しても、君たちから地図を貰えたから、迷うことはないと思う」

反応したように、傍らの3頭の馬が一齐にハイエロフアントを見

る。

ブルルル・・・と穏やかな、納得したような嘶き。

ラーラマリア、馬たちの返事を横目で追った後、視線を戻す。

ラーラマリア「正直言おうと・・・（真剣な声で）アタシら4人なら、『黒衣の者』も確実に斃せる気がする。あん時の連携・・・完璧だったとは思わないかい？」

デス「（頷いて）悪くなかった」

ハイエロフアント「でも僕たちは、違う世界の住人・・・突然この世界に来たけど、突然元の世界に戻される可能性もある。何となくだけど、マジカルランドで僕たちが消えたことは、もう認識されていると思うんだ」

デス「（ハイエロフアントを見詰め）ワールドなら、既に『第三の目』で知り得ているだろうからな」

ハイエロフアント「（デスを見詰め）特に、死神の君がいなくなることは、世界の根幹を揺るがす事態だからね。ワールド様やフォーチュンなら、ドロップで僕たちを帰還させようとすることも考えられる」
数回、目を瞬かせるキリエとラーラマリア。

「またもや出てきた聞いたことのない名前や単語に、不思議そうに目を向けている。」

軽く小首を傾げ、静かに左手を腰に当て、少し身体を伸ばすラーラマリア。

ラーラマリア「・・・とにかく、あんたらは元の世界に急に戻ることもあり得る、つてことだね？」

ハイエロフアント「そう、こちらの世界に来たのもいきなりなら、戻るのもいきなり、ということ」

ラーラマリア「（はあ、と溜め息を吐き）そっか・・・しゃーない」
ふっ、と残念極まりなさそうな表情を浮かべるラーラマリア。

そして、すっ、と右腕を伸ばし、掌を軽く開いて差し出す。

ラーラマリア「万が一、また逢うことがあれば・・・（涼やかな眼で）また旅をしないか？」

ハイエロフアント「僕たちで良ければ、喜んで」

デス「ハイエロフロントがいいのなら、あたしも異存はない」
ハイエロフロントが右手を伸ばし、ラーラマリアと握手をする。
続いて、デスも同様に、彼女と握手をする。

腕を体側に下ろし、穏やかな微笑みを交わし合う3名。
片や、キリエ。

両手で、ぎゅっ、と傘の柄を握ったまま、再度顔を伏せている。

一歩、キリエに接近し、至近距離で向かう合うデス。

キリエ「(僅かに声を震わせ)・・・折角、友達になれたと思ったのに・・・」

デス「死神と友達には、なるものではないな」

キリエ「ちら、と上目遣いにデスを見て」エロフロントとは夫婦なのには？」

デス「(頬を朱に染め、視線を外し)や・・・ハイエロフロントは、別だ・・・」

キリエ、デスの照れた顔を目の当たりにして、少しだけ口角を緩める。

全員の視線が集まる中、遠くを見るような眼で、瞼を半分閉じる。

キリエ「私と知り合った人、友達だって言ってくれた人は、みんな死んでいったわ。だからこうして・・・デスとエロフロントがこうして生きててくれて、嬉しい」

途端。

バツ、と勢いよく顔を上げ、デスとハイエロフロントに眼差しを結ぶキリエ。

キリエ「(赫い瞳を、きら、と煌かせ)あなたたちに知り合えて、本当に良かった」

透明で、清廉で、綺麗な響きの、声。

心の底からの言語が、閃く。

デスとハイエロフロント、同時に大きく頷き、キリエとラーラマリアを真っ直ぐ見詰める。

キリエとラーラマリア、揺るがない視線で、デスとハイエロフロントを真っ直ぐ見詰める。

暫くの、後。

くる、と踵を返し、背を向けて肩を並べるデスとハイエロフアント。数歩、枝分かれした轍の一方方向に、歩き出す。突然。

キリエ「デス、ひとつ聞かせて」

思い出したような表情で、デスの背中に言葉を放るキリエ。

デス、続いてハイエロフアントが振り返る。

デス「(瞼を一度瞬かせ) 何だ？」

キリエ「わたしは・・・救われると思う？」

間を置かず、両目を閉じるデス。

デス「(深い声色で) 死神のあたしですら、救われたんだ・・・」

そしてデス、瞼を開け、しつかりとキリエを見詰める。

デス「(きっぱりと) お前が救われない筈がない」

ゆっくりと、確実に丸く見開かれていく、キリエの両眼。

デスの返答が一瞬で彼女の裡に流れ込み、深層まで達している模様。

傘を握る両手に、きゆうつ、と更に力を込めている。

ハイエロフアント「キリエ、君は・・・もう救われているんだよ」

キリエ「(思わずハイエロフアントを見て) え？」

ハイエロフアント「(ラーラマリアに目線を向けながら) すぐに、判るよ」

ラーラマリアと目を合わせ、小さく頷くハイエロフアント。

不敵に、且つ慈愛を包括した微笑みを湛え、目を細めるラーラマリア。

それからキリエの横顔に視線を結び、続いてデスとハイエロフアントに目を移す。

再度身体を返し、キリエとラーラマリアに向き直る、デスとハイエロフアント。

ハイエロフアント「父なる神は、気高き魂を決してお見捨てにならないんだ」

デス「キリエ、お前の魂は、今まで見てきた魂の中でも、飛び抜け

て清んでいる。そして気高い」

更に、キリエが眼を大きく開ける。

そして息を思い切り吸い、止める。

デスとハイエロファントの眼差しは、微塵も揺らぐことなく一直線に彼女に注がれる。

デス「(ふっ、と笑みを浮かべ)死神のあたしが言うんだ。信じろ」
直後。

ふわっ・・・と緩やかに、キリエが微笑む。

心の淵からの歡喜、魂の奥底からの嬉しさを、抑えることなく。
まさに、聖女の笑み。

傍で見ていたラーラマリア、ぐっ、と唇を噛む。

感嘆を満たした両目を、ほんの僅か潤ませ。

暫くの、間を置き。

更に、置き。

思い切ったように視線を掲げ、デスとハイエロファントを見詰める
ラーラマリア。

喜びの笑みから、寂寞の微笑みへと変わっていく、キリエ。

ラーラマリア「(名残惜しそうに)「元気でな。ふたりとも」

ハイエロファント「ふたりも、元気でね」

デス「またな」

キリエ「(寂し気に) また、ね」

互いに交わされる、4人の視線。

長い、時間。

やがて。

振り切るような動作で、ぱっ！と背を向け合うキリエとラーラマリア、
ア、デスとハイエロファント。

目を伏せたまま、傘の陰に隠れるようにして、一頭の馬に跨るキリエ。
エ。

間髪を入れず、唇を引き締めたまま、一頭の馬に跨るラーラマリア。

キリエが、荷馬としてしているもう一頭の手綱を持った、瞬間。

前方から、ふわあっ、と突然駆け抜ける、一陣の風。

キリエ、開いた傘を取られそうになり、ぐいつ、と力を込めて引き戻す。

ラーラマリア、思わず一度目を閉じ、キリエの様子を窺いながら後方に目線を投げる。

無人。

誰も、いない。

過ぎていった疾風が、砂埃を巻き上げて、遙かな距離を開いていくだけ。

両眼を正円に見開くラーラマリア。

ラーラマリア「(息を飲み)・・・いない！」

すかさず振り返るキリエ。

枝分かれしている轍の先、周囲、霞んで見える地平の端まで、動く者はいない。

黄褐色の土だけが、可視範囲に存在している。

デスとハイエロファントの姿が、ない。

キリエ「(息を飲み)嘘・・・さっきまでいたのに・・・」

ラーラマリア「(ぐるり、と周囲を見回し)姿を隠す場所なんてないぞ！ ホントに消えちゃった！」

辺りにあるのは、広大に拓けた荒野。

間近には小振りな岩や、樹々などは存在せず、ましてや影を潜めるなど不可能。

たった一瞬で、デスとハイエロファントは、姿を消した模様。

茫然とする、キリエとラーラマリア。

尚も、動かず。

尚も、動かず。

漸く、疑念が入り混じった表情を浮かべるキリエ。

キリエ「本当に・・・元の世界に戻ったの？」

ラーラマリア「いや、判らない。(両の瞼を閉じ)あちらの世界から急に呼び戻された、ってコトなんだろうなあ・・・」

再度、黙るふたり。

ラーラマリア、目を開けて、遙か彼方を眺めるような視線を放る。

そして、ふうう、と大きな溜め息をひとつ吐く。

ラーラマリア「なーんか、この数日、夢みたいな感じだったな、思い出してみればさ」

キリエ「でも・・・(ラーラマリアに視線を向け)夢じゃなかった」
ラーラマリア「(コク、と頷き)ああ、夢じゃなかった。確かに、アタシらは曲を奏でたさ。ゴードバンジヨーみたいなのに、4本の弦が競うように鳴り交わした、相和せる旋律を、な」

キリエも、コクン・・・と首を上下に振る。
暫くして。

何かを振り切るように、手綱を同時に馬の首に、パシ！と当てるふたり。

合図を受け、馬が並足で、カッポ、カッポ・・・と蹄を鳴らして進み出す。

デスとハイエロフロントが向かおうとした方向とは別の、もう一方の轍に沿って。

段々と、4人が別離を交わした地点から遠ざかる。

キリエ、ふと、思い出した様子でラーラマリアを見る。

キリエ「そう言えば、持ってたこなかったの？ バンジヨー」

ラーラマリア「ああ。元々あの孤児院の物だし、壊したら修理も大変かな、と思つてね。銃の修理なら何てことないが、楽器の修理は難しくつてさ。(にひつ、と笑い)もつと聴きたかったかい？ アタシの演奏」

キリエ「(かあつ、と頬を紅色に染め)そんなこと言つてない！ ウザいっ！」

真つ赤になつて、別方向に視線を逸らすキリエ。

愉快そうに彼女を見詰めるラーラマリア。

そして。

ラーラマリア、真つ直ぐに前方、進行方向に視界を固定する。

ラーラマリア『『黒衣の者』を斃して、狂血病を治す『明日』が見えたらさ・・・』

その真摯な声色に、彼女の横顔に視線を戻すキリエ。

少しの間。

静かに、ぶれない眼差しをキリエに向けるラーラマリア。

ラーラマリア「清廉な、真剣な声で」ふたりで戻ろう、あの孤児院へ。そして・・・聴かせてやるよ、アタシの演奏と唄を、さ」

キリエの両目が、ゆつくりと見開かれる。

瞳が、限りなく透明に赫く輝く。

ふたりの目線が、宙で絡み、融合し、一本の不変なものとなる。籬を外したように、緩んでいくキリエの表情。

キリエ「穏やかに」・・・うん」

ラーラマリア、聖母の如き微笑で、キリエを見詰める。

キリエ、紛うことなき聖女の微笑で、ラーラマリアを見詰める。やがて。

揺るぎない、深い想いを秘めた両眼を、進む先に据えるふたり。

そのまま、3頭の馬を並べて、行く。

彼方の風景が、砂塵で霞んでいる。

太陽の光は、厚い雲の隙間から注がれており、天への階段のように地上とを結んでいる。

それは。

キリエとラーラマリアの来たるべき日の、福音の如く。

クロスオーバー番外編「鳴り交わす絃の、相和せる競いよ」